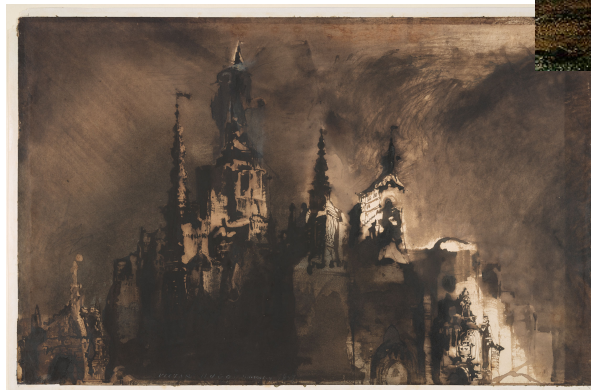
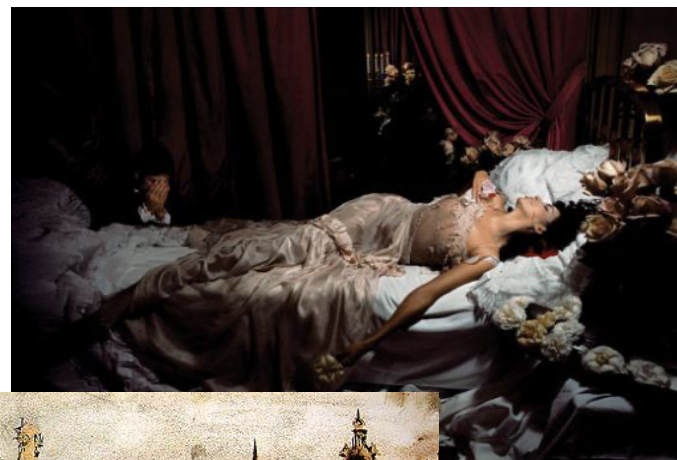


この作品は、2015夏の星海社F I C T I O N S新人賞に於いて選外となり、一行コメントのコーナーで、エディターの平林緑萌様より「2015年にこれを読むのはちょっとしんどいです……。」という評価を戴きました。



プロローグ *Prologue*

ふと。

キーボードを打っていた指を止める。

デスク上のスタンド・ライトに照らされたキーの一つ一つは存在の鮮烈さで浮かび上がっていた。

それ以外は青褪めたような脆弱な薄暗がりの静寂に、沈んでいる。壁の時計を見上げた。

精確に秒針は動いている。

23時4分。

そこには何の表情もなかった。

吐息が洩れる。諦めたかのように眼を落とし、書類の字をなぞった。いつ終わるのであるか。しかしこれが終わっても、次の事案がある。そちらの方はどういうふうに処理してよいかイメージがまだできていない。ただ不安と焦燥だけがある。そんなさなか、新たな問題が見つかった。とても数時間では終わりそうもない。

にわかに机の抽斗に文房具をしまい始めた。すっかりしまうと、鞆を机上に置く。朝刊が差し込まれたままだ。構わず上着をつかみ、出口へ向かう。振り返る。フロアには4、5台のデスクによつて造られた島がいくつもあり、群島のあちこちではまだライトが点いていた。

だが明日は彼らが私を振り返る番かもしれないし、もう二度と会うこともないのかもしれないし、まあ、概ねまた明日会うのであるが。ともかくもうどうでもよくて暗い廊下に出た。

廊下の両側には宅急便の荷物が積まれている。足早に通り過ぎる。荷物に貼り附けられた伝票を見ないようにする。

無事にそこを抜けると、エレベーターのボタンを押した。音もなく開く。明かりの落ちた1階のエントランスに降りた。自動ドアが左右に退く。夜が頬を冷たく撫でた。夜場の遠い騒音に（微か

ではあるが）囲まれる。

会社を出た。

すっかり寂れてしまったかつての繁華街は心なしか街灯も薄暗く、暗がりが多い。古くて狭い住宅から漂う晩ご飯の匂い、どうやって成り立っているのかわからない小さなスナック、昭和の時代に建てられた4階建の雑居ビルディングの汚れた壁や換気扇、タバコ販売の小さな窓口などが懐かしくて侘びしい気持ちにさせる。

家賃5万以下の安アパートの隣にある、赤ちようちんの奥で、微かに喧騒が聴こえていた。踏切の警告音、過ぎる私鉄の音、最近駅前にできたコンビニエンス・ストア。紙パックの日本酒を買う。店を出ると、急いで袋から取り出し、短いストローで啜る。安堵の吐息が洩れた。

高架でも地下でもない、小さな駅の上にあった、皓々たる満月を見上げる。

今日も営みを終え、家路に就くのだ。

心は渴き、すべてが灰色に霞んでいた。まるで膜のうちに封ぜられたかのように直接さがない。生々しさがなく、すべてのものから乖離している。現実のような感じがしない。生命がない。色彩も旋律も魂を癒してくれはしない。

歌よ。

あゝ、しかし、それは……

もはや、謳われなくなり久しき歌の数々よ。

魂を焦がし、滾る炎のように理想を求め、一瞬それをつかんだはずなのに、手の中の砂のように崩れ去って喪われる。

自由や平和は尊いのに、ようやくそれらをつかむと人々は腐敗する。王権が民に配られても、また新たな王威が世を覆い、権力を振るう。

平等や人権は黄金の前で、その生命を喪ってしまった。

いくつもの国がまだ血を流しているのに、いくつもの国は寝呆けた眼をこする。いくつもの国がまだ飢えているのに、いくつもの国

は飽食する。

自由主義を謳歌する若者たちの繁栄の裏では多くのこどもたちが過酷な労働に駆られ、学校にも行けない。戦火に晒され、人々は自由と土地と生活を奪われ、踏みにじられている。飢渴は厳しく、病患は容赦なく、医者もない。いつ殺されるかもわからない、理不尽に。生き残っても男の子は兵にされ（人殺しにされ）、女の子は搾取され、人格は破壊される。

矛盾はいつまでも解決しない。

私欲は果てず、永劫に同じことが繰り返される。正義は真理と道徳とで正論の城壁を廻らすも、悪辣者は正論など意に介さない。法の網を廻らせても、卑怯者は必ず実際の逃げ道を創り出す。努力の末に光明を見出し、ようやく良き世が来ると思われても、欣喜は束の間、すぐに絶望が容赦なく襲う。

神よ、あなたはなぜかように過酷なのか。

人はなぜ、このように愚かなのか。

だがそれを問うて何になろう。意味もない。甲斐もない。愚者が賢者をせせら笑っている。無為徒勞の輩よ、現実を見ろ、と。たとえ無為であっても、休みなく、闘うしか選択肢はない。

さような想いに煩い、疲れ切った頃、ようやく古くて小さな我が家にたどり着く。安堵と落胆の溜息が同時に洩れる。ちょうど雨が降り始めた。

玄関に入り、背の後ろに回した手で扉を閉めた。重いコートを脱ぎ、帽子を椅子の背に掛ける。

昏く静かな部屋の木の椅子に、深く腰掛け、ろうそくに火を点した。小さく暖かな炎に見入ると、やがて意識は薄らぎ、瞑想に沈んでいく。諸々の幻影が過ぎる。強くなっていく雨音が次第に遠く感じられる。

さあ、今宵も翼を広げよう。

心の翼よ、今、将にお前は羽搏こうとする。融通無礙に、自由自

在に、空想よ。刹那の解放よ。想いは無際限なる心の蒼穹を翔る翼。

何人も自由を欣求する心を無みすることはかなわない。今このときばかりは憂き世の責め苦を逃れ、解き放たれようではないか。

眼を瞑りたまえ。闘う者よ。この理不尽から刹那逃れる権利があなたにはある。

第1部 北大陸中央南部西側

第一章 運命の序奏曲

篠突く雨の中を頭巾の附いたオリーブ色のマントで足下まで覆って、俯きながら歩く人。数百年を経て磨り減った古い石畳の路地であつた。小柄で華奢な軀にも似合わず、大きな剣のフォルムが浮き上がっている。刀身は幅広で長く、この人物が鞘から一氣に抜くことが出来るのかどうか疑わしいほどであつた。

またそれをじつと見る者もいる。

ハラヒは特に考えがあつてのことではなく、ただ漫然と肘を窓枠にかけて雨の路地を眺めていたのだが、ふとその人物が眼に留まつたのであつた。

彼女が今いる建物は酒場を兼ねた宿屋で、一階が酒場、二階が宿泊室である。しかし彼女の泊まった部屋は一階の隅にある宿泊代の安い部屋で、物置同然に殺伐とし、狭く暗いが、よいこともあつて、こうして道行く人の様子がまざまざと観察できたのである。

ハラヒはその小柄な人を見た瞬間、思わず『きよかみ（清神）』と銘打たれた自分の剣を取って、柄を強くにぎった。片刃で日本刀のようなその剣はぐいっと身に寄せたときにかちやりと金属の音を鳴らした。

その人物の動きには無駄も隙もない。頭巾から時折見える薄いペーパームント・グリーンの双眸は光が水面のように揺れ動いていた。隅々をにらみ、射抜くように鋭い。

石造の建物が狭く屹つ峡谷のように迫る路地は、昏い夜がさらに深い黒に沈む場所。ここに着くまでの間、右へ左へと細い路地から細い路地を繋いで渡り、双眸を鋭く燦めかせながら旧市街を歩いたであろう人物は足を止める。

開け放たれた戸口からは強い光があふれていた。ハラヒが泊まっている店の入口である。吊るし看板には『バルドス *Bárdos* 亭』。豎琴を弾く牧人の象形。バルだ。廉やすくて、立ち飲み中心の庶民の酒場、テーブル席もあるが料金が割り増しになる。

石段を二段上がった。中の様子を瞬時うかがう。

湯気、農夫や鍛冶職人や狡そうな顔をした貧しい行商や土木・建築人夫らの喧騒であふれていた。

「おおよ、まったくだ、実際のところ、世の中ア、どうかしちまつてるぜ」

「あのあまつちよろはよお」

「うらあ、乾杯だあ」

「棟梁の女房つたら、ありや、ひでえもんだ」

「どうせまた戦争だぜ」

「早く酒をよこさねえか」

「ああ、そうともよ、エジンバール *Edinbaur* の川の流れに賭けてもいい、次は」

「まったくだぜ、あの女房殿ときたら」

天井は暗く、太い梁が半ば闇に消えている。カウンターの中で太った顎髭の店主の怒気を含んだ低い声が「そら、ビールだ」と言つて大きなジョッキをドスンと置く。

給仕の女の子は乱れた縮れ毛をスカーフで雑にまとめ、頬が汚れていた。十二、三歳か。店の隅の暗がり立っている売笑婦の娘だった。

炎の揺れる暖炉に燃える薪の匂いが強い。

カウンターは伐り出したままの粗い無垢で、古びて色あせ、疵だらけで、削られ、傷み、艶もなく、人々の袖が擦らない片隅には埃が積もっていた。

その人物はテーブル席の前で止まる。

マントを脱いで、雫を振るい落とし、あらわれたのは、少女であった。複雑な紋章や意匠の彫られた鞆をマントで包み隠す。その鞆

に隠された幅広の剣は重く、ベルトから外してテーブルに立てかけたときにゴトつという音がした。

ペパーミント・グリーンの眼であたりを睨め回す。

首筋あたりで内巻きする水色の髪は濡れたせいでさらにカールが強くなっていた。縁取りの強い、眼尻の上がった眼（眼窩の化粧は魔除け、主に眼の病気の原因となる魔から護る力があると彼女の部に伝えられていた）、白皙の皮膚、背は高くなく、肩や胴に馬革と金具の鎧、同じく硬い革のブーツを履いている。

暖炉の傍のテーブルが空いたばかりだった。二人の厳つい傭兵が立ち去る。いらふ（彼女のなまえは正式には「尹良梟」と録す。東大陸（エステ Este）にルーツを持つ民族は氏名に漢字を使う者が多い。本文中は主にイラフと表記する）は坐った。

場所は憂鬱なるエジンバール川に近い、街道沿いの小さな町、ストラングラ。数千年前に処刑場があつて絞首刑人が多く住んでいたため、この名がある。200年前からは地の利を生かし、街道を使った陸運や川を使った水運で通商の要所として栄えていた。最近では鉄道も敷かれている。

「チーズ。骨付きマトン。ビールやワイン以外で飲み物は何があるのかな」

「え？ お酒がダメってこと？ じゃあ、水か、ジンジャーね」

給仕の少女はじとつとを見ながらそう訊いた。イラフはあえて眼を逸らし、

「ジンジャーにしよう。パンは何？」

「ライ麦よ。」

あなた、もしかして、あたいと同じくらいじゃない」

「早く持つて来てくれ」

運ばれたチーズはヴァルゴー Vir-Goex 国北部山岳地帯のヤギの乳からできたもの、羊の肉は裂大陸大海洋 Mar-Mediterrano に泛ぶローデイス島 Lordissess の滋味豊かな草を食むローデイス羊の肉だ。場末の貧民窟にある酒場のメニューに、外国の名産品が当たり前

ようにある。いかに国が豊かで物資にあふれているかがわかった。
為政者の心と力次第でこんなにも違うのだ。

「クラウド・レオン・ドラゴ Cloud Lion Drago 連邦（通称「クラウド連邦」）。けして大国ではないが。噂どおりだな」

イラフはつぶやく。そのつぶやきにはある種の憂いのようなものが含まれていた。

クラウド連邦。小さなグループが聖典を護るために小さな砦を造ったことから始まった国家。神聖シルヴィエ帝国の陰謀に抗うためにネットで連帯を叫び集めた仲間たちで創り上げた国家。やがて帝国に操られたレオン・ドラゴ王国の強大な騎馬隊を斃し、王国の領土や国家施設を吸収して、小さな強国となった連邦国家である。

扉からふしぎなオーラを帯びた人影が入ってきた。

全身をフード附の外套で覆い隠している。その外套を脱ぐことなく、顔を蔽ったまま、細身のシルエットの人物は迷いなく彼女の坐っているテーブルに向かって歩む。外套の下に大剣が隠されているのがわずかにわかる。

その人はためらいなく、イラフと同じテーブルの向かいの席に坐った。

「イラフ、だね？」

すぐわかったよ。ふ。その姿勢、全身から発する威風、眼差し。

一分の隙もない。一目で達人とわかる」

イラフはわずかに目を丸くしながらうなづく。

「あなたが：イース様ですね。初めてお目にかかります。ほんとうにわたしくらいの方なんですネ」

「君よりも一つ上だ」

ただし、この世界での歳の取り方は自分で選べる。実際、イースも4年間ほど年齢設定を変えなかった。変える義務がないからである。最後まで同じ齡という設定も違反ではない。

「しかもクラウド連邦の軍事大臣であられる」

「運命だ。已むを得ざる状況で国を創らざるを得なくなった。たま

たまその創成メンバーの一員だったに過ぎない」

「伝説です。」

ジン・メタルハートを打ち破ったこの世で唯一の存在でもある」

「それも運命だ。」

正義は勝たなければならない。神の思し召し^{おぼめ}によって正義の側にいた」

「あの怪物に勝ったのです。」

彼女がどれほど強いかわからない者は、この北大陸（ノルテ Norte）にはいません。いや、今や東大陸（エステ）でも鬼神のごとく怖れられている。

一騎当千とはあの女のためにある言葉です。

しかし彼女はその自己記録を最近更新しました。イン||イ・インデイス（殷陀羅尼帝国）の西部ゴルン（五覧）の平原で完全装甲した兵二千騎が壊滅しました。

一人も生き残れなかったのです」

「信じ難いな。」

いくらジンの黒き炎の剣とは言え、刃毀れもしないのか」

「あの剣は一度、あなたの氷青の剣によって真つ二つに裂かれました。しかしその後、メタルハートとともに復活し、さらに強靱な剣となって甦ったのです。」

彼女同様に」

「なるほど。」

次に会えば敗れるのはこちらというわけか。ふふ。しかしながら僕はかつて彼女に殺されている。あの戦争以前の闘いで。生まれ変わるたびに交替でどちらかがどちらかに殺される運命なのかな」

そう言ってくすりと笑う。

彼女は彼女自身を「僕」と称していた。なぜだろうと思うことも

なく、イラフは別のことを考えていて、口をつぐんだままだった。その様子をフードの奥からじつと見ていたイースは再び口を開く。

「我が身は今この国から外へは動けない。」

最近は動きを見せないが、以前から、神聖シルヴィエ Swillyeie 帝国の軍隊がこの中央南部にあるさまざまな国の国境附近に軍を集めていて、緊張状態が継続している。（※北大陸のうち、中央南部と西端部、東端（二国のみ）の三地域以外はすべて神聖シルヴィエ帝国の領土）

ちなみに、数年前だが、帝国の策略によって王政が倒され、連邦制となってシルヴィエの傀儡政府が政権を握るユヴィンゴ Uvingott 連邦では市民による革命が起こったが、反ってそれがシルヴィエ軍の介入の口実になってしまった。

諸国は依然として帝国軍の侵略活動が再び盛んになる日が来るはずと見ている。だから我々は今、敵の動きの少ないこの好機に西端諸国と、こちらの中央南部西側地域とで連合し、ノルテ（北大陸）西諸国連合として大結束しようとしている。

基本的な合意が済んでいるから、軍の大臣は実務レベルの協議を始めなくちゃならない」

「存じています。」

神聖帝国は昨今、東への活動を活発にし始めています。我らがオエステを攻めようとして、東征軍に力を傾けています。とは言え、西の国々が安心してよいレベルではありません」

「そのとおりだ。見掛けは信用できない。彼らはいくつかのやり方を持っている。」

一つは力を背景にした一方的な主張をして国土を侵蝕する方法。

もう一つは侵略しようとする国に煽動家を送り込んで内乱を起こさせた上で、善良な第三者を装い、内乱平定を理由に軍を送り込んで暫定政府などに介入し、自分たちに都合の良い政権を作り出して実質的に支配する方法。

企業や人材を送り込んで経済を牛耳り、社会を実効支配する方法。シルヴィエ聖教の布教を背景にしながら革命思想を流布して革命を起こし、政権を打倒して実質的に属国化する方法、などだ」

「ユヴィンゴの件といい、飽くまでも正しいことをしているふうに装うのは、やはりこの I E (Idea Earth 理想の地球) という世界のル

ールのせいなのでしょうか」

「むろん、それもある。ここIEでは、悪を為せば滅びる。プログラムが狂わない限りは」

「かつてウイルスにやられたことがありました」

「そうではない。あれも実は正規プログラムのうちだったのだ。IEの正義とは、肯定的な正義だ。積極的で、事実に、無空的な正義だ。理想的・教条的な正義ではない」

「どういう正義でしょうか」

「理想や本質よりも、実存や現実こそが最高の真理・真実であり、真の理想である、という考え方だ」

「現実が正義とは？　しかしそれではすべてが正義ということになってしまいますが。妄想すら妄想という現実です」

「そのとおりだ。しかし人の心や行動に於いてはそうではない。いにしえの聖者も正しいと惟^{おも}うことを為せ、と言っておられる。

世界はただ事実的で、無空だが、心機（こころのはたらき）はいずれかを正義と決することができる。

これが事実だろう。つまり現実を正義とする思想はいわゆる真理としては成立し得ない類の真理だとも言える」

碧色の眉を顰めてイラフは困惑した顔をした。

「わたしたち凡夫には、理解不能ですね。神慮のごとく推し測り難い。

もしそう考えるならば、すべては解決済みということになります。今も多くの問題があり、現に我々人間は苦しんでいます、全的な解決はなくともよい、ということになりますね」

「あってもよい。

ただし全解決は考えようによつては生命の終わりだ。矛盾と葛藤なくして生命の躍動はない。自己の承認を廻る闘いが躍動を維持しているとも言えるからね」

「もしそうならば、なぜ、さような回りくどいシステムなのでしょう。うか。

全知全能なる神を以てすれば、そんな奇異なことをしなくとも、世界生命を存続させる方法があるように思えます。

わたしには、問題の解決はとても簡単なことのように思えるのです。神がたださように為せば、さようになるはずなのだから。

それを思うと、誠に不敬ではありますが、憤りさえ覚えます。葛藤なくしても維持されるシステムを構築すればよいだけの話なのに、そうすれば、どれほどこの世の不幸がなくなるでしょうか。あゝ、神は万能だというのに」

「それこそ計り難い神慮なのだろう。

思い煩うな。我らの前にはただ現実が横たわるのみだ。どうあれ、闘うしかないんだ。この理想世界に於いてさえもね」

「そうですね。余計な話をしてしまいました。さあ、目的を果たしましょう。まずは自己紹介させてください。

わたしはリョンリャンリューゼン（龍梁劉禪Ⅱ大華嚴龍國）に雇われた者で、島嶼国家コレイ（古矜 Kōpin）で生まれ育ったコライ（古雷・コレイの複数形。コレイ人の意）です。

両親は貧しく、地元で子供たちに無償で学問を教えていたラオ師に就いてイア（非在）を学び、先生の勧めに従い、7歳のときに国を離れてリョジャド（龍蛇土）や大華嚴龍國で武の修業をしました。特に大華嚴龍國の真正義神奥寺でイアの奥義とジムイ（神葬）を学び、『非^イ』のうちの傭兵部隊となりました」

彼女の言う『非』とは、大華嚴龍國最強の特殊部隊である。

命知らずの軍隊でその狂破非情冷厳不敵峻酷は世界中から怖れ、シルヴィエ帝国の『屍の軍団（聖教のために命を棄てて生きながら屍となった軍団）』に匹敵すると言われていた。

イラフ自身もアンギラの戦闘などさまざまな戦いに参加しているが、彼女のような外国出身の『非』は正規軍よりも格下となる傭兵部隊として別途に雇用契約されている。

失敗や裏切りは必ず死で報いられ、また解雇後は一応、自由の身ということになるが、その実態は秘密厳守のため抹殺され、魂が身

体からの自由を得させられてしまうという末路となってしまうのであった。

「そうか。」

なるほど君はカムイ（神剣士）なんだ。神彝裂刀カムイさきとうの使い手か。

しかし『非』の中で、カムイは少ないのではないか」

「そうです。」

神彝裂刀はどちらかというと、リョジャドやコレイなどの大華嚴龍國の西にある島嶼が起源なので、卑しく思われているのです」

「そうか。狭量な考えだが、因習は人が思う以上に人を支配している。それは悪だが、根絶やしにはならない。自覚されにくいせいもある。習慣を超えて客観的視点で物事を見ることはとても難しいことなのだ。」

しかしコレイ生まれで、リョジャドで暮らした経験もあるなら、辛い思いもしたんじゃないかな。

数年前、『非』はリョジャドのアンギラ（リョジャドの一地方都市）で大きな戦闘を行い、市民も含めた多数の犠牲が出たと聞く。

アンギラのリョジャド人は市民までもゲリラとなって戦ったが、コレイ出身の外国人傭兵部隊や超特殊部隊『非』の容赦ない襲撃によつて殲滅され、非戦闘員にも多くの犠牲者が出た、と。

もしかしたらその功績で今回の任務が任されたのかもしれないが、いずれにせよ、この難しく、危険な任務が命ぜられたということは、外国人にしては、君はかなり認められた存在であるということだね」
イラフの碧の眉毛は顰められ、ペパーミント・グリーンの双眸がモス・グリーンのまつ毛に深く翳された。闇の底に沈んでいる暗い記憶を思い出して。

「捨て駒ということでもあります。」

アンギラのことについては、（その頃、わたしは未だ『非』ではありませんでしたが）実際、あまりにも犠牲が大きかったにもかかわらず、虚しい戦いでした。

リョジャド奪還は、ほんの一時的な、しかも部分的なものに終わ

りました。シルヴィエ軍の巻き返しによって再び占領されてしまったのです。

2ヶ月前の戦では、また一地域（二つの県）を奪還しましたが、どうなることやら、いつまた奪い返されるかわからず、情勢は不安定です」

「ふむ」

「さて、本題に入りましょう。わたしが命ぜられた仕事は二つです。

一つは、シルヴィエとの戦争に勝った国、クラウド連邦に秘密裏に協力要請をすること、そしてもう一つは、ジン・メタルハートを斃した唯一の人物と会って、そのオーラを吸収すること」

「すべてにおいて協力する。この約束だけだ」

「深く感謝いたします」

「大華嚴龍國のリヨン（龍）皇帝との連絡方法は」

「029054781です。秘密情報部に直結します」

イラフはマイクロPC（MPC）を懐から出し、番号を表示させた。

MPCとは、マイクロ・パーソナル・コンピュータの略称で、軽量小型、通話機能もあるコンピュータのことである。ちなみに、IEではPC通信は絶対不可侵で、リアル世界のように傍受されることは絶対にならない。

登録を終えると、イースは尋ねた、

「実際、東大陸方面の状況はどうなのだ。SNSの上では、さまざまなことが言われているようにだけど。

ちなみに、僕らの西側地域（※この場合、彼女が言っているのは、北大陸中央南部の西半分の地域）は小競り合いがあることを除けば、この1年は、近年になく、平穏だ」

「ネット上の情報は残念ながら正確とはいえないと思います」

「現実世界もこちらのサイバー世界も同じだな」

「現在のシルヴィエの基本戦略は東征南下です。

大華嚴龍國を中心とするエステ（東大陸）及びその領海島嶼へ北か

ら攻め入り、南下して行こうとしています。

大軍が動いています。我が軍は果敢に戦っていますが、わずかな勝利を除けば我が方が劣勢です」

「一つの大きな戦争があるわけだ。世界中から戦争の無くなる日はないね。」

しかもすべてにシルヴィエが絡むように見えるのは気のせいかな。では、今は東征というわけなんだね。

西征の時期もあったが」

「ありました。3年前です。

シルヴィエ帝国は西大陸(オエステ Oeste)のヴォード帝国に対し、突如、一方的に宣戦布告し、侵攻しました。

オエステ(西大陸)の大国ヴォード帝国はその少し前にシルヴィエと通商条約を結んだばかりで、(北のシルヴィエから攻められる心配がなくなつて)南大陸(スール Sur)のマールロ帝国との紛争に専念しようと、南へ進軍を開始したばかりの時期だったのです。

完全に裏切られ、意表を突かれたかたちでした。

ヴォードに攻撃され始めていたマールロは大華厳龍國がその2年前(今から5年前)のシルヴィエとの海戦で疲弊しているのをよいことに、エステへ向けて北上し、このために軍力を東北に寄せていた時期だったので、シルヴィエのヴォード攻めは幸いでした。

以上、三つの大きな戦争があつたことになります。

数のうちに入らない小さな戦いではありましたが、わたしのアンギラに於ける闘いも、その大きな潮流の一つであつたと考えます、今顧みれば」

「潮流か。なるほど、うまいことを言う。北↓西↓南↓東(東↓北…アンギラの闘い)、確かに一つの方を向いている。流れのようだ」
「そうですね。」

一連の戦争の端緒は5年前の二つの大きな戦争でした。

二つのうちの一つ目は、大華厳龍國とマールロ帝国の間で起こった、領海を廻る争いです。

マーロの漁船が違法操業し、その後、龍皇帝の直轄地である島に寄港して略奪を行いました。龍皇帝がこれを憤り、マーロの皇帝羅汎（ラハン）に宣戦布告して、大艦隊を南へと進攻させ、海軍力の弱いマーロ軍を海上から一掃し、その勢力範囲を奪って実効支配しようしました。

実は、この裏にシルヴィエ諜報部の暗躍があったと言われています。

二つ目は、同じ頃、大華嚴龍國の海軍が南に集中しているのを好機と見たシルヴィエが艦隊を東征南下させ、島嶼を占拠し、我が大華嚴龍國がこれをコレイ島沖で迎え撃った海戦です。

結果的には我が国が甚大な被害を受け、数々の島が属国状態となりました」

「今の東大陸周辺の島嶼の詳細は、実際、どんな感じかな」

「5年前からあまり変わっていません。マグドール Muggdaux、カナレイ Canlei、リョリュジュ Lyrlyje など、ノルテとエステの間にある島国は次々と武力で侵略されるか、内部陥落させられてしまいました。

ニカ Nica はそれ以前から属国状態でしたが」

「そうか。変わらないか。やはりね」

「リョジャドなどの場合は、ニカとの領有権を廻る小さな争いに端を発しました。

膠着状態が続きましたが、5年4ヶ月前に、シルヴィエ軍が密かに混入したリョリュジュ国軍が軍事介入してきたのです。大義名分は紛争の調停ということでした。その名目でリョリュジュ国軍に仮統治されてしまったのです。当時のリョリュジュは未だシルヴィエに占領される前でしたが、既に深くシルヴィエ勢が浸透していて、リョジャドはシルヴィエの配下になったも同然でした。

だからその後、（5年前の大きな戦争によって）簡単にシルヴィエに侵略されたのです。

ちなみに、侵略後、リョジャドは完全なる帝国領となりましたが、

2ヶ月前、南のバウ（海峽）岬から大華嚴龍國の精鋭部隊が上陸し、二つの県だけを奪回しました」

「なるほどね。」

端緒となったニカとの領有権争いが既に仕組まれた感じがするね。だってニカはその頃（5年4ヶ月以上前）にはもう、シルヴィエの属国に等しかったのだろう？」

「そうです。お考えのとおりです」

「状況はわかった。」

何しろ、敵は一般市民から成る予備隊も入れれば、総勢5億もの大軍を持つ超々大国だ。それでも国の人口の十分の一以下でしかない。

国の富は世界随一で、また科学技術も超の上に超が附くくらい特出している。未だ騎馬に跨って刀剣や弓矢で戦う国がほとんどだというのに、彼の国に於いてはミサイルや戦闘機を有している。

IERールがあるからどうにかになっているものの、もしもこれがリアル世界のことであつたら、1年もかからずに世界は制覇されているだろう」

「南大陸のマーロ帝国、西大陸のヴォード帝国、東大陸の龍梁劉禪（大華嚴龍國）、この三つの超大国を合わせても人員数や物量では敵わないのが今の世界情勢です」

「神聖帝国との戦いはIEのアイデンティティを護る戦い、正義を護る戦いでもある。君の行動もまた、東世界の情勢のみならず、或る意味、世界の運命にもかかわっているのだ」

第二章 古書堂

これは齊歴9069年霜月のことであつた。※齊歴とは世界共通暦（世界一齊歴）のこと。

イスはイラフを見やり、感情をあまり表わさない悲愴の顔をしみじみ眺める。小さくうなずきながら、改めて言った。

「しかしよくここまで無事に来られたな。しかも独りで」

イラフは苦しさも辛さも表情に出さず、遠い眼をした。さまざまなことを思い出しつつもそれを顔に出さないのだ。

「幸運だったと思います。しかし同じ道で帰ろうとは思いません」

「やはり相当危険だったか……」

「はい。南ルートで海を渡って来ましたが、考えることは同じ、誰も海上を、南ルートを行く。帝国に近い北ルートは誰もが避けま

す。北は山岳や溪谷や寒冷地など、難所も多いですから。

しかし皆が南を行くので、南はシルヴィエ情報部の監視もきついです。

何度も危険な目に遭いました。剣を交えたことも数度。それゆえ、恐らくわたしの行動と目的とは相手に知られていると思う方が自然でしょう。

帰路はあえてシルヴィエ帝国領を横切って帰ってやろうかと思っています。もはやお伝えすべきはお伝えしたし、国への報告はメールでも電話でもできます。万が一、死んでも任務に支障はない」

「シルヴィエ横断か。大胆だな」

そう言いながらイースもまた驚いた表情は見せず、淡々と応えただけだった。同様にイラフも、

「数学的な計算上のリスクも、統計学的に推測し得るリスクも同じ結果を示します、すなわち南も北も同じだと」

「わかった。馬車などの手配をしよう。秘密の任務をしていることがバレない準備をしよう。力の及ぶ限りでね。

我が国の鉄道や馬車の特に良いものを用意しよう」

「素直に好意に甘えさせていただきます。旅の商人に見えるものが望みです」

「それも了解した。しかし見た目はともかく、実力も商用なみでは速く走れない。

外見が商人の馬でも、いざとなれば龍馬のごとく速いものがよろう」

「しかし龍馬を商用の馬に似せたとしても、すぐに見破られてしまうのでは」

「龍と馬を掛け合わせたものが龍馬で、飛ぶがごとくに、足を地に着けぬよう疾走し、峻しい山も駆け登るが、見た目が大きく、普通の馬に比べればとても魁偉なので、そんなものに乗っていれば、すぐに偽の商人だとバレてしまう。商人が高価な龍馬など使うはずもないからね。」

ところが、龍馬と麒麟を掛け合わせて、さらに龍と羊を掛け合わせた龍羊と掛け合わせると、ふしぎなことに脚の太い農耕馬の子馬にしか見えない馬が出来上がるのだが、実際は龍馬と同じ特性を持つ。

僕らはそれをヨウク Ureと呼んでいる」

「ヨウク……」

「大いなる発見でまだ知られてはいない。」

シルヴィエ帝国は科学の発達した国ではあるけど、こういう方面のことにはうとくて、彼の国では知見がないらしい。だからこれはトップ・シークレットのうちの一つなんだ」

「お借りできるのですか、そんな貴重なものが」

「むろんだ。受け渡し場所を後で細かくメールで指示する。」

実は、その場所は我が国の中にはないんだ。何しろ、ここは諸国の中でもどちらかと言えば北寄りで、シルヴィエに近いからね。

秘密の牧場はここからずうっと南へ行った国の中になのだ。距離だけの問題じゃない、その国は我が国よりも大きな国で、帝国も簡単には諜報活動ができない。

実際、我がクラウドは卓越した精神のある国だが、機密が守り切れるかどうかという意味に於いては心もとない部分がなくもないのさ」

そう言って笑う。

「ほんとうにお借りしてよいのでしょうか。途中で捕縛されて機密がバレる可能性があります。やはり危険です」

「どうせ、いつかは知られてしまうのだ。すべて時間の問題だ。ならば是非、君の役に立たい。正義のためには失うことを怖れてはならない。さような執著は悪だ。

自己のために損失をせぬよう躍起になる人間は魂に苦しみの轍を刻むものだ」

「イース殿……ありがとうございます。ありがたくご厚意を頂戴します」

「幸運を祈るよ」

イースは去った。振り返ることもなかった。

少し間を置いてイラフも席を立ち、オリーブ色のマントを羽織る。勘定を払って雨の闇に出た。さらに激しい横殴りになっている。

ハラヒも未だ窓から道を眺めていた。イラフが出て行く後姿が見える。それが見えなくなると、また想いに耽った。

イラフはフードを深くかぶり、襟を寄せる。それでも水色の髪から次々と雫が垂れ落ちていった。右手は剣の柄に彫られた紋章の彫を撫でながら、とつさのときにすかさず抜剣できるように握っている。

気温は下がっていた。しかし、尾行を確認するため、わざわざ回り道をしている。宿までの道を歩きながら、周辺を睨み、ペーミント・グリーン双眸の眼光鋭く、入念に探りを入れていた。

行為とは別に、頭はさまざまのことを考えている。想うほどに想いは深まり、やがて何を考えているかすら定かではなくなっていた。心はさようなときに働くのか、あるいは働くために人を想いの底へと沈め込むのか。

だからなぜそれが眼に附いたのかわからなかった。しかし眼に附いたのである。

雨にけぶるさなか、立ち止まった。

ぼんやりした灯りに照らされたその店は古本屋のようである。古びてくすんでいながらも、心癒す落ち着きがあった。古い活字の紙印刷や羊皮紙手書きのさまざまな書籍がある。既に一人の客がいて

立ち読みをしていた。

少し変わった少女であつた。濃い 크림ゾン・レッドとボルドー・カラーの色が交互に入り組んだような髪が濡れ艶を持つて絡まり乱れつつ、鎖骨に垂れている。双眸は桃色で、瞳を翳すような藤色の睫毛の下で強い光を放っている。眉は薄い桜色だつた。

着ている服は、その髪の色に似合わないクリーム色の短いトレンチ・コートの下に、チュニックをワンピースのように着て、そこから伸びる細い脚は白いタイツに、ショッキング・ピンクのミュール（こんな雨なのに！）で、キャスターの附いた唐紅のキャリア・バッグを傍らに置いている。

碧き眉が緩む。イラフにとってこの光景の全体が、すべてのフォルムが、繋がつた一つの何かのフォルムをなすかのように想える。

一つのふかしぎな、古代の叡智を記録する神聖文字のように、深く遠く、しかしながら懐かしい感じを、覚えさせた。名状し難い気持ちになる。

そしてその一部または半ばは明らかにその少女の存在から来るものでもあつた。彼女に最初から、或る種の懐かしさや親しみのような情感を抱いたのだ。

ペパーミント・グリーン双眸が遠いまなざしになる。イラフは半ば夢遊病者のように無意識的に、属するところへ帰るように、故郷へと戻るかのように、戦士が戦場へ還るように、真理を求める者が知の殿堂に入つて行かずにはいられぬように、自然と古書堂へ入つた。

心機（こころのはたらき）のまゝに。

灯りはあるが古色蒼然たる厳格さが漂つて影が濃く、とても暗い。周囲を見廻した。幽玄なるランプの光によつて、照らされるというよりは陰翳に深く沈み込まれるかのような典籍の数々は、興味深いものばかりであつた。

羊皮紙製本の『饗宴』（これはとても皮肉なことに想えた。プラトンの著作だが、その師であつたソクラテスは「生きた思想を死ん

だ羊の皮に載せるべきではない」と言っていたのに）、『法華経義疏』、奇門遁甲の卷子本、ロシア文学全集、パピルス紙の『死者の書』、粘土板のギルガメッシュ英雄伝、ウパニシャッドの数々、『龍脈太図』、古代ギリシャのオルギア秘儀書、『神氣天真義書』、貝多羅に記された『スッタニパータ』、神仙箴言集、『老子』、『莊子』、稀覯なる『グラン・グリモワール』の初版本、『碧巖録』、『無門関』、『和漢朗詠集』、『徒然草』の嵯峨本、光悦の自筆写本等々……

さて、こんな古文書の中で、この少女は何を見ているのかと、引き寄せられ、その先客が開いているページに視線が行く。近附くと、芳しい香水の馨がした。彼女のすべてからオーラのように漂っている。

書かれているものは単純ですぐに読み取れたが、意味はわからなかった。

『正円と逆円、って何だ？』

そう心でつぶやく。

二つのまったく同じ円が左右のページに対象に描かれて、右に正円と記され、左の逆円と記されていたのだ。しかし違いはわからない。

思わず凝視してしまっていた。ボルドーとクリムゾンの髪の少女が振り向く。桃色の眸の表面をゆらゆらとしていた光がくるくる激しく動き出す。ミュールのヒールがかつん！と鳴る。

「何か？」

その双眸はいぶかしがると同時に、面白がっているようでもあった。

「いえ、その」

「ふふん」

「逆円というのは、あまり聞き慣れないかな、と思ひまして」

「ああ、これか」

見下すような言い方が少しカチンとくる。

「円を描くときに右回りか左回りかということだ」

「そうですか。どちらが正円なのでしょう」

「どちらでも。右回りを先に描けばそれが正円で、左回りが逆円。左が先なら右が逆だ」

「はあ」

身もふたもない話のように思えた。

「ふふん」

またも蔑むような笑み。

イラフは相手にしないことにした。このようなことで憤慨するのは浅はかだし、怒りで心気を消耗するのも虚しい。モス・グリーンのみつ毛を翳しながら思う、無駄だと。それに今は隠密で行動をしなければならぬとき、諍いなどすれば、人の印象に残ってしまうではないか、と。

去ろうとするその瞬間、その少女の視線の動きに気が附いた。その眼はわずかに捲かれたマントの隙間から見えるイラフの剣の柄の紋章に集中している。その桃色の眼の光り方で、彼女がこの紋章を理解していることを察知した。『何奴！』

イラフは碧き眉を顰め、少し探りを入れる気になった。

「あなたはかなり博学なお方とお見受けしましたが」

そう切り出した。

「いいや。君ほどではない」

皮肉な口調であった。

「そのようなことはないと思いますが。」

わたしも武の心得あるがゆえに、学も少々修めはするも、それは『武に学なくば、暴にしかず』という先人の教えに準じたまで。

学などとは言っても、しよせん武人のなすことに過ぎません」

「ふん。理想主義だな。学とは机上のものではない。実践の道具だ。」

ぼくは、むしろ、智慧が武力たるべきと思う。だから多くの知を学び、それを蓄えて融合し、力とする。

力なき叡智は机上の空論にしかず」

この女はもまた、自身を“ぼく”と称するのであった。

「なるほど。一理あります」

「一理も二理もあるさ。むしろ物理的力たるを智慧と呼ぶべきとも思う」

「或る意味その方が理想論的では。」

「というよりは妄想かと」

「縁なき衆生は度し難きかな」

「わたしも士道を精進する者なれば、気脈を読み、人の言葉ではないそれらの言語を解し、勝つために、大いに活かすこともありますから、あなたの言うこともわからないわけではありませんが。」

あなたの論理で言えば、精神に聖なる炎を点火する叡知は智慧にあらず、投石機や大砲などが叡知であると言わなければかりです。さような論に堕ちてしまう」

「それが悪いか」

「理不尽と言ったまで」

「さればそのお点前、拝見しようか」

そう言うなりその少女は雨も水溜りも厭わず、降り頻る路上に、白いタイトのミュールの足で出た。髪をひるがえし、振り返る。イラフも用心深く出るが、途端に、

「あつ」

水しぶきを上げて倒れてしまった。倒されたのだ。彼女はイラフに指の一本も触れていないのに。

「ううっ！」

急いで起き上がる。何の力だったのだろう。相手は微動だにしていない。“気”のようなものか。立ち上がったても、心が整わない。“いき”がまとまらず、不安定で、未だ隙がある刹那、またもや力が迫るのを感じた。

予測していたにもかかわらず、受け切れない。再び突き倒された。巧みだ。けてして力でゴリ押しではない。理に適って、妙を得ている。

“呼吸”をつかんでいる。

未だ少女と言ってもおかしくない年齢（イラフ自身もそうだが）に相違ないのに、既に匠たくみの領域であった。イラフは感心する。

「うぐ、つつ…」

うめきながら立ち上がった。

暗い路地、弱い光を半身に浴びて、半分を深い闇に浸して彼女が立っている。その双眸はこちらを睥睨し、ピンクダイヤのように爛々と輝いていた。

「これが『叡智』だ。現実を革命する。実際の真理だ。真実の智慧だ。脳裏で同義反復（トートロジー）を繰り返すだけの論説とは違う。非現実的で、実のない、カタチでしかない思考や言語による論理は智慧ではない」

「お見逸れました」

降参の言葉を言ってイラフは水色の髪をはらりと垂らして頭を下げる。相手は反つて顔を顰めた。

「そうではあるまい。剣を抜け。そこから君の『本質』たる領域だ」

「それには及びません」

しばし沈黙。

「ちえっ。してやられたか！ ぼくだけが本質を顕現させ、君は自己を隠蔽したままというわけだ。抜かったよ。無手勝流（戦わずして敵に勝つということ）というわけだね」

「そのようなものではありません。感服しました」

桃色の双眸は眼光を和らげて、今度は好奇心でくるくるしながらイラフをまじまじと見つめ、

「いや、ぼくの負けだ。」

しかし君が東大陸の人間であることぐらいは見抜いたよ。龍梁劉禅、すなわち大華嚴龍國の軍に属する者だな」

「そういうあなたこそ」

「いかにも。ぼくらは同志というわけだ」

「ならば立ち話を人に聞かせる必要はないでしょう」

「しかり。」

しかもこの雨だ。さあ、どこかカフェにでも入ろう」

二人は暗く、陰隠滅滅たる雰囲気の、客のいない、寂しい老舗のカフェに入る。

とは言え、けして地味ではなかった。むしろロココ調で派手である。

繻子張りの椅子や房飾りのついたクッション、明るい楓材でつややかな猫脚の円テーブル、寄木細工の箆筒、ドレープのたつぷりであるカーテン、ペルシャ絨毯。

そのクラシカルなスタイルが反って憂鬱な気味の悪さを醸し出しているに相違ない。

彼女が切り出した。

「むろん、互いに密命を受けた身、何をしているか話すわけにはいかないだろうね。名乗ることも」

碧き眉を寄せてイラフは少し考えたが、

「そうです」

「君はこれからどっち方面へ」

「帰国します」

「ぼくもだ。ルートは？」

「奇想と思われるかもしれませんが」

イラフは双眸を緑の薔薇のように瞠みひらいて燦めかせながら説明した。

静かに聞き入っていたチヒラはクリムゾン・レッドの髪を指でひねりながら、

「人の考えとは似通うものだ。ぼくも同じように考えた。まだ馬の用意はできていないが」

「意外でした。自分以外にさように考える方がいようとは」

「互いの安全のため同道するも一案かと思うが」

「そうですね。」

幸いわたしの方は馬車の用意が約束されています。ここではありません。

ませんが、一緒に来てください。場所に案内します」

「その場所は、まだ詳しくは話せない。って感じかな。わかったよ。しかたない」

「これからは、何とお呼びすればよいでしょう」

「ちひら（千毘羅）。

ぼくは君にぼくのなまえを教えよう。チヒラというのだ。これから運命をともしにするかもしれないのに、隠しても虚しいし、既に君はぼくの素性を見抜いている。

今さら秘しても意味があるだろうか。それに、君が裏切るとは思えない。そういう気配がまったく感じられない」

「光栄です。

わたしは聞いたことがあります。我が大華嚴龍國の精鋭部隊には、意（こころ）を物的な力として使うことのできる者たちがいるというのを」

「存在の一切は情報生命体だ。

あとはその「龍脈」を読んで、自らの知と波動を合わせて絡め取って制御すれば、その者のスキルに応じて、攻撃や防御として使うことができる」

「あなたは簡単に言いますが、容易なことではないはず。古来少数の達人しか理解しない神技です」

「すべては運命なのかもしれない。

天才は自分の力で天才に生まれたわけではないからね。努力家だって自分の力で努力家に生まれたわけではない。ただ、それをあまり言っていると、努力しなくなる愚か者がいるので、公に言わないだけだ。努力しなければ損するのは、自分でしかない。自分の行為すべては自分に帰ってくる。

これは逃れようのない現実だ」

二人の宿泊先は近かった。明日、同じ駅から出ようとするのだから、それもふしぎはない。同じ列車の切符を買うように図ることを決めた。

雨の路地を二人ならんで歩む。イラフはオリーブ色のフードを深くかぶり、チヒラはクリーム色のトレンチ・コートの襟を立てて寄せた。『オシアンの歌』を歌う。

人気はない。すべてが陰翳に塗りつぶされ、そちこちの隅には濃い黒しかない。雨が降るのみだ。

それまで気配はなかった。だが既に数人に囲まれていた。

イラフが尋ねる。

「何かご用でしょうか」

しかし彼らは何も言わず斬りかかってきた。イラフとチヒラが飛び退く。

唐紅のキャリア・バッグが転がった。襲撃者は黒っぽい服を着ている。しかも剣も黒塗りで闇との見分けがつかない。チヒラが意の力を **arrow**（矢）として発射する。刹那の閃光、敵が一人斃れる。

イラフは抜剣し、

「何と愚かな、我らに刃向うとは」

青眼に構えて眼を瞑った。

チヒラは意を練成して戟を現象させる。細やかな装飾のある繊細な彼女の戟は三叉が二つ重なっていて、先端が漢字の「出」に似ていた。刃は細い焰がかたちをなしたものだ。

同時に右手に青白い炎の楯が現れる。楯には平和の紋章が浮き上がっていた。

意力によって現象する戟と楯である。まるで生命のある炎のように揺らぎ、眼を睜く妖魔のようにも見え、表情で怒りや殺意や不退転の意志を感じさせた。その威圧によって敵が怯む。大概の者はこのような武器を見たことがないからだ。

三叉戟は穂先の元に長い帯を翻し、帯には『天真義』と記されている。それがその戟の名であった。楯には『地真義』という文字がある。それが楯の銘であった。

チヒラも言う。

「冷静に考えることを勧めるよ。誰を敵にしているかわかっている

のか。ぼくらは完全装甲した騎馬兵百騎でも斃せるぞ」

イラフも重ねて、

「君らでは無理だ。止めておいた方が身のためだ」

かすれた声で敵の一人が憎悪と怒りに満ち言う、

「小娘どもが」

「そうか。已むを得まい」

そう言うってから、イラフは心を静め、物質の波動を読み取ろうとわずかの間に心を清めた。事象の揺らぎが示すロゴスに聴従する。

摂理^{ロギス}に従い、自然の潮に身を任せる。物事が動こうとするときに起こる波が迫りつつあることが感じられた。

「あゝ、わかる。来るぞ」

静寂が破られた。

一太刀が地上すれすれの高さで、地面と水平になって迫り来る。

彼女はその刃の上に乗し、解剖学的な正確さで一人の肩を斬った。むろん首を落とすこともできたが、利き腕の腱を斬ればもう攻めてこないことがわかっている。

そのまま蹴らずに飛んで壁を走り、もう一人の背後に回って肩と足首の腱を斬った。

その頭を踏んで飛び上がり、後ろから来た奴をかわしながら、前にいた一人を斬り、振り返って先ほどかわした者の喉元に剣の切っ尖を突き付けて言う、

「何者だ。言え。どこに属する者か。何が目的なのか。なぜこのようなことをする。」

黙ってないで言え」

しかし相手は斬られる覚悟で後ろに飛び下がり、一か八かで逃げようとした。

傍らにいたチヒラがそれを見逃すわけがない。動きにくいはずのミュールでも身軽に舞うように敵に追い付き、数歩も行かせずに戟で薙ぎ倒す。イラフが再び剣を突きつけた。だが舌を噛んで自害してしまう。

「しまった」

イラフは倒れている他の者たちにも眼をやった。

止める間もなく、喉に短刀を刺している。口の中に仕込んだ毒を嚙んで痙攣している者もいる。

「どう思う」

チヒラが桃色の眸に紅を交えて色を濃くし、イラフに問いを投げた。どここの手の者だと考えるかを問うているのだ。イラフは首を横に振った。

「自害の仕方が東大陸ふうの者もあり、また毒を嚙むなどエステ（西大陸）ふうの者たちもいる。おそらくはどちらでもないのです。事実とは大概そんなものです」

「特異性は造られたものに過ぎないからね。毛髪や顔付きから人種的にはこの地方か、周辺の者らしいが、暗殺専門の特殊な傭兵だ。君の言うとおり、雇い主は南か北のどちらかであろう。とは言え、南か北か。どちらかを特定するのは難しいな」

「そうですね。実に念入りです。」

自害の仕方に他の大陸の特徴を使いながらも、（私たちが今、推測したような）逆の推測をされた場合でも、国を特定できないように、二つの大陸が疑惑の候補に残るように図っている。

もしわたしを狙ったならノルテ、すなわちシルヴィエ帝国でしやうけど」

「なるほど。」

どちらが狙われたのかも問題だな。ぼくにも狙われる心あたりがある。ぼくならスール（南大陸 Sur）だ。ここに来る前はそこにいたからね。マール皇帝羅汎（ロハーン）はぼくの死を望んでいると思う」

「贅力皇帝ですか。」

身の丈 3 m 9 9 cm、尋常ならざる魁偉の男。その腕力のみを用いて一代で大帝国を築き上げた奇跡の英雄」

「そうだね。」

まさしく稀有なこと、奇跡だ。計り知ることのできない大いなる

自然（フュシス *physis*）の気紛れだ。

なぜならいくら腕力があっても、チンピラの大將にはなれるかもしれないが、皇帝にはなれない。だが彼はあえて力ですべてをねじ伏せるという手法を用い、自らを試すかのように、その異常なやり方にこだわって皇帝になったのだ」

「沙漠の民の伝説の族長、騎馬民族の帝王、独りで一万人を屠りながら、百万の軍の囲みを突破した話は有名です」

「その鬼神の勢いに何人も手がだせなかったらしい。メタルハートと勝負させたらどのようになるのだろう」

「そんなふうに言くと、まるでジンも皇帝になれそうですね。いたい、そういうものなのでしょうか」

「さあ、どうかな。ぼくには違いがあるような気がする。

羅汎には、凡人には想像も附かないような、何か途轍もない功德が備わっているのかもしれない、ってね。ふふん。

自然はふしぎだ。

どんなに有能な人間であつても、普通の人の百倍千倍の仕事をするなど不可能だ。ある意味で、人は（特にその弱さに於いて）皆同じだと言える。

だが英傑や宗教者に時折見られる桁外れの業績は、必ずしもそうではないことを、ぼくらにまざまざと見せ附ける。理性と科学を超えた現実のふしぎさ、柔軟さを教える。現実ハードではなく、ソフトであることを」

「ジン・メタルハートのような者でも、皇帝になりたいと思うものでしょうか。わたしにはそういうふうには思えない」

「それは、どうかな。まあ、今まで彼女がそういう動きを見せたことはないけどね」

「自分で『そういうふうには思えない』と言っておきながら、こんなことを言うのもおかしいですが、かつてそういう野望がなかったとしても、再生した彼女にも同じようにそれが『ない』と言えるかどうかは大いに疑問があると思います」

「むろんだ。それは考え方として正しい。

ちなみに、自己矛盾を気にすることはない。契約や裁判など公的・対外的なものでは少し困るが、日常生活の中では当然のことだ。人の心はセオリーどおりには一貫しないものさ。

話が逸れたな」

「そうです。どちらが狙われたかという話でした。

わたしたちの両方を狙った可能性はどうでしょう」

「なるほど。だから北と南が疑われないように図った・・・」

「あるいは、わたしたちが南か、または北から狙われているのを承知の上で、裏の裏をかき、実は東か西のどちらかが犯人かもしれない」

「うーん、そうか。決め難いな」

「実際問題は常に決め難いものですが、もしかしたら、そうなること自体が作戦なのかもしれません。東西南北どちらでもあり得、かつ混淆的だということに変わりはない」

「ふむ」

「どうでしょう。今宵はどちらかの宿で泊りませんか」

「その方がより安全だな。闘いのコンビネーションが良いのも先ほど証明されたし」

「そうですね」

数秒の間をおいてから、ペパーミント・グリーンの眸を強く燦めかせ、

「いらふ（尹良鳧）と言います」

「ん？」

「わたしの名です」

「そうか。わかった」

微笑する。

余計な荷物のない、無一文の気楽さ。失うものがなければ心は常に清々して、さっぱりと軽やかなものだ。

イラフは予定していた宿をキャンセルしてチヒラの予約していたオテル・オリエンテに泊まった。

言葉一つ、簡単なものだ。

アールヌーボー調の植物的なデザインに、鮮やかな色彩画の嵌められたドーム型丸天井、明るくエキゾチックな色遣いの円形エントランスの奥にあるカウンターに肘を突き、彼女らは羽ペンで記帳して部屋に上がる。

「一応、確認しよう」

ライト・ブラウンの楓材の木彫扉をゆっくり開けながらチヒラがそう言った。

まずは部屋も入念にチェックし、窓枠をチェックしてから窓を開けて暗い雨降る虚空を見廻し、ペルシャ絨毯や暖炉も眼を近附けて痕跡がないか確認し、最後に廊下を再び歩いた。

ようやく安堵して二人向かい合い、語らい始める。チヒラはミュールを足でぽおんと放るように脱ぐ。

それとは真逆に、碧い眉を寄せてイラフが問うた。寄せられると眉はわずかに色を濃くする。

「チヒラ」

「どうした？　いったい、そんな思いつめたような顔で」

「いや。実は…」

「何？」

「めんどろでなければ教えてくれませんか。

あなたが先ほど言った情報生命体のことがよくわからなかった」

「何だ。そんなことか。

深刻な顔をして何かと思ったよ。君ほどの達人がそんなことを問うか問うまいかで逡巡するものか」

「そうです。そういうふうに見えないかもしれませんが」

「内気な性格を抑えても知りたいわけだ。ふーん。武人なのに知的

な好奇心が旺盛だな、イラフ」

「武人こそ知が大事です。」

知こそが最大の武器であると考えています。たとえば、いくら武芸に長けていても、一人で一万人は斃せない。羅汜のような例外もあります。普通はない。しかし知があれば、百万人を斃すことも可能かもしれません。知略によって。

いや。

そうでなくとも人間は真理を求めるべきです。真理こそ(意外にも)実は人の求めるすべてだと思います。知なくしては、求めるものを得られない」

「君の言うとおりだ。知は最も大切なものだ。知とは勉強ができるかどうかではない。謙虚で心清らかなことだ。どんなに学があつても、自惚れて我が罪のみは赦されると想い、悪をなす人間は愚かだ。つまり謙虚で心清らかとは、自分の立場を超えた立場に立つことができることだ。私欲の超越だ。それは客観的な立場を獲得することによって得られる。」

だから客観的な視点は大事だ。

客観的な視点とは、すべてを網羅するように、いろいろな事実を、さまざまな角度から知ることによって、おの自ずから得られるものだ。全体を知らなければならない。

局地的な事実ではだめだ。局所的な歴史ではだめなんだ。全時空を網羅しなければならない。

諸々の立場を理解することは、自分の立場を棄てて、他者の立場に参入することへと通ずるからだ。

あつ、いや、すまない。

つい自説を論じてしまった。ぼくは今、我が説を伝えることに夢中になり過ぎて、嵩じてしまった。

これぞ客観性の喪失と言うべきだろう。

いやはや、話を戻し、君の要請に応えよう。ぼくのわかる範囲で。まず。

そうだな…………

たとえば、宇宙は全体として、あたかも生命を持っているかのようだ。あたかも生命であるかのようではないか。

全体の総和として、結局、宇宙の存命と膨張を志向している。まるで意志のように。一つの知性のように、情報というかたちに於いての生命体であるかのように。

だが果たしてそうだろうか。

事象を詳細に鑑みてみよう。宇宙を構成する諸々の要素を鑑みよう。

たとえば、すべての物質を細かく分解・分析していくと、最後はエネルギー態になる（そのことは理解できるかな？）。

物質を構成する素粒子は粒子状（固形個物）ではない。原子を分解していくと、最後は“気”に還元される。それは“ゆらぎ・ふるえ”であり、時空の歪みのような“歪み”でもある。

それはエネルギー態だ。不可逆的な特定の働きを持ち、あたかも意志のようにベクトルをもつて働く。

いや、このレベルになれば、実際、物質的な感じは、とっても希薄で、物質的な感じはしない。

スタイル（様式）として、ほとんど“心”や“想い”と変わらない。むしろ、意志そのもののようではないか。

むしろ、素粒子のレベルでは可逆的な動き（※時間を逆行する、時間をさかのぼる、時間を逆に進むこと）があることは知られている。

だがそれにしても一つのベクトルだ。一つの方角性を持っている。あたかも一貫する意志のようなものではないか

「意志ですか。

わかっているようではない。誰もが既に経験しているから、慣れていて、誰もが疑問もなく、何となく了解している…」

「ところで、人間には、意欲する心の働きとしてある意志と、諸細胞の新陳代謝や細胞分裂など有機体としての意志とがある。

端的に言えば、“心”と“物的現象”だ。これはまったく別物の

ように思える。だがそうだろうか」

「別ではない？ まさか」

「心の方を考えてみよう。」

人の心の働きは、脳神経細胞（ニューロン）から脳神経細胞へと伝わっていく電気的な発火現象（インパルス）と、その刺激によって誘発される神経伝達物質の分泌による興奮作用だ。

化学的現象の一連の作用によって醸される効果でしかない。外から見れば化学的な作用に過ぎないようなことが、その作用の内部にいる当事者（ぼくら）にとっては、今、こう考えたり、会話したりしているすべて、意識そのものであつて、見たり、聞いたりしている世界一切のことだ。

君はどう思うか、知性と物的現象は何が違うのか」

「うわあ。」

わたしたちにとつては、到底、同じものとは思えませんが、客観的に見れば、まったく同じなんですね」

「そのとおりだ。」

ただし、世界がぼくらの眼に見えているとおりの世界だとすれば、という前提のもとでの話だけだね。

つまり科学的な実験で観察されたとおり、脳髄というものが実在し、そこにインパルスが流れている、という現象がまさしく事実であり、現実であるとすれば、ね」

「知覚されるものを疑うなら、もう收拾がつかないでしょう」

「さつきまで積み上げてきた論理も基礎から崩壊するね」

「すべてがつかみどころのないものに、解明不能なものになってしまします」

「そのとおりだ。」

さて、またもや話が逸れたが、物質的な感じが希薄で、むしろ、意志のよなものでしかないとさつきは言ったが、その意志とやらが実は、かなり物的な存在だということだ。

まったく以て、ふしぎじゃないか。物なのか、意いなのか。まるで

『色即是空、空即是色』のような感じだ。しかもそれでいて、なぜ、このような（ぼくらが今しているような）知性であり得るのか。

こういうふうな、（あゝ、何と表現すべきなのだろうか？）“カタチ”で（“カタチ”というやり方で）捉えようとすること自体が、もはや相応しくないのかもしれないね。

物事の純粹な原理源泉として、厳然と存在する本質（ギリシャ語：ウーシア *ousia*）としての知性というものは、実際にはないのかもしれない。

ただ知性のような“効果”があるだけで、ぼくらは幻影を見せられているだけなのかもしれない。そもそもこういうふうな、考概のすべてが化学的な現象で、効果でしかなくて、本質ではないとすれば、今やっているこのような批判自体がもう、いったい、何なのか、つてことになってしまう。

だけど、カタチで捉える方法の他に方法がないことも事実だ。

それに、ぼくらにとっては、実際、どうであろうとも、現実はまだに現実で、ぼくらのこの意識は考概で世界（理解）を構築する。ぼくらにとっては実際のものである世界を^{つく}做る」

「経験していますからね。もう是も非もない……」

「まったく。経験はマジックだ。納得が生じてしまう。しかし解明はできない。

観念上に躍るカタチを、見たまゝを信じるしかない。たとえば了解できなくとも“まさに見たものは見た”、と」

「アルチュール・ランボーですか。文脈は違うけど」※「見者（ヴォワイヤン）の手紙」参照。

「マジックとして理解すればいいんだ。世界が情報生命であるということは、突き詰めればそういう仮説だ。カタチでない、何か成らしめる何か。カタチとして、まとまっているかのように感じさせる何か。“何か”だ。

それはぼくらの感覚の上でも、さほどふしぎではない。むしろ、ありふれている。

たとえば、生物の進化を見てみるとしよう。

すると、どうかな。その巧みさ、奇抜さの数々、豊かなる発想の数々、擬態や羽根の構造や光合成や冬眠の知恵など驚嘆すべき奇跡の数々を見よ、人が思考を凝らしても為せないような美や巧緻がある。

神の奇跡だ。マジックだよ。（※マジックの語源は古代ペルシャ語の『マジ』にあるという。マジとはペルシャ系の祭祀階級を指している。ちなみに聖書に出てくる東方三博士は『マーゴイ（ギリシャ語：magos）』である）

だが改めてよく観察すれば、そのことは生物に限らない。すべては神的叡智に富んでいる。宇宙の誕生から発展までもしかりだ。

自然現象のさまざまな奇跡にぼくらはいつも驚嘆する。

数学的な美しさを描く物理の法則、化学的な変化変容のさまざま、天体の運行や壮大な宇宙の展開、ブラックホールや超銀河団……

いや、ぼくらは「他にも選択肢があるにもかかわらず、自然にこのようになった」と思い込んでいるから、奇跡のように見えるだけなのかもしれない。

実は選択肢という概念自体が不適切なのかもしれない、という可能性はゼロではない。

ただし、これを問うても意味がない。どうやって解明したらよいか、確かめるすべもない。

いずれにせよ、生物も非生物も、無機質的なものも有機質的なものも、物的存在もエネルギーも運動も時間も空間も、すべての現象は、いや、非存在であるものも含めて一切は、なぜ、そうなのか、なぜ、そういう在り方なのか、なぜ、そういう設定なのか、わからないことだらけだ、マジックだ、そのように唐突に忽焉と決定され、龍脈が地表のすべてに奔る地理となり、星々の運びの理を読む天文となるように、知性があるかのごとく法則を做す。

どうしてそうなのか、実際にはそこで何が起こっているかを、ぼくらはまったく知らない。わからない。しかしそんなぼくを一瞥もせず、機は事象を象り、世界が生成で絡み膨れ、運命が決せられ

る。

唯、奇跡だ。これがぼくの言うところの情報生命体さ。わからない？

ま、ある意味、そういうことさ。概念になるような固定された「カタチ」あるものではないからね」

イラフは慎重に反芻し、理解しようと努めた。人は経験の擦り込みなしに物を理解することができない。彼女はさまざまに角度を変えて想起し、疑似経験を積んでいるところなのだ。

その夜は何も起こらなかった。イラフはすぐ寝た。チヒラは本を取り出してしばらく読む。弱々しいろうそくの火と暖炉の炎で読み耽った。やがて疲労で強い眠気に襲われる。

午前4時の少し前。起床した。

イラフの動く音に目を覚まし、チヒラは乱れたクリムゾン&ボルドーの髪を振り、ベッドから身体をもぎ取って奪い返すように上半身を起こす。もの凄く眠たかった。「気（叡智）」を使うことはかなりの疲労を肉体に与えるのだ。

それに引き換え、イラフは剣を構えて入念に型の確認をしていた。その眼は集中している。チヒラが目覚めたことに気が附くと、汗をぬぐい、微笑しながら挨拶する。

「おはようございます」

「あゝ、おはよう。素振りか。朝から元気だな」

「準備運動です。精神が充実するまで時間を要しますから、早起きしてウォームアップしておかないと、出立の時に気力は充実しません」

「間違いない。寝坊したな」

「あなたは遅くまで読書されていたから」

「それでもない。意の力を使うといつもこうなんだよ」

「結構負担がかかるのですね」

「〃まったく以て自然なこと〃」とは言い難いからね」

「お腹が空きました。さあ、食事をしましょう」

早朝の出立なので、前の晩、特別注文でサンドウィッチなどお弁当を包んでもらっていた。暖炉に吊るしてあった薬缶で湯を沸かし、お茶を飲んだ。チヒラは寝癖でさらにくしゃくしゃに絡んだ深い緋色と濃い葡萄酒色の髪を散々苦心してブラシで梳かしながら、

「君もコーヒーは飲まないんだな」

「何で飲まないとわかるのですか」

「紅茶に手を附けたからさ。コーヒーだってあるのに。言ってしまうとバカバカしいね」

「成長期は控えた方がよいと言われたことがあったので。飲まないというわけではありません」

「ぼくもだ。さあ、着替えて行こうか。つまらないことを言った」
支度が終わると、羽織って扉を開ける。地味なイラフと白やピンク系で派手なチヒラの格好は対照的だった。また足音を忍ばすイラフと、ミュールをカツカツと鳴らしてキャリア・バッグをガラガラ引くチヒラも対照的である。

さてともかくもエントランスを出ると、古き街は黎明前の霧に埋もれていた。十九世紀のロンドンのように。遠くに蹄の音が聞こえる。

「うわ、凄いな。見えないよ。馬車が待っていても見えないんじゃないか」

チヒラが手で霧をかき分けようとするが、それで先が見えるわけもない。

「大丈夫です。……あっ！」

イラフは両眼を光らせる。殺気を感じた。鬼神のような凄まじい念を。あえて凄まじさを見せつけるようにぎろりと睥睨している。同時に、白いトーガを来た人物の幻影が微かに過るような気がした……それらが一つのものなのか、別件なのかは定かではなかった。イラフははつきりとは見えない周囲に鋭いペーミント・グリーンの眼光を投じ、警戒する。心を研ぎ澄ました。眼に見えないものを見ようとするように。チヒラもぐると周りを見廻し、

「感じたよ、ぼくも」

「でも」

イラフは剣の柄に置いた手を離す。

「今は消えました。確かに先ほど感じたのですが」

「そうだね。消えたようだ。敵がいたとしても、彼らにもぼくらの姿は見えないだろう。或る意味、この霧は幸運だよ。」

さあ、行こうか。で、どうすればいいんだ？」

「まず駅に行きます。駅までは普通の辻馬車に乗りましょう」

「あれ？ 列車で行くのか」

「馬車のあるところまで、です」

チヒラは微笑し、

「ずいぶんと、もったいぶるじゃないか。さぞかしもの凄^ひい馬車なんだな。わかったよ。君を信頼しよう。」

ところで、イラフ、もう敬語はいいよ。ぼくらは同じくらいの年齢だろう。たぶん」

二人とも十四歳であった。

「わかりました。そうしましょう。…いや、わかった。そうしようよ」

「さあ、早く辻馬車を探そう。そして早く行こうよ」

「探すために気を読む、っていうのはどうかな。視覚が当てにならない状況で、気を読むしかないと思う。まさか嗅覚^{きゅうかく}っていうわけにもいかないし」

「あはは。それはそうだけど。でもどうかなあ。辻馬車以外の馬車も走っているし。技術的にムリかなって思うんだけど。…まあ、試しにやってみるか。うーん」

そう言うが早いか、藤色のまつ毛を下ろし、チヒラは心を澄ます。

「ムリと言いながら、もう始めてるんだね。そうそう、案ずるより産むが易し、さ」

イラフもまたまぶたを下ろして。ペーパ^{ひたみ}ミント・グリーンの眸^{ひとみ}を閉じた。

まずは自分の経験の範囲内で、剣を構えるときのように心に静寂を呼び覚ます。存在が情報生命体ならばその情報が読み込めないだろうか、と思つたのだ。殺気を読むときのように。

考えてみれば、同じような原理のような気がした。できるんだと想うこと。剣の修業もそうではないか。なぜ望んで意志するとそれは近附くのか、理由はわからないが、経験則に合致する。

むろん、そんな簡単なことではあるまい。

だがそういう傾向があるような気がしていた。理屈を超えた微かな手応えのようなものを感じる。薄っすらとした可能性のようなものを仄かにつかんでいた。このように感じ易い人ほど、そのように起こり易い気もする。

「わかった！」

二人が同時に言つた。たぶんお互いに顔を見合せたであろうが、霧で見えない。それでも意思の疎通を感じ、今度は同時に歩み出した。

確かに向かう方に二人乗り馬車が待っている。霧にぼうつとするカンテラを吊るし下げて。

イラフは武人ゆえに気を読む力を既に持っていたとは言え、チヒラの些細なヒントを基にして、たちまちに情報生命の理論を体得してしまつたのである。

「呑み込みが早いな」

馬車の乗り上がりをするとき、チヒラがイラフを振り返つて言つた。

「師が良いからさ」

そう言つて微笑む。

出発した。チヒラはポケットから本を出し、髪を弄りながらミュールをぶらぶらさせて読み始める。

街を出ると霧は薄らいできた。

木々や草原が現れ始め、素朴な土壁の農家などがポツリポツリと見えるようになる。降る雨に寂しげだなどと思うと、突如、霧をま

とうストラングラー駅の偉容が見え始めてきた。

処刑場のあった小さな絞首刑人の町の名を冠する駅とはとても思えない。本来のストラングラーの町よりも、この周辺の方が近代的で栄えていた。

川の傍にある駅は半ば橋にまたがっている。帆船で運んだ物を貨物列車に積んで運ぶこともその逆も容易だ。駅のファサードはホテルのファサードでもあった。

象徴的なオベリスク塔が立つ駅前の円形広場では、次々と馬車を着いて人々が降りた。馬車は時々渋滞して列になる。街道を挟んだ向かいにも大きなホテル、オテル・リコがあった。そこは高級で金持ち専門だ。

駅の切符売り場に行くと、買うまでもなくイラフの席は用意されていた。イースの手配だ。当たり前だが、チヒラの席の用意はない。今からチヒラが購入すれば、イラフとは離れた席になるのは明らかだった。

「二人用の席を確保できないかな」

イラフは依頼する。

「お待ちください。確認いたします」

予約係は髪を結った制服の女性で、手早く予約台帳を確認した。実は鉄道職員は公安職員が兼ねている。犯罪者やスパイの往来をチェックするためだ。

あまり待たされなかった。席に余裕があったので、二人は二人用のコンパートメントに入る。ちなみにこの急行列車は全席がコンパートメント式であった。

クラウドの誇る麗々しい列車には金色の筆記体で「クラウド・スパルタクス急行」という文字が象嵌されている。車輻はクラシカルな深い青であった。

車掌に導かれて颯爽と乗り込む。濃い青の制服の男の後に附いて狭い廊下に行く。麗々しい夫人や凛々しい紳士とすれ違う。すれ違うほどの幅があった。映画などで見るよりも広い感じだ。

部屋に着くと、内装は絨毯も麗々しく、木目も美しいクラシカル調である。案内された個室は十分な高級感のある部屋だった。

「すばらしいな」

チヒラが言った。

「映画を思い出したよ。アガサ・クリステイだ。オリエント急行」

肘掛の附いたソファのような椅子にゆったり腰かける。汽笛を鳴らし、汽車が動き始めた。駅舎を出ると、すぐに川を渡る橋である。

橋は川の上で二股に分かれていた。広々としたエジンバール川は霧に覆われていてもその偉容をうかがわせる。切れ目に悠々と流れる黒い姿を垣間見させていた。壮観であつた。早くも旅愁を感じる。

「もう朝だろうね」

川を渡り終えたと、チヒラが言う。

「6時過ぎた。黎明の時刻だろうと思う。いや、実際、少し明るいよ」

遠く霧の上に山脈の影を眺めながら平らかな地に行く。

チヒラは大きな革装丁の本を出して読み耽り始めた。

平原は霧がまとい附くように漾う。渺茫たる景色のところどころに白い岩を剥き出しにし、岩は雨に濡れていた。他に見えるものとは言えば、点在する灌木の濃い緑があるばかり。稀に見る常緑の高木はオリーブのようであつた。

しばらくして山岳地帯の峡谷を走るようになる。霧はかなり薄れ、消えかけていた。深い溪谷の下が見えて怖ろしい。雨は霧雨に変わっていた。

この地域は峻しい山岳と、切り込む深い峡谷と、唐突に現れる平原との三つが基本的な組み合わせだ。そこにさらに湖や深い森林が添えられ、総合的な印象としては屹そはだつ地形が網目のように無数に繋がり、人の往く手を阻むかのような構成になっている。

こうした地形はゲリラ戦術を心得た者には待ち伏せや挟み撃ちに適した場所であるというのみならず、狭隘峻嶒な地形自体が自ずと大軍を拒んで寄せ附けない。

特に中央南部の北にいくえにも連なる大山脈は1万数千mを越える峰が連なり、戦車や戦闘機も寄せ附けなかった。

そのあまりの高さゆえに通常の高高度飛行の限界に近く、気流も荒くてシルヴィエの戦闘機すら安易には越えられず、南下することができないのである。（ただしプレッシャー・スーツを着てズーム上昇法を用いれば、何とかなるようだが、今のところ、リスクが大き過ぎるということらしい）

イラフは天然の城壁を感嘆し、見上げた。

このような山々から俯瞰すれば、汽笛を鳴らして雄々しく進むこの鉄道も、大自然の偉容の中を行くまことに細々とした、小さな存在であるだろう。

「霧はなくなつたが、雨が止まないね。侘びしげだね。壮観だが、どことなく寂しい」

頬杖突いて景観を眺めるイラフはそうつぶやく。

「荒涼としているからな」

「栈道すら造る者のいなかったこのような場所に、線路を敷いて鉄道を通す。どれほど難儀であつただろう、いかほど辛い仕事であつたことか。想像に難くない。容易な事業ではなかつたはずだ」

切り立つ岩壁に、渋い緑の松が靈妙な風情で生えていた。どこか東洋的である。山水画のように。

「下手なアトラクションよりよほど怖いな」

「ほんとうに」

二人は正式な朝食のため、食堂車へと出た。

「もしここに敵がいたらどうなるだろう」

チヒラが鋭く言う。

「こんな場所で襲われたら：」

「まさかそんな大胆な行動にはでないだろうけど」

「やり方はいろいろある。寝込みを襲うとか、食事に毒を入れるとか」

「食事前に素晴らしい話が聞けてうれしいよ」

「どういたしまして」

「ともかく行こう。空腹だし、行ってみなきゃわからないし」
行けば客はほとんどいない。

細身に白く長い髪を垂らした白いマントの人物が静かにスーブを
吸っているのみであった。後姿では女か男かも定かではない。長い
髪は女性を連想させやすいが、背がとても高そうである。まばゆい
純白マントに包まるように全身を覆い隠しているので、情報が少な
い。

「どう思う」

「どうって？」

「あの人さ、マントの下に白いトーガを着ていたら・・・」

「じゃ、話しかけてみるか」

「よせよ、食事のじゃまだ」

「そうだな、何も感じないし。まあ、気配を消している感じがしな
くもないが」

「うん。いずれにせよ、朝感じた気配はあの人じゃないように想う
な」

「じゃ、ともかく坐ろうか」

焼き立てのパンのよい香りがし、ソーセージとポテトが運ばれ、
スクランブル・エッグにサラダが美しい染附の皿に乗り、重たいク
リスタル・グラスに入った濃厚そうなリンゴ・ジュースが置かれた。
ペパーミント・グリーンの双眸で運ばれて来る食事を射抜くように
凝視していたイラフが、

「大丈夫そうだけど」

と言うと、チヒラは、

「え？」

「いや、毒の話さ」

「あ、そっちのことか。しかし印象だけでは何とも言えまい。毒に
は気配なんかないからな」

「そうかなあ」

「え？」

「だって、すべては情報生命でしょう。解釈しようとすれば、きつとできるんじゃないかなあ」

「まあ、確かに。だけど、あまりにも何もかもを“解釈”してしまふことは神の領域を侵すことになるよ」

「そうかな。手も使わずに、気で敵を斃すよりかは、よほど自然だけれどもね。」

それに、正しいことをするのに神が裁くはずがない」

「正しいとどうして断言できる。この世のことはすべて複雑で知り難い。神慮は計り難いよ」

「神は正義をなすために人間に理性を授けた。正義を望みながら理性に基づいて行動するならば、それは必ず人を正義に導くはずだ」

「そうとも限らない。」

正義を望んでいると自ら信じて疑わない者も、実はその下に自身でも気が附かない矮小な利己的欲望を抱いているものさ。結局、人間はなかなか利己主義から逃れられない」

「そうだね。君の言うとおりだと思う。だからと言って、悪を為そうと思ってしまえば、さらに悪くなる。最初は純粋な正義でなくとも、心掛ければ正義に目覚めるはずだ。ともかく今はこれをやってみようよ」

モス・グリーンのまつ毛を下ろし、イラフは瞑目した。

正義を心掛ける。想いを静め、意（こころ）を清めた。炎が鎮まり、寂滅が訪れる。清んだ広やかな気分になる。そもそも神に抗うなどということがあり得ようかという疑念も湧く。

神は完全にして万能である。神の御心に副わぬことなど起こりようがない、すべては神の意のまゝであり、神の為された一部分に過ぎないから。すべては神である。

いやいや、そうだろうか。神とは、いったい、人間が定義できるような存在だろうか。そもそも“考え”って何だ。人間のあれやこれや推考する諸考概など、いったい、何であろうか。

『ン……………』

だが考概を否定してしまうと、一切の考えのやりようがなくなり、
どちらの方角に進むこともできなくなってしまう。

逝くべき方向を決める根拠がなくなってしまう。

『どうすればよい』

心の働きのまゝ、心に導かれるまゝにするしかない。いよいよ心を清まし、浄める。清浄たらしめる。

清まると執著が失せる。好きな物と嫌いな物との差別が撤廃される。

毒と毒でないものの境界線が消える。区別ができなくなる？ しかしそうではなかった。むしろ逆であった。

ふしぎな働きによって、万象が差異のない、識別のないそのまゝで、“識別”された。これを表現するに識別という言葉以外に言葉がないので、あえて識別と言うが、これは識別ではない。言葉がないから仕方なく識別と言うが、このニュアンスを伝えるために“附きで表現する。仏教でいうところの無分別知とも言うべきか。

チヒラは息を吞んでこれを見守っていた。

ようやくイラフが言う、

「わかったよ。大丈夫だ。毒はない」

「気が附いていないかもしれないが、君はどうやら千年に一度の天才らしい。

ぼくに触発されて、その才能を大きく開花させたのだろうが、しかしその上達ぶりは遥かに、ぼくを凌いでいる」

「わたしは気の力だけで敵を斃せない」

「じきにもっと凄いことができるようになるさ。君の才能を見抜いた師の炯眼は確かなものだ。

さ、ともかく食べよう。腹ペコだ」

そう言うと、脚を組んでミュールをプラプラさせながら、本を開き、読み耽りつつナイフやフォークを片手で扱い、食事をする。

「行儀が悪いと思うかもしれないが、ぼくは一時も無駄にしたくな

いのさ」

食事を終えて立ち上がるとき、白い人物の姿はなかった。反対の車両に帰ったのであろう。そうでなければ、イラフたちの脇を通って気が附くはずだ。

「やはり少しふしぎな感じだ」

「そうだね。だが、ぼくは敵意を感じない」

「わたしもそう思った」

「じゃ、行こうか」

部屋に戻るとチヒラは再び読書を始める。

列車は午後9時に国境を超えた。ヴォルフ国、傭兵王と呼ばれたヴォルフ大公が創った国である。荒涼たる岩と枯れた短い草にまばらな灌木があるだけの小さな平地が突如墜落するかのような断崖絶壁の大亀裂になり、それがまたわずかな平地になり、そしてまた亀裂が現れて地を裂くという風景が繰り返された。

ルーム・サービスで軽い夜食を摂る。

ストラングラーから5百キロ、最初の停車駅に着いた。午前5時。

ヴォルフの北端をなすユグスト辺境伯の都ストリントベリーのバルパルス駅であった。

いく人かが乗り、いく人かが降りた。まるでそうすることがルールであるかのように、皆一様に厳粛な表情であった。

「ふしぎな感じだ」

イラフはそうつぶやく。

駅から見る黎明の街は幻想のように峻酷だった。窓の少ない鋭利な建物群は玄武岩のように黒く、無表情で森厳だった。

第四章 ストリントベリイ

「お腹いっぱいになったが、まだ出発まで1時間ある。下車しよう」

朝食後、イラフが言った。

「そうだな。明るくなってきたし」

チヒラが応える。

列車を降りた。殺気はない。

「街に出てみるか」

笑みもせず、チヒラが言う。

「そうだね」

イラフもそう応えただけだった。

巖のように幽玄なる建築。埴の人形のように感情がない。非情の面相の石壁が来る者を睥睨するのみであつた。

ミュールを鳴らすチヒラ、ペパーミント・グリーンの眼光鋭きイラフ、駅前の平場を過ぎり、大通りから逸れて枝道に、さらに路地に入る。

「人通りが少ないね」

「そういう街なのさ。大公は苛烈な武人だ。商業を否定している」

「それで街が成り立つのか。」

すべての社会は下部構造に、経済を持っている。法律や政治は上物に過ぎない。古代神聖政治ですら、そうであつたはずでは」

「そうだね。」

そもそも集団というものは、生産物がないと養えない。この町は傭兵で成り立っているのさ。この地域一帯がそういう感じだ。武士階級出身、傭兵出身の為政者はこのあたりじゃ、珍しくない。武勲を何よりも尊ぶ土地柄だ。

傭兵上がりのユグスト辺境伯は最もソリッドな典型とも言える」

「あ」

「どうした？」

「見ろ。少年が暴力を振るわれている」

人の姿が見えない街で初めて見た人がこれだった。数人の男が金髪の少年を囲んで殴ったり、蹴ったりしている。

「イラフ、あの少年はシルヴィエ人だ。周りを顔んでいるのは若い傭兵か、傭兵の子息たちだろう」

「だからと言って多勢に無勢で赦されるのか」

「シルヴィエ人は侵略者だからな。嫌われているんだ。憎まれている」

「だがあの少年が何をしたわけでもない。理不尽だ」

「感情は常に理不尽さ。彼らも仲間や家族をシルヴィエ人に傷つけられたか、殺されたかしたのかもしれない。生まれた土地を奪われたのかもしれない。尊厳を疵付けられたのかもしれない。そんなときの人間のほとぼしるような言動の奔流は、必ずしも理に制御されたものではない。ほとんどが過剰で、むしろ矯激だ」

「わたしは助けに行く」

「どうぞ。ご勝手に」

イラフは割って入った。

「君たち止めたまえ。卑怯だ。こんな年端もいかない少年を。君らのような筋骨たくましい青年が」

「黙れ、こいつらは悪の民族なんだ」

スキン・ヘッドの一人がそう喚く。

「莫迦か？ ペーパーバックや下等な俗悪映画じゃあるまいし、この世に悪の民族などあるものか。この世に民族全員が悪である民族などあり得るはずがない。民族が同じだと同じなのか。逆に正義の民族もない。」

民族や宗教単位で悪だなどと決めつける愚劣さが悪だ」

理の通った話も知性のない者らには通じない。もうの一人の巨漢も、

「ほざいてんじゃねえ。こいつはなあ、シルヴィエ人なんだぞ。わかってるのか？ てめえ、シルヴィエの味方するのか」

顔に大きな傷のある日焼けした背の高い痩せ男も近附いて来て、

「ああん？ 何だ、てめえ、女じゃねえか」

「だから何だ？」

「お嬢ちゃん、怪我したくなきゃ、邪魔するんじゃねえよ」

「怪我？ 君らがわたしに怪我をさせる？ 面白い」

「おいおい、でかい剣を佩いてるからって、調子に乗るなよ、おち

びちゃん」

「そうか」

抜剣と同時に五人の男たちのズボンのベルトが切れ、ズボンが落ちた。

「ひゃあ」「うつつわっ!」「なんだ、こりゃ!」「てめえ、やりやがったな」

一斉に襲い掛かってくる。イラフは剣の柄で鼻をへし折る。男が倒れる。

「て、てめええええ」

次に襲いかかってきた男の肩に飛び乗り、襲ってきた三人目の男の顔を蹴り倒し、四人目を峰打ちで昏倒させる。

「この野郎、あまつちよろめ、降りやがれ」

男は自分の肩の上にいるイラフの足をつかもうとするが、踊るように軽快に肩の上で跳ねるので捕まえられない。

「俺に任せろ」

五人目の男がイラフを殴ろうとし、空振り。イラフを肩に乗せた男を殴ってしまう。男が倒れ、イラフは静かに着地する。五人目に剣を突き付け、

「さあ、どうだ? おまえ自身の愚かさがよくわかったか? 憎むなら、やった者を憎め!」

「ち、ちくしょう!」

「愚か者、まだわからないらしい」

イラフは峰打ちで叩きのめした。

「世界は虚しい。理性の欠乏した人間の何と多いことか。愚か者には理屈が通じない。闇に蔽われて、通るべき道理が通らない。惧るべきことだ。愚劣が世を覆っていて、残虐がまかり通る。愚かであるということは罪悪だ。狡猾な者も卑怯な者も邪悪な者も、要するに愚かなのだ。何て虚しいことか。

さあ、大丈夫か、シルヴィエの方よ」

「うえーん、う、うえーん」

「泣くな、さあ、お母さんのところへ帰りなさい、いや、家に帰りなさい。家はあるのか」

泣きながら首を振る。

「家がないのか、君、なまえは」

「リアイキ（璃亞彝配）」

「行く場所がないのか」

「海鳥島（エル・パツハロ・デル・マル）に行くんだ」

「エル・パツハロ・デル・マル！　そこに家族がいるのか」

「違う！　でも海鳥島に行くんだ」

「わからないことを言うね。ここからは遥かに遠いぞ。どうやって行くんだ」

「僕、歩いていくんだ」

「無理だよ。いったい、なぜ」

「どうしたんだ、イラフ」

怪しんでチヒラが近附いて来る。

「いや、この子が。……あつ！」

突然だった。

陣風のような勢いで人影が過ぎる。思う間もなく、反射的に二人はかわしていた。凄まじい朱い大剣が空間そのものを裂くように伸びて迫る。二人を同時に斬らんばかりの勢いであった。

『捉えられない！』

動体視力が追いつかない、イラフは刹那そう思った。かわした後でも風圧で斃れそうになる。力に逆らわず、転がりながらチヒラが気を放つ。敵の動きが千分の一秒緩んだ隙に、イラフは地表すれすれ、背の高い敵の膝下に滑り入り、石畳を蹴って垂直に飛んで下から上へ縦に逆斬りせんとする。

これぞ神彝裂刀の奥義、いげきんこうりゅう“韋刃天亢龍”であった。

その垂直のさま、竟に天に昇り畢おわらんとする亢龍のごとくではあったが、籠手で軽く払いのけられる。

「っわッ！」

敵は背後から放たれたチヒラの気の刃を剣で両断し、返す刀で、イラフを裂かんとするも、転びながらイラフは振り下ろされた剣を逃れる。

ズン！ もの凄く重たい剣だ。その刀身が石畳に深く刺さって石が飛び散り、路面が揺れた。

「ばかな」

イラフはまた驚いた。刀身の半ばまで深く刺さった幅広の剣が、何のストレスもなく抜けて鞭のようにしなりながら迫ってくる。切っ尖が鼻先をかすめた。チヒラが両掌を差しだして気を撃ち放つも、敵はわずかに動きが止まる程度。

「このままでは」

「やられる」

そう思う千分の一秒、イラフは周囲を見廻し、少年の姿が見えず、無事にどこかへ逃げ隠れることができたらしいことを確認した。『よし』 さて、どうしたものか、この強敵は。

そのときだ。白い光のようなものが目前を過^{よぎ}って、敵の剣を受け止めた。

「あゝ」

イラフは思わず声を出す。剣が止まったので、初めて敵の姿を見ることができたからだ。

黒い緋色の髪をカーリーのように乱して昏い緋色の鎧兜で装甲した長身の女戦士、その身の丈は2mを超えるように見えた。それでいてあのスピード。冷たい汗がイラフの背に流れる。

その凄まじい朱色をして艶光する大剣を、黄金の光を放つ細身の白い剣で受け止めているのは、細い身体に白く長い髪をまっすぐに垂らした白いマントの下に白いトーガを着た人物だった。幅広の朱剣を止める細剣はとても長く（イラフには2m以上あるように見えた）て、今にも折れそうだった。背後から見ていたので性別まではわからない。背の高い華奢な若い男か、少年のようでもある。だがイラフは直感的に女性であると感覚する。

朱い剣に彫られた茜色を帯びた金の神呪文が燃え上がるように輝くと、じりじりと白い細剣が押されて潰されそうになる。

イラフは我に帰って急ぎ立ち上がり、緋の兜の女剣士の右手に回りながらチヒラを見やる。チヒラは三叉戟『天真義』を顕し、楯『地真義』を右手に持つて、左方へと回っていた。すると、それに気が附いたのか、緋剣士は白剣士を弾き飛ばし、チヒラに向かって振りかぶり、その勢いでイラフに斬りかかる。チヒラは転びながら『天真義』の尖から烈光をほとばしらせ、イラフは下から間合いに入ろうと試みた。

突き飛ばされた白剣士もまた素早く体勢を立て直し、トーガという動きにくい衣であるにもかかわらず、巧みな所作、理に適った剣さばきで、布を絡ませることもなく、むしろ麗しく舞うかのように突きを繰り出す。剣が黄金に変わる。その美しさと動きの華麗さはギリシヤ古典期の彫刻が動くようであった。金と象牙でできた芸術品のようであった。しかもその表情は「高貴なる無関心」を浮かべ、冷然として感情を表わさない。

だが緋色の剣士は長身にもかかわらず俊敏で、黒豹のようにしなやかに飛び上がり、三者すべての攻撃をかわした。そして喚く、

「我が名は、生ける屠殺神アグル・ゴリア。命は賭して闘うがための代に^{しろ}しかず。聴くがよい、そして恐れ怯えよ、我が信仰、我が神は、聖の聖なる殺戮の大神帝ジン・メタルハート様よ、我こそはメタルハート様の直属の配下。憶えておくがよい。

儂き貴様らの命のあるうちは」

そう言い残して近くに二階家の屋根の飛び上がり、けたたましく笑いながら、次により高い屋根へ飛び移り、さらにまた高い方へ、そして屋根から屋根へと走り去って行った。

ジン・メタルハート。その名を聞いて稲妻に打たれたかのように、イラフとチヒラとは、ただ呆然と見送る。立ち尽くすことしかできなかった。

その身体には衝撃が走っている。むろん愚かなことだ。イラフは

その強敵と闘うためにこの旅の途にあるのだから。

メタルハートと闘うのだというわかり切った事実を、イラフは強烈に実感していた。剣の柄をにぎり、動揺を抑える。

『しかもジンの配下だと称するあのアグールでさえあんなにも強いのだ』

苦いものが胃から込み上げる。怯えてなどいない。しかし動揺はしている。なぜだろう。『歴戦の傭兵たる自分に恐れなどあるはずがない。ましてや命惜しさなど！　だがこの根底から来る畏れ^{おそ}は何だ！』

これではいけない。いや、弱いのは仕方ない。人は皆弱いものなのだ。強いと思う人間は愚かなだけだ。物を知らぬだけだ。

理性を取り戻し、白い髪をした若き騎士へ歩み寄った。

「ありがとうございます、助かりました」

イラフは手を差し出す。チヒラも寄って来た。相手は手を出さなかった。イラフは已むを得ず、静かに引つ込める。

とにもかくにも初めて相手をまじまじと見ることができた。驚いたことに、冷凜たる彼女もまた、少女と言ってもよい若い女性であった。

白皙の肌に切れ長の眼の中に怜悧に燃える金色の双眸、左の鼻翼に宝飾付きの金でできたマントラの透かし彫りされた円環のノーズティカ（インドの鼻ピアス。円環の連なる装飾的なものが多い）を徹し、装飾のたくさん吊るしたチェーンで耳朶の金のピアスと繋いでいる。首には金色に光る入れ墨が精緻に彫られ、そのすべてが神呪であった。

美しく燦めくまっすぐな白い髪はまばゆい。前髪が眉毛を隠し、少し内巻きになっている。後ろ髪もまた腰下までまっすぐに垂れ、内巻きにそろっていた。背が高くて180cmはあるの相違ない。

「イラフ、そしてチヒラよ。じぶんは白く燦めく冷凜剣のユーカレ（憂寡鈴）。海軍だ。奴を追っていた」

「なぜ我々の名を」

「国は外国人を容易に信じない。じぶんも龍不（りよふ）国出身だ。ふ。君らを監視するよう命ぜられていた」

チヒラはリョジャドの出身のリョジャド人である。イラフが最初に感じた懐かしさや親しみのいわれはそこにあった。

ペパーミント・グリーンの眼をいぶかしく光らせ、ユーカレを凝視する。

「なるほど、それは十分にありそうなこと。しかしそれをこんなに簡単にバラしてしまうのは不自然に思えますが」

「もともと承知する我が任務はアグールを追うこと。ノルテに渡るなら監視も兼ねるよう命じられたから仕方なくそうしているだけだ。こうして身をさらしてしまえば、監視の役には立たない。だからこれで監視任務はお役目御免だ。狩りに専念させてもらう。

まったくもって清々した。ちよつとばかり運動にもなったし。ふ。

監視されていることを心外に思うかもしれないが、気にするに及ばない。じぶんにもまた監視が附いているのだから。恐らくじぶんの監視に対しても監視が附いているはずだ。さらにその監視役に対しても監視が附いているに相違ない。さようにいくえにもなっているものだ」

「そうか。まあ、やりそうなことだ」

イラフが歎息するも、チヒラは笑いながら、

「ふ。愉快じゃないか。官僚どもがよくやる保身さ。奴らの趣味はなるべく背負わないようにすること、なるべく関わらないようにすること、已むなく組織を護るふりをして自分を護ること。他にない。それが保身ということさ」

「小人をせせら笑つても意味はない。失礼してアグール追跡を続けさせてもらう。ふ。さらば」

ユーカレがニヒルな笑みを浮かべ（金の双眸は笑っていない）、ノーズティカを打ち鳴らしながら背を向けて去って行つた。

「すかした奴だ」

チヒラが桃色の晴を曇らせ眉根を顰め、肩をすくめる。

「さあ、わたしたちも行こう。列車が出るよ」

イラフがそう言った。

「そうだな。今さらだが、人気のない街でよかったよ、普通なら巻き添えになる人間が出るところだった。ま、とにかく急ごうか」

「あの少年は無事にどこかへ逃げられたみたいだな」

チヒラにそう言われてうなずきながら、

「うん。たぶん、そうだと思う。アグールとやらに襲われた一瞬後には、もう姿が見えなかった」

「じゃ、急ぐか」

「うん」

しかし二人は乗り遅れた。

「荷物は次の駅に置いてくれるよう頼んだ。後発の急行で行くしかない」

チヒラがそう言った。

イラフはペパーミント・グリーンの双眸をモス・グリーンのまつ毛で翳してしばらく考え込んでいたが、

「列車で監視の目を感じたのはユーカレのせいだったんだね」

「ああ、たぶんね」

しかしチヒラは遠い眼をしたのであった。

急行は2時間後に来た。日はすっかり高くなっていた。二人は乗り込む。

「茶でも飲もうか。空腹でもある」

またトラブルに巻き込まれるのを警戒して駅のホームをあえて出なかったのだ。ラウンジのある車輦に向かう。

そこで奇妙な男を見た。

黒いマントに全身黒い服でフードを深くかぶっていて、とがった鼻先ととがった顎が見えている他は、縮れた長い黒髪がはみ出しているのみである。その全身からはただならぬオーラが発散されていた。

「何だろう、何か不安を覚える」

イラフが言う。チヒラも眉をしかめ、

「敵かな」

黒尽くめの男は視線に気がつき、席を立ち、去ろうと立ち上がった。刹那慌ててマントを押さえたが、二人ははっきり見た。見事な彫金のされた剣の鞘には神聖シルヴィエ帝国の紋章が浮き彫りにされていたのである。

第五章 黒い男

「見たか」

鋭く囁くようにチヒラは訊いた。

「あゝ、見たとも。間違いない」

「しかし、なぜここに」

「シルヴィエ人だって旅行くらいする」

「だが、あれは相当高貴な身分の者じゃないと附けられない」

「そうなのか」

「知らないのか」

「知らなかったよ。で、どうする。それが肝心だ」

「わかっているよ。しかし、どうすべきでもないだろう。ぼくらには、ぼくらの任務があるのだから」

「放置か。もしかしたら食い止めなくちゃならない何かが起こりつつあるのかもしれないよ。調べるべきだと思うが」

「うん。一理あるね。だが相当リスクがあるよ。外交問題になることもあるかもしれないし、帝国の者らが近くにたくさんいるのかもしれないし、彼自身がかなりの達人であるようだし」

「そうか・・・」

そうこうするうちに寝台車輛に行って見えなくなってしまった。

「さあ、お茶を飲んだら、ぼくらもコンパートメントに戻ろう。ともかく荷物を置こうよ。ええっと、次の駅は7時間後だったかな」

戻って荷物を収納しながら、イラフは、

「実際、商業目的の場合は、シルヴィエの人間も相当な数の人間が来ている。考え過ぎかもしれない」

「商業目的かどうかは確かめようがないけどね」

「それはともかくとして、シルヴィエがいること自体は珍しいことではないとは言え、君の言うとおり彼が高位の人間だとすれば話は別だよ」

「軍本部にはさつきメールしておいた。ついでに照会もかけたよ。ぼくらに教えてくれるかどうか知らないが。義務は果たしたさ」

7時間後、黄昏の駅で誰かが降りた気配はなかったが、翌朝の食事に黒尽くめ男は来なかった。

「やはり降りたのかな」

「ルーム・サービスだってある。食事に来ないからと言って、列車内で食事をしていないとは限らない。どっちにしろ、気にしないさ、本部も何も言っていないし」

「そうだな。まあ、関係ないな」

そうこうして三日が何事もなく過ぎた。彼らはほとんど語らず、景色を眺め、本を読んだ。

午前5時、列車はスパルタクス帝国に入った。スパルタクスは強大な軍事国家で、産業は牧畜と農業と漁業と海洋貿易である。

峻嶒な山岳地帯を抜けるとなだらかな起伏の続く丘陵地帯に入った。早くも空気中の光がシャンパン・カラーを微かに孕み始め、空は紺碧ながらも黄昏の兆しを見せる。

まるで斜陽の帝国の豪華な懶惰のようであった。帝国は過去、壮大に繁栄していた。

当時の栄光は十分に力を余していて、未だに地方の隅々にまで、偉容を誇る不落の城が聳え、都市には立派な建物がならび、人や物資であふれている。

その端緒は、大航海時代の世界ルートの発見による世界貿易で蓄積された空前絶後の富にあった。

得た金銀によってさらに大軍艦数千隻の大艦隊を編成し、一時は

マル・メデイテラーノ（裂大陸大海洋）から東のオフエアノ・パクス（太汎海洋）、西のアッチランティコ（大古代海洋）を廻って、各大陸に貿易拠点となる都市を数百か所も持つほどの、世界に冠たる大帝国の神威を帯びた時期があつたのである。

溪谷を見ながら丘陵地帯を蛇行しつつ進むと、やがて前方に、岩山の絶壁の面を背にして建つ地方都市シュッペンダガルトが見え始める。午前7時だ。

建物全体が立ち上がり部分から急激に角度を急にして尖る。基礎部から上（城の4分の3以上）が鋭利な細い尖塔状になる。この奇妙な形状の城は組石造の躯体に錆びない白銀色の金属板を張って砲弾に缺することさえない、まさしく鉄壁の城砦であつた。

奇観にイラフは見とれた。

「すごいなあ」

「こんなことで驚くのは早いよ。」

世界にはもつと凄い建築物がたくさんある」

「君はそんなに世界を廻ったのか」

「そう。正確に言えば、世界の大学と図書館とを、だ。」

気の力を練成するためには工夫が必要だし、前の時代を超えて新しい境地を啓くには、さまざまな異世界の奥義を学ぶ必要がある。

見聞は重要だ」

「任務ではなく、勉強のため？」

「最初はね。しかし外国に詳しいので、自然と国外の情報収集などの任務が命ぜられるようになったのさ」

「さぞかし博学なんだな。実際、羨ましいよ。」

わたしには学問のために学問をする機会がなかった。勉強は嫌いではなかった。武人になるしかなかったんだ。ほんとうは乱暴なことは好きではない」

「そんなに強いのに。」

「誰しも自分の特技を好きになるものだと思うていた」

「むろん、武を磨くことに興味は尽きない。でも、それは学問なん

だ」

「なるほどね。」

ところでシュッベンドガルトには古い修道院があつてその附属図書館が素晴らしいんだが。聖ガレノン修道院の附属図書館だ」

「聖ガレノン！」

「君も知っているのか」

「いや、知らないんだけど。実は……やめておこう。後で話す」

「おかしなやつだな」

「で、蔵書がたくさんあるってことか」

「あゝ。百万冊を超える古今東西の書籍だ」

「一生かかっても読み切れないな」

「人間は一生のうちで5千冊程度しか読めないという説があるそう
だ」

「そういうのを聞くと挑みたくなる。もう14年も無駄にしている
が」

「ふ。まだまだ遅くない。君は知識への意欲に目覚めている。幸運
だし、幸せなことだ。向学心のない愚かな人間は哀れだ。残念な
ら、ぼくらよりも愚かな人間はたくさんいる」

実際、聖ガレノン修道院は素晴らしい場所であつた。

左右に塔を備えた大聖堂のファサードから身廊を通り、側廊を横
切つて修道院施設に渉る。そこはパティオ（中庭）を囲む廻廊形式
の建築であつた。

廻廊には列柱が並び、列柱はアーチをなし、アーチの上部はト
レーサリー（アーチの上部を飾る幾何学模様の透かし彫りまたは組
子のような装飾）で装飾されている。

二人は廻廊をゆっくり歩きながら知の雰囲気に浸つた。

「ここだよ」

チヒラが指差したのが蒼古荘厳たる附属図書館である。中に入る
と高い天井の聖堂のような構造で壁面はすべて磨かれ装飾の彫られ
たオーク材の書棚で、3層構造になつていて、バルコニーのような

廻廊が3段になって備わっていた。ミュールの音がよく響く。

「1000年を超える文書だけでも数千ある。それらはオリジナルのパピルスや粘土板、椰子の葉の経典、羊皮紙の写本などだ。こんな場所は世界でもそうたくさんはない。人間の知性の栄光だ。

ここは叡智の殿堂としてあらゆる権力から独立している。この最高位である大司教兼院長に国家の王の権限も及ばない。特別な地位、超越的な存在として、世界の正義と平和に貢献している。

さて、ところで、ぼくは少し自由に閲覧したいのだが」

「どうぞ。わたしも自由に見よう」

二人は別々に閲覧を始めた。

知の森をさまようようにイラフはさまざまな書籍を手にし、閲する。遠くにかすかに黒いマントの男を見たような気がした。近附くとあの男だった。熱心に古文書に見入っている。室内にもかかわらず、深くフードをかぶっていた。何を見ているのだろう。好奇心に駆られてイラフは進む。

男はペーパミント・グリーンの双眸の光に気が附いたかのごとく、わずかに振り返った。そしてあたかもちやうど読み終えたかのように自然に立ち上がって本を戻し、去る。イラフは足を速めたが、見失った。彼が見ていたであろうと思われる書籍を探す。確かこの位置に本を収めていたが。表紙の色は、確か……

「あゝ、これは」

その冊子の背表紙に浮き彫られ表題は『奥義の書・大曼荼羅真義』。手にとって少し頁をめくってみた。非常に難解な書物である。

「世界曼荼羅……？ 時空と歴史による秘術？ 実践非論理性？ 何のことだ」

イラフには理解できなかった。チヒラを呼ぼうとしたが、姿が見えない。探したが、いない。どこにも。

もしやと思い、パティオのある廻廊に出てみた。

「あれ？」

チヒラの姿は見えなかったが、見失ったと思っていた黒いマント

の男がいたのだ。人影のない、列柱に囲まれた四角い中庭を横切っている。

四角い平面を斜めに横断する黒い姿は音声のない映像のようであった。

それも束の間、突如、屋根から降りてきた影がある。紅きアグールだ。マントの男が振り向き、剣の柄をにぎる。アグールが^{おあなた}大鈍のような刃物で襲う。

助けるべきかどうか迷ったが、体は中庭に飛び出していた。しかし、それよりも速く白い影が過ぎる。イラフがあつと驚き叫ぶ、

「ユーカレ！」

それは純白のマントを翻し、金の双眸に白き髪とトーガのユーカレだった。長き冷凜剣を振るう。その華麗な動きは千手観音像のようでもあった。五月雨に乱れ、あらゆる方向より変幻自在に斬り附ける。オーロラのようにも見えた。

「くそつ、また貴様か」

アグールが憤りを剥き出しにする。ユーカレに遅れたイラフも、
「加勢するぞ！」

と剣を振りかぶる。どこからかチヒラも飛び出て来た。『天真義』を出す。黒マントの男はフードを外さず、剣を抜く。構えた。

「ち、多勢に無勢か」

さすがのアグールも不利と思ったか、まとも屋根に跳び上がり、
「次は貴様らの命はないぞ。ぎやははは」

そう哄笑して去る。

「ふう。また逃がしたか」

ノーズティカ揺らすユーカレはそう唸ると、マントの男を振り返り、

「あなたは どうしてアグールに狙われているのか」

男は黙っていた。礼も言わず、背を向けて去ろうとした。

「ちよつと待って。礼の言葉ぐらいあってもよいのでは」

チヒラが桃色の眸を濃くして憤り露わにし、いさめたにもかかわ

らず、男は歩み出し、それを見ていたイラフとて言わずにはいられない、

「貴殿、失礼であろう。シルヴィエの殿よ」

相手は足を止めた。

「シルヴィエだと、それはまことか」

ユーカレがそう言っただけイラフを見る。

「あゝ、しかも高貴な身分だ」

チヒラがそう補足すると、男はいきなり振り返った。

「それ以上、言うな」

抑えてはいるが、厳しい語調だ。

ユーカレはいぶかしがる。

「しかし、なぜアグルがシルヴィエの人間を襲うのか。ジン・メタルハートは今や神聖シルヴィエ帝国に属するはず」

男はその疑念に答えず、黙っていた。思案しているようだった。

チヒラも猜疑を抱く。

「言われてみれば確かにそうだ。しかも高貴なる身分のはずなのに……」

黒尽くめの男は手で戦士らの言葉を制止する。

「もうよい。わかった。ところで、まず訊きたい。君らはどこに属する者たちか」

切れ長の眼の中の金色の眸を鋭くし、一歩進み出たユーカレが代表して応えた。

「我らはオエステのものだ。剣を見れば察しが附くだろう」

「大華厳龍國だな」

「そうだ」

三人が同時にそう応えると、シルヴィエ人は彼らを凝視し、こう言った。

「その証はすぐにわかる」

この段になって、ユーカレはイラフとチヒラとに以前、会ったことに気が附く。

「こんなところで再会するとはな」

チヒラは呆れ顔で、

「今頃、気が附いたのか。よほど印象がなかったらしい。

まあ、いいや。しかし、まさかまたここで会うとはね。アグールを追って来たのか」

「追いつけていることに変わりはない。だがここに来たのは偶然だ。世に名高い修道院附属図書館を是非見ておきたい、そう思ったのだ」

「なるほど。ぼくらと同じだ」

今度はユーカレが問う、

「君らは任務を終えたようだが」

確かに、チヒラはスールでの情報収集を終えて報告を済ませていた。イラフもクラウドのイースと会って密約を交わし、報告を終えている。

「まあ、そうとも言える」

チヒラは応えた。

黒服の男が口を挟む。

「アグールは私を狙っている。

ともかく秘密を守ってもらうことが必要であることを証明しよう。私の言葉だけでは、到底、信じられまい。当然のことだ。さあ、行こう。

一緒に院長室へ来てもらいたい」

三人は顔を見合わせたが、

「わかった。院長は世俗の権力を超越した方だ。信頼できる。すべての悪は世俗の価値を信じることから起こるのだから」

四人は廻廊を廻り、司教館へ向かった。衛兵は黒服の男が来ると調べもせずに通す。

長い廊下の先に修道院長室はあった。巨大と言ってもよい檜の扉の両側には装甲の聖騎士が立っている。扉が厳かに開いた。

叡知の殿堂の主、ピリピレオ2世は深紅の僧帽に白い絹の貫頭衣、黄金の杖を持って玉座に坐っている。大司教兼修道院長はその厳し

い顔に驚いた表情を浮かべていた。

「何と、いったい、これは、どうしたことだ」

いつもの用心の癖で、部屋の中を見廻しながらも、イラフはこのときに初めてじっくりと黒服黒マントの男の様相を見ることが出来た。背が高い。フードから出ている顎はシャープで精悍だ。

ユーカレが一步進み出て名乗る。

「大華厳龍國、海軍精鋭部隊、憂寡矜です」

それを見てチヒラも、

「陸軍精鋭部隊諜報部、千毘羅です」

「超特殊戦闘部隊『非』、外国傭兵部隊の尹良梟です」

僧帽から硬そうな銀色の髪をはみ出させる革のような皮膚のピリピレオは黒服の男に尋ねた。

「エル殿。説明していただく」

エルと呼ばれた黒マントの男はそれに応え、

「猊下。この者たちは私がシルヴィエの人間であることを知っています。しかも身分についても近からずとも遠からず察しています。

そこまで知られては何も言わずに置くよりも、怪しい者ではなく、この秘密を守ることには意義があるということを経験した方がよいと判断したのです。すべては話せぬとしても。

その証明は、ここに於いてはあなたにしかできません。院長殿。

大義を説明することはできぬも、大義のあることを保証していたきたい。

それに、院長殿、さきほど私はジン・メタルハート直属の女戦士に襲われたところを彼女らに助けられました。なれば何も言わぬは義に反すると気が附いたのです」

ピリピレオはゆっくり深くうなずく。

「わかった。

まず大華厳龍國に連絡を取る」

そう言ってMPCでメールを送った。沈黙の数分が過ぎた。着信音が鳴る。

「回答を受信した。君ら戦士の確認はできた。うむ」

腕を組んで考え始める。やがて、

「では諸君、これは皇帝の信頼厚き劉玄大丞相を補佐する大輔弼官、尹殷卿の提案であるのだが、余も今、思慮し、良き策であると思える。

誇り高き戦士諸君よ、チヒラとイラフは既に任務を終えたし、ユ―カレはアグール追討と目的が重なるはずだ。何が言いたいか、わかるか？」

戦士らは首を横に振った。

「諸君らは、今ここにいるエル殿をリヨンリヤンリューゼンの首都である大元汎都まで護衛してはくれまいか」

黒服の男も、三人の戦士も眼を睜く。

「何ですって！」

「しかし彼は、いったい、何者なのでしょうか」

ペパー・グリーンの光を強めてイラフが問い詰めるように質問したが、大司教は、

「今はその質問に答えられない」

「しかし彼はシルヴィエ帝国の人間では」

「そうだ」

「神聖帝国の人間を護るのですか」

「そうだ。理由は説明できない」

「しかし敵は何者ですか？ 誰から誰を護るかも知らせてもらえないのか」

「そのとおり。真実を知らずとも生きて行ける。真理は常に秘匿され、現実の真相はその姿を顕わにしない」

藤色のまつ毛を翳してチヒラがうなずき、

「わかりました。説明がないことなど、よくあることです。命令に従うのみです。

ちなみにルートの指定は」

「ない。ただし絶対に安全な方法だ」

「この世に絶対はありません」

「この件に関しては絶対が条件だ」

「不可能です」

「君らに拒否権があるのか」

「……ありません」

チヒラのその言葉の後に、咳払いしてからユーカレが言う、

「了解しました。」

ただし、絶対に、というオーダーなら、いくら精鋭とは言え、我々だけでは手薄でしょうね」

「わかっている。皇帝もそれを考慮しておられる」

桃色の眸を猜疑で曇らせてチヒラが問う、

「彼はここに来るまでどのように警護されていたのでしょうか」

「志ある屈強な戦士と聡明な従者がいた。だが」

「……やられてしまったわけですね」

「そうだ」

さらにチヒラが、

「皇帝は、いった、どのような配慮をお考えでしょうか」

「尹殷卿いんいんがノルテで潜伏活動中の軍人を大至急招集すると言っておられる」

「どこに、いつまでに」

「この周辺に。第一弾は今日中に来るだろう。後は追って道々集まるであろう」

「何人くらいですか」

「今日、集まる者が何人であるかという問いなら、定かではないと答えよう。」

だが最終的には百名ほどになる。ということだ」

「わかりました。どこの部隊に属していますか」

そう訊いたのはユーカレであった。

「さて、添付ファイルを見る。ふむ。」

陸海両軍の特殊部隊だ。一部は大華厳龍國が長年契約している外

国人傭兵だ。またクラウド連邦と合意ができているとのことだ。連邦からも戦士の派遣が得られるということらしい。メールの最後にこうある。

彼らを特殊作戦部隊SFE（セファイ Security Forces for EL）と呼ぶと。大輔弼官殿はさように伝えてきておる」

「了解しました。出発は明日でしょうね」

イラフの問いに、ピリピレオは厳粛な面持ちで、

「準備出来次第、すぐに、だ。」

エル殿がここにいることが既に知られてしまっている以上、一刻の猶予もならん。これは悔えることのできぬ事態なのだ。

ともかく準備が終わるまでは、この中から出ずに、出来次第で秘密の出口から彼とともに出発してもらう。

ちなみに、ルートについての考えはあるか」

濃いクリムゾンとボルドー・カラーの絡む髪をいじりながらチヒラがユーカーレの顔を見つつ、応えた。

「ぼくらが行くこうとしていたルートで行きます。シルヴィエ帝国領を横切ります」

二人の頭がならぶと紅白の梅のようだと、イラフは唐突に気が附いてくすつと笑う。

チヒラの応えに院長は少し顔を顰めた。

「意外だが、良かろう。君らはプロフェッショナルだ」

イラフが尋ねる。

「エルという、彼のなまえは本名ですか」

「それも答えられぬ」

そう言うってからピリピレオは手を挙げてもう下がれと言う合図をした。

第六章 旅

「セファイはグループ化した共有のアドレスで個別または集団の連絡

を取り合う。チャットやeメール、通話が可能だ」

打ち合わせから戻って来たチヒラがそう報告する。午前10時だった。

その他いくつかの連絡事項を確認し合うと、イラフ、チヒラ、ユーカーレの三名は二人用の修道僧居室で、簡素なベッドに腰掛けて額を突き合わせる。

「しかし、皆目わからない。どう思うか」

さようなイラフの問いに、純白のユーカーレが涼やかな表情で応えた、

「ふ。疑念はない。全体として、さほどふしぎではない。ただ、護る対象がシルヴィエ人というのが馴染めないだけだ。慣れの問題だろう」

「軽く言うな。どのくらいの身分だろう。大司教が尊重するような存在だ」

藤色のまつ毛を翳すチヒラも疑念を呈した。

「少なくとも大貴族以上、皇帝以下だな」

ユーカーレが金の双眸で涼しげにそう言うと、チヒラは少し頬を膨らませ、ミュールをカタカタ鳴らし、

「バカを言うな。絶対神聖皇帝ジニイ・ムイは帝都ヒムロ *Himuro* にいる」

「ふ。わかっているさ」

眼光鋭くイラフも問う、

「大枢機卿で帝国を離れた者がいるか」

チヒラが首を振って、

「少なくとも聞いたことはない。ぼくらは知り得る情報でしか思考できない。それは万全ではないし、不備がないとは、到底、言えない。

少なくとも大枢機卿が首都ヒムロを離れた話は、…聞こえてはいない」

眉を寄せて思案しながらイラフがさらに問う、

「・・・では枢機卿か、大貴族か。誰が考えられるかな」

チヒラは眼を閉じて肩をすくめ、

「大枢機卿と違って、枢機卿は数もいるし、名もほとんど知られていないから。」

帝国の貴族に至ってはなおさら。まったく知られてはいない」

「エルの場合、若そうだから、大貴族の子弟ということも考えられないか」

「うん。あり得る。さらに情報が少ないけどね」

「そうだよね、大貴族にどんな人がいるのかを知らないのだから。」

そもそも身も蓋もない議論だ」

「ダメだな。これ以上考えてもわからない。解決不能だ。やめだ。考えてもわからない問題は考えてもわからない。」

それより現実問題に戻ろう」

ミュールを鳴らしてチヒラがそう結論附けると、白いトーガを強く身に巻き直しながらユーカレが、

「で？　それで帝国領を横切るといつていたが」

チヒラも「そうそう」と頷いておきながら、どういうスケジュールなのかは知らなかったので、イラフの方を向きながら、

「で、イラフ、いったい、どこで馬車に乗り換えて隠密行動をするんだ」

イラフが頬を輝かせて愉快そうに微笑する。

「実は」

悪戯っぽい笑みを浮かべた。「ここなんだ」

「え！」

「案内するよ。時間はかからない。・・・と言っても、わたしも初めての場所だけど」

「なるほど。それでか。だって、聖ガレノンと聞いて反応したから、変だなんて思っていたんだよね。知らない場所と言いながらさ」

聖ガレノンの所有する牧場はサムカノン村という村が管理していた。緑豊かな丘陵の窪地にこんこんと湧く泉があり、森が囲んでい

る。

森の中には馬小屋があり、馬のいななきや時折ふしぎな神獣の声がした。

研究員のサンディニが出てきた。修道士の服装だったが、無造作な口髭や縮れた黒髪は風体を気にしない学究の徒のそれだった。いかにもこだわりの強い、癖のある研究者、もしくは技術屋に見えた。

「こちらです」

大きな納屋のような藁葺きの建物に案内された。藁が敷かれ、十数頭のポニーがいた。

「これがそうですか」

イラフは思わず訊いた。

「そうです」

サンディニはにかむかのように、理由もなくうつむいて答えた。

「ヨウクはほとんどポニーに見えます。鬣と尾が異様に長いことを除けば」

「ほんとうだ。かたちはポニーと同じだけれど、尻尾と鬣の長さは倍以上ありますね」

チヒラとユーカレも予想外の動物の出現で、眉を上げて眼を丸くする。

「イラフ、これは、いったい、何だ。まさかこれで移動するのか。正気か」

サンディニは少し不機嫌な顔になったがこういうことに慣れていくようだった。

「龍の血を濃く引いています。龍馬と同じ、1200 kmを1時間で走れることも可能です」

「信じられない」

そんな疑念と驚きには興味がないように研究員は言葉を続け、

「エサは馬と同じでも大丈夫ですが、霧や霞も食べます。巖に附いた雫を舐めるだけでも大丈夫です。」

今回は、砂漠地帯に行くようなルートはないようですが、水分補

給には気を付けてください。寒さにはとても強いです」

イラフは尋ねた、

「馬車もこちらにあると聞いていますが」

「届いています。こちらです。最高の匠が造りました。人数に変更があったと聞いたのですが、居住性に問題ないと思います」

納屋を出て煉瓦造りの倉庫に入った。T型フォードのような自走機やライト兄弟が作った飛行機のようなものがいくつか置いてあった。

「これらは別の町にある鍛冶屋で密かに造られたものです。これらの機械式移動システムと、龍馬などの生物を組み合わせて使えないかなども研究しているのです。

さあ、これです。平凡な旅商人に見えるようにというオーダーでしたので」

幌タイプの、大型だが、平凡な馬車で、車輪も木製だった。

「車輪は特殊な材木で、実際はゴムのように柔軟です。接地面に微妙なパターンが刻まれていて走破性も十分です。サスペンションもかなり高性能なものを装着していますが、見た目にわからないように工夫しています。

車軸には軽量で強靱な金属、オリハルコンを使用しています。フレームも同じくオリハルコンのラダー・フレームです。その上に乗るボディが木製ですが、実は材木と材木を張り合わせた中に厚い鉄板を挟み込んであります。

荷台の上に張つてあるこの幌ですが、幌も幌を張るための骨も特殊で頑丈な不燃性のものを使っています。なお防御と防寒を兼ねて、馬車の幌の上にかぶせるために、大型帆船用の頑丈な帆を何枚か積んであります。

幌の各所に、小窓として開けられるように、切り込みを入れてありますが、幌を重ねるときは、この切込みの位置が合うようにしてください。そうじゃないと意味をなさなくなってしまうので」

「へー、こういう小窓、好きだな。……おかしいかい？ 怪訝そう

な顔で見ないでくれよ、チヒラ」

サンディニはイラフらのやり取りを無視するように言葉が続け、
「座席はあえてベンチのようなタイプにはしませんでした。直接床に坐るような感じの低い座面に、ゆったりした背もたれの附いたタイプです。アラビック・ソファに少し似ているかもしれませんが。ただ、ご覧のとおり通常のシートのように列になっていて、アラビアのように囲む感じではないです。」

そのまま仮眠も取れるように低く作ったというのが意図で、特にアラビックな感じにしようとしたわけではないのです」

座席の真ん中は通廊になっていて、通廊にも鮮やかな絨毯が敷いてあった。、

「しかし鮮やかな明るい色使いで、見方によってはアラベスクのような模様だ」

「はい、せっかくそう見えるからそういう感じにしてみようかと思ひまして」

「おかしなところに気を遣うね。この小さな天球儀みたいなものは何だ」

チヒラが尋ねた。

「羅針盤です。一応、備えてあるのです。かなり正確なもので、星の位置測定器を兼ねています。それで形が少し似ているのです」

「商人という設定では、少しおかしくないか」

「そうでもありません。」

最近では、かなり使われていますよ。高価な物ではありませんけれども、安全対策に投じる資金は年々増えて来ています。無事と平穩への意識はかなり高まってきています。

生きる者の本質ではないでしょうかね」

「そうでもないさ」

チヒラがさり気なくさらりとかく言うも、イラフは感心したように、

「目立たないところに高い技術が投じられているんですね。苦心し

ていただきました」

「ありがとうございます。力の及ぶ限り工夫いたしました。」

さて、それから積み荷ですが」

それを聞いてユーカーレがノーズテイカを微かな音をさせて冷笑し、「ふ。いくら体裁を整えても、実がないと商人らしくないからな」

半ば無視するように髪をかきながらサンデイニは言葉を続ける、「積み荷がないと商人らしくないので、搾ったオリーブのオイルの樽と赤ワインの樽を積みます。これからですが。それから琥珀や革、古い貨幣なども、錠前と鉄棒の附いた木箱の中に仕分けして入れておきます。」

それとは別に食事用に塩漬け肉の瓶詰や塩や小麦粉の袋を積んでおきます。

後は、これです。ここに若干の工具、地図、防寒具を収納しておきます。あゝ、それから薪と焼き石用の石も少しだけ積んでおきます。

焼き石は走行中の暖房用としても使えます。鉄の籠を使うか、そこにあるミニ暖炉を使ってください。それです、その鉄と煉瓦で組んだところです。そこで使ってください」

三人は旅の支度を始めた。

そこへ髪の毛の長い、口髭と顎鬚を垂らした痩身の若い男が現れた。

風雨に晒された精悍な顔立ちで、いかにも百戦錬磨の傭兵ですと言わんばかりの風貌だった。

「ガリア・コマータの隊長、ストランドです。」

隊員とともに、イース殿より命令を受けて参上しました。大臣は警護をしるのおおせです」

眼を輝かせてイラフは立ち上がり、手を差し出す。

「どうかよろしくお願いします」

ガリア・コマータとは長髪のカリアという意味で、実際の歴史上にもあった呼称だが、こちらではクラウド連邦の建国に大いに貢献した強兵騎馬軍団であった。

出発の朝は寒い雨となる。起きて来たチヒラが不満げな顔をした。ユーカレはトーガの大きな布を器用に留めている。

セフイの斥候や先遣隊などはおもう出発していた。とは言っても、大華嚴龍國の特殊部隊も外国人傭兵もまだ来ていない。ガリア・コマータたちだけであった。ユーカレが言う、

「むろん、待つ気などない」

その言葉にチヒラはうなずいた。

「いずれ来るさ」

馬車には四頭のヨウクが繋がる。予備として二頭が牽かれた。つまり馭者も含めて、いざというときになれば、一人ひとりが一頭に乗れるように用意したのだ。

「ガリア・コマータの兵士一名を斥候、五名を偵察隊、七名を調査隊、十四名を先遣隊として出しています。皆、神速なる龍馬に乗っています。」

今のところ、進路に特段の不安要素はありません。

なお我々本隊が出た後に、後衛隊九名、調達班八名、援護隊五名、事後検査隊三名、しんがり隊二名を出す予定です」

ストランドがそう報告した。

「さあ、出発だ」

イラフが号令する。

セフイ本隊は意気揚々と出発した。

馬車の手綱はガリア・コマータのパウルという男がにぎる。屋根のない、肘掛と座面だけの馭者席に坐り、セイウチのような髭に表情を隠して出さず、冷たい雨に濡れることをまったく意に介さないように見えた。雨外套のフードからは雨の雫が次々落ちている。

ユーカレ、イラフ、チヒラ、エルは天井の高い幌の下、車内の座席に坐った。

イラフはさっそく小窓を開けて雨の景色を眺めてみる。

ストランドが龍馬に乗って、いかにも商人に雇われた傭兵ですという雰囲気^かを醸し、添うように警護していた。

チヒラは読書を始め、ユーカレは念入りな剣の手入れをする。

荷台の中は毛布やクッションを置いて思い思いに暖を取れるが、エルに関しては、念のため、積み上げた樽と麻袋で作った壁にテントのようにタープを張って、室内城砦を築き、その中に隠蔽した。間もなく馬車は山間の街道に入る。荒れて峻酷な道だった。切り立つ岩の壁が聳え、峡谷の断崖はまっすぐに落ちている。森林限界の領域まではまだ少しあるので、木々は濃く深く、怖ろしいまでに育った常緑樹が厳しかった。数百年の古薫を漂わせ、枝を四方に張って凄まじい。

斜面は次第にきつくなり、樹木は減り、小さな岩が突き出る荒れた路となった。大きな岩を迂回したり、何度もつづら折になったりしながら、坂を登る。それでも馬車は柔らかくしなやかに、小さく上下するだけである。

「確かに乗り心地は良いな」

ユーカレは馭者席に近いところ、荷台の一番前に坐って、前方の幕をまくって肘をかけながら行く先を眺めつつそう言った。

そのすぐ後ろに坐るチヒラが言う、

「こういうゆっくりした旅も非常に興味深いが、このままでは何年たつても目的地に着かない。人のあまりいない山奥に入ったら少し急ごうよ。龍馬のごときという速さも確認しておきたい」

地図を見ながらイラフが言う、

「ならば、もうそろそろいいだろう。ここいらに人家はもうない」

「どれ。へー、ほんとだ。次に人がいる場所は？」

チヒラが寄って、イラフと頭をならべる。イラフが地図を指さし、「ここかな。山の中に旅籠があるんだ。では、ここまで全力で駆けさせてみよう。どのくらいスピードが出るか確認するんだ」

「そしてそこで休憩しよう。お腹もすいたし」

小さな顎を上下させてチヒラがそう言うのと、

「異議なし」

イラフが水色の髪を揺らし、笑って応えた。ユーカレが鼻先で苦

笑する。

振り向いたパウルが、

「では目的地が決まったところで、速足を試しますか。そら」

と言って、ヨウクの背を手綱で打つように叩くと、唐突に、勢いよく駆け出した。凄い力で馬車が引つ張られると乗員は後ろへ引つ張られる。ヨウクと繋ぐ索が壊れそうだ。

「うわっ！」

あつ、と言う間に加速していた。風景が動体視力で捉えられなくなっていく。風圧が耐えられないほど凄まじくなった。恐るべき速度で、たちまち峻しい二つの山を超える。

山間部の寒さは厳しいが、雨は勢いが和らぎ、霧雨となっていた。

凍るような霧雨ではあるが。

「あゝ、何と言うことだ。あゝ、面白い、凄いよ」

ユーカレが珍しく声を立てて笑いながら感嘆する。レオンも参ったという顔で、

「まるで世界最強のジェット・コースターだな……」

「ふふわっ、ふふあつ。雨が凄い勢いで吹き込んできたね」

くしゃみのように咳き込みながらチヒラが言うと、嬉々としたイラフが、

「ほんとうだね！ あつという間に濡れてしまった」

そう言ってペパーミント・グリーン of 双眸を輝かせる。それを見て、チヒラが歎息した。

砂岩色の建物が見え始めたので、馬車はスピードを落とし、ゆっくりと蹄を鳴らして歩む。

チヒラが乱れたクリムゾンとボルドーの髪を整えながら感想を述べた。

「いや、驚いた。おかげでさらに空腹になったね」

それは斜面のつづら折りの路の曲がり角のところに数件の家が寄り集まった、小さな、とても小さな村であった。イ・デイン・チロという名である。

どれも明るい土色をしている砂岩製の家々で、曲がり角の内側に建つものは三角形を作るように組み合わさり、外側に建つものは馬蹄形をなしてならんでいた。

すべて急な斜面に建つがゆえに、どの家も、表から入るときと裏から入るときでは、同じフロアでも階が異なり、著しいところでは、1階の玄関から入って突き当たりが5階のベランダであったという家もある。

「旅籠プラン。あれだ」

肥えた羊を象った吊り看板が下がっていた。炙り肉の匂いがしてくる。脳裏に浮かぶ画像は、黒い鉄のグリルの上で肉汁をぽたぽた垂らしながら、真っ赤な炭に炙られる旨そうな肉の図である。

「たまらないね」

チヒラがまず馬車を降りた。イラフとユーカレが続き、パウルは馬寄せの傍らに馬車を繋ぎ留める。ストランドも周囲を見廻しながら馬を降り、くつわを鎖で留め金に繋ぐ。エルはパウルに言った。

「私は降りない。手をわずらわせてすまないが、持ってきて来られるものがあつたら、君の食事の後で持ってきてくれ」

「了解しました。俺も馬を離れないでここに持ってきて食べようと思つていたんです。すぐに戻って来ましょう」

「すまない」

「いいえ、遠慮は結構ですよ、旦那」

そんな会話もよそに少女三人は意気揚々店に向かう。ストランドも周囲を警戒しつつ、追従するも、

「今のところ、斥候や後衛隊から危険の報告は受けていません」

と報告する。ユーカレが、

「順調だな。だがそういうときが一番危険だ」

「そうだと思います。さて、中に入ったら、私はドアの傍で食べます。あなた方は良い席にどうぞ」

「申し訳ない」

イラフがモス・グリーンのみつ毛を翳してすまなそうに言った。

しかしチヒラは藤色のまつ毛を咲かせてあつけらかと、

「ええ！ 心配のし過ぎでは。ぼくらは達人ばかりだ。怖れることはない。メタルハートでも来ない限りはね」

「ふ。

そいつが来ない保証がどこにあるんだ。警戒の心を怠るなよ」

冷めた声で白いトーガの裾を引いて身に寄せつつユーカレがそう言い放った。

少し怒った顔で頬を紅潮させてチヒラが、

「ふふん。わかってるさ。たとえジンが来たって、君がいるから心配ないよ」

「ふ」

イラフはとげとげしい会話をあえて無視し、扉を開け、

「あゝ、暖かいね」

と笑みを緩ませる。

中に入ると湯気のうるおいを皮膚に感じた。窓が曇っている。店の床はでこぼこした方形の石を敷いたもので、中央に大きなグリルが置かれ、中で熾火の赤かとした炭が燃えていた。毛穴が柔らかに開くような気がする。

太った体に大きなエプロンを付けて、レードルを片手にニコニコしながら店の亭主が厨房からあらわれた。

「いらっしやいませ。どうぞ、こちらの席が暖炉に近くて、とても暖かいですよ。どうぞどうぞ、お坐りください。窓からの景観も見ものですよ」

中央にグリルがあるせいで、暖炉は隅に二つあった。

窓際の席で、断崖に突き出たかのように見下ろすと、遙か下方の谷底、よくよく見ると急斜面を行くつづら折りの路が細々と続いている。

「あの道を通って、ここまでを来たんだな」

「旅商人の方ですか」

話好きそうな亭主が尋ねてきた。

「そうです」

紅の唇に笑みを浮かべてチヒラがさりと応える。

「山越えにはなかなか大変な季節ですな」

「だから商売になる。ライバルが少ないからね。治安はどうですか」

「山賊も凍えていますよ」

「確かに。しかしご亭主、オークなどの物騒な鬼や魔物は出たりしませんか」

亭主は急に声をひそめ、

「それです。ふしぎと昨今、そういう化け物を見かけたって言う方が増えましてね。ご用心に越したことはないですよ。

商いには珍しく、お若いお嬢様ばかりなので、実は最初見たときには、そういう心配が過ぎつたのです。しかし、まあ、よく見れば、屈強な傭兵も雇われているようですから、そうそう心配もあるまいと、あえて口にしなかったのですよ」

「やはり奇異に感じましたか、こんな娘らで旅の商売など。

実はそうでもないんです。

ぼくら四人は皆、商家の娘なのです。それぞれの理由で父親が旅に出られなくて、已むを得ず旅に出た次第です。

とは言え、父親らも女の子の旅は心配と申すもので、知恵を絞って、同じような境遇の娘を探し、仲間になって旅すればよいのではないかと考え附いたのです。あちこち声をかけてみると、意外にも同じような理由で、同じようなことを考えている娘がいることがわかって。

それで、こんなふうに旅をしているわけなんですよ。

さぞかし奇妙に見えるでしょうね」

亭主はちらりと剣を盗み見しながらも、一面には出さず。

「いいえ、とんでもない。世の中には、さまざま事情がございます。安易に勝手な推測をしてこうと決め付け、声を荒げて批判をしたりする者は、すべて悪党ですよ。

お察しいたします。

いろいろな苦勞が世の中には在るものでございます。樂している人間はいるかもしれませんが、樂ばかりしている人間なんていないものです」

「ところで亭主、ここいらではなかなか食材も手に入りますまい」にやりと亭主は笑った。

「いやいや、山間の牧人が率いる群れをご覧ください。羊や牛の肉にはまったく困りませんね。ただしオリーブ油や塩がなかなか」

「もうお察しかと思いますが、ぼくらはそれらをたくさん積んでいきます。かなりな上物ですよ」

「ええ、そうかと思いました。単刀直入に伺いますが、おいぐらぐらいでしょう」

二人は商談に入った。イラフは桃色の双眸を持つ賢者にしてクリムゾンの髪をした学究肌のチヒラの意外な能力に感心するも、ユーカレは冷笑を止めず、ずうつと外を眺めている。

亭主が去った後、外を見ていたはずのユーカレが小声で言った。

「不用心かもしれないが、今後、商人のふりをしなければならぬときには、刀剣類を馬車に置いていくことにしよう」

チヒラは眉を寄せて顔を曇らせたが、

「君の言うとおりだ」

そう言つて黙った。

以後、料理が来るまでは、まったく会話ははずまなかった。

だが脂のしたたる旨肉うまにくが運ばれて来ると、再び雰囲気は和らぐ。暖かい食べ物の湯気は心を緩やかにするものだ。

スープを一口啜り、イラフが、

「ん。うまいよ。旨みたっぷり、ダシが利いてる。味わい深いよ」

「うーん。ほんとうだね。肉もいいけど、チキン・スープは体が暖まる」

「ふ。スパイスのせいだろうな。黒胡椒が見えるじゃないか。チキンはどこかで入手できるようだな」

「ぼくが思うに、たぶん、農家がどこか近場にあるんじゃないか。」

来る途中では見かけなかったけれどもね」

「ねえ、これ、ジャガイモだ。こんなところでも獲れるんだ」

「だんだん、ここがよいところのように思えてきたよ」

「ふ。喰うために生きているからな」

燦めくノーズティカのユーカレがそう言っても、ジョークにしか聞こえなかった。

馬車に戻る。エルは食事を終えていた。じっとして黙り、相変わらず、幌の内側のテントの中でフードを深くかぶって、真珠のように自らを秘匿している。彼の人生に於いては、使命以外のすべての愉しみや快楽は切り捨てられてしまったかのようなのであった。ストイックで、ソリッドだ。

チヒラは手際よくオリーブの樽と海の塩を詰めた袋を数袋、硬貨や肉の塩漬けと交換した。それを眺めていたイラフは象徴の森を歩いているような気分になる。

一通り作業が終わると、チヒラは待たせていた仲間に見合図を送りながら、

「ざらざらした砂漠のような現実さ。

さあ、行こうか」

退屈そうに待っていたユーカレが気怠そうに微笑する。ノーズティカがかすかに揺れる。

一行は再出発した。

その夜は野宿する。岩の狭間に風を避けて龍馬を繋ぐ。寒風が強かったが、焚火を焚いて、三重にタープで囲い、干し肉を噛み、チーズをかじる。少し談笑してから、毛布や藁を敷いて眠った。眼が覚めると黄昏のような曙光の中、誰もが無口に片付け、白い息を吐きながら支度をする。

出発するとすぐに曇り、粉雪が舞い始めた。

その日以降も曇天か、雪か、凍るほどに冷たい雨か、いずれかの日々が続く。旅は粛々と進み、時折、疾風のように翔けた。高度が上がると、凍った雪の純白のみの世界になる。峻酷寒厳な氷雪と氷

壁の岩山を這うよう、よじ登る。

頂を越えて今度は下り始めると、季節を冬から秋へ、秋から春へと遡行していくかのようであった。

谷沿いの路や街道や平原はいかにも旅商人のごとく進む。

途中、大いなる溪谷があり、広やかで、大きな湖があった。珍しく晴れた日で、誰ともすれ違わない。周囲は美しい緑をなし、湖に突き出た緑と岩との小さな岬の先端に、古城の廃墟があった。

古城とは言っても、恐らくは砦だったのであろう。

かたちを完全になしていた頃ですら小さな塔のようなものに過ぎなかったものだから、そのほとんどが崩れた今となつては、わずかな石壁と土台しか残さない、何か滅びの象徴のモニュメントように見えた。

黄昏の湖を背景にシルエットは漆黒であった。輪郭が赤々と揺らいでいる。

「燃えている。湖とともに赤みを帯びたオレンジ色で燃えているかのようだ」

イラフのその呟きを聞いてユーカレが、

「ふ。

まるでいにしえの戦士のような。滅びて歴史に名を遺すこともなかった無名の」

「すべての現象は滅びへと向かって行くのだ。崩れて、熱は放出し、均されて差異がなくなり、無となる。生命とは崩壊と散逸と平均化に逆らう力、再生と自己増殖によつてそれらに抗う力のことだ」

イラフは微笑んだ。

「そうならば死と虚無そのもののようなあの廃墟にも生命はある。炎のように滾ろっている」

「君は詩人だな」

そのチヒラの言葉を聞いたユーカレはいつものように微かに黄金のノーズティカを揺らして鼻を鳴らすだけであった。

「ふ」

第七章 ニュース

銀嶺なる国境の山を越え、華の王国フロレチェに入り、北部のミラレセという町に着いた。厳しい寒さに凍えたが、大いなる商業都市は燃え咲くような芸術の街でもあった。

この日、ようやく外国（大華嚴龍國以外の国）の傭兵が数名追い附いた。バルバロイという隊長が率いていた。

「素晴らしい都市だね」

双眸を朝の水面のように輝かせてイラフが言う。

遠くにドーム型の大聖堂のオレンジ色の屋根が見える。

大商人が競って屋敷を飾る彫像や絵画を求め、芸術家の地位は高く、詩人は崇敬され、文化が生命の必須であると謳われた。

古代のカノン（規範）が追究されるとともにアヴァンギャルドも熱い。時折、歴史古き街を、大胆で斬新なコンセプトチュアル・アートが蓋うこともあった。

ファサードに薔薇窓と黄金のイコンを掲げる大聖堂に荘嚴された数々の宗教画は神聖崇高の極みである。

「一度見ておきたい」

エルがそう言った。

白き髪のカレはしばし考えたが、

「ふ。それもよい。行ってみるか」

藤色のまつ毛をつんと上げてボルドー・カラーの髪を指に絡ませるチヒラも、

「ふふん。そうさ。ぼくらがいれば問題はない」

「待って。斥候や先遣隊の報告は」

ペパーミントの眼光を尖らせるイラフの問いにストランドが応え、「今のところ市街地の中は問題ありません。調査隊は現在、報告をまとめ、出発の準備をしています。先遣隊は町の各所に散って警戒を継続しています。」

斥候隊と偵察隊は既に町を出ましたが」

「ふ。行けばわかる。ま、このままで済むはずがないと思うが」

ユーカレはそう言った。

「ちっ、何なんだ、あいつは」

チヒラが舌打ちする。

大通りを馬車で進むうちに歩道沿いに新聞売りがいた。エルはそれを見逃さず。

「新聞を」

パウルがさつと降りて買い、エルに手渡す。

「ふむ」

馬車は再び動き出し、エルはしばし静かに読んでいたが、

「おお、遂に」

チヒラが振り返った。

「どうしたんだ、エル氏」

少し沈黙の後、

「シルヴィエの電撃的な和睦交渉。大華厳龍國への進軍を中止し、急遽和平条約を結び、海軍を撤退した」

「それは驚きだ」

そう言つてチヒラが藤色のまつ毛を強く開いて眼を丸くする。いつも冷ややかなユーカレも驚きを隠せず、トーガを締める太いベルトに下げた剣の柄をにぎり締め、

「あり得ない。なぜだ。ならば、じぶんらの闘いは、虚しいことだったのか」

「いや、まだすべては解らない」

「イラフの言うとおりだ」

エルがそう同意するも、依然としてチヒラは疑念を呈し、
「しかし、どう理解してよいのかわからないことは確かだ」

手のひらを向けて彼らの言葉を制し、エルは咳払いし、

「それだけではない。

西大陸（エステ）の超大国、ヴォードへの突然の宣戦布告だ、シ

ルヴィエが」

モス・グリーンのまつ毛も上げてイラフが思わず声を上げ、

「あり得ない！　だって和平の義を結んだばかりでは」

「そうさ。」

だって、もともとノルテ（北大陸）の西端諸国と共謀したヴォードがシルヴィエを一方的に攻めていて、シルヴィエが大華嚴龍國との闘いを優先したいがために結んだ平和条約だったはずだ」

紅の唇をゆがめてチヒラがうめくも、冷ややかにユーカレは、

「さぞかし憤っているだろうな、ヴォード帝国は」

「当然だ。これは裏切りだ」

といい、憤るチヒラに同意し、イラフも、

「卑劣な攻撃」

と言うも、まだ信じられぬように疑念を呈し、

「しかし、なぜ：」

誰も応えない。推測さえない。

皆の言葉が止まったとき、エルが決然と、

「もはや猶予はない。急がねば」

「ふ。じゃ、聖画は諦めて先を急ぐか」

ユーカレが金の眸で冷笑するようにそう言うと、エルはまなざしを深め、首を振る。

「いや。それは省略できない。行こう」

「省略できない？」

チヒラが藤色の睫毛を持ち上げてさように声を上げる。

だがユーカレは意外と思う様子もなく平然と、

「何であるかを理解できないが、どうやらそこへ行く必然性があるようだな。だとすれば、敵もそれを知っていて、待ち伏せている可能性がある。」

まずは先遣隊を行かせよう」

そのようにした。

こわばった表情でストランドが報告する。

「推察のとおりです。」

シルヴィエの精鋭部隊のいずれかでしょう。恐らくは『聖なる
隷・殉教者たちの群れ』かと思われます」

「シルヴィエの？　なぜだ？　エル氏、説明していただきたい。あなた
は、いったい」

エルは黙っていた。

「言えないのか。ぼくらを信頼していない、ということか」

「ふ。行くまでさ、チヒラ。」

護衛がじぶんらの役目だ。問うことではない。行つて敵がいれば
闘う。それだけだ」

「やたら闘うのが戦士ではない」

「しかし、イラフ、どうするつもりか。ふ。エル氏はじぶんらが止
めても行くだろう。ならば闘うしか選択肢はない」

眼光強くイラフはエルを振り向いて問うた。

「エル氏、行くことの意義は何か。ただ真・善・美のためか」

フードの奥から蒼く燃える双眸の彼は応えた。

「いや、そうではない。実践上、必要だ。事前に確認しておきたい。」

それ以上は言えない」

「多くの者が命を賭けるのだ。それでも言えぬのか」

「言えぬ」

桃色の双眸を濃くしたチヒラも憤りを抑えかねて、

「しかもその場にいる無関係の者も巻き添えになるかもしれないの
だ。彼らも多くの者がシルヴィエ人に仲間や家族を殺されている。」

それでもやらねばならぬならせめて理由を」

「言えぬ」

怒りを殺すようにまぶたを閉じてイラフは嘆息しつつ、チヒラを
制す。

「待て。シルヴィエ人だからと言って、彼が殺したとは限らない。」

彼は何事も関与していないかもしれない。同じ民族だからと言って
同じ罪にはならない。当たり前なことだ。罪科は常に個々人のその

都度の所業に帰する」

「ちつ。確かにね、君の言うとおりさ。」

しかし、エル氏の態度、まさに王侯貴族だな。大義のためには民の命など、どうでもよいか。ところが民にとっては明日の命こそが大義なんだ。

高貴な使命を帯びて命を犠牲にしても、それは報われず、人としての夢も希望も家族への愛も、歴史の巨大な波瀾に翻弄され、潰える」

そう言い放つチヒラの桃色の瞳がさらに赤みを帯びる。暗黒の過去を思い出したかのように。魂を悲歎と絶望の暗黒の世界に深く沈め。

しかしそんな想いを敢えて無視するかのようにユーカレはノーズティカを鳴らして嘲笑し、

「臆病風に吹かれたか。さあ、じぶんは逝くぞ。生きるも死すも、ただ使命を果たすのみだ」

「すまぬ」

低くかすれた声でエルが謝った。そして、

「だがこれには意味がある。いずれ、多くの人を救うことにも繋がるかもしれないのだ。時節は動き始めた。風雲は急を告げている」

「どういうことか。さっきの記事と関係があるのか」

ミュールを鳴らしてチヒラが詰め寄ると、エルは、

「ある。少なくとも私はそのように確信している。だがこれは序章に過ぎない」

蒼い瞳は強く光った。

イラフは刹那にその気を読んで水色の髪を揺らしてうなずき、

「わかった。」

行こう。あなたとピリピレオを信じる」

大聖堂は広場に面して壮麗なるファサードを誇らしげに、そして悲愴なまでに崇高に顕示し、天へまっしぐらにその尖塔を突き立てていた。広場には多くの人々が行き交い、また物売りが立ち、馬車

が通り過ぎた。

蒼穹は遠いほど青が濃く、どこまでも深く碧い。

彼らも馬車から降りる。ストランドも馬を繋いでパウルに見張りを任せ、広場へ歩み出る。その後ろのユーカレが行き、エルが続き、その背後をイラフとチヒラが護った。

ストランドが言う。

「今、先遣隊十四名がこの周囲に散っています。後衛隊九名も呼び寄せました。周囲を警戒しつつ、我々を警護しています。傭兵部隊には馬車を遠巻きに守らせました。

龍梁劉禪の陸海の特殊部隊がようやく集結しています」

海軍特殊部隊の隊長はシルス（支陋栖）少尉、陸軍特殊部隊の隊長はジイク（斎粥）少尉であった。目立たないよう、貧しい旅の傭兵将校のような恰好をしている。

「我が国の援軍は遅かったな。出発の頃には少なくとも数名は来ると思っていた。まさか今になるとは。

まあいい、現状に集中しよう。ぼくも今、最大限に気配を読みつつ警戒しているよ。闘いの気の脈拍を」

聖人の像で荘厳された正面出入口から拝廊を経て、身廊を進む。天井が高く、崇高であった。神々しい聖歌が聴こえてくる。多くの人が厳かな面持ちで礼拝に訪れていた。

「ここでは闘えないぞ」

そう言うイラフを抑え、チヒラが、

「急ぐしかない」

袖廊との交差部には聖のうちにも聖の聖なる聖者の像があった。

「ミラレセの守護聖人、その名の由来となった聖者ミラレーゼだ。

彼は最初、山中でしかなかったこの場所に庵を編み、清廉な修道生活を送った」

チヒラが説明する。

その像の後ろに立っている者がいた。まるで床から湧いたかのよう。なぜならイラフもチヒラも寸前までそこに気配を感じていな

かったからだ。現に偵察隊の警戒や調査隊の調査にも引つかかっていない。

「アグール！」

ユーカレが金の双眸を燃え怒らせ、冷凜剣を抜く。周囲で悲鳴が上がる。

「あは、あははは、ふわははは」

黒い朱色に艶光する大剣を抜き、狂乱の哄笑をまき散らしながら緋色の髪を振って叫ぶ。

「殺す！」

イラフがエルの前に立ってかばいつつ、

「引き返しましょう、退却した方がよい」

「だめだ。私は行く」

「しかし」

アグールが大剣を振り、狂乱して叫ぶ。

「ふわは、ふわ、ふわっ、ふわっははは。殺す、殺す、殺す！ぶっ殺す！ひやははははあああ」

聖堂内には驚愕と悲鳴が波のように広がった。あまりのことに事態を理解するまでに数秒を要してから逃げ惑う人々。大混乱となった。

母親は幼子を抱き上げ、むやみに駆けてぶつかり、老婆が転ぶ。

蒼白な若い男が恋人を引つ張って走り出そうとするも足がもつれる。少年が倒れたお爺さんを起こそうとするが、なかなか起こせない。

チヒラが『天真義』『地真義』を顕し、ユーカレの加勢に入ろうとすると、忽然と現れ、立ちふさがる者が。

「我が名はイジュール。おまえの意（こころ）の力は私には通じない」

紫色の髪は蛇のように蠢き、瞬きのない眼は赤黒く滾ろう。顔立ちは古代ギリシャの彫刻のように流麗で、古代戦士ふう革鎧にベルトで留めた腰衣、短いマント、背丈はユーカレと同じくらい。槍は穂先が大きく湾曲し、薙刀なぎなたにも似る。男か女か定かではない。

「何！」

チヒラが意を練成して収斂し、三叉戟の尖先から虹色の稲妻を鞭のように振るう。

イジュールの左腕に楯が現れ、それを弾き返した。嘲笑う。

「意（こころ）の理（ことわり）を知るはおまえらだけと思うな。

この世の形あるものはカタチばかりのもの。それゆえ変幻自在、神出鬼没も当然よ。

一切は揺らぎ滾ろい、争い、抗い、諍い、揺らぎ、滅び逝く。戦いの焰だ。さあ、さあ、この刃と闘え、皆殺しだ、理不尽だ、不可説だ、無差別なる殺戮だ！ 『仏に逢うては仏を殺せ。父母に逢うては父母を殺せ』だ。きやきやきゃっ！」

そこへガリア・コマータの戦士らが次々押し寄せ、パニックはさらに拡大する。二手にわかれ、アグールやイジュールの周囲に円を描くようならぶ。ストランドが、

「待て待て、そうはさせぬぞ、さあ、皆の衆、今こそ命を捨てよ、武勲を立てよ。歴史に名を留めよ」

そう雄叫びすると、二十三名のガリア・コマータの戦士たちが剣を抜く。あちこちの入口から平民の服の下に鎧を着た大華嚴龍國の特殊部隊が侵入するも、同じく宗教者の変装をしていたシルヴィエの特殊部隊戦闘員がヴェールを脱いで忽然と現れ、憤激の形相で妨害する。人々はさらにパニックとなった。

そこに騒ぎを聞いて出て来た聖堂警護の下級兵らも加わり、戦闘は増して混沌化する。

「さ、今だ。この混乱に乗じるしかない」

イラフはエルの手を引いて奥へ、後陣へと走る。すると立ち塞がるように、

「待てっ、待てっ、待てっ、待てっ」

異相の戦士らが次々現れ、行く手を阻む。イラフの剣の下に斬り伏せた。さすがの彼女ももはや手加減する余裕がない。致命傷を負わず。

「ここだ」

エルが立ち止まる。

祭壇の前だった。燭台の置かれた祭壇に聖なる象徴が擱かれ、聖ヴァルゴ教の神聖文字の記された帯がそれを飾っていた。その背後には高さ30mの黄金の衝立があり、様々な聖人の事蹟が彫られたり描かれたりし、衝立の縁を天使や神獣が荘厳している。

聖画はその中央にあった。

見上げてエルが思わず声を洩らす。

「おお」

「あゝ、何て素晴らしいんだ」

双眸を耀かせ、イラフも嘆息を禁じ得ない、

絵に描かれているのは清らかなる若き女性であった。その慈愛と聖性は、この世のものとは思えない燦然たる超越性に輝いている。

「これをよく心に留めて置け、イラフ。この荘厳、この崇高なる静謐を。」

芸術家は究極を求める。それは彗星のようなものだ。火が附けば、もはや自分でも止めることはできない」

エルがそう囁く。

「言われなくとも一生忘れられない」

だが背後から、

「そこまでだ。レオン」

イラフが振り返り、眉を顰めてモス・グリーンのみまつ毛を翳す。

「レオン？ 何だ、それは！ 誰のことだ？」

「レオン・フランシスコ・デ・シルヴィエよ、貴様、覚悟しろ」

何者かがエルに向かって大剣を振り下ろす。イラフは驚いた。だが反射的に手は剣の柄をにぎっている。そういう動作のさなかに、どうやら「レオンとはエルのことを言っているらしい」などということにも気が附く、ペパーミント・グリーンの双眸を驚きで大きく睜みひらきながら。

エルは抜剣して受け止めていた。その有様を見て、身廊・側廊か

らこの祭壇前まで逃れて来た人々がここでもまた戦闘にかち合ってしまう、絶望の悲鳴を上げる。

イラフは見た。刃と刃のぶつかる烈しい音がして、エルのフードがめくれ、瀧のような長くて縮れた黒い髪が流出するさまを。蒼白で大理石の彫像のように端正な顔立ち、鋭利な強い顎に高貴な鼻筋、燃えるような炎の双眸。

それがエルの隠された真実の姿だった。

「いったい、どういうことだ、レオンとは」

イラフは混乱する。戸惑いながらも剣を抜き、レオンを襲ったシルヴィエの戦闘員を斬る。斃れるときに敵の覆面が外れる。戦闘服の襟が見えた。彼女の記憶に違いがなければ、シルヴィエの精鋭部隊『聖なる隷・殉教者の群れ』の将校である。知って驚く。「レオンと呼ばれるとは、いったい、どういうことか」という疑問と同時に「なぜ、この男はシルヴィエ人で、かつ高貴な身分でありながら、こんなにも狙われるのか」と改めて強く猜疑が過ぎる。過ぎらずを得ない。

だがひとたび剣を抜けば迷いはない。

敵が一振りする間に十二振りする速さはまるで相手が止まっている人形のようにすらあった。

しかも無重力の中を泳ぐように体を水平にしたまま、後ろ向きに飛び、その体勢で数人を次々斬る。地に足を着かずに、敵の頭や肩の上を蹴ったり、胸を蹴ったりしながら後転しつつ斬った。変幻自在の自由自在。あらゆる体勢からあらゆる方向に剣を振って、下ろし断ち、上げ裂き、突き、襷がけに切り刻む。

拝廊や身廊・側廊における大混乱もエスカレートする一方であった。

逃げる老人や肥った商人や僧侶らが次々転んで重なり、アゲールとイジュールの配下の戦闘員らに踏まれる。ガリア・コマータと戦闘員らの振り廻す剣が当たって血を流し斃れる人々。必死に雑役夫は外に助けを求める。

ようやく完全装甲した聖堂警護の上級聖騎士と、街を守備するミラレセの正規軍が堂内に入って来た。

アグールと死闘を続けるユーカレが悔しそうな表情をし、

「邪魔が入ったか。無念だ」

「ふわはは、心配するな、すぐに貴様を始末してやるから」

「ふざけるな。負けるものか」

「ユーカレ、放っておいて撤退しろ！」

チヒラが叫ぶ。彼女は大きく飛び退いて、イジュールの手から離れていた。イジュールもまた聖騎士らの姿を見て、「なるほど。めんどろな奴らが来たな。こちらも退散するか」

そう言って、忽然と姿を消す。

イラフの傍にストランドが走り寄って来た。

「さあ、撤退です。ヨウクを出します。さあ、あそこです、あちらへ」

装甲した聖騎士や黄色い制服の守備軍正規兵たちが怒涛のように迫り、口々に叫ぶ。

「そこだ、追え、追うんだ。捕まえろ、殺しても構わん。急げ、あいつら逃げるぞ」

ストランドが叫ぶように、

「早く、早くこちらへ、急いってください」

内陣の小さな裏口に誘導した馬車へ導こうとするも、イラフが大
声で、

「だめだ、ユーカレが」

「もうっ！ 何やってんだ！」

そう罵りながらチヒラがユーカレの元へ疾駆し、イラフも「まったくだ！」と憤慨しつつ向かう。

「ぬおっ」

三対一で、たちまちアグールが劣勢になる。大聖堂の聖騎士と守備軍正規兵らが来て、

「貴様ら、ここは聖なる場所、無礼者め、神を嘲るか！ 不敬の輩

め、天誅！」

そう叫び、剣を抜く。囲まれた。

「ぎやはははは」

アグルが緋色の髪を振り乱し、楽しそうに笑い、踊り乱れながら聖騎士を薙ぎ倒す。そのさまは悪魔そのもの。血飛沫を上げること、肉を切り裂くことを楽しんでいるかのようなのであった。

イラフとチヒラはユーカレの両腕をつかんで引つ張り、

「今だ！ さあ、行くよ！」

「ちくしょう！」

ユーカレが悔しがった。

聖騎士と黄色い守備軍正規兵らが立ち塞がる。

「待て。逃がさぬぞ、この大逆罪人どもめ！」

「すまん」

イラフはたちまち聖騎士を峰打ちで昏倒させる。

「さ、早く、早く」

ストランドが烈しく叫ぶ。

「わかってる！」

イラフ、チヒラ、ユーカレが走る。

「早く！」

すぐ後ろに聖騎士が迫っている。「待て、待て！」

「ああ、つかまる！」

ストランドの声は悲鳴に近い。「もう待てない、おまえらは先に
行け！ 俺だけ残る」

待っていたガリア・コマータの兵たちだが、命ぜられて龍馬で飛び去った。

「あゝ、もうほんとうにダメだ！」

ストランドも遂にパウルの隣に飛び乗る。

「パウル、出せ！ エル殿だけでも脱出させねば！」

ヨウクが動き出す。

イラフ、チヒラはその刹那に、飛び乗った。ユーカレのマントが

聖騎士につかまれる。

「こなくそっ！」

イラフが振り向きざまに聖騎士の籠手を激しく峰打ちした。だが放さない。聖騎士は引きずられた。ヨウクは飛翔する。宙吊りになっても放さなかった。

「これでどうだ！」

チヒラが意の力を放ち、衝撃を与える。それでも歯を食いしばって放さない。

「危ない」

火矢が彼女の眼の前をかすめた。地上の聖騎士団が矢を放ったのだ。

「放すものか！」

「放せ！」

ストランドが剣を抜き聖騎士の腕を斬り落とした。

「うわああ」

聖騎士が転げ落ちる。

「仕方なかったのです。彼も使命、私も使命です。已むを得ないことです」

ストランドは辛い表情でそう言った。

「わかってる。誰も君を責めはしない。お互い戦士ならば解っていることだ」

チヒラがそう言って肩に手を置く。

イラフは聖騎士の方をずっと見ていた。

ユーカレが呟くように小さく言った。

「すまなかった。じぶんの引き際の判断が適切ではなかった」

第八章 国際情勢に就いて

「さて、エル氏、いや、レオン・フランシスコ・デ・シルヴィエ殿。

貴殿はもはやすべて隠すことはないはずです。少しは説明していた

だきたい。

わたしたちは何のためにするのかわからぬことで正しい任務を果たしている無事の人を殺したり、傷附けたりしたくない」

イラフが振り向いてそうきっぱりと言った。

「何だって！」

誰もが驚きの声を上げた。

ペパーミント・グリーンの眼光をさらに強め、畳みかけるように、

「それに、あの聖画の意味は、いったい」

さまざまな事が一同の頭の中で錯綜した。

「レオン！ フランシスコ・デ・シルヴィエ！ 前の皇帝ジュダスの孫、父親は大枢機卿で次期皇帝候補の一人、フィロソフィ。

そして自らも枢機卿で大枢機卿になれば次々期皇帝の最有力候補だ。

代々皇帝を輩出した名家で、シルヴィエを姓に持つ、数少ない家系の一つ。高貴な血筋の中でもさらに高貴なる家柄」

藤色のまつ毛を翳してチヒラが言うと、ユーカレもノーズティカを揺れ燦めかせ、

「ふうん、そう言えば、そんな話を聞いたことがあるかもしれない。

権力抗争で、難を逃れ、首都ヒムロから姿を消したとか、何とか」

沈黙。

レオンはしばらく応えなかった。再び深くかぶったフードの下で、じつと黙っていた。その沈黙はどこか空恐ろしいものであった。シルヴィエの皇帝の血を引く者が今、眼の前にいるのだ。

「わかった。君らの理解するとおりだ。

だから君らの推測するとおり、高貴な身分であっても帝国から命を狙われているのだ。

だが」

「だが？ 〃だが〃 何ですか」

イラフが詰め寄る。

「私が国を離れた理由は命惜しさではない」

「では、なぜ」

チヒラもさらに詰め寄る。

「それはまだ話せない。聖画のことも、だ」

「何だって！」

チヒラが眼を剥くも、ユーカレが制する。

「待て、チヒラ、イラフ。感情を抑えよう。気持ちわかる。だが世界を動かすような内容かもしれない。よく考えろ。興奮は愚かさしかもたらさない。じぶんら一介の戦士が知ってよい内容ではないかもしれないのだぞ」

再び沈黙。

ようやくイラフが言った、

「わかった。ユーカレの言うとおりだ。少なくとも清廉な戦士や無事の人々を犠牲にすることも已むを得ない任務かもしれないことは何となくわかった。

それ自体はよくあることだ」

そう言って何かを思い出し、剣を抱いて自分の毛布にくるまった。

翌日、国境を越えてオーシアンス王国に入る。荒涼たる丘陵地帯だった。滔々たるローマン河の傍にあるヴィーノという町の傍に休憩する。かつてはこの河を涉って古代の戦士たちが覇権を争ったのだ。憂鬱な曇天の下、イラフの胸にその場面が彷彿とする。耀く鉄の兜をかぶり、すね当ても凜々と燃え立ちて宙を飛ぶよう、筋肉質な胸を鎧の下に秘め、髪を靡^{なび}かせて大剣で楯を打ち鳴らし、雄叫びを上げて殺し合う闘い。

街には入らなかった。ミラレセでの騒ぎのせいで、この馬車が指名手配状態になっていることが予測されるからだ。

「すまないが、ニュースが見たい」

レオンが言った。もはやフードで顔を隠していない（むしろ馬車の中でだけだが）。冷然たる容貌からは高貴や崇高と言うよりは幽玄の雰囲気が漂い、蒼ざめてむしろ死人のようでもあった。

彼の言葉を聞いてチヒラは顔を曇らせた。

「また新聞ですか。…まあ、情報収集はしたいけど。」

ストランド、ガリア・コマータの斥候に行かせてくれないか」

精悍なる若き長髪の隊長が応えた。

「わかりました。しかしあのときは、所属がわからぬように下等な傭兵に身をやつしていたとは言え、ガリア・コマータ自体が指名手配になっていれば、見破られる可能性もゼロではありません。」

一応変装させますが」

だが案ずるより産むが易しの言葉に違わず、新聞はすぐに手に入った。

大聖堂での事件は第一面になるべき大事件である。予想違わず、ミラレーゼ大聖堂での闘いは記事となって、大きく取り上げられていた。白昼の聖域での暴挙、大騒動、怪我人続出…

「これでしばらくは人前に出られないな」

ユーカレがノーズティカを鳴らし、関心なさそうにつぶやく。

だが第一面で最も大きな記事ではなかった。その上を行く事件のせいだ。

レオンが唸った。

「見たまえ、見出しは『国際情勢大波瀾！』だ」

「いったい、何があったんだ」

「順に説明しよう。」

まずは、オエステ（東大陸）の大華厳龍國が一方的に和平条約を破棄し、シルヴィエに向けて大艦隊を出航させた」

「昨日の電撃的和睦から一転して奇襲か」

「そうだ。」

大華厳龍國の中で、シルヴィエ側が唐突な和睦を申し出たのは、国内事情が悪く、停戦せざるを得なかったからだ、という分析が主流になったためらしい」

「そうか、だから、これこそ天の与えたチャンスとばかりに、あえて条約を破棄し、攻めに転じたということか」

「だがそれだけでは終わらない。まるでドミノ倒しだな。」

その動きに乗じて、スール（南大陸）のマールロ帝国が大華厳龍國に宣戦布告し、こちらにも大艦隊を出航させた。

マールロは海軍力が弱く、最近は大華厳龍國との小競り合いで、攻められてばかりであったから、シルヴィエ脅威論を掲げて、ともにシルヴィエ戦線を張って共闘しよう大華厳龍國に持ちかけ、同盟を結んでいたのだが、大華厳龍國の艦隊の大勢が北へ向かって南が手薄となったため、これを勝機と見做したようだ」

「まさに油断も隙もない、狼の世界だな。ここはほんとうにIEか」

「一晩で世界が変わってしまったようだな、凄い。」

力の流れが突如、逆流してしまったかのようだ」

「しかもそれだけではない。」

マールロの軍は従来、エステ（西大陸）へ北上して大陸の南海岸にちよつかいを出していたが、少ない海軍をオエステに向けて出してしまったので、ヴォードがそこを突いて艦隊を南下させているらしい」

「いったい、何事なんだ」

「すべて絶対皇帝の思惑どおりなのであろう。どうやら事態は急を要するらしい。」

急ごう。シルヴィエ領に入り、アクアティア *Akvatia* へ行かなければ」

「アクアティアだって？」

「どこだ、それは」

「行けばわかる。さあ、行こう、あの平原へ」

その夜は野宿することとした。日の落ちる前に野営のための作業を始めようとするときに粉雪がちらつき始めた。曇天に係わらずも微かに茜を帯びた空気に結晶が煌めく。

「薪を燃やす場所を作ろう。石を環状に置くんのだ。その中で集めて来た薪を燃やそう。焚火は山火事にならないようにしなければならぬ。木を怖がらせるな。」

火事になれば人命ばかりでなく、多くの生命を損失する」

塩漬けの肉を塩抜きして炙り、頬張る。熱いスープを啜り、チー

ズの塊をかじる。

「炎に照らされ、暖められると、なぜかホツとするね」

「先祖からの体験がDNAに刻まれているんだろうな」

「さあ、眠ろう」

翌朝、針葉樹林で樹木の伐採をしている集団を見かけた。

「ふ。恐らくは違法な伐採だろうな」

ユーカーレが金色の瞳を曇らせて、そう言った。

チヒラがまつ毛を翳し、顔をゆがめる。

「愚かなことだ。刹那の儲けに眼がくらみ、結局は自分たちを苦しめる。子どもや孫にもツケを残す。神の造りたもうた摂理に瑕疵を与える」

「だったら止めるべきだろう」

モス・グリーンのまつ毛を開かせて、その中央に。パーミント・グリーンの眸を燠のように憤りに滾らせるイラフがそう言うのと、レオンもうなずき、

「私も賛成だ。」

愚かな人間たちは少しでも減らすべきだ。愚かさとは知識の寡少ではない。畢竟、道徳のなさだ。人は生まれや育ちで差別されるべきではない。その行為で差別されるべきだ。

悪しき行為は必ず魂に苦しみの轍を残す。それは法の裁きではない。個人の意見や見解でもない。摂理だ。だから言説を弄そうとも動かすことのできない現実の真理だ」

しかし水色の髪を頑なに振り、まなざしを強くして、

「轍が苦しみをもたらすまでにはかなりの時間がかかるようです。悪者はなかなか苦しまない。わたしは待てません。今、彼らを懲らしめたい。今、この不正行為を止めさせたい。不正を行うすべての者が必ず魂を疵付けるとは言うけれども、それを待つてはいられない」

ストランド、停めてくれ」

言うや否や、身のこなしも軽く降り立ち、

「じゃ、行つて来るよ」

「ぼくも行く」

「いや、少し休んでいてくれ。すぐ帰ってくる。どうせ下っ端をいじめても仕方ないんだ。いつの時代も真の悪は権力のある者だ」

そう言つて粉雪の舞う森へと去つた。伐採者たちを見つけると、

「おまえら違法伐採だな」

最初、彼らは無視していた。

「違法伐採者ども、恥を知れ」

「わしらはこれをやらねば食つていけねえ。わしらはともかく、女房子どもが餓死しちまう。あんたらにや、そういうきれいごとが大事故かもしれねえが、わしら、貧しい者どもはそういうわけにやいかねえ」

「生きる道は多い。知恵を求めよ」

「じゃ、何があるんだ」

「おまえらの責任者、監督者を出せ」

「おーい、大将を呼べ」

「ここに居るぜ。何だ、そいつは」

「おまえが責任者だな」

「知らねえな。だが、もしそうなら何だつてんだ」

「違法な伐採を止める。結局は環境破壊で貧しい庶民が苦しむことになる。子孫をも苦しめる」

「明日のことより今さ」

「今儲けただけだろう。愚かだ。もっとまじな商売を探せ。てつとり早く儲かることばかりではなく」

「よ、お嬢ちゃん、あまり調子に乗らねえほうがいいぞ。屈強な男や警官も俺の言うことには黙っているんだからよ。へへ。それとも、どうだ、俺と楽しく遊ぶかあ？」

「愚劣の極みだな」

抜剣する。

「ほう。剣士か？ ふひやは」

「カムイだ」

「へっ、それがどうした！」

相手がポケットから出したのは短銃だった。しかしイラフは発砲された弾を両断する。

「銃ではわたしを殺せない」

その刹那イラフの背後で斧を振り下ろす者が、また左右からは山刀で突っ込んでくる者らがいた。だが三者とも峰打ちで昏倒させる。違法伐採者たちは大いに慌てた。

「ば、ばかな」

冷厳なまなざしでにらみ、

「死んでもらおう。世の汚濁でしかない。おまえのような魂の腐敗した者は既に死人だ。生命はない。首を斬っても殺人ではない。生命とは生き延びることではない」

「ゆ、赦してくれええ」

「おまえは命乞いをした人間を赦したことがあるのか。金儲けのためにさぞかし人を殺したであろう、何の逡巡もなく、憐れみもなく」

「ひ、人殺し！」

「愚かな、愚かさの極み、人を殺すくせに自分のときには大騒ぎか、醜い、愚劣であるばかりではなく、醜惡の極致！」

剣を振り下ろす。防寒具のボタンが全部斬られて落ちる。失禁した。

「おまえのボスは誰だ」

「ひえ、ひえ、ひええ」

「誰だって訊いてんだ！ 言わなきゃミンチにするよ！」

「言う、言うよ、言います！」

「ウソだったら十分以内に帰って来ておまえを殺す。いいね」

「わ、わかった……」

セフイの馬車に戻った。

「この先に町がある。そこにボスがいるらしい」

イラフがそういうのを聞いてチヒラが、

「王侯や貴族が絡んでいるかもな」

「だったらそいつらも斬る」

ブルムサの町に來た。

「わたしだけで行く。君らは関わらなくていい。すまないが少し待ってくれ」

水色の髪なびかせ颯爽とイラフは単身でエルグという富豪の屋敷に殴り込む。広大な豪邸で、城壁のような塀を張り巡らせ、門には武装した兵たちを立たせていた。

「入れる」

「何だと？　ここをどこだと思ってる、ああ？　貴様、何者だ、お許しがなければ入れられない。切り刻まれたくなくばさつさと去れ」
「この主人は悪だ。わたしが叩きのめす。彼に味方するなら同罪だが、それでいいのか？」

「おい、おい、相棒、頭のおかしなやつが來たぜ」

「何だ、おまえ、よく見ろよ、こどもじゃないか。やい、お嬢ちゃん、いくらこどもだからってな、赦されねえんだぜ」

「そうか。わたしは急いでいる。悪に対して容赦したり、手加減したりする理由は持ち合わせていない。通るぞ」

「何だと、てめえ、舐めやがって」

「優しくしてやりや、調子に乗りやがって、やい、脅しじゃねーぞ」

「ぶった斬るぜいっ！」

「そうか。是非やってみてくれ。やれるものならな」

兵士の剣は鞘から抜く前に真つ二つ。兜も割れ、鎧は十文字に裂けた。二人の門兵は失禁して気絶する。制止する者には剣さばきを見せて震え上がらせ、主人の書斎へ扉を蹴破って入る。

「伐採を止めろ」

「何だ、貴様は。誰だ？　いったい、何を言っているんだ。正気か！」

「止めなきゃ闘う。おまえの兵を出せ」

「暴徒だ、異常者だ、出合え」

しかし数百の兵はたちまち倒された。すべて峰打ちであつた。

「憲兵を呼べ」

憲兵が来る。

「貴様らは悪の味方をするのか。それでも官憲か！」

「エルグ殿が何をしたというのか」

「違法伐採だ」

「証拠は」

「わたしは見た！」

「それは証拠ではない」

イラフの肩を叩く者があつた。

「こんなことになってるんじゃないかと思ってたら、案の定だね。

イラフ、彼らの言っていることが一応は義しい。一応はね」

チヒラだった。さらに藤色のまつ毛を翳しながら言葉を続け、

「もう行こう。この闘いには長い時間がかかる。とても簡単なことなのに、ちつとも簡単にはいかないのだ。人から愚かさがなくならない限りは」

「わかつてるよ。でも最後に領主のところへ行かせてくれ」

領主コルネッタの居間に殴り込む。

「いいか。ここで違法伐採があつた。貴殿の監督不行き届きだ。もしくは貴殿も甘い汁を吸っているのか。はつきり言おう、自分だけ巧くやって得すればよいと思う者に生きる資格はない。

いずれ、また来る。改善がなければ、『非』の尹良梟が天誅を下しに来る。止められる者が入れば用意して待っている」

ザクセンズ王国に入り、街道を避け、吹雪の山野を疾駆する。ゾブンという小さな村で居酒屋に入り、レオンはデュヴィル Duvel というビールを飲んだ。溪流が窓から見える。雪が舞っていた。

暖炉の炎が暖かい。

深い想いに捉われる。

第2部 神聖シルヴィエ帝国

第一章 帝国史学

聖者イキが齊歴4979年に遺した教えを信仰する人々が創った宗教国家、それが神聖シルヴィエ帝国だ。

広大な国土は面積42,402,200km²。北部は北極点に達する極寒地で、国土の2割を永久凍土が占め、大人口を養える環境にはなかったが、領内に大火山をいくつか有し、地熱温水を農業に生かし、各地域に巨大な温室とも言える幾層ものガラス張りの空中庭園を造り、天候に左右されない世界最大の超巨大穀倉地帯をなし、帝国内の全人口の7倍を養える生産量を誇っていた。

また鉱物資源が豊富で、鉄鉱石や金銀銅や貴石の類が大量に採掘される。また燃える黒い地下水も大いに汲み上げられた。

水源も豊かだ。大河や湖もあり、その上、火山から噴出する大量の熱湯を使って、雪や氷を溶かし、利用した。

歴史的にトナカイやエルク（ヘラジカ）、オーロックス、羊などの牧畜も盛んで、それに伴う毛織や皮革製品も豊富である。

林業は乏しくはないが、針葉の大樹が無数にある他は、他の産業に比して超絶の規模、というわけではなかった。

「布教のために我が胸は鋼のごとし」

血も涙もなく、鋼鉄製の心臓を持つという意味だ。

これは最初の神聖王となったイバンバロイ（在位…齊歴7985年-8035年）の言葉だ。その心は鋼のごとく過酷で、非情、不屈不退転で、布教のために容赦なく侵攻し、征服し、苛烈に蹂躪し、領土とした土地に住む民を強制的に信徒とし、信徒を兵とした。その兵を以て、さらに侵攻し、征服し、世界最大の領土を誇る超大国へと成長したのである。

国民は世界を聖教の下に正しい道へ導くため、不眠不休で努力した。科学は劇的に発達し、帝国は自動装填銃や自走式火砲装甲車、ジェット戦闘機を開発するまでに至った。比較するに、他国では未だ剣や弓で戦っている。技術の進化した国でも火を使う鉄砲か大筒くらい、あとは投石機などしかなかった。

シルヴィエの侵略が止まらないのは当然である。いや、むしろ、なぜ未だに世界が全覇されないのか、ふしぎなくらいである。

一つには、この世界（IE）のルールのためであった。

イデア・アース *Idea Earth*（イデアの大地）のルールとは単純明快、現実世界には絶対に存在しないルール、即ち『正しい者が勝つ』ということだ。それが決まりだった。そのようなプログラムであった。物的な力が無条件に圧勝する劣質な世界ではなかった。

もしシルヴィエに信仰がなかったら、物質的に優位であっても、隕石の落下や大震災など、高度な科学を持った時代の間人であつても及ばない巨大な力によって、たちまち滅んだであろう。

神聖帝国の歴史学によれば、この国の歴史は次のように説かれている。

最初に、聖者イキが寒村シルヴィエに突然、現れた。

わずか1年の布教後、数名の信徒を残して処刑され、聖教は一度絶えた。しかし5012年に伝承されたわずかな教えを聞いたカパロシモがこれを広め（後に彼は第2祖と呼ばれた）、5年後に処刑され、2年後の5019年にリュージュが組織を整えて完全な地下活動を行い、5041年、数百の信徒を得て厳しい山岳地帯に隠れ、極寒の過酷な環境に堪え、自給自足の生活をした。このときの伝統が後の農牧業の大発展に繋がる。

5049年の第4祖から7800年の第138祖までは迫害、離散、逃亡、流浪の繰り返しであった。

しかし第139祖のピシユス（7801年-7856年）が遊牧民族フンヌの族長ピン・ハロイと友誼を交わし、一族を信徒に迎え（フンヌ族は信仰文化に寛容で、天神を信奉すれば、どの神を信じよう

が自由であった）、勢力を一気に武装化させ、地方を統べる豪族のみならず、国王すらも容易に手が出せなくなった。聖教の自治区域は次第に拡大発展し、7849年、遂にカペロニエ王国との戦争となる。

2年に渡る闘いの末、勝敗つかず、7851年、和平交渉に至り、神聖シルヴィエは正式に領地を認められ、特異な直臣として男爵（バロン）の位を授かるが、5年後、ピシユスが逝去すると王が裏切つて第2次戦争が始まり、王国は斃れ、7857年、第140祖カムガイはカペロニエの領地を制圧し、神聖シルヴィエ共和国を創つて世界初の宗教国家をなし、聖教最高会議の議長として、国家組織に於いても最高権力の座に就く。

するとあたかもフランス革命時におけるヨーロッパ諸国のように、各国が革命政権への攻撃を仕掛けて来た。

100年戦争が始まったが、過酷な戦争状態のため、聖教内の裏切りも多発した。7985年、第148祖イバンバロイは鉄の統制を敷くため、共和制を廃して王政とし、王以外を臣下とする絶対君主となる。かくして国を一丸として周辺各国を打破、一大国家を築き上げて神聖シルヴィエ王国と称した。

9001年、ノルテの8割超を支配し、世界最大領土を誇る超大国、最も富裕な世界No.1の経済大国、世界最強の軍事超大国となり、シルヴィエは神聖シルヴィエ帝国と国号及び国制を革め、皇帝は絶対神聖皇帝として君臨した。

初代は超絶神聖皇帝ジュリイ（第196祖）である。※彼は特に『超絶』と呼ばれる。

ジュリイは首都ヒムロ（非无呂）を大改造した。

ヒムロはノルテの最北端、永久凍土のクレムペトロ半島の北、永久に凍結した北氷絶海に囲まれている。

正方形の城壁で囲まれ、その四方各辺が正確に東西南北に位置した。

城壁の一边が長さ100kmで、高さ100m、厚さ100mの壁

に囲まれ、しかもその城壁から100mの間隔を置いた内側に、第二の城壁があり、高さ200m、厚さ200mであった。

しかも驚くべきことに、その100m内側にも城壁があり、高さ300m、厚さ300mで、すなわち全体として三重の城壁が帝都を護っているのである。

城壁の上には常時、百万人の兵が武装して構えていた。

ちなみに、神聖帝国軍は全正規兵一億を誇り、その他に予備兵が第一次で二億（第一次予備兵は交替で一定期間、各都市の警戒警備や比較的軽易な紛争地域への派遣など、補助的な任務に就く）、第二次で五千万、第三次で五千万、第四次で一億人いて、総計最大五億という途方もない数を有していた。首都防衛に予備兵含め百万の兵を使うなど、いともたやすいことなのである。

さて、話をもどそう。

全長400kmの城壁には、外に向かって東西南北の四つの門がある（四つの門しかない）。北門は凍結海の氷道に、東西南の三つの門は諸国へ伸びる大街道の起点となっていた。

逆に三重の四つの門からうちに向かうと、都を十文字に仕切る大行列道路に繋がっている。道路の幅は約1kmで、十文字の交差部が帝都の中心部であった。

その中心にあるのが聖大神殿である。

尖塔の高さは4kmに及び、頂上に聖なる象徴で、「I・Y・E」の聖三文字を重ねた神聖文徴が燦然と荘厳されている。

塔の東西南北には控え壁のように直接的に塔を支える高さ1kmの支尖塔があった。

真上から見ると、本塔と支塔で短く太い十文字をなすようなかたちだ。

塔は漆黒の燿岩と象牙と緋色の貴石とラピス・ラズリと黄金で荘厳されていた。イオニア様式の円柱や薔薇窓やアーチや聖文字の透かし彫りや聖人の彫像によって繁文縟礼的に飾られ、その壮大荘厳無限なありさまは人為とは思えぬ凄絶さであった。

東西南北の支尖塔はそれぞれに長さ1 kmの列柱廊を各々の方角（東西南北）へ延ばし、その先端には高さ2 kmの尖塔が屹と聳え立っていた。そしてそのまま、東西南北の大行列道路に繋がっている。

初代皇帝ジュリイは戴冠式に自らの手で燦然たる王冠を頭に上げて被り、金の刺繍で炎の翼を有する龍の縫われた、長さ10 mの貫頭衣を身にし、金剛と黄金の杖を持って宣言した、

「今、朕は神なる真奥義なり。論考を超え、言説を超ゆる」

これを絶対宣言という。最初の絶対神聖皇帝であり、絶対不二なる宣言をした彼は後に超絶対神聖皇帝と呼ばれた。

以来、第199祖にして第4代皇帝ジニイ・ムイまで、皇帝は絶対神聖皇帝の尊称で呼ばれ、崇拜されることとなったのである。

第二章 絶対神聖皇帝の哲学

聖大神殿は皇帝の城でもあり、聖イキ教の聖地大本山である。高さ4 kmの尖塔の最上階に皇帝は坐し、世界を睥睨していた。

塔の下には百万人を収容できる壮麗な大広間があり、絶対皇帝はそこで謁見をするが、それ以外はほとんど塔の上にいる。

遙か遠い蒼穹を眺め、背の高い瘦身に10 mのマントを引き、沈鬱な容貌に長鬚を蓄え、銀色の巻き毛のかつらをかぶった絶対神聖皇帝ジニイ・ムイ（自爾彝無爲）は侍従長にして名誉大司教なるセバトトメス（釵鳩留栖）にこう言った。なお、名誉大司教とは司教区を持たない名誉上の大司教で、シルヴィエ帝国独特の制度である。「朕はまさに世界を真義に於いて貫徹し、世界を真実へと還さんと企てる。大いなる曼荼羅、神聖革命、絶対真理の完成だ。神より授かった天与の才を持つ朕にしかできぬ。

理論や思料を超越し、言葉では説明できない、実存する永劫の真理よ。それは行為に於いてしか現象しない。朕は歴代教祖の考え抜いた真理をさらに考えに考え、修練し、実践し、旅し、研鑽した。

朕は大いなる解脱に到達した。言説不能な真理に到達した。今ま

さにこれを世に現前させんとするのだ。現実してこそ真理なりと朕は惟う。

見ておるがよい、朕の偉業は歴史の波瀾のまにまに揉まれ吞まれ翻弄されて消えてしまう人の営みの中で、ひとときわ強く美しく永久に光り輝くであろう。熾えるように。

この功德ゆえに神聖帝国は永劫の栄光を誇らかに謳歌するのだ」

「偉大なるかな、陛下の御業^{みわざ}」

「我が世の革命など言う者は永遠に滅びよ」

「昨今また性懲りもなく人民解放軍が動き始めましたな」

「笑止千万。我が第二神聖革命を超える革命はない。この大転回を超えるものは」

「真理に栄光あれ」

「ところで大枢機卿イヴイルだが」

「は」

「よく働いておるようだな」

「はい。皇帝陛下の御意のままに大枢機卿猊下はその天賦の才能を存分に發揮しておられます」

「あやつはまだ若い。……次期皇帝の座を望んでおろうな」

「恐らくは」

「しかし、あやつは真理の側にいるとは言い難い。朕同様に伝統を引き継ぎ、実践主義ではあるが、天地と時代を超越して道を選ぶ皇帝の器ではない」

「御意。他の大枢機卿もよくご存じであられましょう」

皇帝は五人の大枢機卿の互選によって決定するのだ。大枢機卿たちが認めなければ絶対神聖皇帝にはなれない。

「ところで戦線のことだが」

「はは。我が軍に永遠の勝利あらんことを」

「オエステ（東大陸）状勢だ。大華嚴龍國の龍皇帝は五千隻の軍艦で海を渡っている。汝も承知のとおりだ。よいか、すべてを上陸させよ」

「陛下、何と仰せられる。迎撃しないのですか。敵は和平の約定を反故にし、停戦の協定を破ったのですぞ」

「ふはは。おまえもさような小人のセリフを言うか。捨て置けい、世俗の価値は」

「しかし多くの将兵は命懸けで戦っております」

「正義と真理のために死すことは無為ではない」

「しかし」

「いや。無為こそが義しい。さあ、もはや問うな。」

朕は今宵も勅命する、聖なる宴をせよ」

饗応の間は大理石の彫像とイオニア式の列柱と壮麗に荘厳された巨大なスペースであった。

その中心は、宗教劇の演じられる演舞劇場で、その全周を囲むように傾斜のある階段状の席があり、その全体はアリーナ arena と呼ばれた。

ちなみに、アリーナとは元来、「アンフィテアトルム（古代ローマの円形闘技場）のような施設」のことで、すなわち流血を吸収するために砂を撒いた闘技場のことを指し、言葉の元々の意味は「砂」である。

ここでは饗宴の楽しみとして歴代皇帝が聖典の物語を解釈して創作した神劇や哲学者の哲学講義が行われた。また奴隷戦士による生死を賭けた闘技も催される。それはときには罪ある者が潔白を示すために為された。ただしその場合は生存不可能な対戦相手が選ばれ、神の奇蹟としか言いようのない状況でなければ赦されなかった。

アリーナの前後左右の壁面は構造物を持ち、下から大列柱を大アーチで繋いだ大アーケード、二階部分を構成するトリヴューン、トリヴューンの屋根裏的な通廊をなすトリフォニウム、ステンドグラスの嵌められたクリアストリーという構造になっている。

また内部構造の中に内部構造を持つように、トリヴューンには小祭室がいくつもあり、聖なる絵画や聖剣、神槍や聖なる杯が安置されていた。それ以外にも壁面や柱に出窓のように張り出して附属す

る栈敷席がいくつもある。それらは荘厳に飾られていた。

皇帝は宴の席に着くと、側近の者に指示する。

「今宵は闘技だ」

厳粛な面持ちで侍従は去った。

聖なる吹奏管楽器のファンファーレとともに宴は開始する。

白い衣装の若い女性や黒い戦闘衣の若い男性が次々と料理や飲み物を運んだ。大きな銀の皿に溢れんばかり豪華な食べ物、肉や魚貝や果物の数々。大甕から惜しみなく注がれる美しきあらゆる種類の酒。

弦奏楽団の神聖で美しい音楽が演奏され、雨のごとく花びらがまかれる。

宴もたけなわの頃、侍従長にして名誉大司教のセバトメスが立ち上がる。

「皇帝に栄光あれ！」

引き出されたのは革命家ボレイノであった。彼は自らが正義であることを示すためにあえて闘技を択んだのだ。闘う相手が何者かは彼には知らされていない。武技に自信のある彼は愛用の剣を再び手に戻され、闘気に満ちながらも緊張した鋭い眼差しをしている。

「対戦相手は」

セバトメスは大声で告げた。

「女性だ」

笑いが起こった。ボレイノは奇妙に歪んだ笑みを浮かべた。どう受け止めていいかわからなかったのだ。だが決して笑って済ませられるような結果が待っているわけがないことだけは理解していた。

「ジン・メタルハート」

笑いが凍りつく。人々は自らが屠られる家畜のように震え上がった。

ボレイノは蒼白になった。叫んだ。

「バカな。ムリだ。不可能だ。獅子十頭と闘えと言われた方がましだ！　そもそもなぜ彼女がここにいるのだ。いるはずがない」

だがセバトトメスは冷たく言い放った。

「これが決まりだ。勝てば神が汝の正義を保証したことになる」

東側のゲートが開く。風もないのに全身の鬨気で黄金の髪をゆらゆらとなびかせる長身の武者が現れた。

「おお！」

すべての人々が畏怖の声を洩らす。

兜をかぶり、焰のような異様な殺気に満ちて鋼鉄で装甲した女戦闘士、身長は2 m以上あった。双眸には殺戮の炎が燃え上がっている。しかも冷徹で、鷹の眼のようであった。

「た、助けてくれ」

ボレイノが悲鳴を上げる。

メタルハートは剣を抜いた。漆塗りのように黒く艶光りする剣。聖なる文字の象嵌があり、唐紅の炎を上げて燃えている。刀身は2 mあり、刃渡りの最も広い部分が50 cmであった。

「く、くそうっ」

ボレイノは自暴自棄になって振りかぶった。渾身の気魄を込めて振り下ろす。ジンは剣を使わず、籠手で軽々と弾き返す。

「うわっ」

革命家は顛倒した。立ち上がって飛び退き、距離をおいて再び剣を構えるも、もはや戦う気力はない。勝てるわけがないのだ。誰も勝てないのだ。

「これは不正だ」

革命家は必死に叫んだ。

「これでは神の意思を伺うことにならない」

メタルハートが誰もいない空間を斬るように剣を振り下ろす。刃は大理石の床を裂き、刀身が深くめり込んだ。

「うわあ」

その振動でボレイノは再び倒れた。

ゆっくり歩み寄ったジンが見下ろし、言った。

「終わりだ」

立ち上がりかけたボレイノを縦裂両断する。

沈黙。そして悲鳴と歓声。皇帝が立ち上がった。

「ここに神の正義は示された。

この世に尊ぶべきはただ真理と真実のみ。神聖シルヴィエ聖教の偉大さはただ真理であること、真実であることである。

我々は日々これを確かめる。聖者は言われた、『批判されぬ者は腐敗する』と。これぞ我が帝国の万世の繁栄のいわれなり。

神聖シルヴィエ教の真理に未来永劫の栄光あれ」

すべての人々が立ち上がった。

「皇帝万歳！ 皇帝万歳！ シルヴィエは正義なり、真実なり！」

その頃、イラフたちはシルヴィエ国境を越えていた。

レオンが彼の「部屋」から出て来て、感慨深げに遥かな山脈を眺める。その表情には翳りを帯びてはいるものの、感動があふれていた。熱く凝視するまなざしは深刻そのものであったが、希望と喜びとが感じられる。

イラフはそれを見て心に満ちるものを感じた。これから本番である。

「いよいよだな」

彼女はそう言った。

険しい山脈を越えるための道なき道の始まりだった。

第三章 ハラヒ（爬蠡非）

薄い金色の髪を腰まで垂らし、氷柱のように冷厳なる容貌の大枢機卿イヴィルは大雪原を蹴散らして奔る特別列車の豪華な特別室でソファに坐している。

まるで書斎のような部屋だ。贅を凝らしたクラシカルな広い部屋は帝国そのものである。モチーフはフランス第二帝政様式だった。車輻一つを使ったその部屋のNo.は至高を意味する999である。

「猥下におかれましては、さぞかしご落胆のことと思っております

たが」

彼の補佐官であるヴィザールは黒髪 of 玲瓏な若者だ。意外であったという表情でそう言った。無理もない。

大華嚴龍國との電撃的な和睦を結んだのはイヴィルの功績であった。しかし彼は帰国の途上で、龍國が裏切って進撃して来たことを知ったのである。

落胆し、憤るのが当然だ。

ところがせせら笑ってさえている。

「ふふふ。何を驚いている」

「しかし猊下」

「私は、むしろ、皇帝陛下のお褒めに与かれるであろう。皇帝の真意を見抜き、それを的確に実現したのだから。

だが」

「だが？」

「いや。おまえにさえもそれだけは言えない。ふふふ。それよりも指示したことはどうした」

「古文書の写しは見つけました」

「最近の閲覧履歴は」

「実は」

「ふふふ。どうした、さあ、言ってみよ」

「すべて削除されておりまして」

「思ったとおりだ。もうよい。」

見せてもらおうか。内容は既にわかっているが」

イヴィルは『聖ルシアの録』という巻物を受け取ると、ヴィザールに背を向けた。

巻物を広げて眺める。

「ふむ」

その文書は神聖シルヴィエ帝国がスールの古王国コプトエジヤにある原本を書き写して、帝国の古文書館で保存し、特別非公開文書として取り扱っていたものであった。その部屋は地下にあり、一個

の鉄鋼の方形を刳り抜いて造った部屋で、分厚い鉄の壁に囲まれ、周囲をさらにオリハルコンで覆われていた。

金庫のようなその部屋の前には常に機甲の戦士が護り、毎日一回の確認が為されている。これほどまでに守護された文書に記されたものとは、世界の奥に秘められた奥義であり、聖にして真奥な真理であった。

その文書には、齊歴99年にコプトエジヤの預言者ルシアが岩山の洞窟に籠もって修行中、声と呼ばれて山上に登って神に遭い、神言を預かったという伝説が録されている。

ちなみに齊歴とは世界最古の王国であるコプトエジヤを基準にして作られた世界共通暦で、0年は古王国コプトエジヤの最初の王朝が始まった年である。世界最初の国はスール（南大陸）の西北岸部に興ったのだ。

従がって、歴史の始まりは今から9081年前となる。有史以来続くイクノヴィン王の系譜が今も続いている万世一系のコプトエジヤ、人々はその永遠不変を崇敬して古王国コプトエジヤと呼ぶ。

強い日射し、緩やかに水嵩の増す長期の洪水によって上流より滋味に富んだ土砂が運ばれ、土地は常に肥沃で農業に適し、またその土地は平らかで広大で、爆発的な人口の増加が起こり、他を圧して最初の王国となった。

王は智慧の長であり、哲学の長であり、卜筮の長であり、天文学の長であり、祭祀の長であり、神が地上に天降りたもうたときの仮象でもあった。

暦を定め、官を用いて法による中央集権制度を布いた。山脈のように巨大なジグラッドを造り、その頂に永遠の真理の象徴を置いて宇宙世界を照射し、大地を安寧し、天空を荘厳し、神の眼を癒し、慰めた。

王都にして神都なるイ・クノは学問と道徳を以て長い間、世界の頂点であった。

その王都を離れ、ルシアは海を前に聳え、樹木のない厳つい山の

洞窟に入った。

「ほんとうの現実をつかみたい」

そう言つて僧院を旅立つたのだ。

眼の前に広がる碧き海はマル・メデイテラーノである。彼は自らの思想のたどつた道程を振り返り、感慨深げに言う、

「すべての理は懷疑され、思考はその精緻の極みを超え、論は極限まで解析され尽くされた」

これが今から9000年近くも昔の人間が発した言葉であつた。

髪も鬚も白く、海風に吹かれるままに乱れて伸び尽くし、わずかに海藻を食べて命を繋ぐ身は痩せ細り皺だらけに干乾び、生きているのかどうかさえ定かではない。

『聖ルシアの録』には左のごとく記される。

＊

「あゝ、肉体は悲しい。神よ、私はかつて求めた。そうです。若き頃は、世界の原理を、現実の実体を、真実を、究極の奥義を、神の真理を解き明かしたいと希つておりました。

しかしもはやさような言辞に疲れ、さようなものはかたちに過ぎぬと明らめ、かたちあるものはカタチにしかざるといふ理をわきまえています。

とは言え、神よ、さような悟りもまた、一つのかたちを持ち、それゆえカタチにしかざるを知っているのです。そしてさような明察もまた。無際限なるループのごとき遁走曲」

ルシアは日々呻吟し、祈り、瞑想に耽つた。

「概念による思考はいずこへも着かず。カタチを超えて、生成の世界へ、我が魂魄の奥底より求めるものを我は求めん。

現実が求むべき真理なり」

ルシアは心を無にした。

彼は現実そのものになつた。

心機（こころのはたらき）によつて覚醒する。

「諸悪莫作（あらゆるあくをなすなかれ）。

衆善奉行（こころをこめてもろものよきことをせよ）。

自浄其意（みずからのこころをきよめよ）。

世界は戦いと邪惡に満ち、民と民とが民族を異にして憎しみ合い、諍い、宗教を異にして争い、互いに無辜の者を殺し合い、権力を簞奪し、利益利権を奪い合っている。この飢えた狼のごとき修羅の世界を是正することこそが真の魂魄の欣求する理である」

聖者はかく考える。

苦行者の前に神は竟に降臨し、こう述べた。

「ルシアよ、汝は意識の新たな地平に到達し、天啓を授かるべき者となった。

よって余は汝に言葉を預ける。神の言葉を預かるがよい。

世界には精髓とも言うべき原理（アルケーαρχή）がある。その一つのものにすべての本質が収斂し、極まる。それが究竟である。世界の心臓とも言うべきもの、聖典の内の最も深いところに秘められた尊い真言（陀羅尼）のように。

大いなる宇宙曼荼羅の円の御中^{みなか}なす神髓^{しんずい}とも言うべき究竟の本質なり。これによつて円環は回転を為し得る。これによりて世界は活命す。歴史は流れ、世界は生成なり。

それはありふれた場所にある。求める者に理は理自らに於いて理を晰^しらめる」

「しかしありふれた場所とはどこでしょうか」

ルシアは問うた。

神はこう言った。

「海を渡り、北の緑の草靡^{なみ}く豊かなる平原。アクアティア Akvartia にある」

「世を革めるにはいかにすべきでしょうか」

ルシアはさらに問う。

神は応えた。

「円環は日時計^{ダイヤール}のごとし。世を革めんと為す者は、正逆の交互を以てその代象を為せ」

＊

文書はそこで終わる。

巻物を再び丸めると、イヴイルはヴィザールを振り返った。

「思ったとおりだった。」

もういい。どこかに仕舞っておけ」

そして深々と坐り、まぶたを閉じて両手を組み、瞑想に入る。しばし後に再び口を開き、次のように言った。

「皇帝の動きを知りたい。これからの予定を」

「本日から四週間、瞑想に入るため、聖大聖殿中央祭壇の真奥部屋
の真奥にある真奥義室に籠られるとのことです」

「ふふ。以前からそのようなスケジュールであったか」

「お待ちください、私の記憶にはありません。そうです、記憶に間違いありませんでした。以前のものには記載がありません。最近、急に決まったようです」

「ふふふ。大いに結構。最近どこかへ使者を出したということはないか」

「勅使は」

「勅使に限らずともよい」

「とすれば、どこまでを範囲とするかで膨大な数になりますが」

「それは知っている。たとえば我が国の公務に関係なさそうな場所への使者だ。外国も含む。いや、特に外国だ」

「調べます。お時間をください」

「わかった。しかし急ぐのだぞ、ヴィザール。ふふ。下がってよろしい」

補佐官が部屋を出た後、イヴイルは再び独り瞑想に耽る。

「私が解らないのは、ジニイ・ムイがいかにしてこれに気が附いたかだ。どうやってこれを発見したのか。」

ふふん。それこそ彼がよく言うように、人知考概を超越した解脫者の智慧なのか」

その頃、ジニイ・ムイは巨大神聖都市の中枢なる神殿の中央なる

聖の聖なる中枢で甚深なる三昧に入っていた。坐して瞑目し、微動すらしない。呼吸は静かで息をしていないかのように見える。

彼は真奥義室に入る前に既に命じていた。

その命令により、屈強なる戦士ダドン、ムーガル、ジョン・ドンの三人とその配下が非公式に皇帝専用機に搭乗して南へ向かっていた。空港のある都市に着くと、その後は特別専用列車を使い、鉄道のない場所は装甲車で進んだ。

その頃、イラフたちは険しい山脈に差しかかっていた。途方もない巨人が造った壁のような銀嶺が聳えてこちらを見下ろし、それがどこまでも遙かに続いている。蒼穹にまばゆく、頂上にある雪の舞うのが微かに確認できた。ハラヒは『きよかみ』の刃を点検している。

ストランドが報告に来た。

「斥候隊からです。上の方はかなり激しい吹雪になりそうとのこと。偵察隊は周囲に危険がないか確認しています。調査隊は野営できそうな場所を確認しています。今晚は山頂近くで夜を明かすことになるからです。先遣隊は野営地の候補となる場所の警護をする場所を探しています」

ペパーミント・グリーンの眼をパチクリさせてイラフが感心し、

「へー、そんなことをしていたんだ。未だに彼らの役割の違いがよくわからない。」

じゃ、後衛隊は？」

「調達隊が貯めた食糧や薪を持って、いざというときに、すぐに補給活動に入ることができるように用意しています。」

援護隊は通常業務で、後ろから突かれるのを防ぎますが、事後検査隊はまだこれから終結する大華嚴龍國の陸・海軍の特殊部隊を案内誘導しています。セフィの数は既に百を超えました。

しんがり隊も追参加者の道案内を兼ねています」

「あまり散らずにまとまろう」

チヒラがそう言った。ユーカレも賛同し、

「吹雪のような激烈な環境はアグールのような悪魔の女にとっては、むしろ、好機だ。必ず来る。それにあれを聴け」

もの凄い遠吠えが轟いた。

ストランドの表情が引きつる。

「あれは、いったい」

「ワググだ。しかも群れている」

ノーズティカをピクリともさせず、ユーカーレは静かにそう言った。

ワググとは大型で獰猛な狼で、言語を解する。

「だが近くはない。反響が遠い」

碧き眉を顰めつつもイラフがなるべく樂觀的になろうとそう言ったが、チヒラは藤色のまつ毛を翳して桃色の双眸を曇らせ、

「だがそれにしても時間の問題だ。急いで隊を収斂せよ」

そのように実行される。

後から参加して来た者たちの中に、ハラヒ（爬蠡非…「被ひ」の意）という者がいた。海軍の特殊部隊の超精鋭部隊に属する。しかしその肩書から推定される強剛冷徹なイメージとはまったく異なり、緑の髪に白い双眸で、どこか儂い、薄い感じの無表情な少女であった。彼女は『きよかみ』という片刃の刀を使う。

変わった経歴の持ち主で、純然たる龍梁劉禅Ⅱ大華嚴龍國の龍民族ながら、一族は祖父の代にノルテに渡って放浪し、中央南部西側のヴォゼヘルゴ（クラウドの隣国に当たる）に定住した。

ヴォゼヘルゴは民族や宗教が複雑で、おもな民族だけでも（人口の多い順に）ヴォル人、ゼエリ人、ログ人、レオン人、ドラゴ人、アッシーラ人、セリヴィド人などが住み、宗教は（同じく信徒の多い順に）ヴァルゴ教、ジゼルス教、ゾドア教、シルヴィエ聖教などがあつた。少数ではあつたが、オエステの民族や宗教もある。

それゆえにハラヒの一族も住み着いたわけだが、民族間宗教間の抗争が絶えず、すべての民族・宗教を満足させることは不可能であつた。民族や宗教、国家の蓑をかぶって人は自己の承認を廻る争いをしているに過ぎないのである。

当時、強硬な一民族優先主義が急浮上したのはそういう経緯である。

それを体現したのは、当時の大統領、デヴォキサ・シロワテル・ボダシェヴィであった。

彼はその思想を強弁し、V A V^{ヴァ}（ヴォル人正統ヴァルゴ教徒党）に入党してからわずか1年での党首となり、さらにその2年後の大統領選挙で圧勝して最高権力の座に就く。

ボダシェヴィ自身が多数派のヴォル人で、かつヴァルゴ教正統派原理主義者であったため、ヴォル人ヴァルゴ教徒を優遇して他を排斥する政策を次々と強行した。

土地を奪われた人々は、ボダシェヴィを恨み、抗議運動を起こしましたが、大統領は激しくこれを罵り、武力で鎮圧し、死者は30万人を超えるも、ボダシェヴィはヴォル人以外の民族の主張を受け容れず、言論や活動の自由を制限する。学問や芸術のすべてについても同様であった。

抵抗運動は地下に潜伏し、他国と通じて武装する。

以来ヴォゼヘルゴではテロが頻発^{ひんぱつ}し、ついに虐殺と報復の連鎖から武力闘争が勃発、内戦が起こり、戦火と政府の拷問と大虐殺とを逃れるため、ヴォル人以外の人々は難民となって、近隣諸国にあふれるようになる。

ハラヒの一族はセリヴィド人の多い、シュッドレヒト（北大陸最大ともいわれる塩湖があることで有名）に住んだが、そこは徹底的な弾圧に遭い、数十万の人々が祖国を離れ、難民となった。

そしてあの史上悪名高いハン・グアリス平原の大虐殺が起こるのである。風を避けるものとなない寒冷の平原で食糧も防寒具もない着の身着のままの難民二十万人が風雨に晒されていた悲惨な場所に軍隊がやって来て全員が、女子どもも容赦なく、虐殺されたのである。

当時八歳のハラヒはその中にいて、軍の中に密かに混ざって内乱を煽動していたシルヴィエ帝国軍人に連れ去られ、神聖シルヴィエ

帝国で過酷な訓練を受けさせられ、超特殊部隊『屍（しかばね）の軍団』に入った。

大華嚴龍國の『非』に相当する部隊で、聖教のために命を捧げ、生きながら死人となり、死をも恐れぬ非情の軍団である。

彼女は虐殺のショックによって記憶を喪っていたが、頬に刺青された一族の紋と同じ刀を古武具屋で偶然見かけ、それを買い求め、記憶を取り戻した。それこそが武人であった祖父、イシュレイ（異呪令）の剣『きよかみ』だったのである。

ハラヒは脱奔してオエステに渡った。父祖の道に還ったのである。

「わたくしが皆様のお力になれることを願っております」

そう言って丁寧にお辞儀する。

イラフは肩に手を置いて言う、

「君は自分自身を弱く見せようとしているが、ただ者ではない。相
当な達人と見た。しかし、わたしが言うのもおかしいが、まだ幼く
見える。歳はいくつなんだ」

「十三です」

「やはり年下か」

数時間進むと森林限界が近付き、樹木は低く、まばらになってきた。雲に覆われると空気に氷が混ざり、榛松が凍る。やがて猛烈な吹雪となった。烈しい風と氷礫のような雪が機関銃のように間隙なく彼女らを襲った。パウルは歯を食いしばって手綱をにぎる。

寒さが厳しくなってくることが予想されたので、防寒のために、幌の上に（あらかじめ積んであった）帆船用の帆をかぶせて、二重にしていた。

さらに出入口の扉となっている幕は四重にしている。だが四枚の幕をめくって、外を見ようとしたユーカレはすぐに閉じた。

「うぶっ、ふわっ。凄いい雪だ。息もできない」

「隊は集まったか」

幕をゆつくりと少しだけめくってチヒラがストランドに訊く。

「はい。もはや人目を気にする必要もないので、周囲に百五十近い

混合軍を呼び寄せています。※混合軍：ガリア・コマータと大華嚴龍國陸・海軍の混合軍。

追って参加する兵もまだ来る予定なので、我がガリア・コマータの事後調査隊三名及びしんがり隊二名は後方に点在したままですが」

イラフも首を出した。身を斬る風が頬を刺す。雪が口の中に入る。風雪に耐え、騎乗する兵の姿が薄っすらと見えた。どことなく幻想的だ。風景は白く塗りつぶされて、ほとんど確認できない。

再びユーカレも顔を出して訊いた。ノーズティカが風に引つ張られて鼻が痛いようだ。

「具体的にどのくらいだ」

「ガリア・コマータは変わらず五十四名、ただし、申し上げたとおり事後調査隊としんがり隊の計五名は案内のため、この近くにはいません。

陸軍特殊部隊は四十名、海軍特殊部隊も四十名、外国傭兵部隊二十名です」

そのときである。

角笛が聴こえた。烈しい風をも劈くような太くて乾いた音だ。

「あれは」

イラフが眉をひそめた。ストランドの喉が動く。

「我が隊ではありません」

皆剣を抜く。

イラフは外に出た。誰もが停止している。水色の髪が激しく風にはためく。

100mほど先に、人のようなシルエットが見える気がした。しかし100m先が見えるはずがない。見えているというよりは、吹雪の白い壁を貫いて、人型のオーラがシルエットを誇示しているのであった。

明らかに独りの人物を画いている。兜からはみ出た黄金の髪のなびくさままでもわかる。2mを超える身の丈。

後から出てきたユーカレがうなった。

「ジン・メタルハート……」

第四章 闘い

ついにこの日が来た。

イラフはもはや何も見えず聴こえず、ただメタルハートに向かって、ゆつくりと雪に足を沈めて歩む。興奮が全身を静かに包んでいた。ジンと初めて対峙する。自分よりも強い敵に向かうときの昂ぶりは快感ですらあった。

チヒラが三叉戟『天真義』を念じ出だしつつ、

「待て、ぼくも行く」

イラフは振り返らず、

「我らの使命はレオン殿をお守りすること。君たちは馬車を離れるな。」

わたしが行く」

緑の髪なびかせるハラヒも進み出て、

「あなただけではみすみす死に赴くようなものです。わたくしも行きます。」

メタルハートはハン・グアリス平原での大虐殺に加担していました。あの女は父母の仇です」

そう言つて、眼尻を上げ、双眸を白き炎に怒らせ、イラフとならぶ。

海軍特殊部隊の巨漢、少尉シルス（支陋栖）がチヒラを制した。

「イラフ殿は『非』の戦士です。ハラヒも我々が特殊部隊の精鋭で、しかも元『屍の軍団』であつた達人です。」

彼女とイラフ殿にお任せして我々は任務を果たすべきです」

ストランドも同意した。

「少尉の言うとおりでしょう。チヒラ殿とユーカレ殿はここをお願いします。イラフ殿は俺がサポートします」

そう言つて剣を構えて馬を進める。

陸軍特殊部隊の少尉ジイク（斎粥）は身の丈が2 m 5 0 cmもあり、筋肉の盛り上がった胸と上腕、さらに肩幅も2 m近くあって、全身が四角く見える魁偉の巨漢だったが、

「我らが猛者も向かわせましょう。軍曹オゾン、アガグ、ウソゴ、行くんだ。配下を連れてイラフ殿をお助けしろ。」

さあ、いずれも我が隊の名立たる猛者の軍曹です。彼らに配下を添えて行かせました。チヒラ殿、ユーカー殿、ご両方はレオン殿下をお守りください。あなた方はここにいますべきです」

「仕方ない。承知した」

「ふ」

かくして猛吹雪の中、立ち塞がるメタルハートに向かって、数人の戦士たちが歩を進める。

数十mまで来た。

ジンの両眼は爛々と燃え、すべてが吹雪に塗りつぶされる中でも、明瞭に見える。その威圧感は凄まじいものだった。実際、オーラを風圧のように感じる。吹雪とは明らかに異なるのでわかるのだ。

虎のように低く凄まじい声色で、

「貴様がイラフか」

メタルハートが睥睨し、そう尋ねた。

「なぜわたしを知っているのか」

「このジンを殺そうとする者の名を知っていてもおかしくはあるまい。どのような者か、この眼で見えておきたかったのだ。ふふふ」

「どうやら情報がリークしているらしい」

「つまらぬことよ。」

さあ、かかって来い、どこからでも来るがよい」

イラフは眼を瞑った。

心の声を静かに聴く。

隙がない。

それを覚知した。

ジン・メタルハートはその膂力やスピード、巨体だけではない。

明らかに武人として達人の領域に達している。深い奥義を極めている。

「これほどの者がなぜ悪なのか」

イラフはそうつぶやかずにいらなかった。

ある程度以上の高みに達しようとするればおのずから精神的な高みが要求される。それが必要となる。

精神的高みとは自己超越であり、自己への執著を捨て去る清廉な精神だ。私心や私利私欲を棄てる精神がなくなれば技に迷いが出る。命を惜しんではキレが喪われる。

これは自己保存を旨とする生物の原理に違^{たが}うようだが、これによって生存率が高まるならば、一様にそうとは言い切れない。

むしろイラフは命を捨てる精神こそ生命であると感じている。生命は日々新しく生まれ変わる存在である、と。

じりじりと間合いを詰める。

メタルハートは余裕綽々^{よゆうしゃくしゃく}で、仁王立ちのままだ。剣を構えてもいない。

あと20mというところまでイラフはにじり寄った。

まずは低く攻める。

短い助走で地を蹴って十数cmの高さを燕のようなスピードで地上と平行して飛び、ジンの足下で再び地面を蹴り、地面と直角に上がって、下から上へ縦裂きに両断しようと試みた。『韋驮天亢龍』だ。

ジンが消える。

咄然とする間もなく、敵は背後に回っていて、大剣の腹でイラフを殴打しようとしていた。咄嗟に空宙で身を振り返らせて、剣で受けていなければ、背骨がへし折られていたに相違ない。

イラフはすっ飛ばされた。

受け身を取って転^{まろ}び、すぐに立ち上がり、体勢を立て直す。

何が起こったかすらよくわからなかった。凄まじいスピードだ。

オゾン、アガグ、ウソゴが関^{かぎ}の声を上げて立ち向かうが、一振りで三人とも薙ぎ倒された。配下までもがその風圧で尻を突いてしま

う。風の摩擦で雪さえも一瞬、燃え上がった。

ジンがにらむ。兵士らは震え上がった。

全身からはオーラの炎が眼に見えて立ち昇っている。

イラフは構えながらもふしぎに思った。すぐにメタルハートが襲って来ると思ったのに、まったくイラフの方に向かってくる気配がなく、その場所を動かないからだ。イラフは疑わざるを得ない。闘う気があるのか？

ハラヒがじりじりジンの背後に迫っていた。イラフとは眼を合わせない。もし眼が合えば意思の疎通が起こる。それをジンに読まれてしまうことを危惧するからだ。

「心得ているな……」

イラフはハラヒに感心する。会ったばかりなのに、これほど阿吽の呼吸なのだ。チヒラ以上かもしれない。

前後から同時にジンに襲いかかる。

イラフは45度の角度で頭上を狙い、ハラヒは「父母の仇っ！」と叫んで片刃の『きよかみ』でくるぶしを狙う。まったくの同時だった。呼吸を読み合っていたのだ。二人とも世界が情報生命体であり、我々の認知する世界は解釈であることを体で理解しているとも言える。

しかしメタルハートは同ずることもなく、後ろ手に剣でハラヒを払い、イラフの剣を籠手で受けて弾き返す。

「笑止千万とは、貴様らのことよ。」

蚊蜻蛉に等しい。まるで相手にならん。出直して来い」

「何だって！」

イラフが叫んだ。ハラヒも怪訝な顔をする。

「さらばだ」

去ろうとする。

「待て！」

イラフが追いすがろうとする。

「無駄だ」

振り向かずに歩み続けてメタルハートが言う。

「なぜだ。なぜ闘わぬ」

「弱過ぎる。強くなってから来い」

イラフもハラヒとともに完全武装した百人の兵と対峙しても負けることのない強者である。それがこうも簡単に敗れ、それどころかまったく歯が立たないとは。

圧倒的な力の差であった。どうしてこの化け物にイースは勝つことができたのか、イラフには見当もつかなかった。思わずおのれをののしり、

「くそっ！」

対照的に白き眼を凍らせてハラヒは静かに訊いた。

「ジン・メタルハート。おまえの狙いは何だ。」

おまえはシルヴィエの側にいると聞く。しかしおまえの配下はシルヴィエのある方の命を狙った。なぜだ。

そしてさらにふしぎなのは、おまえはおまえの指示でおまえの部下が狙ったその方に今、眼もくれず、闘いの決着も附けず、ただ去ろうとする。まったく理屈が合わない。

なぜだ」

「ふ。ふふ。」

貴様らに語る必要などない。先も言ったとおりだ。イラフという者がどれほどの者か見ておきたかっただけだ。期待外れであったがな」

無防備に背を向けて吹雪の中を歩き去った。幻影のごとく消える。

「無念っ！」

イラフが雪を叩く。緑の髪のハラヒが彼女の肩に手を置き、

「完敗ですね。でも命が助かったのです。ふしぎですが。殺されてもおかしくなかった」

「その方がまだ」

「そんなことを言うべきではありません。あなたには任務があります」

イラフは応えなかった。

馬車に戻るしかない。車内に上がって円陣を組むように坐り、イラフとハラヒが二人の戦士とレオンへ事情を説明する。話を聞いてユーカーレもいぶかしげに眉を寄せた。

チヒラが言う、

「てっきりレオン殿の命を狙ってきたのだと思ったよ、ぼくは」

「そう。わたしもそう思っていた。現にアグールがレオン殿を襲ったこともあったし」

イラフもそう言っとうなずく。ユーカーレがレオンに尋ねた。

「レオン殿はどう思うのか」

漆黒の髪若き貴人は思案した。

「ジン・メタルハートがなぜイラフと闘っただけで、しかもとどめも刺さずに去ったのか、という問いであれば、私にもわからない。何らかの一時的な事情ではないだろうか。

いずれにせよ、彼女が私を殺そうとしている、ということには変わりないと思う。なぜならば、（イラフ殿の言うとおりに）アグールが私を襲ったのは、ジンの命令以外ではあり得ないからだ。

私は神聖皇帝ジニイ・ムイからも、大枢機卿イヴィルからも命を狙われる可能性を持っている。理由がある」

金の双眸のユーカーレがノーズティカの鎖を揺らしながらうなずき、
「ふ。

なぜ皇帝が？

大枢機卿ならわかる。あなたもやがて大枢機卿になって次々期の皇帝の座をイヴィルと争うこととなるからだ。イヴィルは既に大枢機卿だが、まだ若くて次期候補には選ばれない。次々期の互選が勝負となる。

ところが、次々期の互選となれば、あなたも大枢機卿となっていて、家柄の良いあなたがそのときの最も有力な候補として浮上することは疑う余地なく、明らかだ。

イヴィルがあなたを競争相手としてにらんでいる、というのは帝

国内ではかなり知られた話と聞く」

縮れた髪を傾けて蒼白いレオンが冷笑を浮かべる。

「そのとおり。国内では公然と知られた事実だ」

「だが皇帝はなぜ」

「それはまだ言えない」

「秘密だらけですね。」

そう言えば、命を狙われることが帝都を離れた理由ではない、あなたはそう言っていましたか……」

チヒラが腕組みし、薄紫の双眸の色を濃く深め、そう言うと、レオンは、

「そうだ。私はそう言った」

「しかしその理由は言いたくはない、と。我々にとっては謎だらけだ」

イラフが少しむつとした言い方をする。ハラヒが問い、

「いずれは話していただけるのですか」

レオンは鼻梁を高くし、言う、

「アクアティアに行けばわかる。少なくとも私のしようとすること。そこまで行って隠すことははやない。

高貴なる祖先の名誉と魂とに賭けて」

四人は同時につぶやいた。

「アクアティア……」

そこにストランドが入って来た。

「早く行きましょう。獐猛な冬山のワグが迫って来ています。

視界の悪いこの吹雪では龍速を出すのは危険です。ワグを振り切れるようなスピードは出せません。

この山岳地の足場に慣れて土地勘のある奴らの方が圧倒的に有利です。追撃する側に利があり過ぎます」

一行は先を急いだ。

イラフはずっとジン・メタルハートとの闘いを脳裏で反芻していた。どうしたら勝てるのか、イースに逢って得たものは、今のところ

ろは何も活かせてはいない。何が足りないのか。

だが彼女には薄々わかつていた。大義だ。わたしには大義がない。世界が情報生命であるとすれば、そういう精神の力こそ大きく物事を動かすのではないか。そう悩み、考え続けた。

ジンが悪である、だから闘う。そのような抽象的な一般論ではだめだ。もつと実存的な理由がなければ勝てない。つまり「いったい、なぜ正義が守られなくてはならないか」に応えられなくてはならない。

傾斜はますますきつくなる。雪を冠して切り立つ岩を聳え上げさせる山々。

深い亀裂を避けて遠回りしたり、足場の狭い道を踏んで深い峡谷を下ったり、大磐の間をくぐり抜けたり、断崖の壁にへばりつくようにして細い道や栈道を突風に吹き飛ばされそうになりながら進んだり、絶壁に登攀したりして進む。垂直の壁を登る狭隘なつづら折りの道で叫ぶ、

「おい、気をつけろよ、飛ばされるな。バランスを崩したら真逆さまだ」

ガリア・コマータたちが突風にかき消されそうになりながらも声を張り上げ、注意を喚起する。寒さも凄まじい。

「こんな状況で襲われたら堪らないな」

チヒラが外を見ながらつぶやく。

「激しい風、この寒さ。騎乗の者たちはほんとうに大変だ」

イラフも言う。

彼女らは風の当たらない幌の中で防寒具にくるまっていた。内側が鉄製で外側が木製の籠に熱した石が入っていて、暖房になっている。

「また聞こえたな」

ユーカレがワーグの遠吠えを風音の狭間に聞いてそう言った。その言い方は無関心で、何の感情も入っていない。

日が沈んでも進み続けた。

ワグの遠吠えはますます近く、頻繁になって来る。ストランドが止まれの合図をし、

「戦闘の陣形を取りましょう。」

大華嚴龍國の特殊部隊と傭兵部隊と我らガリア・コマータとで円陣を作って周囲を護ります。交替で不寝番をします。走っているときに襲われるよりはましかと。空腹で疲れ切っています。体も凍えて硬い。闘う前に休憩や食事が必要です。野営の支度もしましょう。

ともかく、その大きな岩の陰で、石で風除けの囲いと、かまどを作って、食事の支度をするのでしばらくお待ちください」

野戦慣れた戦士たちによって、準備は手際よく進んだ。

肉のスープを啜り、碗の熱さで手を暖めながらチヒラが言う、

「山越えにはあと数日はかかるな。吹雪も止みそうにない」

翌日も進行は捗らなかった。

ところどころ絶壁に当たる。迂回もかなわず、羚羊のように、わずかな足場から足場へと飛んでジグザグにじわじわと登るしかなかった。

そのようなときには馬車を（ヨウクに牽かせるだけではなく）数頭の龍馬にも繋いで、引っ張り上げるようにしなくてはならない。ほとんど宙吊りのような状態であった。わずかしこ進めない。時間ばかりが過ぎると感じた。

天が厚い雪雲に蔽われて日射をさえぎっている上に、吹雪で空間も閉ざされているので、日が暮れるとたちまち闇になる。岩棚で休憩中に、すぐ傍でワグの吠え声が聞こえた。

「数百mというところだな。とうとう追い附かれたか。まあ、よく持った方だ」

ユーカレは相変わらず冷ややかな金の双眸であった。

イラフが立ち上がる。

「わたしに龍馬を貸してくれ。騎乗して防御に当たろう」

「パウルの龍馬があるのでそれはできませんが、どうして…」

「昨日の闘いでは不完全燃焼だった。憂さ晴らしと言うわけではな

いが、ワーグを叩き斬って、少しは仕事をしたい」

ハラヒも立ち上がった。

「そういうことなら、わたくしにも権利がありそうですね。どなたかガリア・コマータの方に休んではいただけないか」

「いや。もう少し進もう。闘わずには済まないだろうが、もつとよい場所に移動した方がいい。こんな断崖では不利だ」

チヒラがそう言って、ストランドを促す。

往く手の見えない猛吹雪の中で、絶壁を超え、山岳路を登攀する。

尖った岩だらけの過酷な急斜面であった。

「足下に気を附ける、慌てず、確実に進め！」

油をたつぷり浸み込ませた松明をいくつか灯す。荒々しい岩の形相がちらちらと見え隠れした。先頭に行く特殊部隊少尉のジイクとガリア・コマータのストランドは全身隙なく、周囲すべてに均等に注意を払い、殺戮の闘気を漲みなぎらせて進む。

「清々しい気分だ」

龍馬を借りたイラフは顔面に当たる氷の飛礫のような雪の弾丸を受けながら昂揚していた。ハラヒも同様に騎乗で、

「ワーグの咆哮が間近です。もう襲撃して来るでしょう。わたくしには飢え切った奴らの荒い息遣いすら感じられます」

闇の中、松明に照らされてホワイト・アウトした暴風雪の向こうを見通そうと、眼を凝らしても、何も見えない。風が耳をつんざく。

「感じる……」

イラフがそう言った。深夜に近い時刻である。一匹が岩の上から飛び降りて襲って来た。

「来たぞ！」

ジイク少尉の上に覆いかぶさる。将校は剣で払うが、自らも重さで落馬してしまう。ワーグの体の大きさは2 m 5 0 cm、少尉と同じくらいだ。

「おのれ！」

牙を剥くワーグの喉笛をつかみ、殴打して殺す。立ち上がった。

次々とワグが落下し、身を低くしてうなる。ストランドの龍馬が爛々たる眼でにらみ、逆に威嚇する。

「さあ、来い！」

オズンは大薙刀を振るい、斬り捨てる。イラフは走り寄って、闇の中であるにもかかわらず、二匹を一振りで斬る。その神技にアガグがうなった。

「凄え」

ハラヒは龍馬の上からジャンプして一匹のワグの背に乗る。乗られたワグは振り落とそうと暴れるが、巧みにその動きを利用し、その背の上から次々と他のワグを斬殺した。

乗っているワグが暴れ疲れて斃れそうになると、刺し殺してまた次のワグに飛び移り、同じことを繰り返す。

ガリア・コマータたちは息の合った連携で、瞬く間に数十匹を屠った。ウソゴは無駄のない動きで大きな斧を流麗に振るい、ワグを次々と斬首する。

「あははっ！」

笑いながら龍馬を操って舞うようにイラフは大剣を振るい、疲れも知らず斬り続けている。ワグの動きを読み切って、一振りするだけで数匹のワグを同時に、真っ二つに断つことができるようになっていた。

「さあ、今のうちに！」

ストランドが促すも、特殊部隊の兵士たちの何人かは龍馬から引きずり降ろされ、去れない状況であった。イラフが駆け寄る。あっという間に数人を助けた。

チヒラは馬車の馭者席の脇に立って三叉戟『天真義』を振るい、気を発して近づくワグを撃退する。

ユーカーレは物憂げに立膝してそれを眺めていた。自分が手伝うほどのことはないと言わんばかりの態度だ。ワグの群れは数百匹近くを斃されてようやく退却する。

「夜が明けるぞ」

チヒラがイラフを呼び戻す。微かに明るさが空気の色を変えていた。

「あゝ、さっぱりした」

水色の髪を振って清々しい顔でイラフが戻って来る。

「返り血を拭いてください」

ハラヒが布をイラフに渡した。同時に馬車の前に着いたのだ。

「すまない。」

君も疲れ知らずだな」

そう言われて彼女は少し笑った。

血で濡れた布はすぐに凍った。

第五章 アクアティア

山頂と山頂の間にある鞍部を越えて山を下る。

北側はさらに風が強く、なおかつ雪が深かった。

冬はノルテ内陸部から乾燥した寒冷な風が吹く。それが山脈に堰き止められるのだが、南の空気と触れて雲が起こり、その停滞した雲が雪を降らせるのだ。北部よりも湿度があることが雪を増やす原因となっていた。

「ワーズすらも来そうにないな」

ユーカーレが白い髪を撫でて冷笑する。

そのとおりだった。自然の脅威以外は存在していない。その唯一の存在が圧倒的に凄まじい。

吹雪というよりは叩き附けてくる怒涛のようだった。白い氷壁が轟音を上げて波状に襲って来るかのようなようだった。

凄まじいスピードでぶつかってくる壁が一秒と空けずに連打して来るかのような。天にまでも届く巨大な空気の立方体の塊に体当たりされ、押し潰されるかのような感じであった。

何度も止まって、岩陰に避難する。野営の際は、雪を掘って、空気穴を上手く残して馬車を埋めた。騎乗の兵たちも雪を掘ってそこ

に隠れる。その状態で二日過ごしたこともあった。

火を焚けば（底冷え感はあるが）かなり暖かい。凍った雪は溶ける心配もない。

「あゝ、意外だね。こんなにも暖かいんだ。久し振りに体温を取り戻したような気がする。あと何日くらいだろう。でもこれならがんばれそうだ。初めて知ったよ」

モス・グリーンのまつ毛を大きく咲かせてイラフが言うと、ユーカレが、

「もうじき榛松が見えるだろう。それからは早いものさ。ヨウクが少し体力を回復したら龍速を出してもいいだろう。眠るしかないな」
ヨウクも龍馬も踏ん張って進む。遅々として捗らないが、少しずつ前へ行つてはいた。

「どうやら近くにトロールのグループがいるようです。まだこちらの臭いは感知されていません」

ストランドの報告を聞いて、イラフは、

「時間が大事だ。なるべく係わらないよう迂回しよう。どんな様子なんだ」

「獲物が少なく、飢えと寒さで狂暴化しています。大型で愚鈍、獐猛なタイプらしいです」

「念のため、斥候とともに私も様子を見に行こう。防寒具を」

見ればトロールは生命維持のために半冬眠状態にあり、問題なかった。

やがて雪で凍った榛松が見えると、遠くに針葉樹の林が見え始めた。吹雪は止んだ。

「やつと世界に帰ってきた気がするよ」

チヒラが緋色の髪をかきながら安堵した嘆息とともに言う。

針葉樹の森に入ると氷雨が降り始めた。馬車は静かに進む。皆極寒から解放されてぼんやりしていた。レオンが自分の部屋から出て来て、地図を広げて言う、

「この先に登山道がある。そこから下れば山麓に行く街道にぶつか

る。街道を北へ進めば百キロメートルもゆかずにアクアティアの大平原に入る」

チヒラがミュールをつかんでカタカタさせながら考え込んだ。そして、

「どう思う、ユーカーレ」

「ふ。まっとうな道だ。つまり誰もが簡単に想定できるルートだ。しかも人眼に付き易い。危険だと判断するのが普通であろう」

イラフも唇を結んでうなずきながら同意し、

「やはり道なき道を行くべきでは。」

帝国は当然、我々の動きを察知しているのだ。現にメタルハートに襲われた」

レオンも腕を組み、瞑目する。高貴な顔立ちに翳りが差す。

「ううむ。君らの言うとおりかもしれない。速度は落ちるが」

イラフがチヒラの方を向き、

「龍速はだめだろうね」

「目立つ恐れがある。レオン殿、実際、街道だと人眼はかなりありますか」

「周辺数百km四方は辺境だ。居住者や通行者はほとんどいない。密輸入者がいれば、というくらいか。」

村は一つもない。冬の雪が多過ぎるため、農業も牧畜もここらでは盛んではないのだ。北の地方の方が寒さは厳しいが、乾燥しているから、むしろ降雪量は少ない」

「ガラス張りの畑で寒暖に関係なく穀物を育てると聞いていたが」

「全土にあるわけではない。ましてや国境附近には造らない。もう一つ理由がある。雪が積もったらガラス張りでも日が差さないからだ」

「なるほど」

山を下るにつれて、季節が冬から晩秋に移り変わって往くようであった。紅葉さえも見られた。「美しいな」

「まったく山の上にいるときはどうなることかと思ったが、気持ち

が緩んできたよ」

「そういうときに、またジンが来るんだよ」

「やめてくれよ、チヒラ。今は束の間の休息を楽しみたい」

泉を見つけて野営する。食事も豊かになった。木の実も拾えるし、ウサギやキジや山鳩を捕えることもできたからだ。溪流では手製の竿で魚も釣った。焚火で炙ると旨い。

登山道へ出る前に、先に斥候に行かせ、人のいないことを確認してから偵察隊を行かせ、調査隊に周囲の状況を確認させてから、本隊及びその他の隊が列をなして下った。

山をかなり下り、街道との合流点の近くなったところで道から外れ、森の奥に分け入り、そこで野営する。

街道が数十メートル下に見下ろせた。

「見渡す限り人影はないな」

「このまま下って、街道附近まで行くと、もうほとんど平地だ」

その先には遥か広大なる草原が見えていた。

「見てよ、多少の起伏があるが、樹木も少ない。人目につかないように街道を外れても、匍匐前進でもしない限りは丸見えだよ。むしろ反って目立つ。

街道から外れた道なき道を颯爽と騎乗のままで行こうものなら、

我は今ここに在り！と言わんばかりだよ」

「普通に街道で行くしかないってことですね」

「街道ではまた各隊に分かれ、散って慎重に進もう。ただしあまり距離を置かないことにしよう」

「龍速は封印しよう。しばらくは」

十数kmを進む。

やがてまったく平らな緑の大平原に出た。

「アクアティアだ。ここだ」

レオンが低い声で囁くようにそう言う。

イラフは風が優しくさやかであると感じた。

草は冬も枯れない種類のものらしい。カーペットのように美しく

輝き、長さが整っている。彼らは馬や馬車を草でカモフラージュし、平原の中に入り、並足で進んだ。道がないのだ。

平原を二日進むと、唐突に草原の真ん中に農家と水車が見えてきた。煙突のある母屋も納屋も水車小屋も質素な藁葺き屋根だ。

「いったい、人が住んでいるのだろうか。」

あれでは、これからの季節、寒くて住めないのではないか」

近附くと、母屋は煉瓦造りであることがわかる。よく見れば屋根は下地に板葺をしていた。

「誰が住んでいるんですか」

チヒラがレオンに訊いた。

「実は私も初めて来るのだ。いや、シルヴィエの人間であっても、ここまで来たことのある人間は極めて少ない」

「なぜ？　どういうことなんだ」

イラフの問いに、レオンは厳かに、

「ここは聖域なのだ。不可侵の土地だ」

「え！　では」

イラフが声を上げ、ユーカレも、

「じぶんらは入ってもよかったのか」

レオンは遥かなまなざしで、さらに厳かに、こう言った。

「ここに住むのはエオレア。神と人との間に生まれた娘だ。イキリヤの魂の娘だ」

チヒラが思わず驚きの声を上げ、

「イキリヤだって！」

「イキリヤって、いったい、誰？　人なのか？　どういう人なのか」

イラフがユーカレとハラヒにそのように問う。チヒラは驚嘆に魂を捉われていて話しかけられないから。

しかしユーカレが首を横に振る。ハラヒも。

「残念ながら、じぶんもまったく知らない」

「わたくしも、わかりません」

レオンが馬車を降りた。

「さあ、本来、この平原は禁足地だ。入ってはいけない場所だ。既に足を踏み入れて数日経ってはいるが、せめて家に近附く今このときぐらいは馬や乗物から降りて崇敬の念を表わそう」

「しかし、ここに住む人はどうやって生活しているんですか。水はあるようですが、食べ物はないし、誰とも交流できなくて物にも不自由するのでは」

イラフの問いにレオンが、

「彼女は神の子だ。不死で、食べものも飲み物もいらない」

「不死！」

「そして世界究竟の真理でもある」

「究竟の真理？」

「究竟の真理だって？」

「真理というものは、物的存在ではなく、理念や精神や知性だと思っていた。あるいは神のような霊的な、光のような、超越的なものだ」

イラフがいぶかしげな面持ちでそう言うと、レオンは速やかに反論した。

「それは先入観だ。平凡な物質が宇宙一切の原理をなす真奥義であつても何らおかしくはない。

彼女は生きている真理なのだ。実存する真理、実在する真理であり、世界の本質の精髓であり、世界の存在を支える原理なのだ」

「そんなことつて……」

イラフには理解不能であつた。チヒラがうつむいて語る、

「そういう話を聞いたことがある。

確か、ぼくがかつて聞いた話では、

『パスタリヤ家の支配する海鳥島エル・パツ・ハ・ロ・デル・マルにイキリヤ（彝配璃亞）という少女がいた。

人間を超越した、そのあまりの美しさは、神の真理そのものが顕現したと人々が信じたほどだった。〈太陽の薔薇の紋章〉という詩にも歌われている。

彼女はイタルという少年と親しい仲であったが、それを横恋慕した聖職者ラヴィドゥが無実の罪でイキリヤを火炙りの刑で処刑した』と。

齊曆9067年のことだ」

「何という酷い」

「恐ろしいことを」

「火炙りというのがどれほど残酷な処刑かわかっていたのだろうか、それを無実の少女にするとは」

ユーカレもうめいた。イラフは憤怒し、

「生きていれば、なぶり殺しにしたい」

「今では所在不明で、生きているか、死んでいるかもわからない。

ヴァルゴ教の聖職者らしい」

「それで」

イラフの問いには、レオンがこう応えた。

「それからが奇跡の始まりだった。

大宇宙の中枢である神の真理を生まれながら備えたイキリヤの非業の死を憐れんだ神が彼女を愛し、愛によってこどもが生まれたのだ。娘だった。

それがエオレアだ」

「凄い話だが、聞いたこともなかった」

「実はほとんど知られていない」

チヒラがそう言くと、レオンもうなずきながら、

「そのとおりだ。シルヴィエ人でも知らない者が圧倒的に多い」

「しかし、レオン殿、このことが我々の旅とどういう関係があるのですか」

「まずはエオレアに逢おう。すべてはそれからだ」

誰もが馬を引いて歩いた。パウルは馬車を牽く馬を引いた。

小川が流れていた。川は環を作って敷地を囲んでいる。円環で永劫に水は廻り続けていた。水車は永劫に廻り続けている。

苔の生えた、手すりのない小さな木の橋があった。

「我々はここで待ちます」

二人の少尉と、傭兵隊長と、ガリア・コマータ隊長のストランドは言った。

「わかった」

チヒラが応える。

レオンを先頭に四人の戦士は橋を渡った。素地のまゝの明るい胡桃材ウルナットの扉は開いている。

レオンが入った。四人は続く。

室内は質素だった。床には藁が敷いてあり、暖炉に赤かと炎が燃えている。小さな食事用の木のテーブルと、羊の毛を詰めた袋に布を敷いただけのソファがあった。暖かい。清々しい気が満ちている。

「ようこそいらつしやいました」

エオレアはいた。陶醉感を覚えさせる清らかな声であった。その顔も胸も四肢も光り輝くようで、それを見る者は魂が洗われ、新しく瑞々しい力が、すうっと、自然に静かに、体に、魂に染み入っていくのを感じる。イラフはここに来るまで思い詰めていた心の呪縛が解かれたかのような気がした。改めてエオレアを見る。

イラフは驚いた。ミラレセ大聖堂で見たあの女性と同じだったからだ。レオンがなぜ記憶にとどめると言ったのかがわかった。恐らくはレオンも会ったことがないから事前に確認しておきたかったに相違ない。しかしこの環境で人違いもないのでは、とイラフは思うのであった。他人の身体生命を脅かすほどの意味があったのかどうか……

エオレアを改めて観察する。イキリヤの死から14年しか経っていない。エオレアは普通なら十三歳、神の子ゆえに胎内にいた期間がなかったとしても、十四歳のはずだ。未だ青い林檎のような少女であるはずだが、いや、確かにそのような、危うい、瑞々しい、不安定で、どこか病的でさえある繊細さ、儂さ、痩せた未熟な硬さ、萌え始めの初芽のような初々しさがあるものの、圧倒的な、神々しい美が厳然として強く燦めいている。その輝くような美しさは神に

由来するものだった。何よりもその燦めく双眸だ。

それは詩に歌われたイキリヤの眸ひとみにそっくりであった。

『瞳孔の開きを調整する筋肉の一種である虹彩が放射状の縞目の文様を做すが、Brilliantにカットされたダイヤモンドのように美しい。

彼女の虹彩は青蒼碧藍紺紫サファイア群青コバルトブルー土耳其石ラピス・ラズリが鏤められて爛々と燦抜するモザイクであった。

その一つ一つがコロナの炎を随えて瞭かに熾り燿く。

燠ひかりり為す青碧。蒼燐が紺碧に燦々と爛きらめく。碧蒼なる燠火の如く炮烙し、奥になるにつれ炳焉あきらかとなるその奥に、燠おきせる青蒼を赫奕と太陽のごとき燎あきらかさで燦きらめかせる。

虹彩の亂反射の捉えられぬまばゆさの原因は虹彩を蔽う角膜と、角膜と虹彩との間の前眼房を満たす眼房水とが、尋常ならざる晰らかさで、クリスタル・グラスのよう透けているからである。

その透明度は湖面から水深100mの底にある砂粒の表面の凹凸の一々をも精緻な解析度で明晰にし、めまいを起こさせるほど瞭かにして睿らかに晰らかなるきよらな水をも遙かに彼方無限の果てまでも超える。

大聖堂の光燦たる薔薇窓だ。

聖なる天上のステンドグラスを嵌めて無際限なる光焰輪の紋を耀かす。言葉にならぬ永劫の真実。人間が一秒たりとても呼吸することのできない、高純度の鮮烈な空気。人は虹彩の尖熾に射抜かれる』

イラフは激しい感情に魂を奪われた。これが神の力だ。これが神なのだ。到底、人間には及ぶべくもない。崇高で神聖で荘厳で、きよらかな、言いようのない凄まじいまでのまぶしき光輝、燦めくまばゆい熱のない炎、太陽よりも遙かに遙かに強烈だ。宇宙開闢の炎をも超える。1兆光年も遙かの彼方も超え、一切の平行宇宙をも充たして凌駕し、十一次元の時空を遙かに突き破っている。真理そのもの、善のイデアそれ自体だ。イラフは全身に光の潮のようなものが漲るのを感じた。

「凄い」

彼女が世界の精髓にして宇宙の中核なる原理、究竟の真理であるという言葉が初めて理解できた。体で強制的に理解された。

レオンが深々とお辞儀してから片膝を突いてひざまずく。神聖帝国で最も高貴な家柄の者すらもひざまずかねばならないのだ。

「まずはお詫び申し上げます。禁足地に入ったことをお赦してください」

「構いません。自然なことです。歴史的な運命の上にあります」

「聖の聖なるエオレア様のつつがなきことをお伺いさせていただきます」

「ええ。まったくの安泰、平穩無事です。何事ありません。すべてはとても健やかです。静かです。」

マリア、客人にお茶をお出ししてください」

イラフがそれを制し、

「あ、いえ、お構いなく」

「そうです。我らは禁を犯した者」

チヒラが儀礼的に首を垂れる。ハラヒも、

「客として扱っていただくことなどできません」

「気になさらないように。私はあなた方が来ることを知っていました。ハーブ茶も昨日のうちらから葉を採んで用意していたのです」

「しかし」

「マリア、こちらへ持つて来て。さあ、皆さん、お茶をどうぞ」

素朴な素焼きの陶器に爽やかな香りの茶が淹れられ、運ばれた。

一つ一つ形が微妙に異なる碗は何の変哲もないのに、なぜかそれゆえに味わい深く、優しくて繊細微妙なる素焼きの土色をしている。

マリアはエオレアにとってもよく似た美しい少女だった。優しさとか親切と暖かみが柔らかな円のように、ほんのりしたオーラで体現されている。誰もが親しみを持たずにいられない、愛らしい少女であった。輝くばかりに健やかなのに、繊細で、可憐で、儂い美しさ。人間であるうか、神の眷属であるうか、イラフはじっと見て考えた。

「彼女はエルフです。私の生活を助けてくれています」

マリアはお辞儀した。

茶を含む。きよらさやかな味がした。精神が清められるようであった。

「エオレア様、またハーブを採りに行ってもよろしいでしょうか」

「ええ。あなたはほんとうにハーブを摘むのが大好きですね。いいですよ。お願いします。いつてらっしゃい」

マリアはうれしそうに微笑み軽やかに舞うように草原へ出て行った。

レオンが尋ねる。

「ここ数年で外部の者が何者かここを訪れませんでしたか」

「ええ、来ました」

「何者でしょうか」

「神聖皇帝ジニイ・ムイ」

激しい衝撃が脳髄に走った。戦慄を覚える。

「絶対神聖皇帝がここを訪れたのですか、彼自身が！」

イラフが驚愕の声を上げる。

「そうです」

「驚いた」

「信じられない」

「いや、あり得ない」

「彼は一人でしたか」

そう問うレオンだけが冷静であった。

「ここに入ったときは一人でした」

「いつでしょうか」

「5年前です」

「彼は。」

彼は何をしに来たのでしょうか

「求愛です」

「求愛！」

ハラヒが珍しく声を上げる。

「これは驚いた」

イラフも瞠目した。

「何ということだ。イラフよ、ぼくはもう死にそうだ」

「それで、断ったのですか」

レオンは動ずることなく、重ねて尋ねる。

「むろんです。永遠の命がある者が死すべき人間と結ばれることはありません。世界の秩序が崩れるでしょう。すべてが狂うでしょう」

「そのとき、彼は何か言いましたか」

「ケーレ **Kehe** を起こす。そう言っていました」

「ケーレ！」

チヒラが驚きの声を上げた。

「いったい、どうやって？」

レオンも今度は表情を変えて尋ねる。

「それについては何も言いませんでした」

「そうですか。わかりました」

残念そうにそう言ってから、しばらく考え込んでいたが、レオンは再び次のようにエオレアに問うた。

「彼の随行者に大枢機卿イヴィルはいましたか」

「いいえ。彼はいませんでした」

「誰がいましたか」

「聖教の巫女リリア、カッサドル・デ・ドラゴーンネスの聖殉教騎士アヴァロキとその従者アムト、セトン、ミハル、『屍の軍団』のロキ少佐、ザンキ中尉、グロヴィス少尉、ヨギ少尉です」

「なるほど。狂信的な心酔者のみを連れてきたというわけですね。侍従長ですら信頼されていないのだ、皇帝は」

そのとき、エオレアは突如、双眸を燦めかせ、こう言った。

「レオン・フランシスコ・デ・シルヴィエよ、汝に永遠なる栄光のあらんことを。私はあなたを祝福します」

あまりに唐突だったので、驚いた顔のレオンはすぐに気を取り戻して胸に手を当て深い辞儀をし、再びひざまずく。

「有り難き幸せの極みです。

生きて再び光輝あるシルヴィエ家の座に帰ることがあれば、神聖のうちにも最も聖なる祝祭を挙げることをお誓い申し上げます」

「すべては最高神カム・イアレズヲの意のまゝに」

「エオレアが祝福した」

チヒラが眼を丸くする。

「どういうこと」

イラフが問うた。

「王権が承認されたんだ。神の祝福だ。彼は皇帝にならなければならない。ぼくらは今、未来の皇帝を眼の前に行っているんだ」

「でも互選によつて指名されるのでは」

白き双眸の眼を瞋みひらいてハラヒもそのように問う。

「神の決定に逆らう互選など行われるはずがない」

チヒラはミュールをかつんと鳴らし、そんなこともわからないのかという顔で言い放つ。

イラフは困った顔をし、

「わからないことだらけだ。後で教えてくれよ」

「ではエオレア様、これにて失礼いたします」

興奮した面持ちでレオンはそう言い、一同に眼差しで退室の合図を送る。

「幸いあれ。

戦士たちに最高の祝福を与えます。神の息吹とともにあらんことを」

エオレアは言祝いだ。イラフたちは全身に激しい生命を感じた。心気が充溢する。

こうして会見は終わった。馬車に戻ってから皆それぞれに坐る。チヒラはイラフに話した。

「エル・パツハロ・デル・マルは世界の臍へそと言われ、世界の中心地にある。神秘学的にも神学的にも呪術的にも大いに意味のある場所なんだ。

そこでは時々、世界の根幹に関わるようなことが起こる。世界現象解釈学的に言えば、イキリヤの悲劇もその一つなんだ」

「凄い話だ」

イラフは感嘆した。

「エオレアもそこで生まれた」

チヒラがそう附け加えると、ハラヒは怪訝な顔をし、

「では、なぜ今はシルヴィエに」

「はつきりはわからない。神慮は計り難いのさ。」

ただ、特別な場所ではなく、最も平凡な場所に、平凡に暮らすというコンセプトらしいとは聞いたことがある」

「どういう意味があるんだ」

イラフが問うも、チヒラは肩をすくめ、

「つまり意味なんかない、っていうことさ。当たり前で、ありふれたものが世界の奥義なのさ。」

ちなみに、皇帝ジニイ・ムイのムイ（無為）はそのことを意味しているということらしい」

「ありふれた場所なら、シルヴィエ以外にもありそうだが」

ユーカーレも問うた。

「どこにでもあるさ。だから、どこにもないのだ」

「何だ、それ」

イラフが憤慨する。

「つまりシルヴィエでいいってことさ」

「禅問答だな。ちんぷんかんぷんだ」

「そういうことなのさ」

そう言つてチヒラは笑った。唇を舐めて、たくらみで満たし光らせて。

はつとした。その言葉によって心機の何かが啓く。

イラフは自分の中に何だかのことが熾つたと微かに感じた。それはスイッチのようでもあり、何かの紐を解いて放つような感じだ。

静かに体内に広がって消えた。

消えると同時に体と外の区分が曖昧になり、入り交るような、入我我入の境地のごとき円寂を迎え、生命は金剛（ダイヤモンド）のように輝き、充たされ、満足し、生に納得する。

必然的に死への畏れが消え、生を納得したので死を受け入れる気持ちが生じ、生命を終りのある美しい塊と観ずる。

ダイヤモンドのような耀き。

エオレアの双眸の燦めきのようでもあった。

第六章 悪とは何か

「いかにして皇帝はケーレを起こすだろう気か」

レオンは独りごつようにそう問う。

それを聞いて、

「ケーレってなんだ？」

とイラフが尋ねると、チヒラが、

「方向性を変えること、転回だ。または向きを変えること、屈曲、曲りとも言える。世界の現行を変えてしまおうということだ。ある意味で、革命だよ」

ユーカレが皮肉な面持ちで、

「ふ。皇帝ともあろう者が恋愛感情で動いたのか」

その非難に対し、レオンは、

「いや。皇帝ジニイ・ムイに限ってそういうことはない。彼には彼の思いがあるのだろうと推察する。私はアクアティアに来て、その思いが強まった。

ただそれが正しいかどうかは別だ。動機が純粹であつても悪はある。

これは私の空想だが（感傷的な妄想かもしれない）、皇帝は世界の原理真理を極めて、極めることで原理真理と合一し、さらなるステージへと世界を是正しようとしているのかもしれない。神的な革命を目指しているのかもしれない。それが求愛であつたと私はさ

ように理解する。

いずれにせよ、世界の真理の中枢に手を触れようとしている。これは神の領域だ。

人にとって不可侵の域だ。しかしむしろ彼は意識的にか、無意識的にか、定かではないが、そこに触れようとしている。

いや、はっきり言えば、彼自身が神そのものになろうとしているのだ。

宇宙世界の運命を正し、宇宙世界を真に於いて真なるものへと昇華させるために、超越的な領域へ解脱させようとしているのではないか。

我らシルヴィエ人ならば、そのように理解するだろう。

理解しにくいかもしれないが、我が国に於いて、また聖教に於いては、教祖たる皇帝が聖教の真髓であり、宇宙世界の原理真理そのものであるべき存在なのだ。

皇帝に於いて宇宙世界の原理真理が成就すれば、究竟の原理真理が宇宙世界に実在し、宇宙世界が真に於いて真なる世界へと革まることとなるのだ。

だから宇宙世界を真へと導くということは皇帝自らが神になろうとすることと同じだということになる。

そういう意味では、皇帝はその真義を全うしようとしているだけなのかもしれない。神にして永遠なる絶対神聖皇帝の本願を成就することによって」

うなずきながらも、不満げにイラフは、

「そういうことか。しかしあなたはそれを肯定しているのか、否定しているのか。今までは、帝国、または皇帝のやろうとする何かを否定しようとし、それゆえに命を狙われているような印象を漠然とではあるが、我々は持っていたが。」

今の発言を聞けば、まるっきり肯定しているかのようで、わけがわからなくなってしまった」

「基本スタンスは否定だ。その理由は彼の行為だ。」

戦争もそうだが、他にもある。セオリーが正しくても現実の行為に誤りがあれば、一見、正しく見えたセオリーの本質に誤りがあったのではないかと疑うべきだ。それによつて世界の運命が左右されるだけに、さまざまな危惧が生じるのだ」

「まだよくわからないな。ところで、なぜ皇帝の計画がわかったのですか。侍従長ですら知らないのに」

「偶然だ。」

我が叔父の聖教戒律に関する講演会を聞きに行ったときに、十数年ぶりに幼馴染の天文学者と再会し、屋敷で食事をもにしたのだが、そのとき彼が最近、星の運行に異常があると言ったんだ。

後からそれが妙に気になつてね。

翌日、友人の警視が訪ねて来て、5年前の皇帝専用機の機長の自殺について不審な点があるから飛行記録を非公式に見ることができないか相談があつたのだ。正式には警察でも見ることは許されないからだ。

私は星の運行のこともあつて、ただならぬ感じがした。だから普段なら絶対にしないが、個人的に見てみると約束した。そして驚いたことに、記録が抹消されていることを知つたのだ。そこでちよつと手を使つてね。知り合いのハッカーをコンピュータ室に同伴して密かに解析させた。

そしてそのパイロットがアクアティアに飛行した翌日に自殺していることがわかつたのだ」

「ということは」

「口封じの可能性は高い」

「神聖皇帝たる者が何ということをして！ 誇りはないのか。無辜の国民を」

イラフが憤った。ユーカレもうなずいて、

「なるほど。動機が正しかつたとしても、彼のやり方は間違っている」

レオンは相手の怒りを制するように手を上げて、

「まだ確証はない。もし確かに口封じであつたならば私もそう思う。だが正邪を決めるのは彼に糺してからだ。

想像も推測も、ただの想像と推測でしかない。それは実体ではない。真実ではない。どんなに確実性が見込まれても、事実ではない。まずはアクアティアに来たことを確かめ、その後に皇帝に直接、糺さなければならない。そう思った。

だから君らにも何一つ語らなかつた。心から申しわけなく思う。それについてはどうか赦してほしい」

「わかりました」

チヒラは承諾の意を示し、イラフは、

「何が何でも皇帝の野望を阻止したくなつてきた。レオン殿、命令外ではあるが協力させて欲しい」

その強い口調を聞いてチヒラもハラヒも、

「ぼくもだ」

「わたくしもお願いします」

レオンは頭を下げた。

「ありがとう。」

国も民族も宗教も越えた君らの友情に感謝する。私は今改めて確信する。正義こそが守るべき唯一なのだ、と」

しかしユーカレが、

「あなた方の国は侵略国家だ。正義と言えるのか」

レオンは憂いに顔を曇らせる。

「それは認める。しかし国民はシルヴィエ聖教に改宗することがすべての民族の幸せに貢献すると信じているのだ。

意外に想うかもしれないが、政治家や官僚も本気でそう信じている人間が少なくない」

「あなたは信じていないのか」

イラフが碧き眉を厳しく寄せて問う。

「すべての人の幸福に寄与するとは思わない。この世には絶対ということはないのだ」

「神に於いても？」

「神に於いては常に絶対ということしかない。だがそれを受け止める人間の判断が誤る。人間にとっては、必ず自分という人間が介在せざるを得ない(そうでないことは不可能だ)から実質的に絶対というものが存在し得ないのだ。」

「どのようなことも意識である。人間が人間の意識として受け止めなくては人間に顕現しない。」

「だから聖教をも疑うべきなのだ。神聖ゆえに鴉片であってはならない。」

「そのように科学的に宗教自体をも含めて自己批判することが、本来のシルヴィエ聖教の精神なのだ」

「そういう宗教はあまり聞かない」

「そうでもない。仏教に於いて仏陀は鵜呑みにすることなく、自分を批判しろと言っている。どのような教えも、弟子自らが検証しろと言っておられる」

「そのような考え方をする者は、帝国では、唯一あなたしかいないだろう」

「そうでもない。わかっている者たちも少なからずいる。」

「でも彼らには、どうすることもできないのだ。宗教は恐ろしい一面を持っている。」

「私が皇帝になった日にはすべて共存共栄の理想世界を作りたい。」

「まさにIEとはそのためにあるのではないか」

「わかった。」

「あなたを信じよう。じぶんも国や民族や宗教が丸ごと悪であるなどという非現実的な妄想は抱いていない」

「ユーカレがそう言うと、チヒラが尋ねた。」

「話は終わったか？ 今はわかり切った確認をしている場合じゃない。」

「さて、レオン殿はジニ・ムイの動きをどう読んでいるのですか。」

「というのは、あなたが新聞などで情報を知りたがったのは、シルヴ

イエ帝国の動向、皇帝の動きを知るためではなかったのでしょうか」
「いかにも。」

私は今起こっている各国との戦争が5年前から始まっていることに暗号を感じた。だから戦争の情勢を把握したかった」

「5年前……皇帝がアクアティアを訪れた時期だ」

「それゆえにこれら一連の動きがケーレのために行われているのではないかと推察し、懸念していたのだ」

「国を出奔して確かめなくなる気持ちもわかる」

イラフがうなずく。しかしチヒラは問う、

「いうことはなんとなくわかりますが、しかし、いったい、この戦争でどうやってケーレを起こすつもりなのでしょう」

「そこまではわからない」

「わからなければ阻止できない。何としてもそれを知らなければ」

「レオン殿、あなたはこれからどう動くつもりか」

ユーカレが問うた。チヒラも、

「もうお考えを聞かせてもらってもよいでしょう」

レオンはうなずいた。

「さつきも言ったとおり、ここで聞いたことをヒムロで公表し、皇帝に直接、正邪を糾すつもりだ」

「オエステまで、大華厳龍國へ行く予定だったが、それが命ぜられた任務だったけれど、もう遂行できない、しなくなるってことか、ヒムロに行くのだから、そうだ」

イラフは自分の頭の中を整理するために独り言のように繰り返した。

「ふ。そう言うことだ。命令違反ではあるまい。主旨は変わってない」

鼻を鳴らしてノーズティカを揺らし、ユーカレがそう言う。

「君はいつ主旨がわかっていたんだ。理由は言われなかった。ただ我が国まで、龍皇帝の下まで送って行くよう、大司教に言われただけだった。」

それしかわからなかったはずだ」

「大道を貫くことに変わりないさ」

レオンもうなずき、

「あの時点では、東大陸行きが正しかった。

君らの手腕は未知数だし、信頼できるかどうかともわからないし、今のようについて話をすることができるようになるとは思えなかったので、とにかくにも大華厳龍國に行つて、龍皇帝の選んだ智者や勇者とともに、シルヴィエへ帰つて来る算段であつた。

なおその際には、大華厳龍國の同盟国であつた羅汎皇帝の力をも借りることができれば、とも思っていた。あの時点では」

「しかし羅汎皇帝は龍皇帝を裏切つた……」

緑の髪の毛が鋭くつぶやく。

「そのとおりだ。両大国の協力を得ることはもうできない。だからどちらかを選ばなければならない」

「ぼくらの立場からは『龍皇帝を選んでくれ』と言うべきなんだろうね」

「そうだな。この状況でマールロまで送つてくれと言うわけにはいくまい」

レオンは自虐的な微笑みを浮かべた。チヒラの眸^{ひとみ}が桃色を濃くし、光を強める。疑念が生じた。

「しかし公表だけでは弱くないでしょうか。証拠もないし」

「名誉がある。私の祖父は前皇帝だ。父は大枢機卿だ。私が嘘を言うわけがない。誰もがそれを承知している」

「でもシルヴィエ国民は皇帝の言うことも信じるのではないですか」
「むろんだ」

「それじゃ……」

「皇帝たる者、嘘を言うはずがない。もし言うなら（そんなことはあり得ないが）その場で斬り捨てる。

彼は私の言うことを認めるであらう。

それが彼の生命のためだ」

碧き眉を硬くし、イラフが両手を頭の高さに挙げ、ペパーミント・グリーングリーンの双眸を強く燦かさせて皆に手のひらを見せた。待て、の合図だ。

「わかった。」

レオン殿が無事にヒムロに入ればいいんだね」

しかしクリムゾンとボルドーの髪を振ってチヒラが否む。

「いや。そうだとしても、ジニイ・ムイがどのようにケーレを実現させようとしているかを知らなければ、阻止はできない。」

皇帝を退位させても、動き出したものが止められないかもしれないんだ。止め方がわからなくてはならない。

そのためには、何が起ころうとしているのか知らなくてはならない」

「皇帝も何らかの方法で調べたはずだな」

ユーカレが顎に手を当て考え込む。

「古文書にケーレについて書いたものがないのかな」

そうつぶやき、考え考えしながらチヒラは言葉を継ぎ、

「古文書は各国にかなりある。コプトエジヤの古文書館には有史以来の文献がそろっている。インⅡイ・インデイス（殷陀羅尼）の古文書館も真奥義に関する文献は世界一かもしれない。」

シルヴィエだつて各地の文書館には相当な資料が保存されているはずだ」

「それは確かにそうだが、やみくもに探しても、何千年かかるかわからないぞ」

ユーカレが反対する。イラフも同意し、

「それはそうだ」

「ぼくの友人に非常に賢明な者がいる。」

コプトエジヤの王家に繋がる血筋の者で、ユリアスというんだ。

彼に訊けばヒントがありそうな気がする。

連絡してみるから、少し時間をくれないか」

それを聞いてユーカレは結論する。

「では、その結果が出るまでこの平原で待とう」

「そうだな。場合によっては行くべき方向が変わるかもしれないから」

チヒラも同意し、イラフも、

「まあ、山でずいぶん苦勞したんだ。この平原の緑でもぼんやりと眺めてゆっくり待つのもいいよね」

と言って遙かな草原の地平を見つめる。

その平原の北の果て、片隅にある小さな森で、二人の山賊まがいの男が悪事を企んでいた。まるで醜さと卑しさと粗暴のカリカチュアのような登場人物。

「皇帝のお褒めに与^{あず}かれるんだな」

「あゝ、イヴィル猊下の話を聞き逃さなくてよかったな」

「運があるんだ。こいつを借りることができたのがそもそも幸運だ」
傍らに大人しく待つ小さな龍を満足げに眺める。翼のある龍で、応龍と呼ばれる種類の龍であった。特に今回、彼らが乗って来たのは、応龍の中でも比較的小型のもので、密かに行動するのに適している。

「しかしおまえに操れるとはな、驚きだったぜ」

「ふん、任せておけや。飛行機はだめだが、これなら大丈夫だ。俺の婆ちゃんはな、魔女だったんだぜい」

山賊に見えるが、実は山賊ではない。神聖シルヴィエ帝国の聖殉教騎士アヴァロキの従者アムトの配下で組織する聖闘士アムト団の兵士、ベンとサムだ。

元は町の破落戸^{デロツキ}だったが、警察に追われたため、アムト団の厩舎清掃係として身を隠し、数年を過ごすうちに資金調達の腕前を見込まれて兵士に格上げされた者だ。

イヴィルが聖殉教騎士の屋敷を訪問したとき、車寄せで馬車を預かって客用の贅沢な厩舎に引く役目を命じられたが、馬車を降りる際に大枢機卿がふと口にした言葉を聞き逃さなかったのだ。大枢機卿は嘆息しながらこう言ったのだ。

「あゝ、アクアティアのエオレアを奪取すれば、皇帝から崇高な賞讃と無限の褒美と永遠の栄誉を得られるだろうに……」

二人はアクアティアのエオレアとは何かを調べ始めた。アクアティアが禁足地である他はなかなかわからなかったが、偶然、一夜の宿を求めてアムト団の宿舎にやって来た巡礼の僧がこんな話をしたのである。

「エオレアはアクアティアに女性だけで住んでいる。そこは禁足地で周囲数百kmには誰も立ち入ることがない」

ベンは興奮を抑えて尋ねた。

「アクアティアってのは、ずいぶん広そうですが、その家ってのは、どの辺にあるんでしょうね」

「さあ、そこまではよく知らないが、真っ平らなその平原の中心にあるらしい」

「そうですか、そうですか」

そのしばらく後、たまたま「休暇を取って遠出をするのに、どんな乗り物が良いだろう」と雑談していたら、面識のない団員が会話に割って入って来て「知り合いから応龍を借りることができる」と言い、すぐに借りて来てくれたのである。驚くほど、あつという間の仕事であった。二人はかくして平原を飛んだ。

脂ぎった指を舐めながら、眼を飛び出させるかのように地図を眺めていたベンが言う、

「ここじゃねえか、おい、相棒よ。さあ、どうだい。この辺りが平原の中心らしいぜ」

家はすぐ見つかった。するとどうだ、常人とは思えぬ一人の美しい女性がその近くで花を摘んでいるではないか。サムが指差した。

「おいおい、ベンよ、あれ、あれじゃねえか」

ちなみにイラフたちは一行もその近くにいたのだが、草でカモフラージュされていたため、ベンもサムも彼女らの存在には気が附かなかった。

「おお、間違いない。女性しかないはずだから」

二人は巡礼僧の話を捉え違いしていた。(二人の)女性しかないというニュアンスで言った言葉を、女性独りしかいないと捉え違えたのである。固有名詞がエオレア一人しか話題に出て来ないため、先入観があつて、そう思い込んでしまっていた。急降下する。

下を向いて花を摘んでいたが、何かが迫ることを感じて振り向きながら上を見上げ、「あっ！」と叫ぶような表情をする。眼が恐怖で見開かれる。

「さあ、おとなしくこっちへ来いや、エオレアちゃん。こりゃあ、別嬪じゃねえか」

ぎらぎらと欲情した眼で、サムが応龍を飛び降りてニタニタ笑いながら歩み近附く。

「え！」

マリアは言われたことが理解できなかった。余りのことに自分がエオレアと勘違いされていることに思い至らなかったのだ。

ベンも飛び降り、

「さ、サム、ぐずぐずするな。さつさとかつさらっちまうぞ！」

「おうよ、わかってらい」

汚れた手でつかみかかる。

「あれえ！」

「じたばたするな！」

「さ、エオレア、俺たちと来るんだぜ」

「あれ、あなた方は何を言ってるの、何の事だか」

「へへ、すつ呆けたって、こっちにやすっかりわかってるんだい、でへへへ、そーら、おいで」

「ああ、やめて！ やめて！ 助けて！ 誰か！」

その少し前。

地上から応龍を見つけたガリア・コマータたちが口々に叫んだ。

「あれは何だ？」「おい、あれは？」「龍だ、龍が」「おお、何かを狙っているみたいだ。旋回している」

隊員の騒ぎを聞きつけたストランドは急いで知らせる。

「異変です。あれを見てください」

イラフたちは首を出したが、平原に何も見えない。

「何もないじゃないか」

「空です。上を見てください」

「あ！」

蒼穹を飛ぶも生き物がいる。翼を広げ、尾が長くて、黒い蜥蜴のような生き物だった。

「応龍だ」

チヒラが言った。

「誰か乗っている」

ハラヒが指摘する。イラフは、

「誰だ、なぜ。：あ、もしかしたら」

「ほら、急降下し始めた。何かを狙っている」

ユーカレがそう声を上げると、チヒラが、

「そうか、わかった！ マリアが狙われている。だって、ほら、あそこ、マリアがいるじゃないか」

と言う。それよりも早く、イラフはヨウクに向かって奔り出し、

「急げ、行くぞ！」

「まずい！」

「だめだ、間に合わない」

ハラヒが手綱を素早く解いてヨウクに跨り、駆りながらもそう言う
うと、イラフもまた乗って号令し、

「諦めるな、追うんだ！」

「なぜ彼女を」

走らせながらも問うチヒラに、ユーカレは応え、

「わからない。エオレアと勘違いされたんじゃないか」

「そんな莫迦な！」

「いや、知らない者らには区別はつくまい」

「しかし、いったい、誰が」

というイラフの問いに答えてチヒラが、

「皇帝の回し者か」

「いや、そんなことをすれば皇帝にとっては大きな失態となる」

しかしチヒラは、

「ではそれを狙った誰かの陰謀かも」

もはや考える暇はなく、

「ともかく追え」

だが虚しかった。応龍は純粹な龍である。龍馬やヨウクよりも早く、しかも空を飛ぶので、たちまち遙か彼方に見失ってしまった。

「無念だ！」

イラフが憤る。

「何としても誤解を解かねば。何という愚かな過ちだ。苛立たいね、無知ほど危険なものはない」

「ふ。」

どうやら北の方へ行ったようだ。地団太踏むのも結構だが、事実の確認が先だ。それが現実主義というものだ」

ユーカレがゆつくりとそう言った。

「奴ら、ヒムロへ行くのか」

チヒラがそう言うと、レオンは、

「可能性は高い。ジニイ・ムイが遂に強硬手段に出たか。そんな愚かな者ではなかったはずだが。」

しかしそれで我々の進路も決まったな。北進しよう。追跡だ。帝都に行くかどうかは定かではないが、追えばわかる。見逃すまいぞ」

ハラヒが、

「レオン殿は強硬手段と言いましたが、なぜマリアがさらわれたのでしょうか」

とチヒラに尋ねると、

「わからないが、ユーカレの言うとおりエオレアと勘違いされたのではないか。レオン殿の話し方はそういう理解だ。強硬手段っていうのが何であるかは理解できないが」

ユーカレもうなずき、

「ともかくも、人違いはあり得る。ほとんどの人間はエオレアを見たことがないから。いずれにせよ、追い附けばわかる。」

追い附けなければ、わかつてても無力だ」

レオンは冷静にこう言う、

「エオレアに報告しよう。急いで手短に、だ。一瞬の無駄も赦されない。そして必ず連れ戻すと強く誓おう」

家に戻って説明すると、

「自己犠牲の崇高な精神、その正義の勇氣に感謝します。誓うのは止めてください。大いなる革命を祝福いたします」

一行は北へ発った。なりふり構わず龍速で駆けた。

「相変わらず凄いね。やはり速いよ。でもこの気持ち、この焦り。」

あゝ、まだまだ速さを足りなく感じるよ」

風圧でバタバタする布をまくって馬車の外をちらりと見ながらイラフはそう言ってから、チヒラを振り向いて、

「それにしても、あの応龍というのものはもの凄く速かった。わたしたちの手にも入らないかな」

「入るさ。ただ、ここでは難しいな。ぼくらは伝手が^{つて}ないね、この大陸では」

チヒラにそう言われて、イラフは首を外に出す。大声を上げ、

「ストランド！」

「何ですか」

「応龍は手に入るかい」

「国に連絡しましょう。こちらへ取り寄せられると思います」

あまりにもあつさりと解決にしまったのでイラフが反って疑義を呈し、

「え、だって、ここは帝国の領土だよ」

「応龍はステルス機みたいに探知機に引っかかりにくいんです。国からここまで飛んで来てもらいましょう。たぶん、うまく行くと思います」

「そうなんだ。それは凄いな。世の中、知らないことだらけだよ。」

わかった。よろしく頼むよ」

イラフは満足げに坐った。

藤色のまつ毛で翳らせて双眸の濃さを深めながら、チヒラはさらに逃亡者の痕跡を追いつける。

「とは言え、応龍はそう頻繁に飛んでいる神獣ではないからね。情報に海に残した波紋は簡単に拾える。

敵は素人だな。もしかしたら皇帝の手の者ではないかもよ。

政府関係機関の者なら、ぼくのような人間のいることを知っているだろうから、こんなずさんなやり方をしないとと思う」

「あゝ、愚かな敵という者は、ある意味、最もやきもきさせる存在だな。貴様らの行為はバカな勘違いなんだ、何でわかんないんだ、すぐやめろ、つて叫んでやりたい気分だよ……」

「愚かさはほんとうにおぞましいが、当事者は気が附かない。それが愚かさの本質だ」

「だからと言って、安穩としてられないし、赦して良いものでもないじゃないか」

「だがムダに精神を消耗しても逆効果だ。真に現実主義者になろうとするなら、冷静さと、清み切った精神集中こそが肝要大事だ。そもそも誰も愚かなのさ」

「君の言うとおりだ。反省も含め、こうした焦燥や葛藤の瞬間も鍛錬だと思おう」

「そのとおりさ。一瞬も気を許さない者にとっては、すべての瞬間が生き生きとした訓練だし、日々が新しい成長だ。

エオレアに見えたことも、大きくぼくらに何かを授けてくれた。君にとってはイースに見えたことに劣らず、大きな力となっているはずだ。すべての事物や人との出会い、一つの瞬間とて、おろそかにしてはならない。

ぼくらはこの旅で確実に成長している。刹那が歴史の奔流の中でひととき強く輝いている。君は感じないか。ぼくの手を見たまえ。このオーラを。気が充実している。色も輝きも変わってきている。

意（こころ）が神気を帯びている。経験こそが真の言葉で、真実の叡智であって、現実の力なのだ。そして、そう想うことこそが希望というものなんだ。希望ということの実体なんだ。わかるかい。

昨日は負けていても、必ずや明日は勝つんだ」

その頃、ベンとサムは追われていることも知らず、応龍の背で酒盛り。

「あははは、ざまあみやがれて気分だぜ、うまくいったなあ、おい、ベンよ」

「首尾は上々、上出来だ。最高だ。これで褒賞も栄誉も昇進も思うがままだな。サム」

「なあ、ベンよ、俺らもしかしたら騎士になれるのかな」

「おうともよ、これからの立ち振る舞い次第よ、いいか、いかにも萎しおざいます。崇敬し、我が魂のあくがれである聖騎士様、大枢機卿様のお役にたてれば、幸せの極み。お国のためになるのであれば、女一人をさらうくらい、何でもありません、これでかような凡夫も天国に行けますでしょうか』ってな。どうだい、相棒」

「ぎやははは、ガラじゃねや」

「笑いごとじゃねえ、ここが肝心なんだ。国じゃ、俺らみたいに欲望を剥き出しは蔑まれるんだ。俺の言ったとおりにすりゃなあ、殊勝殊勝と褒められて、ひよっとして上手くいけば、騎士様に昇進も夢じゃねえのさ」

「ほんとうかよ、ほんとうだろうな、へへ、すっかりいい気分だ。酔いも回って来ちまった。

この女、きれいだなあ、えっへへっ」

「あゝ、俺もさつきから堪んねえんだ」

さつきまで驚きと恐怖で言葉も出なかったマリアも眼を丸くし、遂に必死に叫ぶ。

「あなたたちは何者です。何でこんなことを。わたしをどうするつもりですか」

「まあ、そう叫ぶな、エオレアちゃん、仲良くしようぜ、俺はサム
つて言うんだぜ」

「あゝ！ あなた方の勘違いです。誤解です！ わたしはエオレア
様ではありません！」

「すつとぼけたってムダだぜ、お嬢ちゃんよ、ああ、ベン、俺あ、
堪んなくなってきた！この可愛らしさつたらないぜ。ちよつとだ
けだよ、なあ、ベン、いいだろ？　なあ」

「あゝ、そうさな。ここが思案のしどころさ」

「おお！　止めてください、間違いです、あなた方は見当違いをし
ています！　帰してください、エオレア様のお世話をしなくてはな
りません。助けて！」

だがそのとき彼女はふと思いついた。

自分がエオレア様でないことがわかった、今度はエオレア様がさ
らわれてしまうと。口をつぐむ。

「めんどくせえな、うだうだ言うな。あれ、急におとなしくなっち
まった。どうやらくだらねえ嘘で騙そうなんて諦めて、観念した
らしいな。

ところで、よお、ベンよ、おい、おまえ、いつまでも何考えてや
がるんだい」

「いつまでだってさ。何考えてるって、いろいろ考えてんだぜ。物
事はな、思いも寄らない事態ってのがいつもあるんだ。どんでん返
しだ。まずよく考えなくっちゃなんねえ」

「くそつ、辛気くせえ」

さて、イラフたちはと言えば、平原の北辺に至る。

皓々たる月の下、北の山脈の雄大なるシルエットが見え始めてい
た。ヨウクで越えられるルートを選び、いくらか遠回りをしなければ
ならない。

「応龍はストレートに山を越えただろう。しかしヨウクや龍馬では
そうはいかない」

レオンは自らに言い聞かせるようにそう独りごちする。そして眉

を寄せて悩み、思案する。そんな姿を見て、その夜、イラフはチヒラにぼつりと語った。

「シルヴィエは悪の帝国だと単純に思っていた。

いや、もちろん、いろんな人がいて、いい人もいることはわかっていた。当たり前過ぎることだけれども、国民や民族が皆同じ人格ということとは、絶対にあり得ないこともわかっていた。

でも、やはり帝国は悪だという感覚はぬぐえなかった。何となくシルヴィエの国民は概ね同じような考え方をしているように感じていた。帝国軍のやることに反対しないのだし、兵士となって一緒に行動しているのだから同じだと、そんなふうに、心のどこかで単純に考えていた。

まあ、よい方に考えるときであつても、たとえば、庶民は純粹に信仰しているつもりかもしれないけれど、洗脳されて正しい道が見えていなくて実際には彼らのやっていることは純粹な信仰などではなく、悪の道だ、なんてね。

そんなふうに簡単に考えていた」

「どこの誰もがそんなもんさ。気が附いただけでも幸せだよ。誰もが自己を超越できているというわけではない。

人は国家や民族に少なからず自己の尊厳を投影している。国家や民族の尊厳や財産に損害が与えられれば、その国や国民を丸ごと憎悪したくなるものさ。

とは言え、客観的認識のない者は不幸だ。夢の中を勝手に妄想して生きているようなものだ。愚昧の闇に封ぜられているようなものである。何も知らず、空も海も花も知らない。精神の地下牢に繋がれている。ほんとうの感動もない。

すべて事実（または真実）というものは常に個別的だ。物的にも、時間的にもね。それぞれに、その都度その都度で、まったく事情や内容が異なるのが普通で、決して一樣ではない。一樣であるはずがない。

当たり前だ。

物事を国家や民族や宗教単位で悪と見做したり、憎んだりするよ
うな、一様なものとして認識することはこの世の大きな悪だ。

そのような妄想によって当事者でもないのに復讐され、殺された
ら、やられた方の気持ちはいかようなものであるか。その遺族の
感情は。その恨みの炎たるや、いかほどであろうか。恐らくは天を
も焦すであろう。

想像に難くない、彼らも無差別に殺すだろう。恐るべき憎悪と復
讐の連鎖が起こる。

だから裁かれる者は当事者のみでなくてはならない。訴え、責め
る者も当事者か、その正当で直接的で（つまり最少範囲の中から選
ばれた）代理人でなければならない。

漠然と同じ宗派だからとか、同じ民族だからではだめだ。復讐の
連鎖を生む」

ユーカレが冷めた口調で言葉をはさんだ。

「当事者という定義が難しいな。

同じ宗教を信奉して反対しないなら、その精神を共有していると
主張する者もいる。同じ国にいて反対しないなら関与していると考
える者もいる。

我々はそれを殺されるほどの関与ではないと考えるが、そう考え
ない者もいる。同じ考えを強要することはどこまで許されるのだろ
うか。

自分や他人の生命や自由な言動や財産などの権利を損なう行為は、
制限されて当然と思うが、実際はケース・バイ・ケースでかなり
難しい場合がある」

「そうだね。すべてはケース・バイ・ケースだ。

だからすべては個別に判断すべきで、一様に、単純に、十把一絡
げに攻撃すべきではない。客観的な事実に戻しているからだ。す
べては事実に基づき、科学的であるべきだ。それが真実だし、つま
りは正義だ。これは絶対に間違いない真理だ。

私利私欲を妄りに貪ることが悪だというが、自己を超越すればそ

れは滅する。自己超越のために人は真の客観性を体得しなければならない。

客観性の缺如、これが悪の起源だ」

第七章 コプトエジヤの秘文

「ユリウスからの返事が返ってきた」

人間違いの誘拐をした犯人を追跡する馬車の中で、チヒラがそう言い、メールの文を次のごとく読み上げた。

「彼はこう書いてきている。

《『聖ルシアの録』という古文書がある。そこにアクアティアに関する記述がある。抜粋して送ろう。こうだ。

〃苦行者の前に神は竟に降臨し、こう述べた。

「(略)……世界には精髓とも言うべき原理(アルケーαρχή)がある。その一つのものにすべての本質が収斂し、大本となる。それが一切の究竟である。世界の心臓とも言うべきもの、聖典のうちの最も深いところに秘められた、尊い真言(陀羅尼)のように。

大いなる宇宙曼荼羅の円の御中なす神髓とも言うべき究竟の本質なり。これによつて円環は回転を為し得る。これによりて世界は活命す。歴史は流れ、世界は生成なり。

それはありふれた場所にある。求める者に理は理自らに於いて理を晰らめる」

「しかしありふれた場所とはどこでしょうか」

ルシアは問うた。

神はこう言った。

「海を渡り、北の緑の草靡く豊かなる平原。アクアティアにある」

「世を革めるにはいかにすべきでしょうか」

ルシアはさらに問うた。

神は再び応えた。

「円環は日時計ダイヤルのごとし。世を革めんと欲する者は、その対象を為せ」
“

対象というものが何であるかは定かではないが、ジニイ・ムイはこれを為そうとしているのだろう。健闘を祈る」

と言うことだ」

チヒラが読み終えても誰も口を開く者がなかった。

レオンも顎に手を当てて考え続けている。

「宇宙という名の曼荼羅が円環で、その円環が廻ることで世界が成り立つ、と言うことか。むしろ円環といっても、その名称で普通に示唆される考概のとおりではない。だからそれがいわゆる円環ではなく、エオレアであっても、何ら不思議ではないということだ」

「円環はダイヤル（日時計）のごとしか……それがわかりそうでわからない」

イラフが苛立つ。

ユーカーレが自分自身に言い聞かせるように、

「ダイヤルとは日時計だが、後に時計の文字盤を指すようになった。さらに後代には電話機に附いている指先で廻すダイヤルにも使われるようになっていくが……」

チヒラが手を打つ。

「それか。もしくは金庫のダイヤルとか。曼荼羅を円環に見立て、そのダイヤルを廻して何らかの作用を起こさせる……か」

「少なくとも戦争には関係なさそうだな。レオン殿は5年前からの数々の戦争のことを言うが」

ユーカーレが無関心そうに言うも、チヒラは、

「だがそれでもわからない。ダイヤルを廻すことの対象って、何だ」

「と言うか、対象って何だ」

イラフはお手上げのようだ。ハラヒも、

「何だろう」

チヒラはもつともらしく、

「代理となる現象？」

「どういうこと？」

イラフは納得できずにそう問い返すと、替わってユーカレが、

「本来のものは顕現しないので、何かその代りになる現象を作用させて本来のものを作用させたような効果を得ること、ではないか」

「呪術的だな」

レオンがさらに考え込む。イラフはさらに、

「だがエオレアの代わりって何だ」

と問い、チヒラも、

「エオレアはダイヤルなのか」

「そうさ。エオレアを仮にダイヤルとした上で、そのダイヤルの代用を探すんだ」

ユーカレはわかったようにそう言った。

「まったくわからない」

イラフが肩をすくめると、チヒラは、

「もう少し考えてから言えよ」

「うん：」

「でも何でしょうか」

やはり困惑顔でハラヒ。

「ジニイ・ムイが為そうとしていることを見ればわかるんじゃないか」

ユーカレがそう思い附くも、イラフは、

「何をしているかな」

「戦争、侵略？：：かな？ レオン殿は5年前から一連の戦争が始まって、そこに暗号じみたものを感じると言っていたが」

チヒラは考え考えそう言った。しかし、

「戦争のどこがダイヤルなんだ？」

イラフが一刀両断。

再び皆黙り込んでしまった。

「取り敢えずぼくは追跡に集中させてもらう」

「そうだ。まずは彼女を助けなくては」

イラフもはっと気が附いたようにそう言ったが、ハラヒは、

「だがイラフ、今はチヒラと手綱をにぎる者たち以外のわたくしたちにはできることはありません。もう少し考えてみてもよいのでは」

「ふ。日が暮れてしまうさ」

ユーカレが皮肉な表情で言う。

黄昏は崩落するように燃え落ちて終に日が暮れた。

チヒラが言う、

「どうやら奴らは休憩しているらしい。止まっている。チャンスだ」

「どのくらい先にいる」

「だいぶ先だ。向こうは龍速よりも速いから」

「奴らは眠るのだろう」

「たぶん」

「夜明けまでに追い附ければよいが」

「龍速を使っても、どうかというところか」

「だがそれしかない」

夜明け前。彼女らは追い附いた。

イラフは草藪に身を隠す。数十m先に、山賊のような二人の男が焚火をはさんで向かい合い、酒を酌み交わしていた。

「そつと近づくぞ。わたしとハラヒで十分だ。むしろ気配を消せない者は来ないで欲しい。」

皆は周りをぐるりと円形に囲んでいてくれ」

気配を消して、音を立てずに進む。近附くと、縛られて龍に繋がれ、すっかり疲弊し切ってうなだれているマリアも見えた。

「ぐわあっああ」

応龍が突如、吠える。サムとベンは驚きつつも、すばやく立ち上がって逃げようとする。

「しまった、龍がここまで敏感とは」

イラフがうめくも遅い。「ええい、一か八か」

凄まじい勢いでイラフは駆けてサムを切り捨て、返す刀でベンを

も、と思うと既に敵は応龍に乗り、飛ぼうとしている。

「行かせるか」

ハラヒが飛びかかるも、わずかの差、間に合わず。悪党どもはマリアを吊るして飛び上がってしまう。

「しまった！」

無念のあまりイラフは地面を拳で殴った。

戻ると、ユーカレが冷たく言い放った。

「これで奴らは休みなく、眠りもせずに一直線にヒムロまで行くだろうな。」

そしてエオレアだと思って連れて来た女性が間違いであったことを指摘されて懲罰、最悪は処刑され、そして」

「そして……マリアはどうなるのか」

イラフが碧き眉を力ませ喰い入らんばかりに訊く。

「この失態を隠すために陰謀を企んだ者によって消されるだろうな」

「そんな馬鹿な。禁足地から無理矢理連れ去ったんだ。用がないならば解放すべきであろう」

「禁足地だからだ。」

もしエオレアを連れて来たのなら、そのまま拘禁しておくつもりだったのだろうが、偽物じゃ、拘束していても意味がない。だからと言って、そこいらに放っておくことも、ましてや返すこともできまい。略取が露見してしまうからだ。

だからもう、手っ取り早くなかったことにしようとするだろう。

この世からの抹消してしまうってことだ」

レオンが立ち上がった。

「龍速でヒムロまで行こう」

「追い附けない」

ユーカレが表情もなく言い放つ。

「ヒムロに着いた瞬間に処刑するわけではあるまい。その時間を有効に活かせば未だ可能性はある。何としても阻止するんだ」

レオンが反論したが、ユーカレは批判し、

「ヒムロに着く前に、じぶんらが見つかる。たとえ、見つからずに着いたとしても、どうやって城壁の中に入るのだ。城門の衛兵は飾りではない」

だがレオンは決意の表情で、

「それでもやるべきだろう。見捨てることはできない」

その言葉にうなずきながらチヒラもレオンに賛成の意を示し、

「そのとおりだ。貴人を警護することだけが正義ではない」

全員の顔が引き締まった。

「そうだ、やりましょう」

ストランドらもそう言い、少尉や傭兵隊長は首をゆっくり縦に振る。

「ふ。仕方ないな」

ユーカレも同意した。

イラフとハラヒはうなだれて言った、

「すまない。我々がミスしたために。こうなってはもはや生きて帰らぬ覚悟で行く。絶対に無事に連れ帰る」

「君らだけの失敗ではない」

チヒラが言うと、ストランドも、

「そうです、皆が作戦に賛同し、その場で見守っていたのです。我々も同罪です」

それでも二人はうなだれたままで、

「言葉もない」

横目で見えていたユーカレが、

「時間の無駄だ。ほんとうに助けたいのか？」

それを聞いてレオンが珍しく微笑する。

「ユーカレの言うとおりだ。急ぐ」

ヨウクはいない疾駆する。

龍速する馬車の中で五人は再び対象について考え始めた。

議論はなかなかかどらない。すぐに言葉に詰まり、沈黙となってしまう。

「代象とは必ずしも似たものとは限らないんだよね。どこかが重なってはいるが、それはパッと見にはわからないもの、という可能性もあるわけだよね」

イラフがそう切り出すと、チヒラが藤色のまつ毛を翳して桃色の双眸の色を濃くし、

「それはある。」

何だかの一致があればいいんだ。だからいろいろな角度から物事を見なければ見つけれないと思う」

ユーカーレが異議を唱え、

「しかしジニイ・ムイは実践している。彼がやっている何かで、しかも規模が凄く大きいことである可能性が高い、とすれば」

「では、やはり戦争では」

ハラヒがそうぶり返すも、イラフは、

「でも、どう繋がるんだ。戦争がどう廻るんだ」

またも沈黙が訪れるのであった。

追っても追っても影さえも見えず、一行の思考同様、旅も永久凍土の上を虚しく過ぎ行く。

天気は荒れた日が多く、人跡稀な土地が多かった。時代に日照時間は短くなる。帝国の土地ゆえ、安易に旅籠や民家に泊まることは危険で、野宿する日も多かった。

しかも、それまでのように雪洞を造ることはできなかった。極寒地でとても乾燥しているので、雪洞を作るような雪質ではない上に、雪の量自体も少ないからだ。

已むを得ず、寒さをしのげるようなテントが必要になってきていた。旅の途中の町や村で、馬車に積んであった商品を少しずつ売り払い、資金にすると同時に収納スペースを空けて、テントの材料になりそうなものを買って集めて積み、終にはパオ（包）のようなものを組み立てられるまでになっていた。もはや商人らしさの欠片もない状態である。

三度目の山脈の街道をたどった。また永久凍土を涉り、最北の山

脈を越え、氷河を越える。ヒムロを目前とし、広大な氷原の中をまっすぐ貫く街道を疾走していたとき、斥候が騎馬ごと斃された。

ジン・メタルハートだった。

「くそっ、ここで邪魔するか！」

イラフが思わず歯ざしりするが、チヒラは冷めた表情で、

「いや、ここまで何事もなかったのがふしぎだ。シルヴィエ側は絶対、ぼくらが来ていることに気が附いていたはずだ」

ユーカレが、

「ふ。」

その議論は後でしようか。見る、アグールもいる」

ハラヒも緑の髪を揺らしてうなずき、

「ええ。しかもイジュールもいます」

「それに」

イラフが言った、

「見たこともないのが二人いる。何だ、あの化け物どもは」

初めて見る二人の女戦士の一人は翼があり、下半身は鷹のようであった。顔には血の気がなく、死人の表情をしていた。どこか土偶のようでもある。

もう一人はケンタウルスのような体で、下半身が獅子の首から下で、前後の脚があり、獅子の首から上であるべき部分が筋肉の盛り上がった女戦士の上半身になっていて、その上半身の全体に獅子の鬣のような長い毛が黄金に煌めいてなびいている。

チヒラがクリムゾンの髪を傾けて肩をすくめ、

「つまりはジンと四天王の勢揃い、っていうわけだ」

ユーカレが補足し、

「翼のあるのがユイス、ライオンもどきがゼノだ」

「マリアが心配だ。戦う暇はない。状況的にこれほど気の進まない戦闘もあまりないな」

イラフはそう言って微笑した。

「私が行く」と言って、レオンが馬車を降りた。「いや、止めるな。」

止めないでくれ。今回ばかりはどうしても行く」

「むろん、わたしも行くさ」

イラフも降りる。他の三人も降りた。ガリア・コマータ隊長のストランド、外国人傭兵隊長のバルバロイ、海軍特殊部隊少尉シルス、陸軍特殊部隊少尉ジイクらはそれぞれの兵を率いて騎乗のまま進んだ。

レオンはその戦闘でジン・メタルハートに向かって大きな声を張り上げ訴える。

「聖なる不可侵の禁足地アクアティアでさらわれたエルフがいる。彼女は彼女とよく似た女性と間違われ、さらわれたのだ。そのことを知っているか」

メタルハートが冷厳に応えた。

「知っている。サムとベンという者らがさらった。奴らは禁を犯した。禁を犯した者は何人であろうとも罪で処刑される。奴らもはや地上にはいない」

レオンが焦りと悲痛の表情を浮かべる。

「マリアは」

「エルフは追放される」

「彼女は聖なる場所からさらわれた。元の場所に還すべきだ。聖なるエオレアに使えていた」

「ヒムロまで連れられる途中で二人の男によって世俗の穢れに汚されてしまった。もはや聖なる場所に相応しくない。二度とアクアティアには戻れぬ場所に追放する」

「バカな。彼女に罪はない」

「誰にも罪はない。神は無謬だ。しかし裁きはある。それがどうした。愚かなことを」

「ならば通せ。止めるならば止めよ。私は突破して行く。人々を説き伏せる。皇帝をも」

「愚か者よ。たとえヒムロに到達したとしても、禁を犯した者は処刑される。さように言ったつもりだったが、聞こえなかったか」

「何！」

「おまえは処刑だ。我が裁きの剣を受けよ」

「聖なる禁足地ではあるが、足を踏み入れたからと言って、即処刑、などという法や掟はなかった。いつからそうなったのか。

いや、たとえそうであったとしても、正しい目的であれば必ず赦されるはずだ。赦されなければならない。

法は手段であり、目的は正義だ。主客転倒すればそれは悪だ。

第一、あの場所を訪れた人間は少ないのかもしれないが、現実的にいないわけではないではないか！」

「言葉は言葉に過ぎない。皇帝の命で物事は動く。神がさように定めた。第199祖なる絶対神聖皇帝が唯一の法だ」

「では禁足地に足を踏み入れた者は無条件に死刑なのか。確かにそうなのだな。ならば、私は言おう。皇帝を処刑せよ。なぜならば、皇帝も同罪だからだ。5年前、皇帝もあの地に足を踏み入れている」

「知らぬわ。

さつきも言った。言葉は言葉に過ぎない。うんざりだ！ 我はただただ実行するのみ。貴様は死すべき」

「どけっ、下郎！ 私は皇帝の不正を糺す。絶対神聖皇帝たる者、不正であつてはならない、どのような理由であれ！」

レオンが激しく叫ぶ。

「何んだと、貴様！」

ジンの形相が凄まじくなる。

静かな声でレオンは言う、

「おまえは悪だ。去れ、邪悪なる者よ」

緑の髪をなびかせてハラヒも進み出た。

「そうだ。おまえは悪だ。ハン・グアリス平原の虐殺を忘れたか。罪もない女やこどもまで殺した。天をも焦し焼き尽くすこの激烈な怒りを知れ！」

冷然と睥睨するジンは、

「言いたいことはそれだけか。さつさとかかって来い」

モス・グリーンのみつ毛を翳した冷たいまなざしでイラフが進み出て、

「愚かな」

とつぶやく。全身のオーラが激しく燃え上がっていた。彼女はそれがアクアティアで得た境地であることをこの瞬間に明確に実感する。心塵を落とし、世界生命に触れている。

メタルハートが眼を睜みはった。

「ほう。」

変わったな」

イラフはそれに応えず、青眼に構え、

「神轟裂刀、その真髄を貴様に、今初めて見せよう」

飛ぶ。

「むん」

まばゆいまでの大きな火花が激しく散る。ジンが剣でイラフの剣を受けたのだ。

「お、おのれ」

メタルハートの眼が睜みひられる。イラフの剣を押し返す。大きく振りかぶる。

上段から一気に振り下ろした。イラフは避けながらジンの上へ飛び、斬り附けるも、かわされ、横から迫った黒剣をすれすれで逃れ、刃に乗り、至近距離から再び斬り附けるも、籠手で受け止められる。いや、ジンの認識からすれば、受け止めたはずであった。しかし。

籠手が碎け、碎けて落ちた。

「ぬうう」

メタルハートが眼を剥く。驚愕と恐怖で。周りの者は呆氣に取られた。彼女が苦戦することを想像していなかったからだ。

アグールが叫ぶ、「奴を斃せ」

「おお」

ゼノとユイスが進み出た。

「そうはさせるか」

チヒラが応じる。ミュールで地を蹴って飛び上がると、三叉戟『天真義』と楯『地真義』を顕現させ、ゼノを制した。海軍少尉シルスは将兵を率いてジンの加勢に進むユイスに向かって突撃する。

イジュールがシルス少尉を阻止しようと向かうも、チヒラの做る青い炎の壁に阻止された。動きの止まったイジュールの腿をハラヒが『きよかみ』で斬る。

アグールがチヒラの集中を断ち切ろうと迫った。それをユーカレが剣で制し、「貴様の相手はじぶんだ」陸軍少尉ジイクが助太刀しようとして来たが、「手出し無用。ユイスをやれ！」と叫ぶ。

冷凜剣が黄金に燃えて純白のトーガに黄金が映った。首の刺青の神咒も強く燦めく。彼女は柄を両手で握って剣尖をまつすぐ天に向けて右方に構え、斜めに斬り下ろしつも、アグールが受け止めようと突き出した剣に当てずにかわし、そのまま背後に廻して頭上に放り、また両手でつかんで上段から振りかぶった。アグールはすかさず飛び退きかわすも、ユーカレが飛鳥のように跳躍して、猫のようにしなやかに追いつがり、一気に間合いに入って、右につかんだ剣で下段より裂き上げようとする。アグールは横にかわしてユーカレの側面に立つも、白き左拳でしたたか殴られ、「ふぐわっ！」

ユーカレに断られたジイクは海軍特殊部隊を率いてシルス少尉を援護するため、ユイスに立ち向かい、バルバロイの率いる外国人傭兵部隊がチヒラとともにゼノを追い込んでいた。ガリア・コマータは騎馬でイジュールを囲み、ハラヒを援護する。勇猛果敢なストランドの兵はイジュールを苦戦させる。ここはよしと見たハラヒはイラフと闘うメタルハートの方へ攻撃を転じるため、身を離し、女傑に向かって立った。

「貴様は勝てない。貴様は悪だ。二十万の人々の恨みを知れ！」

そのときイラフは再び青眼に構えていた。

瞑目し、甚深微妙なる気を読む。世にはさまざまな気が横溢している。係わり合い、複雑系的に絡む因果関係をなす。これを読み解いて世界の情報構造を解し、十一次元の時空の中で、因果の一つで

あるジン・メタルハートを捉える。

「天誅！」

ハラヒが叫んで振りかぶり、ジンの刃と切り結ぶ。その刹那、イラフは弾丸よりも速く疾駆し、メタルハートの間合いに入る。体を地面と平行に倒して振りかぶり、水平にジンの鎧の銅を裂く。

「うぐわあ」

初めて聞くメタルハートの絶叫に四天王すら震撼する。

その隙を逃さず、ハラヒが水平に『きよかみ』を振るってジンの首を狙う。同時にイラフは眉間を突こうとする。

しかし神をも凌ぐ闘神ジン・メタルハートはハラヒの刀剣を噛んで銜え、イラフの剣尖を兜で頭突きして弾き返し、奇声を上げる。

「ぬうきやうおおおーっ！」

渾身の力を込めたジンの一振りの剣がイラフとハラヒを同時に襲い、一瞬空気が裂かれ、摩擦熱で炎と燃え上がり、後につむじ風が起こる。

ハラヒとイラフはかるうじてかわすも、体勢は大きく崩れた。もしメタルハートが氣勢を上げたときに口を開かなければ、剣を銜えられて（ほんの刹那だが）動きの止まっていたハラヒは斬られていたかもしれない。

ジンは二人の体勢の崩れを逃さず、怒涛のごとく襲う。イラフは気の力を以てその剛剣を受けるも、足が地面にめり込む。

ハラヒはジンの足下を狙い、斬りかかった。メタルハートは『きよかみ』を踏んで止める。ハラヒが腰の短剣を抜いてくるぶしに刺す。

「阿毘羅畔欠蘇婆訶！」

叫んでイラフは受けていた大剣を鉄棒のようにぐりりと廻り、その上に乗ってジンの兜を縦裂きに真つ二つにする。

「ふぬぐわ」

メタルハートの髪が解放されてなびく。よろめくかと思いきや、腕を広げ、胸を張って仁王立ちになり、

「ふわああああ」

全身から放射状に発射される闘気にハラヒもイラフも吹き飛ばされる。凄まじい勢いで、二人は背中や腰を強打し、動きが止まった。

「貴様ら、よくも、よくも……」

そううなりながら歩み寄る。

「切り刻み、肉片にしてやる」

しかしその足は止まった。白眼を剥いて昏倒する。

「おお、ばかな！」

アグルが切り結んでいたユーカーレの剣を払い、メタルハートに駆け寄る。

「退却だ、ゼノ、来い！」

「ちくしょう！」

イジュールもユイスも寄って来た。

「覚えておれ！」

アグルはゼノの背にジンを載せて応龍に乗り、飛び去ろうとする。

「あゝ、待て、逃げるな！」「卑怯だぞ！」「追え！」

しかし敵を追い込めるような状態ではなかった。味方の損傷も相当なものだったのである。

ジイクは深手を負っていたし、バルバロイの剣は折れていた。負傷者は将兵の八割近かった。まさに死闘であった。

第八章 イムジン、またはマール帝国史

分厚い鋼鉄の装甲を身に付けて筋骨隆々たる巨漢イムジンは砂岩で造られた砦の廻廊を歩いていた。

ボルハラ砦は尖った細い岩山の頂上を占有し、尖塔が禍々しくしなっていて、岩山を指先とすればあたかも鉤爪のようであった。

匈奴暴族の貴族の家柄である彼は文化的な国が考える貴族とは程遠い存在であった。

野蠻粗暴で自信家で、自らの美(筋骨のたくましさ)と血統の神聖を信じて疑わなかったし、殺戮こそ誇りであると感じ、無慈悲であることを強さの証と考えていた。

だがその半面、この一族に珍しく哲学的な側面を持っていて、蛮勇を自慢して短絡直情を善しとして思料の少ない者が多い中、皇帝羅汎に寵愛されていた。

膂力皇帝と呼ばれた羅汎には稀有なことである。

イムジンは一つの部屋の前で止まった。死魂の間と名附けられた部屋で、皇帝がこの砦に来たときに使う部屋である。

ノックもせずに入った。羅汎は独りで肉を喰らっている。葡萄酒の入った革袋から直接酒を呷り、ようやくイムジンに話しかけた。

「来たか。おまえはわしに話があるという。おまえが重要火急だと思う話ならいつでも聞こう。

話せ」

「ありがとうございます」

「内容は何だ」

「神聖シルヴィエ帝国に関する重要な事項です」

「そうか、よし。すぐに話せ」

イムジンは膂力皇帝羅汎の神のごとく強剛なる肉体を賛嘆の念を以て恍惚と眺める。皇帝は人でありながら神であった。いったい、この稀代の英雄とジニイ・ムイとが対決すれば、どうなるのであるうか。いずれも超弩級の超人である。世界に四大帝国(超大国)ありとは言うけれども、イムジンの見るところ人類の領域を遙かに超えた神的存在と言えば、羅汎とジニイ・ムイしかない。

いつしか帝国が世界の覇権を奪うために競い争い、雌雄を決するとき、それは必ずや南大陸対北大陸の対決になるであろうことは間違いない。そう確信していた。またそのときの勝者は必ずや皇帝羅汎であろうとも確信している。

絶対神聖皇帝と異なり、羅汎は一代で大帝国を築き上げた、英雄数多ある中でもずば抜けた超人、神にも等しい存在だからである。

帝国マールはそのすべてが羅汎個人の力によっている。

マール帝国の歴史は尋常ではない。膂力皇帝、羅汎の歴史でもある。

齊歴9017年、羅汎は遊牧民族の一部族、斧汎（フハン）族の族長であつた荒汎（アラハン）の子として世に生を受けた。彼らの属する羅族は唯一神である天神を奉ずる羅教を信奉し、沙漠や大草原を遊牧し、騎馬戦に長けた民であつた。

羅汎が生まれたとき、村の呪術師（まじない師）は「天を裂いて神を殺すであらう」として嫌忌し、狼の野に擲つことを勧めたが、父母は容れず、逆にまじない師を殺してしまった。

その崇りであつたのだろうか。

荒汎は部族間の抗争に敗れ、死し、一族は離散した。羅汎は母とも生き分かれ、独り荒野を彷徨^{さまよ}つた。まだ五歳であつた。狼の群れを短刀で屠り、その肉を喰らい、皮を剥いで肉の附いた裏を砂で磨いてから縫い合わせ、着た。

数年かけて狼やハイエナや沙漠虎や草原の獅子を殺して生き延びる。なぜ肉食獣かと言えば、草食動物は速くて捕らえられないからであつた。逆に、肉食獣は追わずとも向こうから寄つて来る。それを捕食した。

七歳のとき、部族を滅亡させた背斗族を探し、族長に天命の決闘を申し出た。天命の決闘とは一対一の闘いによつて天神の意思を問う勝負である。族長の地位を賭けて闘いを申し込んだ。

背斗の族長、沙多奴は笑つた。

「おまえが、か。何の冗談か。いやはや、その勇氣は認めよう。さすが族長の子よ。しかし幼子とは言え、天神の前で手加減はできぬぞ。後悔するなよ」

周囲の荒騎馬武者どもも嘲笑する。

「バカバカしい。正気か。おまえが勝てるか。こどもの遊びじゃないぞ。こりや、お笑いだ。こんなにおかしいことがあるか。うわっあはは」

しかし背斗の一族が円陣を組んで見守る中、沙多奴はあっけなく屠られた。石で刃を作った刀身1mもある石刀で、一刀両断だった。刃の鋭利ではない石刀で人間の骨まで一気に切断してしまう凄まじい膂力である。誰もが驚愕し、誰も声が出せなかった。

「こんなバカな、赦せるか」

戦士たちが襲いかかってきた。しかし野獣の動きを持つ少年を捕らえる者はいない。たちまち数十人の筋骨逞しい男たちが切り分けられた家畜の肉のようになってしまった。

「俺が族長だ。文句があるか」

誰ももはや何も言わなかった。だがこのままで済むわけがなかった。

寝込みを襲われたり、食事に毒を入れられたりした。しかし、その都度、野獣のような勘で鋭く見破り、首謀者を残虐に屠った。

もはや暗殺を思う者はいなくなった。すべては恐怖で支配されたのだ。

毎日20kgの肉を喰らい、羅汎は十二歳で身の丈が3mを超えた。体重も300kgを超える。その大剣は刃渡り1m、刀身の長さ4m、重さ120kgの大ヴァジュラ刀で、これを軽々と変幻自在自由無礙に振るった。しかし馬に乗ることは叶わず、ブラドドラゴという龍に乗る。

「俺は大陸を統治する。すべては俺のものだ」

そう宣言し、次々部族を襲い、勝利する。ゴルバディ Gollvadye 大草原を席卷し、匈奴暴族やハーン俠族、逆族、ウーハン氏族を斃し、その鬼神の強さは人々をして彼を膂力王と呼ばせた。

終に沙漠と草原の民族を統一し、騎馬民族最初の大帝国を築き上げる。自ら皇帝を称した。齊歴9037年のことである。わずか二十歳であった。

「我が帝国はマールと号する。我は永劫の皇帝なり。我は終生天命の決闘を拒まない」

実際、六十三歳になった今でも無敗である。

ちなみに、『まろう』とは羅族の言葉で、まったきもの、万象、汎神、全世界を意味した。

さて、イムジンはおのれの考えを述べた。

「絶対神聖皇帝ジニイ・ムイは5年来、奇妙な動きをしています。これら一連の動きには合理的な説明が附けられません」

「それは俺も感じていた。おまえはどう考える」

「彼はシルヴィエ聖教の教祖を継いだ者、第199祖にして第4代皇帝、阿羅漢の領域に達した解脱者です。

我々には見えないこの世の奥義に通暁しています。この世界の深奥に隠された宇宙という生命の真髄を為す叡智、または叡智として存在する生命、論理的な思考を超えた生命の法を鑑みて、行動を起こしているのかもしれませんが。

まずは安易に敵の挑発に乗らないことです」

「敵の挑発に乗るな、とは」

「大華厳龍國への攻撃です。

シルヴィエからの大華厳龍國への突然の和睦と言い、これら連鎖的な各国の動きはすべてジニイ・ムイの計算するところではないでしょうか」

「大華厳龍國の艦隊がシルヴィエ奇襲のために去ったのをいいことに俺が北上してオエステを攻める。なるほど誰にでも簡単に予想が付きそうなことだ」

「そのとおり」

「ではオエステの大華厳龍國を攻めことを止めて、エステのヴォードを攻めるか。だが彼の国は我がマールよりも海軍力に優れているぞ」

「エステは今や南下するシルヴィエの大艦隊に攻められ、力を北部に廻さざるを得ない状況です。間もなく大艦隊が移動するでしょう。

何年か前に我が国と小競り合いを続けながらも、シルヴィエの西大陸への急激な侵攻に伴って北へ集中せざるを得ず、我が国にチャンスが巡ったことがありました。

あのとときと同じ状況です」

「なるほど。好機というわけか」

「そうです。しかしながら意見します。今回、攻めるべきはヴォードではなく、シルヴィエかと。それこそ最も敵が想定していない状況です」

「おお、さすがだ。いつもながらおまえの知恵には恐れ入る」

「あり難き幸せ」

「よしよし、これは面白い。俺は大いに承知したぞ。愉快だ。大いなる勝負、大いなる博奕だな」

「そのとおりです」

「だが俺には明白な勝機が見える。目前に強き光が燦然とまばゆく輝いている」

「それこそが天啓、または余人ならぬ陛下の神慮です。皇帝の神慮に誤謬のないことは皆が知っています」

「血湧き胸躍るとは、このことよ」

「では早速使いを出します。二週間の内にヴォードとの同盟を締結し、その後は速やかに軍を整えて出港しましょう、ノルテへ」

去りがてにイムジンは言った、

「そう言えば、こんな報告がありました。あのジン・メタルハートが完膚なきまでに破られたそうです。ええ、間違いありません。」

四大大陸ではもっぱら、新たなる最強戦士の出現だと大騒ぎしております」

「いつか闘ってみたいものだ」

第3部 彝配璃亜 太陽の真理

第一章 イン・イ・インデイス（殷陀羅尼）帝国

メタルハート破れる！

そのニュースは世界を駆け廻った。

それと同時に皇帝の不正を訴えるレオンの主張も広がった。

彼らはもはや堂々と南の大街道の真ん中に馬車を走らせ、皇帝を糾弾する旗を翻しながら進んだ。すれ違う者は（とても少なかったが）寒さのために深くかぶるフードの下で眼を丸くした。

「しかし強くなつたな、イラフ」

白きユーカレが珍しく褒める。それほどの快挙だったとも言えた。しかし気を緩められる状況でもない。一行は日照時間の少ない永久凍土の土地を進む。極寒の氷原はブリザードになった。蒼ざめた弱々しい翳りのような光が薄闇になる。雪の飛礫は氷であった。

「視界が悪いな」

パウルが思わずうなる。やがて遠くに聳えるヒムロの城壁の畏怖すべき巨影が見え始めた。

「何だ、これ。す、凄い……」

イラフは高さ100mの城壁を見上げて肝をつぶす。

チヒラが、

「この壁の向こうにさらに高さ200mの壁があつて、そのまた向こうには300mの壁があるんだ」

「信じられない。この長さも」

吹きすさぶ暴風雪の右を見ても左を見ても、壁は一直線に見渡す限り地の果てまで続いている。

「さあ、行こう、南門へ」

レオンは促した。

莊嚴にして崇高、嚴肅なる神のごとく、近寄りがたい偉容を冷儼に現前させている巨大なる城門の前に着く。壮大して峻嶮、崇高極まりて、鳴り響く賛美歌の悲愴すらある。

見上げるためには頭を真後ろへ倒さなければならぬほど高い城門は、両脇に横に長い兵舎を備え、そこに門衛の兵士たちが居住していた。門扉は想像を絶する巨大さで、これがほんとうに開くかどうかと、イラフが疑ってしまうほどである。

実際、門は1年に一回くらいしか開かない。さすがに毎日この門を開け閉めしては大変な労力だからである。左右の扉の一部に、縦9 m横33 mの両開きの扉が一つずつ切られていて、一方は入城専用でもう一つが出城専用となっていた。出入りする者は入念にチェックされ、商人はそこで積荷に応じて税を徴収される。

外に立つ兵士だけで数百人はいた。砲台の附いた装甲車が数十台、自走式の装甲砲台も数十台ならぶ。この吹雪の中、鉄の鎧は冷たいに相違ない。三階建て（城壁に上りやすくないよう敢えて階数を抑えて造ってある）の門衛用の兵舎はそれ自体が堅牢な城砦の一部で窓が小さく、銃眼と胸壁を備えていた。

一人の儀装した騎士が歩み寄って来る。紋入りの黄金の鎧兜と紋入りの黄金の防弾楯、長さ5 mの黄金の槍（バズーカ砲付き）を持っていた。槍の穂先の元には聖句の飾り帯がくくり附けられている。

「レオン・フランシスコ・デ・シルヴィエ枢機卿猊下。大変失礼ながら、猊下は公務を放棄してヒムロを出られ、消息を絶っておられました。」

猊下のご到着を皇帝陛下にお知らせの上、神聖倫理委員会及び絶対安全保障委員会にお身柄を引き継ぐことが我々が任務です。このまま門をお通しすることはできません。

それにその外国人たちを通らせるわけにもまいりません。どこからどう見ても、我が神聖帝国と戦争中のオエステの者。敵のスパイかもしれません。レオン猊下がその者らとともに旅して来られたとこののであれば猊下の反逆罪をも念のために疑わなければならぬ

なります。なにとぞ本件を管轄する各委員会の者が来るまでお待ちください」

レオンは表情を変えずに傲然と言い放った。

「ヒムロを出るにあたっては正当な理由がある。帝国にとって何よりも重要な案件だ。

皇帝の所業が道義であるか不正であるかを確かめ、証左するための旅であった。

私は皇帝を正義の名の下に於いて糺す。それは正義が私に課した義務だ。もし速やかにここを通さねば、おまえも同罪だがそれでもよいか」

騎士は困った顔をした。

「猊下、どうかご理解ください。私は職務を果たしているだけなのです。皇帝陛下と枢機卿猊下の間に挟まれてどちらかを選べと言われても無理でございます。どうか木の葉のような存在の者を、世界をも揺さぶるほどの巨大な力で挟み撃ちにすることはお止めください」

「では力尽くで入る。

止めたければ止めてもよいが、一応忠告しておこう。ここにいる者たちはジン・メタルハートをも斃した者たちだ。その話もう聞き及んでいると思うが」

騎士の顔が蒼白になる。

「行くぞ」

レオンは騎士を無視し、そのまま進む。誰も制することはできなかった。イラフとユーカーレも馬車の馭者席の両脇に立ち、騎士たちを眼光で威嚇しながらそのまま通過する。ストランドや傭兵隊長バルバロイ、少尉以下将兵も門に入った。重篤な負傷兵を乗せるためににわかに調達した荷車もこのときばかりは昂然と通過する。最後尾はガリア・コマータの騎馬兵たちだった。門衛たちは固唾を飲み、微動だにしない。

厚さ100mもある城壁を貫通する通路を行くと、洞窟にでも入

ったような感じだった。

ようやく広い場所に出ると、すぐ向かい（100mなどとても近く感じる）に更に高い城壁が聳えている。

「凄い、完璧主義過ぎる」

イラフは再び驚く。

第二、第三の門も同様に通過する。第三の門の出口附近で安保委の将校に遭遇した。彼らも黄金の鎧で儀装していた。AR機能のあるゴーグルを付けていることだけが違っている。

「猊下、どうかお待ち願いたい」

「邪魔するな。皇帝に会う。皇帝は禁足地に入った。その真意を糺す義務が私にはある」

「猊下、我々は皇帝に従わねばなりません。皇帝は教祖でもあるのです」

「だから不正は赦されない。帝国の根底が崩壊する」

「もし皇帝が不正であられた場合は（そんなことはあり得ないが）どうなさるおつもりですか」

「この剣で斬らざるを得ない」

将校は深く歎息した。

「どうかこの決断が私にとっても命懸けであることをご理解いただきたい」

そう言つて身を翻らせて背を向け、先導するように行列道路をまっすぐ聖大神殿へと向かう。

「さあ、我々も進もう」

レオンが言った。

ブリザードのせいで、大河のごとき幅1kmの行列道路には歩く人も馬車もなかった。

イラフはそれでも建築物の偉容に呆気に取られ、感嘆の声ばかりを上げる。

「あゝ、凄い。ほんとうに凄い」

「君はさっきからそれしか言わないな」

そう言われてイラフはチヒラに反駁し、

「だってこんなに広い道路は見たこともない。

それに両側には高くて大きな建物がずらりとならんで果てまでも続いている。どれも壮麗なこと喩えようもない。あ、あれは何」

「あのガラス張りの高層の建物か。あれは空中庭園さ。しかし観葉植物があるのではない。あれは食用の植物を作っているのさ。畑だ。

一つのフロアの面積が100万㎡あり、それが400の階層になっている、首都の食を賄っている」

「信じがたい」

「そら、前を見てよ」

「何だ、あれは」

暴風雪のせいで視界は利かなかったが、それでも何かふしぎな力が備わっているのか、それはぼんやりその巨魁な姿を見せ始める。

「聖大神殿さ。50kmも先にあるとは思えないだろう」

「そんなに遠くにあるのか」

「尖塔の高さが4kmもあるからね。実際より近く見えるのさ」

「さあ、急ごう、龍速で」

近附くにつれ、頂上の神聖文徴「I・Y・E」の聖三文字重ねが燦然と輝くのが見え始める。塔が漆黒の燿岩と象牙と緋色の貴石とラピス・ラズリと黄金で荘厳され、イオニア様式の円柱や薔薇窓や大アーチや聖文字の透かし彫りや聖人の彫像によって繁文縟礼的に飾られているさまなども、やがて判明になってきた。

塔の東西南北に延びる高さ2kmの尖塔と併せ、その壮麗荘厳、言辞に尽くせぬものである。

南の街道から南門をくぐり、南の行列道路を通って来たので、聖大神殿に入るには南の支尖塔から南の列柱廊を突き抜けて行くこととなるが……

荘重なる大理石の彫刻群であふれるファサードを持つ南支尖塔の階段の上にて、この猛烈吹雪をもものともせず、一人の妖美なる人物が待っていた。

「大枢機卿イヴィル」

レオンがうなるようにそう言う。薄い金髪を風に吹き晒させる、冷厳な大枢機卿がそこにいた。

「枢機卿レオン、久しぶりだな」

「猊下、皇帝陛下にお話したいことがあつて参りました」

大枢機卿は演技者のように悲哀の眉を作る。

「その件だが、枢機卿レオン、陛下は今ここにはいないのだ」

レオンが眉を顰め、猜疑しつつ問い糺し、

「どちらへ」

「ヒムロにはいないのだ。大宇宙の時空と森羅万象の大義を為すため、世界の中枢におられる」

「さようですか。何と」

「貴殿の問わんとする熱意はわかった。そのパトスは理解した。だが残念ながら陛下ご不在のゆえ、暫時待つてもらうしかあるまい」

レオンはイヴィルを凝視しつつ考え続けていた、さまざまな思料が脳髓を駆け廻っていた。

「どこでしょうか。陛下の行先は」

「秘法を修しておられる。場所は言えない」

「エル・パツハロ・デル・マルか」

「そう思うなら逝けばよい」

「うむ」

「では、これで」

「よもや偽りはありませんな、大枢機卿たる者に」

「ない」

「わかりました。」

猊下に偽りあるかどうかは確かめようもないが、皇帝陛下たる者が正面から真偽正誤是非を問い糺したいと申し出て来た者を避けて逃げ隠れるはずありません。疑いようはないでしょう。

神聖皇帝ご不在の件、信じざるを得ません」

去ろうとするレオンをイヴィルは呼び止めた。振り向く。

「待て。枢機卿レオン、このまま放免すると思うか」

「ふむ」

「公務を放棄し、行方をくらました件、卿に罪科があるかないかを吟味せねばならない。このまま留まられよ」

「わかった」

そう応えるレオンの諦観の面持ちにイラフが、

「レオン殿！」

「大丈夫だ。わかっていたことだ。ただし」

「ただし？ 何だ、枢機卿」

眉を上げつつも言いたいことはわかっているぞというイヴィルの顔にレオンが傲然たる表情で、

「マリアの無事を確認したい」

「さよう言うと思って、そら、ここに連れて来た。私には遺漏がない。すべてを知り、あらゆる意味に於いて正しく、いかなる角度から見ても破綻がない。」

無謬とは私のことだ」

唐突に小さな扉が開いて、屈強な巨漢の兵士に後ろ手を縛り上げられたマリアが現れ、寒烈風に晒される。眼は状況を理解できず、みひら瞳かれ、怯えていた。

レオンは安堵する。

「そうか。よかった。まずは生きてさえいれば。マリア、辛いことになると思うが命までは奪われぬ。何とか強く生きてくれ。では、これまでだ。諸君、さらば」

レオンがイラフたちに向けて送ったその言葉を聞いて、凍てた瞳のイヴィルがこれもまた想定のうちと言わんばかりに冷笑する。

「そちらの外国人も放免と言うわけにはいかないな。」

スパイ容疑を疑う必要がある。もし嫌疑が証明されれば、レオン、卿の反逆罪も考えねばならない」

「彼らは関係ない。ジン・メタルハートが私の命を狙うから警護してくれたのだ」

「無償の行為、善意の第三者と言うのか。

それにしては、皆、大華嚴龍國の特殊部隊とその関係者ではないか。クラウド連邦のガリア・コマータもいる。いずれも我らが神聖帝国と戦争した国家ばかりではないか」

チヒラが進み出る。

「レオン殿が外国人に援助を求めたのは必然と言える。

考えてもみよ、皇帝の不正を糾そうなどと言おうものなら、帝国内のシルヴィエ人の誰もが二の足を踏むだろう。積極的な協力など期待できようはずもない。

さすれば、ぼくらのような外国人の協力を、レオン殿が要請したとしても、一向ふしぎではない。

国内でこの企てを打ち明ければ、暗殺される可能性も考慮しなくてはならない」

「暗殺の懸念だと？ 愚かな。畢竟、卿は口では何と言おうとも、我ら同朋を信じてはいないのだ。皇帝陛下すらも信じていないのだ」

「ある意味ではそうかもしれない。ある意味では。

すべてはまやかに過ぎないから。

存在は差異による現象だ。とは言え、それでも切実なる実存そのものだ。我々は差異によって物事を識別し、自己の承認を廻る闘いを闘うからだ。

識別は執著心を起こすための契機でしかない。執著は生存への渴望の契機だ。すなわち生けとし生けるものたちを生存へと駆り立て、渴望させるために設定された絡繰りでしかない。

諸概念の起源を思い、かように考えるとき、皇帝を信頼しないと、信用するとかいう考え方自体が灰燼に帰する」

「ふ。

陳腐な、懐かしいことを言う。

どれも幼少の頃、教学の時間に学んだことだ。さような繰り言で猜疑が晴れると思うか、枢機卿」

「いかようにも思え」

「ふふん。開き直りか。」

しよせん、人の営みなど、いかなる演繹をしようとも、その程度のもの。草木や野獣とさして変わらん。言説など戯言に過ぎない。ふふん。

まあ、よい。調べればいずれわかる」

「この者たちは行かせて欲しい」

「ならぬな」

そのときイラフは既に、それが来ることを感じていた。幸い猛吹雪のせいで、視界も悪く好都合だ。だから、こう言った。

「あなた方にわたしたちは止められませんよ」

チヒラは眼を丸くしたが、イラフが眼で合図すると、すぐに意味を理解する。

イヴィルは狡猾に眼を光らせ、にらみつける。

「ほう。ジンを斃したことで思い上がっているようだな、イラフ」

「そうではない」

イヴィルはせせら笑った。

「シルヴィエ精鋭軍を見くびらぬ方が良いぞ。しかも近代兵器で完全武装しておる」

「でも、このタイミングですぐに、というわけではないでしょう」

悪戯っぽく笑うイラフ。

「何：」

そのときだ。

「うわ」

颯のように何かが過ぎり、眼にも留まらぬ速さで上空に去った。

「最高のタイミングで来たな」

そう言うイラフは空飛ぶ神獣の背の上にて、悠々と余裕の笑みを浮かべている。ストランドに頼んでクラウドから呼び寄せていた大型の応龍十二匹がまさにこのとき依頼主の前に現れたのであった。

「何だ、何ごとだ、いないぞ、レオンがいない、奴らがいない！」

マリアを拘束していた巨漢は彼女を奪われた上に、顛倒して気を

喪っていた。

大枢機卿イヴィルと近衛騎士たちはわけがわからず、右往左往し、すっかり動揺している。

応龍がすべてを運び去ってしまったのであった。

マリアやレオンやイラフやチヒラやユーカレやハラヒやストランドやジイクやシルスやバルバロイや傭兵や将兵などは百数十人と龍馬百数十頭とヨウク、そして馬車までもすべてをだ。

同じ応龍とは言え、ベンとサムが使った小型ではなく、（今回のような）大型応龍ならば一匹に付き龍馬二十頭、または人五、六十人が軽く載せられる。

イラフは喜悅し、感嘆した。

「うわ、爽快な眺めだ。初めて空を飛んだよ。しかし地上にもましてももの凄く寒い」

「確かに眺めも凄いいけど、ぼくには寒さの方が凄いい、ぶるっ。

しかし考えようによつては応龍でヒムロを空爆できるな。ステルス機のようにリーダーにも引つかからないと言うことだし」

「だが、チヒラ、わたしたちの持っている爆弾あの都市が揺らぐだろうか」

「そう言えばそうだ。シルヴィエには地対空砲も何十万門もあるし」

「もしかして全世界の応龍の数より多いか？」

「かもね」

笑う。

「おい、いつまでもそんなところにいないでこっちに来い」

「え、ユーカレ、何だ、それは」

「小屋だよ、キャビンさ。これは正式な乗用だからね。こういうのがあるんだ。見ろよ、向こうの応龍には馬小屋がある」

そちらを見ると確かに……

「凄いい」

シルヴィエ帝国側は慌ててジェット戦闘機を用意したが、離陸まで時間がかかった上に悪天候で、すぐに引き返す羽目になる。

「たとえ天候が良くても、もう追いつけません」

パイロットはそう報告した。

よく鍛えられた応龍は音の速さで飛ぶことも可能だったのである。マッハ2で飛ぶシルヴィエの戦闘機はスピードでは勝るが、雲の上に抜けるまでは天候に左右された。その上に、今回は連絡を受けてから準備するまで1時間を要し(当然のことだ)ているため、スタート時点で既に3時間近く遅れていたのである。

イラフたちは既に追いつかない地点まで来ていた。

「ここまで来れば大丈夫だ」

ユーカーレがそう言った。

「ほんとうに助かった。この後は、国に連絡して船を調達してもらいましょう」

ハラヒが快活に言う。チヒラもうなずき、

「そうだね。いつまでも応龍を借りているわけにもいかない。それに空の上では、怪我人の治療ができない」

1時間と数分後にはノルテとオエステとの間に横たわるオフエアノ・パクス(太汎海洋。別名、大東西海洋)に着いた。

ちなみに、大東西海洋とは、オエステから見て西でノルテから見ると東にあるからである。その論法で言えば、エステとノルテの間にある大海洋も同じ名前がなくてはおかしいとも言えるが、別に地名は世界全体で打ち合わせして決めるわけではないので、西の海はただアトランティコ(大古代海洋)とだけ呼ばれていた。

広大なるオウフェツォーク湾を渡り、オウフェツォーク半島に着くと大東西海洋の東側にある国マークルス Marcuiz 王国に着陸する。大東西海洋の島嶼国が次々シルヴィエの手に落ちる中、ノルテの半島にありながら未だ独立を守っていた。

「白色が基調でシンプルだけど、いつ見ても落ち着いた街だな」

先祖はバイキングで質実剛健の気風があり、それが独立を守ることでできている理由の一つである。木製の建築が多くあった。

チヒラはマリアが船を使った南ルートでアクアティアに帰ること

ができるように手配する。マリアはエオレアにメールを送った。イラフは采配し、ガリア・コマータ全員を警護としてマリアに附ける。そのままクラウド連邦に帰国することができるといふ利点も考えていた。クラウドの偉大な戦士たちもほとんどが怪我人である。帰還させてやらなければならないのだ。

ストランドとは、ここでお別れとなった。

「世話になった。さようなら」

イラフが別れを惜しむ。ユーカレもチヒラもハラヒも握手した。

ジイクやシルスやバルバロイも声をそろえ、

「貴殿のような勇者とともに働けたことは大変な名誉だ」と言う。

「素晴らしい経験でした。戦士としてより高みに達したと感じます」

そう言つて、ストランドは微笑の上に涙を泛べた。イラフもチヒラもハラヒも涙ぐむ。

イズミル港に大華嚴龍國の威圧的な帆船が待っていた。砲門があつて戦艦のようでもあり、流旗に交叉する剣と髑髏が描かれ、海賊船にも見える。

「海は荒れてるぜ。出航日和！つてわけにやいかねえなあ」

海賊以外の何者でもない姿、でっぷりとして大柄で荒々しい鬚を蓄えたモーヴィック船長が難色を示した。

「勇猛果敢、七つの海を股にかける君の腕前で何とかならないか」

チヒラがおだてると、船長は、

「まあ、この海はおれにとっちゃ、産湯みたいなものだ。やつてやれねえことはねえな、お嬢ちゃん」

「では、是非お願いしたい」

「船酔いなんかするなよ」

「わかった」

ジイクが医者用の意をする。シルスが指揮し、人夫が次々と塩漬け肉やオリブ・オイルや葡萄酒の樽、塩や小麦粉の袋を積み込んで行く。武器や砲弾も満載した。銀行で資金を調達する。

「さあ、行くぜ」

モーヴィックが言った。帆が風を孕む。船は港から出航した。甲板に立つと、潮風が冷たい。見上げれば応龍が上空を廻っていた。視線を転じて藍色の海を見やれば怒気を含んでいるかのように見える。

「十二匹の応龍はクラウド連邦と大華厳龍國との同盟の証として返さなくともよいとのことだ。」

皇帝にMPCメールで連絡があつたらしい」

チヒラがそう言った。

「そうか。」

無理して船を調達しなくてもよかったんだ」

「いや、怪我人の治療があるから船は必要だったさ。」

治療の必要がなくて応龍に乗ってもよい人間は、ぼくら以外では二十四人だ。セフィは事実上、解散さ」

「とても言葉には言い表せない経験だったな。ストランドの言った意味がよくわかる」

港を出て数時間、状況が安定すると、イラフたちとレオンと二十四人の軍人たちは応龍に乗って先にオエステに向かった。アーレセニア島上空を経由して海を南下する。イン||イ・インデイス（殷陀羅尼）帝国に向かう。

海を見渡してイラフが感傷的な表情をした。ミュールを鳴らし、その後、少し黙ってからチヒラがちらりと問う。

「どうしたの」

「いや。」

海を南西に向かえば、コレイやリョジャドだな、って思っちゃって」

「故郷が懐かしいのか」

「君は違うのか」

「そうだな。懐かしくないと言えば嘘だ。」

「…思えば、なぜ、ぼくらは憎み合わないのだろう」

「そうだね。確かに。」

怨みを忘れるなという声は未だに多い、お互いにね」

「しかしそうでない声もある。」

声はいつでも複雑だ。いつでもすべては一樣でははない。決して単純ではない。一樣に考える者が悪だ。肅清すべき邪悪だ。世界を蔽い尽くすすべての暴力、迫害、差別、虐待、憎悪、憤懣、怨嗟の大本だ」

「君の持論だね」

「ぼくらは苦難をともにした。経験とともにし、ともに戦士として成長した。魂をともにしたんだ。多くの人とこのような共感を持つことが大事だ。闇に籠ってはならない。」

闇に堕ちることが最悪だ。怨み、憎しみ。この過酷な試練を超越することは、実際、もの凄く困難だ。言うほど易しくない。

もしかしたら不可能なのかもしれない。人はそれを超えられないのかもしれない。だが赦しが唯一の救いであることは生理学的にも真実だ。不可能であつても真実であることだけは確かだ。

ぼくにしても、誰にも薦められない真理だが。そもそも薦める資格がない」

その少し寂しげな、悲しくもある表情に、イラフは、

「仕方がないことだ。いつたい、誰がそれを超えられるだろうか」

うつむいたまゝチヒラは苦笑し、

「いずれにせよ、君はぼくの味方だ。少なくとも、ぼくが君を恨む理由はない」

「わたしもだ。なぜだろう、わたしは今、君と初めて会ったときに君がオシアン之歌を歌っていたことをふと思い出した。フィンガル王が仇敵スタルノ王をあえて逃がす場面だ」

オエステに上陸した。

乾燥した苛烈な大地、植物は少なく、岩が多く、陽射しは強烈だ。数少ない木陰では沙門（苦行者）が座禅を組んで瞑想に耽っている。昼は獅子が咆哮し、夜は虎が森を駆け、大きな飾り布を掛けた巨象

の軍団が乾いた砂埃を上げて駆け抜ける。

庶民の家は大概が日干し煉瓦であった。幅広くて流れの緩い黄土色の大河の傍らには巨大な寺院ができていて、沐浴する人々が見られる。寺院の周辺は物売りで賑やかな町であった。

インリイ・インデイスで第二の都市と言われるマンディラーニ（曼荼羅婀娜）に着陸する。瞑想的な街であった。

その雰囲気はこの国のすべての都市に共通する。それは歴史に由来していた。

齊歴527年に太陽の末裔を称するイイシユク（飯粥）王のイ国がこのマンディラーニに興り、大いに繁栄することに始まる。初古の王国の一つであった。

王は哲学を愛し、巨大な図書館や文書館を各所に造った。僧院を数多建立し、公的な神官も私的な修行者である沙門をも大いに奨励し、援助した。

瞑想こそ人の営みの最善であるとして、その実践を民衆にも大いに提唱したのである。

イイシユク王は世襲制を望まなかった。良きシステムさえあれば、世襲はいらないと考えたのだ。世襲よりも安定した、争いのない方法があれば。

歴史上存在した過去の世襲制国家の名誉のために言おう。世襲と言うと、いかにも悪しき風習と思われがちだが、社会の安定していない時代では権力の奪い合いが起こりにくいという利点がある。王位を継ぐ者が自ずと決まるからだ（実際には、争いが起こっている。だが、もしも世襲制でなかったら、もっと酷いことになっていた可能性もある。実際、権謀術策が横行するため、合議共和制から世襲制に戻した国もある）。

イイシユク王は死後、自らの魂魄をコブラに託し、コブラが不正を監視した。

したがって権謀術策を弄して権力の座に就こうとする者にはたちまち死が訪れる。IEのシステムをコンパクトにしたような国家で

あった。

聖なる祖王が亡き後も、その精神は廃れず、聖なる精神は継承され、代々太陽神の末裔を称し、王は真理の分与者であり続けた。

人は真理ゆえに生命があると信じた。真理が生命である、と。繁栄は1000年続く。だが、やがて腐敗した。なぜならコブラの寿命が1000年で尽きたからである。

賄賂や縁故者登用が横行し、民衆に不満が募る。天誅を叫ぶ、武に優れたムガ王国が王位を篡奪した。ムガ王はイ国の文明を尊び、国号をイン（殷）国と改めるも、世襲制を採用し、3000年の繁栄を誇った。

3000年後にイ国の王位継承者を名乗った第二の高祖リヤドが支持者とともに王位を奪還し、現在の首都カルータガヤに朝廷を開き、国号をイン・インディスとし、今日に至る。

瞑想文化に優れたこの国は、言葉による論理学は偶然的積み重ねによつてできた記号に過ぎない言葉（概念）に依存する無意味なものであると蔑み、体験（実存）を重んじて瞑想経験の修得を歴史的に積み上げた。

繁文縟礼な建築装飾は、超論理的で揺らぎのある、複雑系的な実践の思想を象徴している。捉えがたい形状で細かく重層的で入り組んだ精緻な彫刻はシルヴィエ帝国を遙かに凌いでいた。

「彫刻の複雑な寺院だ」

水色の髪の毛のイラフは見上げてそう言った。100m以下ではない。コプトエジヤのユリアスの助言に従い、その寺院で学識第一と呼ばれるレムノ大僧正に面会する。大僧正はチヒラが来訪の理由を告げると、微かに笑った。乞い求めに応じて厳かに大いなる真理を語る。

「いかようなる考概であれ、それらが畢竟のところ、何であるかを問われれば、答えられなくなる。『え答へずなり侍りつ』だ。我々は意味も意義も、何も知らない。只納得^{ただ}という心的状態の中に投げ込まれているだけだ。※「え答へずなり侍りつ」徒然草第243段参照。

それぞれの考概がその思念を做すそのフォームがどうやって選ばれたかも知らない。考概という効果が我々にとっては実存するが、なぜその在り方（設定）なのかも、なぜ在り方（設定）がなければならぬかも知らない。

そもそも知るとは何か、どういうことか。何が起こっていることになっているのか。また知らぬとは。その在り方も在り方という在り方が選ばれた理由も知らない。

実存ではあっても、実在ではないのかもしれない。確かめようもない。そもそも何を確かめるのか。思念を出発させるために踏む地面、成り立たせる縁（よすが）は、どこにあるのか。

人が思惟の中で使用する諸々の考概が、我々を生存へと駆り、執著させるための効果・絡繰りに過ぎないとすれば、その形は“カタチ”という抜け殻に過ぎない。

だがそれが何であろうか。そもそもこのように推定しているこの思考もまた、インパルスがニューロンを走っているだけに過ぎないというのに。

ならば諸考概を何であると言えるのか。物的現象だ。だが、それもまた何であるか。

無空すらない。なぜならば無空すらも既に諸考概のうちでしかないからだ。ムクウというカタチがあるだけではないか。

路傍の小石や、苔や子犬が真奥義であって何がおかしいか。土中に打ち棄てられた茶碗の欠片が究竟の真理であって何が問題か。

またその逆が真であって何が悪いか。またその双方であって何が矛盾か。

拙僧は諸君らにこの国に古来伝わる言葉を献じよう。すなわち、『ここにあるすべては無際限に、過剰なまでの、余りにも自由なる自由。心機に応じよ、龍のごとく生きよ、龍のごとくに肯んぜよ』^{がえ} 隹れを『龍肯』^{りゅうけん}という。 （『龍肯』という言葉は、IEに於いては、人口に膾炙した一般名詞であるが、イラフはその言葉を胃の腑（肚）に落として反芻するうちに、臍下丹田に黎明を觀じ、暖かみ

を感じた。人は物事を“肚”や“呼吸”で理解するものだ)

語るまでもなき日常茶飯のこと。誰もが知らぬはずとともなく、誰もが知りようすらないことである」

その言葉にうなずきながらもチヒラはさらに尋ねた。こういうときはチヒラに任される。他の三人は固唾を飲んで聴き入っていた。

「師よ、しかしながら神の定めによって、我ら人間は二つの路を同時に占有できません。人は道を選ばずにいることはできない。これも神の定めなのです。」

だからよく学び、よく思慮しなければなりません。この構造(仕組み)の理由を知らなくとも、もうこのシステムに乗るしか在りようがないのです。既に選択肢がないからです。。

今ここに來たのも、その努力のうちの一つです。智慧ある師に問います。どうかぼくらをお導きください」

「古寺院アガルイダのイア神像に秘められた文書には『フームサムイムヨム』という咒がある。

これは古イ語で『しかあれ、いやさかに(または『かくのごとくあれ、実にめでたきかな』とも)』という意味だが、実は古代コプトエジヤのエージヤ地方の俗語の一派であるパリナ語で『1423』というのと同じ発音になる。

これは古代から知られたことであつた。

しかもこの文書は古代の聖者フウシカが大曼荼羅とともにコプトエジヤから招来したと伝承されている。ちなみに、コプトエジヤでは太陽の真理と呼ばれる曼荼羅であつた。

さて、この話はこれだけではない」

「何でしょうか」

「このパリナ語を古代コプトエジヤの神官が使った神聖文字(語)で発音し直すと『いゐりあ』となるのだ」

「いゐりあ！ イヰリヤと同じ！」

「古代コプトエジヤ語でも1423を表わすが、彼女の姓であるイヴィロンは古コプトエジヤの『イブルン』と同じで、『イブルン』

とはアナグラムの一種で、文字または数字を内容に関係なく、四つずつに区切って、1番目と2番目の数字または文字を入れ替えるとともに、3番目と4番目の数字または文字を入れ替える手法を言う」

「4 1 3 2 か」

「この数字は究竟と言われ、世界を動かす鍵、世界の原理（アルケム）であると、密かに伝承される秘文である。

貴殿らの任務の重さを鑑み、特に今回はこの秘密を明かしたことを充分重く受け止めよ。蔽に秘して扱い、人に知らすなかれ。以上である。

拙僧にわかるのは、ここまでだ」

「4 1 3 2 ……ダイヤル！」

レムノ大僧正の下を後にして、彼らはまたも喧々囂々。

「4桁の数字！ 暗証番号か？ 金庫のようなもののダイヤルの番号かな？ 住所もしくは郵便番号？ 電話番号ではないしね……」

「そもそも皇帝がそれをどうするんだよ」

「何度も言うが、世界の運命を変えるのだから、相当な規模があってもいいんじゃないか？」

「いや、その逆という考えもあるよ」

第二章 龍梁劉禪Ⅱ大華嚴龍國

「ともかく皇帝に報告もしなければならぬね」

彼らは大いに光明を得たわけではあるが、明白な見解には至らず、大華嚴龍國への旅路に就くこととなった。

応龍で大陸を北上する。

乾燥した瞑想的な土地はやがて樹木の多い、水墨画のような奇岩や湖のある風景に変わっていった。それはそれでまた深く幽玄で、哲学的である。やがて耕作地も見え始めた。畑よりも水田が多く目に附く。

「春になれば、水牛に犁を引かせて水田を耕す光景が見られるよ。」

今は冬だから水もないけれども」

チヒラが説明した。さらにしばらくすると、耕作地ばかりではなく、瓦葺き屋根や石造に交じって、木造建築も目に附くようになって来る。

イラフたちにとっては、懐かしい風景だった。

朝に発って夕に着くとはこのこと、一行は大元汎都を遠望する。

これもまた広大な帝都であった。

歴史を紐解けば、大華嚴龍國の中心をなす龍民族の最初の王朝はリヨン（龍）王朝である。齊歴971年のことである。最初の王はリヨーガ（楞伽）王であった。

彼の民族の歴史を説き出せば、恐らくは数万頁にも及ぶ大著になるに相違ない。いや、それでさえ足るまい。

後にリヤン（梁）王朝が起こり、またリューゼン（劉禅）王朝が起こった。劉禅の頃、国土は拡張し、現在と同じくらいの規模になる。

現在の皇朝は、この古代三国を踏まえて龍梁劉禅を国号とするのである。また大華嚴龍國と言うのは、イン・イ・インデイス（殷陀羅尼）帝国で隆盛し、後に世界宗教となった毘盧舍那宗を取り入れて国号に加えたものである。これを特に莊嚴称号とも言う。

龍梁劉禅は楞伽の法（楞伽聖王勅諭之法）を布き、皇帝は代々龍皇帝を称し、天命によって世を統治するとし、善政を国是とした。

皇帝は即位と同時にこう宣言する。

「善政とは民衆の幸福である。リヨーガ王の正統なる後継者にして民族の正統なる主導者、領土の正当なる統治者である朕は初代王の宣言した国是を継続する。我が国の国是とは天帝の命じたまうもの、天命なり」

火薬充填型点火式の砲台がならぶ都城の壁は十数の門を持ち、それぞれが龍脈の入り口になっていた。風水的な意味を有する。リヨーガ王の叡智を表わす、靈性のある智慧の紋章である蛇と鷲と白虎の徴を掲げる西の門に、イラフたち一行は着陸する。

華々しき楼門を見上げてチヒラは、

「とても久しぶりのような気がする」

「初めてリョジャドから渡って来たときはこの門をくぐった」

イラフもそうつぶやく。門衛は歴戦の戦士を優先して通し、少し待つと迎えが来て宮殿に導かれた。壮大なる皇帝が住まい、政を行う大龍神城に入ると、その中でいくつもの門をくぐり、太徽極熙殿^{たいききょくきいでん}に登る。汚れた鎧兜や装いを改め、髪を洗って整え、礼装に替えた。皇帝の謁見の間に入る。

繁縷なる龍の彫刻が内壁にも円柱にも階にも欄干にも玉座にも精緻精細に彫り込まれていた。生命あるかのごとき龍の像の群れ。これこそが太い^{おお}なる徽^{しち}であった。

輿に乗って現れ、階の上にある玉座に坐して龍皇帝は髯を撫でる。龍のごとく鋭く切れ上がった眼尻で眉は秀麗、龍のごとく強い意志を秘めた鼻先、その下には不退転の口が固く結ばれていた。龍気があふれている。

レオンがまず進み出でて名乗った。

「神聖シルヴィエ帝国枢機卿レオン・フランシスコ・デ・シルヴィエ、皇帝陛下の御前^{みまえ}にて拝謁の栄誉を賜い、光栄の至り、恐悦至極にございます。このたびは辛き窮地を天穹よりも高邁なる御心の甚深なる神慮と海よりも深き慈悲によってお救いいただき、お礼の申し上げようもないほど、誠に感謝に堪えません」

「レオン殿。

貴国シルヴィエとは長く相争う仲であったが、貴殿の境地を想えば、義に照らしてお救い申し上げるのが天理に適うと想えたまでのこと。

我が国は常に大義とともにあり。我が国是は天命とともにあり。

まずはゆつくりと疲れを癒されるがよろう。後に行く末のことなど細やかに話そう、人を交えず。最も高貴なる者同士にて」

そして今度はイラフたちを見、雷のごとく低い声で、ねぎらって言う、

「よく努め、任務を果たし帰って来たこと、実に苦勞であった」

その言葉を待つてチヒラがすべての事実を報告した。

「大儀であった」

聞き終えて龍皇帝はそう言ったのみである。一行は沙汰を待った。皇帝の次なる命令を待ったのである。

「汝らはよく働いた。次はよく休むがよい」

それだけ言うと、再び輿に担がれて行ってしまった。

啞然としたままのイラフたちが残される。

「さあ、聖なる戦士らよ、さがりたまえ」

侍従官に促され、それぞれにあてがわれた部屋に入って荷を下ろし、湯につかり、平服に着替えて（チヒラは普段から平服に近い恰好だが）、一休みした後、チヒラ、ユーカレ、ハラヒはイラフの部屋に集った。

「どう思う。暗号にすら興味を示されなかった」

イラフが口火を切った。ユーカレが応える。

「じぶんらの考えることではない」

「しかし」

「ユーカレ、そう言うが、イラフの気持ちも、もつともだ」

間に入ったチヒラにハラヒも同意し、

「そうですね。さまざまな犠牲やクラウド連邦に世話になったことを考えれば、納得いかない気持ちは自然です」

「そうだ。納得いかない。皇帝のお考えは変わられたように見受けられる。もはや我々の為したことへの興味を喪われてしまったかのように。それで他の者たちやクラウドのイース様に面目が立つか。

いや、敵だって命懸けで戦ったのだ。戦士は駒ではない」

ユーカレは窓の外を眺める。

「レオン殿は皇帝陛下と何を話すのかな」

誰もが無言。

さて、皇帝の私室の一つとも言える壁玉の間である。レオンと龍皇帝は対面していた。陰深き異郷の枢機卿は立ち、活力旺盛なる長

鬚の皇帝は坐っている。

「レオン殿、朕は貴殿を支援する。将来、貴殿が皇帝になれるよう強く支援しよう。永劫の同盟を結ぶためだ」

「永劫同盟」

「そうだ。」

貴殿は今の情勢を知っているか。

エステのヴォードとスールのマールとが同盟してシルヴィエと闘おうとしている。もし我が大華嚴龍國とシルヴィエが同盟すれば世界を二分することとなるが、西と南の帝国が力を合わせたとしても、国力の差から我らの勝利は間違いない。さすれば世界に永劫の和平と安定が訪れる。朕と神聖帝国が仲違いさえしなければ。そうすれば永遠の繁栄だ。

そのためには次期皇帝になるであろう貴殿の父君を貴殿が説得して朕との同盟を承諾すること、そして貴殿がその次の皇帝になって朕と同盟を結ぶこと。それが必要だ」

「同盟ですか。」

陛下は反シルヴィエの御方おんかたと考えておりましたが。現に和睦を反故にしてシルヴィエ帝国軍を追撃されました。貴国は現に我が国に上陸し、軍隊を進めています。我々の国は互いに戦争状態にあります。

また、イラフをノルテに遣わしたつかのも、クラウド連邦など中央南部諸国と連合して、反シルヴィエ運動をするためではなかったかと、私は推察しています。

さらに邪推すれば、私をお救いくださるのも、理由の一つには、シルヴィエの現体制に反する勢力になるからというお考えなのではないでしょうか」

「そのとおりだ！ そのとおりだ！ だからこそではないか。」

朕が厭うのは貴国の現体制、現皇帝ジニイ・ムイだ。或いは（残念ながら貴殿の祖父も含めた）歴代のシルヴィエ皇帝だ。

だが貴殿が権力を掌握し、我が国と同盟するならば、クラウド連

邦などのノルテの中央南部や西端地域も含めたオエステ・ノルテの大連合を作ることが可能になる。貴殿ならばクラウド連邦ら諸国も何の異存があるうか。貴殿の開明、非侵略主義的理性主義の高邁な思想は諸州の王侯貴族らの知るところだ。

逆に、マールやヴォードとは連合可能な筋道がない。むしろ、我が帝国はノルテの国々に近い。価値観に於いても。

朕は反シルヴィエではない。我が国の脅威となる過去及び現シルヴィエ帝国に対して戦旗を翻すのだ。

貴殿が権力を掌握するのであれば、むしろ貴殿の創る新シルヴィエに投資する」

「少し考えさせてください」

「よいだろう。休むことも必要だ。だが時運が大きく動き始めていることも忘れるなかれ」

「一つだけうかがってよろしいですか」

「何であろう」

「4132の暗号を陛下はいかようにお考えでしょうか」

「それについては解明に努めよう。朕も暗号の専門家ではないのである」

レオンが退室した後、劉玄大丞相りゅうげんが入って来た。

「陛下、いかがでしたか」

「何とも言えぬな。思慮深き男にて」

「暗号の件はジニイ・ムイが何を為さんとしているかを解く契機になるかと思いますが」

「それを知るまでもないであろう。」

「解明はせずとも、結果は見えておる」

そのとき、丞相を補佐する大輔弼官ほひつ、尹殷卿いんいんが入って来た。かねてより呼ばれていたのであった。

「来たか、卿よ、何か情報は入ったか」

「ジニイ・ムイの命運は尽きたものと思われます」

「そうか！」

龍皇帝の顔が不安と歓喜のないまぜによつて陰影を深めた。

第三章 ケーレ（転回）

イヴイルは書齋でその報告を聞いた。午後1時であつた。陽射しは淡い黄昏となつている。この季節、帝都ヒムロの1ヶ月の日照時間は1時間程度だ。

「やはり。」

神の領域ゆえにか。そのことはさすがの私もわからない。まあ、どうでもよい。

さて、大枢機卿フィロソフィ・タウロ・シルヴィエに先んじて行わなければならないが」

「大枢機卿殿下はそもそも皇帝が国外におられることも知りません」
「それが確かかどうかどうしてわかるうか。人の心を見ること適わぬがゆえに。」

動きを阻止しておくに越したことはない。そうだ、陳情団を行かせろ。

新たなる寺院の建設でも何でもよい。いやいや、宗派争いが良い。
微妙な問題ゆえ彼もすぐには結論が出せない」

「皇帝は2時間後にはこちらへ帰着されましょう」

「すぐに行くぞ。賽は投げられた」

この密議の1時間前のこと、海鳥島に少年は着いた。まさに正午であつた。南の熱い太陽が頂点にある。

彼は南下する途中から屈強なる戦士ダドン、ムーガル、ジョン・ドンの三人に警護されてここまで来ていた。最初は独りで海鳥島を目指していた。亡くなった彼の両親が夢に出てそう懇願したからだ。つた。

眼の前に背の高い、顎鬚の長い男が立っている。フードを深くかぶり、全身を覆う黒いローブを引きずっていた。南の島では見ないスタイルだ。だが少年には見覚えがあつた。夢を見る前の夕方に、

街で偶然、会っていた。

「来たな、リアイキよ。エル・パツハロ・デル・マルへようこそ。

さあ、今こそ巨大なるケーレが始まる。おまえこそが究竟の真奥義となり、最真央の原理としてこの世を做すのだ。

平凡な、路傍の石のようなおまえが」

手を取る。

「さあ、世界の臍へ行こう」

古代ミノタ文明の跡地。ラビュリントスと言われた宮殿、両刃の斧の紋、恐らくこの作者はクレタ文明を念頭に置いたのであるう。

しかし大きな違いは宮殿がまったく残っていないことであつた。

赤茶けた岩しかない丘に登る。神が降臨したと伝承される磐があつた。皇帝は命ずる。「そこに立て」

少年は立った。

しばらくは静寂であつた。

だがやがて身体から一筋の小さな発光が天を真つ直ぐに差し、貫くように衝く。その筋はいく筋にもなり、太さも太くなつていく。

八方を照らす太陽のようになる。

するとどうだろうか。凄まじい光が放たれた。青き炎。磐を中央としてその一帯が直径9 kmの巨大な光輪の大曼陀羅になり、島が揺れた。海が揺らされたかのように動揺する。

曼荼羅に神仏が躍る。聖なる文字が現れ、鐘のように蒼穹に鳴り響く。

「おお」

「これは」

「ああっ！」

少年は聖なる光燦に包まれ、そのまばゆさは驚くべきもので、光の力ですべてが吹き飛びそうであつた。見る者たちは手のひらで眼ばかりか顔までも蔽わずにはいられない。さらに驚嘆すべきことは、少年が見る見る間に少女へと変じていくことであつた。光は凄まじいエネルギーを孕んで膨らんでいく。あたかも宇宙創成のときのよ

うな凄まじい力であった。言葉では言い尽くすことなど到底できない。究竟の宇宙爆発とでも言えばよいのか。

際限もなく速く、際限もなく烈しく、際限もなく強く、際限もなく大きな炎の光燦であった。

光の arrow 放射の無際限なる拡がり、超弩級の勢い、だが一切はまったく自然で優しく、何事もなく無傷だったのである。

際限もない光の横溢、氾濫であった。静寂なる光の潮は460億光年の宇宙を超えてあふれる。すべての並行宇宙に大波瀾のごとくに氾濫し、10次元の空間と1次元の時間を超越し、超えてさらに際限もなくあふれた。

無限をも超えたのである。

すなわち彼女（彼）はあたかも光明神アスラのように一切万象となり、他者というものが存在となり、他者がいないので識別不能であり、パルメニデスの言う『真の存在』のように対立する存在がなく、常に全体であって、完全で、動揺がなく（変化もなく、過去に生じたことも、未来に滅することもない）、何に対することも、異なるということもあり得ず、それゆえに見ることも聞くこともできず、畢竟の無空なる存在となった。

放逸無際限ということの凄まじさ、陰が極みを超えて極まって陽へと変じ、陽が極みを超えて極まって陰となる。色即是空・空即是色、超絶を超越して一と廻り、ただのありふれ、今のこの日常茶飯事となる。喫茶去となる。

あゝ、茶飯事、茶飯事よ、平常道をなさんとすれば、平常道に非ざる。されども何を以て非ざるとは言わんや。『非』さえも死に絶えるこの場所です。

古来云う処の、無為自然の道（Tao）か、凡庸な日常使いの茶碗の缺けた侘寂か、趙州無字（禪宗の公案にある言葉）か、いやいや、さような奇態な言辞、いくら尽くそうと追いつかず。

カタチでしかなく、現象でしかない、感覚的なもの、憶見・独断（ドクサ dogma）でしかなく、ニューロンを走るインパルスという物的な化

学的現象、脳神経細胞の戯れ。

されどもそれも又よし。

しよせん、諸思考概は戯れ。曷や、何をか謂わんや、誰もが（知らぬ者さえも）知り得ても誰も知り得ざる無空だ、何処にも達せず、至らず、収まらず、言いかけたまま次の句が継げず、呆然と口を開いたままのようなもの、竟に未遂不収のまゝ。

少年のような儚い肉体の面影を残した美しい青林檎のような女の子を見て、皇帝に随行して来ていたカッサドル・デ・ドラゴースの聖殉教騎士アヴァロキとその従者アムト、セトン、ミハルらは畏怖と感嘆の声を上げる。

しかしこの期に及んでも、不気味なる『屍の軍団』のロキ少佐、ザンキ中尉、グロヴィス少尉、ヨギ少尉、そして巫女リリアらは表情を変えず、木偶のようですらあった。

皇帝ジニイ・ムイは紅潮し、

「ケーレが起こった。世界の運命は転回した。天命は革まった。革命は起こったのだ」

歓呼の声を上げる。

「偉大なるかな、我らが皇帝陛下」

聖殉教騎士はひざまずく、誰もがそれに倣った。木偶のような者たちさえも。ただし表情だけは変えなかった。

「これで世界は変わった。運命は新たる世界へと転じた。

おお、偉大なるかな我が人生よ、さあ、リアイキよ、おまえは朕を愛するか」

しかし少年の双眸は移ろう。陽光に燦めく海のように。それは神のごとく崇高で近付き難いものであった。

「応えよ」

皇帝は眉を少し顰めた。

「どうした、自分の変貌に動揺しているのか」

皇帝は怒りで目を睜く。拳をにぎった。

「なぜだ、聞こえぬか、あまりのことに、自らに驚愕しているのか」

だが彼女（彼）に驚愕の様子はない。澄み切った、超常的な、埴輪のように空漠なる顔である。

「き、貴様、応えぬか」

黙っている。

「おのれっ」

しかしジニイ・ムイは憤りを抑えた。ここで殺してはこれまでの世界規模の努力が無為になる。無為に……。まさか。そんな……。いや、あり得ない。初めからこうなると決まっていたと言うのか。あり得ない。

皇帝の顔は蒼白になった。

「バカな……。そんな莫迦な……」

汗が垂れる。再び少女（少年）を見遣る。

リアイキの眼は皇帝を睥睨するかのようであった。その表情は、以前とは、まったく変わっていた。容赦ない自然のごとく非情、地上の価値を無みする神のごとく莊嚴なる無表情であった。皇帝は宇宙の無際限な空間を前にしたかのような根源的な畏怖を覚える。

第四章 決戦の日

「陛下、これはどうしたことでしょう」

異変に気が付き、不安を覚え、聖殉教騎士アヴァロキが皇帝に尋ねる。しかしジニイ・ムイは答えることができなかった。

少女（少年）はゆっくり歩く。

「リアイキよ、どこへ行く気だ」

ジニイ・ムイが問うた。

しかし彼女（彼）は一瞥を投げただけであった。ゆっくりとして大きく底光りする一瞥であった。雷雲風雨のごとく無情なる一瞥である。

剣を抜いたが、リアイキは全身から神々しい光を発しもはや近附くことができなかった。彼女（彼）は言った、

「人間よ、見るがよい、我らは生まれた」

そう言うと、燦然たるまばゆい16枚の翼を広げる。眼を開けていられなかった。少女(少年)は欣然と微笑する。毛穴のない、大理石のような美しくつややかな皮膚。耀かんばかりの澁刺さ。太陽の燦めきのごとく。誰も言葉さえも出ない。騎士さえ腰を抜かしていた。

笑い声を上げて木の上にひらりと坐り、青い林檎をもちでかじった。自由に気の向くままで、誰にもそれを止めることはできない。

「陛下、これは。いかようなこととなるのでしょうか」

聖殉教騎士アヴァロキは瞠目したままで尋ねた。

「ケーレが起こったのだ。もう何がどのように変わるか想像ができない。

彼女が朕と一体であれば、朕はこの世界の中枢であつた。しかしそれは叶わなかった。我らも運命のうちの一つに過ぎない。他の者たちと変わらない。運命の受難者と何ら変わらない。一本の葦と何ら変わらないのだ。

何をしておるか、急いで帰るぞ。帝国の運命が大いに転じているかもしれない」

そしてジェット戦闘機を飛ばして帰還したが、皇帝の脳裏を一つの想いが駆け巡っていた。

さて、その頃、ヒムロでは。レオンの父、大枢機卿フィロソフィは陳情団に丁寧に断りを入れるよう彼の侍従長に申し渡し、皇帝が到着する時刻を確認した。

「まさかそのようなこととなっていたとは、すぐにお会いしなければならぬ。これは帝国の運命を揺るがすことだ」

それをイヴィルが察知しないわけがない。

「今さら気が附いたか。ふん、奴とて愚か者ではない。ただ少しばかりこちらが思っていたよりも早いな。いったい、何者が知らせたか」

「フィロソフィ陛下の補佐官、ミハイロ殿が」

「あの文献学者か。近頃、姿を見ぬと思ったが。私としたことが、手ばかりであった。ふ。だがそれもまたよし。人生の妙味というもの」

「猊下、いかがいたしましたよう」

妖艶な笑みをイヴイルは浮かべる。

「皇帝へ聖なる美酒でも献上いたそう」

さて、その頃、ようやく空港に着いたジニイ・ムイは顔色を喪い、立つのもやつとで、朦朧としていた。誰にも見られぬように黒衣に全身を覆い、足早に横切り、黒き皇帝専用車に乗って聖大神殿へ。近衛兵に守られるように誰にも会わず、秘奥の間に入った。

「独りになる。誰も入れるな」

ソファに坐り、頭を抱えた。

「殺すこともできなかった。到底、できるわけがない。

すべては決定附けられていたのか。努力などしよせんは無為であったのか。初めからこうなる運命しかなかったのか」

そのときMPCにメールが入った。

侍従長からであった。

『悪い知らせです。』

エオレアが突如、亡くなったそうです。老衰のように枯れ果てて。未だ十四歳であったとか。エルフが世界のすべての宗教の宗主に訃報を発信しました』

始まった。ジニイ・ムイはそう独りごちた。始まってしまったのだ。世界の運命が大転回していく、今まさに……エオレアの死がその証だ。エオレアも本来は普通の人間だ。食べたり飲んだりしなければ生きてはいけない。しかし彼女は今までそれを免れていた。なぜなら神性によって生存を超越していたからだ。だが彼女の神性は母であるイキリヤに由来していた。新しいイキリヤが生誕してしまった以上、彼女の神性は失われたのだ。神性によって堰き止められていたがその堰が破れ、一気にツケが廻って来たに違いない。

いや、それ以上に、世界の原理たる資格を喪って、それゆえに存

在意義を喪い、死んでしまったのかもしれない……

「ふふふ。つまり朕が殺してしまったようなものだ」

ドアが静かにノックされる。皇帝は驚く。侍従の一人だった。彼は事情を知らない。

「陛下、イヴィル猊下が面会を求めておいでです」

……イヴィルか。皇帝の胸を苦々しい思いが走った。何を企んでいるか、どこまで知っているのか。

「朕は密儀のさなかだ。何人にも会わぬと申したであろう」

「申し訳ありません。猊下が世界の運命のことでもどうしてもお会いしたいとのことでしたので」

……やはり知っておったか。

「わかった。通せ」

大枢機卿は自信に満ちた皮肉な笑みで入室した。

「聖なる絶対神聖皇帝、ジニイ・ムイ陛下にあられてはご機嫌麗しゅう、誠に慶賀の至りと、畏れ懼れ思う次第でございます」

「何用だ、大枢機卿」

「いくつかがございます。時系列に従って申しましょう。

まずは枢機卿レオンが陛下を告発しております。一つに、アクアティアへの禁足の原則を破った理由を糺しております。

そしてその際、パイロットが急死した件について調査を求めています」

「聖なる密儀だ。語る必要はない。世界のためだ。

パイロットの件は密儀ゆえに世を去ってもらった。彼については時期を見て殉教者に列する予定であった」

「なるほど。適法ですな」

「第二は」

「ふむ」

「ケーレについてです。

世界曼荼羅は情報生命として4132の秘密のダイヤル、とも言うべき法則を持っていますが、皇帝は何ゆえに2314のダイヤル

を廻したのでしょうか」

ジニイ・ムイは瞠目したが、驚きを押し隠し、冷静と威厳を以て、
「それも秘儀だ。説明する義務はない」

と応えるも、冷厳なる冷笑の眼差しを以てイヴイルは、

「確かに。通常であれば。」

しかしその変化はあまりにも甚大です。エオレアの死はご存知でしょう。はい、わかりました。エオレアは世界の原理としてシルヴィエの地に安定しておりましたが、それは喪われました。

それが何を意味するかご存知のことと思います」

いったん言葉を止め、イヴイルは自分が皇帝に与えた打撃の効果を分析する。そして言葉を続け、

「次にその革命の効果として天命が革まりました。世界情勢の急激な変化です。」

ヴォードはマールと連合して帝国を攻めることを決定いたしました。既に連合軍は進軍を始め、今日にも海戦が起ころうとしています」

「馬鹿な、あの国は争っていたはず」

「転回したのですね。」

さて、東の大国、龍梁劉禅は何の抵抗も受けることなく、既に我が国の領土に深く攻め入っていますが、同時に企みを以てレオンを保護し、我が帝国を二分裂しようと企み、混乱に乗じて一気に崩壊へと持ち込もうと計っているようです。

つまり我々は四面楚歌となり、唐突に三大国から攻められることとなったのです。ケーレの結果で」

「ふむ」

「陛下はいかなるご所存でしょうか。」

エル・パツハロ・デル・マルでの密儀については既に司法取引によって聖殉教騎士団から報告を受けております」

「ううぬぬ」

そのとき、またもやノックの音が。

「陛下、一大事でございます」

侍従であった。その内容を察知していたイヴイルはすかさず、

「控え居れ。今、陛下と天下の一大事を話している。下がって待て。

地下牢で生を終わらせたくなくば」

静かになる。イヴイルは再び問うた。

「正義のお考えをお聞かせくださいませ」

「わかった。しばし考えて後、いかに処すべきかを決する」

「御意。」

では、お待ちしております。何なりと思し召しのまゝに実行いたします」

大枢機卿は下がった。

さて、その頃、蒼きアトランティコ大海洋では、ヴォード帝国の將軍イーグル・ワトーが望遠鏡で海上を見ていた。マールロ帝国の海軍は次々と港に寄港している。両帝国の合計二百万の連合軍の大軍団は本日、シルヴィエとの開戦のために集結していた。

ワトーは海戦を得意としている。

そもそもエステ（西大陸）の諸国は永い間、ノルテ（北大陸）諸国の植民地であった。

特にスパルクス帝国の支配するところが多く、次にロード共和国、フロレチェ王国であった。いずれも大航海時代に植民地を増やした国々で海戦を得意としていた。ヴォードが必然的に海戦に長けるようになったのは、こういう事情からであった。

そして資本を蓄え、武装し、齊歴8991年の第一次革命により、ノルテ諸国からの入植者で作るユニオンが本国からの独立を果たした。

しかし事はそう簡単には終わらなかった。ご多分に漏れず民族紛争が起こったのである。そしてそれは最後に帝政という力による終息を迎えることしかなかった。

齊歴9023年、原住民による第二次革命により民族連合会長フアルコ（フロレチェ人代表）が牽引する連合軍が入植者軍を打破、

ラサ Raza 共和国を建国するも、齊歴9025年、連合左派のハルコ
ーン（スパルタクス人）がクーデターを起こし、権力を一時掌握、
しかし齊歴9026年に連合青年部に属し、経済学・法学の一学究
であったフォーク（ロード人）が一時国外追放になるも弾圧を超え
て第三次革命を起こし、ヴォード共和国樹立を宣言、齊歴9056
年のクーデターで同じロード人で彼の側近であったコルビーノが政
権を奪取し、経済の要であった農耕牧畜業と貿易事業を掌握し、大
財閥となって自らを正統なる王と称したが、齊歴9063年、スパ
ルタクス人弁護士組合青年部の左派連合代表であったレヴィングが
共和国の復活を唱えて蜂起、齊歴9066年に共和国代表者会議の
議長に就任するも、齊歴9068年、ロード人による反政府クーデ
ターの鎮圧を機に、永劫平和論と絶対君主制論とを唱えて自ら皇帝
となり、レヴィング・レイヴォン皇帝を称した。

以来、13年間、皇帝レイヴァンは国益のために尽くし、巨大な
富によってヴォードを世界の超大国、四強のうちの一つにまで申し
上げたのである。

ワトーは海図を広げて深慮し、一つの作戦を立てていた。

黎明の進撃に際し、連合軍総督イーグル・ワトーは激烈に叫んだ。

彼の演説は常日頃ならば8時間を超えたが、今日はさような余裕が
ない。強く短く、裂帛の気迫を以て言い切った。

「ここで死ぬ。今日ここで死ぬのだ。生きて帰るべからず。自由な
る主権を守るために、正義の闘いを闘うために喪う命は真の生命で
ある。

兵どもよ、国家存亡はこの海戦にかかっている。皆の者、貴様ら
今は日ここで死ぬのだ。我とともに、自由のために」

アトランティコを進むマールロ帝国とヴォード帝国の連合艦隊は多
種多様な軍艦を烈士威風堂々。

竜骨に深く彫刻を施して船首を高く立ち上げるバイキングのバト
ル・シップ、ギリシャの軍船バイオリム（二段オールのガレオン
船）、ベネチアやフランダースのガレオン船のような複雑な帆を備

えたものなど帆船マニアが見たら垂涎の的となる帆船が数万隻、ルイ14世のラ・クロンや第1級戦列艦ル・フェニックス及びソレイユ・ロワイヤル、敵国から黄金の悪魔と畏れた英海軍の巨艦ロイヤル・ソブレン・ザ・シーズ、オランダの80門戦列艦フリースランド、スペイン無敵艦隊の流れを汲むサン・フェリーペ、ブランデンブルグの大型フリーゲート艦フリードリッヒ・ウィルヘルム・ツー・ベルデなどなど。

対するシルヴィエは巨砲と近代装備を持った鉄の大型軍艦数千隻、ジェット戦闘機を搭載した巨大な要塞島のような航空母艦数十隻、潜水艦十数隻を以て立ちはだかった。

技術的に劣勢な連合軍は退却すると見せかけて切り立つ海峡に誘い、戦闘機の動きを封じて挟撃し、また切り立つ岩崖の上から百万の大砲を以て集中砲撃して殲滅すべく激しく戦った。

連合軍は半数以上の兵士を喪い、無傷の船とてなかったが、神聖帝国海軍のアトランティコ艦隊は壊滅し、海戦は連合軍の辛勝に終わった。

それに勢いを得たマールコの勇猛な騎馬隊がノルテの西端部に上陸し、西端諸国と連合してシルヴィエ帝国に向かって進軍する。

戦勝の報を聞いて、ノルテの中央南部諸国もヴォード帝国に連合し、かつて海洋を制覇したロードやスパルタクスやフロレチェの大艦隊を出した。

大華厳龍國では、ニュースを聞いて居ても立つてもいられないレオンは突然の訃報に接する。

『大枢機卿フィロソフィ・タウロ・シルヴィエ殿、急逝さる』

「ばかな！　あり得ない」

龍皇帝への面会を求めた。

「長居をし過ぎました。急遽帰国したく思ってお許しを願いに参りました」

「どうしたのだ、レオン殿」

「実はわが父、大枢機卿が……」

皇帝はそれを知っていた。またジニイ・ムイが事実上、蟄居し、イヴィルのクーデターが着々と行われているのを察知していた。

『帰すべきか帰さぬべきか。』

帰せばみすみすイヴィルの手に堕ちてしまい、利用することができなくなる。しかし帰さずともイヴィルの基盤が固まってしまえば、利用価値がなくなる。

一か八か帰して一波乱でも起こしてくれば善しとするか。どっちに転んでもダメで元々。喪うものはない。

さて、そうと決まれば、波乱を起こすために屈強の者たちを添えてやらなければならないぞ』

そう思案し、レオンに伝える。

「わかった。しかし情勢は危険が予想される。

イラフとユーカレ、チヒラやハラヒを附けよう。他にも有能な者たちを添えよう。ともかくも彼女らがいれば一騎当千だ」

「あり難き幸せ」

レオンはお辞儀して退出する。

さつそく皇帝の使者がそれぞれの戦士を訪れた。勅命が読み上げられる。イラフは二つ返事で命令への絶対服従を誓い、こう言った。

「とても気になっていました。命ぜられなくても追従させていたかったです」

チヒラもユーカレもハラヒも同じだった。

再び旅は始まった。またもや陰謀と戦乱のさなかに戻るにあたって、戦士らの顔に一点の迷いもない。

大型の応龍を用意し、飛翔する。

「ともかく我々個人にとっても一つだけよかったことは」

チヒラが言った、

「今回の試練で武の精神を練って、魂魄的には相当な高みにまで達したことだ。何よりも存在の実体は精神・魂魄だとぼくは痛感した。これは新鮮な学びだった。今まではそういうふうには考えていなかったんだ。

もはや四天王すら敵ではないかもしれない」

レオンは皇帝宛に正式文書を出した。

『訃報を聞き、帰国いたしたき義、御許し願いたく候。そつう』

葬儀は親族の務め。相御赦し願いたく候。あいおゆる。帰国後、如何な御裁きあらんととも、神妙に御受け奉る事、決して違えずにて候』

葬儀のために帰国したい、帰国してからどのように裁かれようと構わない、という趣旨であった。

その日、ジニイ・ムイは神聖帝国海軍アトランティコ艦隊がほぼ壊滅したという知らせを受けた。

また国境附近でヴォード陸軍、マール騎馬軍、中央南部及び西端部の連合軍、それに加え、亜人類や神獣も含む数千万の大軍勢が布陣し、殺戮の荒御魂のごとき殺気に満ちた勢いで進攻寸前であるという知らせも聞く。

他国に比して圧倒的に優位であるとされていたジェット戦闘機の大戦隊でさえも、応龍の大軍団と相見えた一大決戦では、甚大な被害を受け、まったくの互角であったという報告も届いていた。

帝国が初めて迎える危機である。絶対神聖皇帝は呻吟し、決意する。

第五章 皇帝の最後

シルヴィエ国民にあっても、大艦隊が敗退したニュースが激しい衝撃を与えていた。

ただちに空軍の大出動が望まれたが、それも勝利には結びつかないことがわかって、さらに動揺は広がる。

「ヒムロは絶対に陥落しない。神の力を持つてする他は」

宗教者たちは口々に叫んだ。

そんなとき、聖大神殿前の一億人広場に於いて皇帝が国民に宣告すべきことがあるというお触れが出て、大集合がかけられた。集まった人々は一様に不安げでざわめいている。

皇帝が広場に面する南塔の5階にあるバルコニーに現れ、次のように大音声した。

「朕は聖教の大義と世界生命の永遠の弥栄いよさかのために、神の栄光を讃えんがために世界を光で満たさんとして最奥なる密儀を行った。

しかしそれは今日ある大いなる災いを招いてしまった。

朕は朕の不徳なるがゆえの罪の裁きを神に乞い、真理の名の下に自らを滅す。滅して罪を贖わんと欲す。衆はこれを受け容れよ、衆の心こそ神の御心に他ならなければ」

巨大な沈黙が訪れた。

ジニイ・ムイは続ける。

「しかしそれに先立って言い遺すべきことがある。

朕の滅した後、大枢機卿による互選が行われることとなるが、周知のとおり一名の欠員がある。

偉大なるフィロソフィ大枢機卿が急逝したためだ。

したがって朕は皇帝の最後の権限を用いて指名する。欠員はその子息であり、枢機卿であるレオン・フランシスコ・デ・シルヴィエ枢機卿とする」

歓呼とざわめきとが起こった。

イヴィルが異論を唱えようと立ち上がりかけたが、皇帝は畳み掛けるよう言葉を続け、

「レオンには罪科ありとの声もあることは朕も知っている。

しかし朕はここに強く聖性を以て宣告する。レオンに罪はない。

枢機卿は正義の信念を以て朕の過ちを糺すべく行動した。もし彼の目的が貫徹されていればこの事態はなかったかも知れない。

それゆえに帝国の未来のためには、レオンを大枢機卿に任じて以後の互選も含めた帝国の運命を託すべきと決した。

これは絶対なる神聖皇帝の権限による最後の決定だ。逆らう者は背教徒であり、異論は存在し得ない」

イヴィルは腹心の將軍サエン大将を呼び出し、命じた。

「ただちに百万の軍を率いて首都に近附くレオンを屠れ」

「御意」

その頃、レオンと四人の戦士は大型の応龍に乗り、凄まじい速さでヒムロを目指していた。しかし。

「あ、あれは何だ」

「ジェット戦闘機！」

「数十機はあるぞ」

「まずい！」

逃げ場のない集中砲火だった。さすがの応龍も堪らない。墜落する。

龍は最後の生命を賭して乗る者を落としたり怪我させたりしないよう気を付けながら着陸し、息絶えた。イラフらは応龍に合掌し、すぐに龍の背に載せていた龍馬にそれぞれ移り乗った。

「見ろ、地上軍もいる」

ユーカレのその声に地平線を見ると、雪を蹴り上げて迫る大軍団。

「ちくしょう、我ら数人に何という数だ！ 卑怯千万！」

チヒラが悔しがるも、イラフは双眸を燦めかせて幅広の剣を抜き、
「ただ闘うのみ。行くぞ！」

百万の大軍に突っ込んでいく。その後にレオンが付き、レオンの両脇にハラヒとユーカレが付き、しんがりをチヒラが務める。五人は一つの弾丸のように突っ込んだ。

ヒムロではジニイ・ムイが最後の呪を唱えている。

「神よ、ご照覧あれ！ 民を救いたまえ！」

絶叫のように大音声し、桶に入れた油をかぶる。炬火を手につけて体に火をつけた。焰に包まれる。

「聖教に栄光あれ、聖教は真理なり！」

炎となった皇帝が塔から墜落する。民衆が悲鳴を上げた。

こうして後の世に毀誉褒貶烈しき第199祖にして第4代絶対神聖皇帝ジニイ・ムイは天逝したのである。

「さて、聖なる互選を明朝、執り行おう。新たな皇帝が前帝の葬儀を司るのだ」

イヴイルは冷めた表情でそう言った。

互選の会場は同じく1億人広場で行われる。衆人環視の下で大枢機卿が投票するのだ。荘重なる彫のある櫛の椅子が五つある。そのうち四つに壮麗なる儀装に身を包んだ大枢機卿が坐した。

「刻限までレオンを待とう」

大枢機卿アガルータは言った。大枢機卿ゴ・ダールもそうした。

イヴイルは不満げであったが、仕方なかった。そう思いつつももう一人の枢機卿に尋ねる。

「イシユラル猊下もそれで異存はないか」

「むろんだ」

来るはずがない。イヴイルはそう確信していた。

殺したという報告は未だないが、よもやし損なうことなどあるまい。ジン・メタルハートだつて百万人には勝てないのだから……。

「諸卿よ、時は至った」

イヴイルはそう言った。

「新大枢機卿レオン殿は来ない。互選は四人で行うしかない」

「已むを得まい」

アガルータがそう応えた。ゴ・ダールもうなずく。イシユラルも同意し、

「ただし四人で行って同数であった場合は再度行う。ということだよいか」

イヴイルは少し眉を顰めたが、

「むろんだ。それしかあるまい」

「では」

投票は行われた。人々は固唾を飲んで見守った。開票が行われる。

「イヴイル猊下に一票！」

おお！歓声が上がる。しかし、

「アガルータ猊下に一票！」

おお！再び歓声。

「イシユラル猊下に一票！」

少し小さく歓声が上がる。

「ゴ・ダール猊下に一票！」

おお！というよりは、あゝに聞こえた。

「再投票だ、イヴイル殿」

「そのとおりだ、イシュラル殿」

そのとき、群衆が激しくどよめいた。

「何事か」

憤った顔でイヴイルが敏感に反応した。

民衆を割って現れた人物、少女剣士イラフの後、チヒラとハラヒに両脇を護られた大枢機卿レオン・フランシスコ・デ・シルヴィエである。五人とも鎧は毀れ、服は裂け、血が滴り、または滲み、満身創痍であった。

「遅れて申し訳ない。私も参加する」

イヴイルが異議を唱えた。

「失格だ」

しかしイシュラルは冷静に制し、

「残念ながらイヴイル大枢機卿、さような規定はない」

「過去にこのような事例がないだけに過ぎない」

「だが、ないものはない」

「さような論は正義ではない」

「では諸卿、いかが思われるか」

アガルータもゴ・ダールも声をそろえ、

「已むを得ずイシュラル大枢機卿の言うとおりとせざるを得ない」

イヴイルは蒼白になった。敗北を確信したのだ。

もう手の施しようはなかった。

互選によりレオン・フランシスコ・デ・シルヴィエが第200祖となることが認定承認され、自動的に第5代絶対神聖皇帝となることが決した。

民衆は歓呼した。その声は止むことがなかった。

「我ら聖なる聖教の民よ、帝国は今、未曾有の危機の瀬にいる。

だがまず我らの為すことは先帝の御魂を鎮め、天逝を賀する葬送の義を執り行うことである。

とは言え、時間はない。葬礼の期日は明日とする」

大忙しとなった。

官僚や宗教者や侍従は夜を徹して奔走する。職人は休憩なしで昏倒した。数万人の人夫が石を運び、数千人の石工が彫る。数十万人の金細工師と飾り師は儀式の寸前まで働き、花は全国からジェット機でかき集められる。料理人は食材集めから始まり、てんてこまいであった。一時的に数千の調理人が雇われ、腕を振るつた。

かくして翌日、壮大な国葬が行われ、聖の聖なる式典は執行されたのである。

「聖なるジニイ・ムイは神の列に連なり給う。彼の偉業は聖にして偉大であった。聖の聖なる御魂よ、天へ」

皇帝レオンは神へさように言上する。

朝から天を蓋っていた雲は割れて啓き、まっすぐな天光が差し込んだ。イヴィルは戦況視察を理由に首都を去った。粛清を怖れたからである。

戴冠式は後に廻された。レオン自身がそう決めた。まずは戦局だ、そう言い切る。

「しかしながらこの情勢をどうすべきか」

地図を見ながらレオンは思案した。厳粛なる皇帝の書斎である。

四人の戦士もいた。

ユーカレが冷淡な金色の双眸で言う。

「ふ。シルヴィエ帝国の態勢は立て直された。

一時的に東西南の帝国に圧倒されたが、そもそも兵数や兵器の性能で圧倒的に勝っている。じぶんが言うのもおかしいが、応戦すればよい」

「いや。私には大いなる消耗に思える。

人命や財貨や資源を大いに無駄にしている。特にこの数年の戦争には布教という大義がなく（従前の侵略戦争は布教という大義を持

っていた)、何のための戦争だかわからない戦争であつた」

チヒラも首をひねる。

「そう。ぼくも確かにそう感じていた」

イラフもうなずき、

「裏切ったり、同盟したり、北から東へ南へ流れたかと思えば、北から西へ南へ東へ流れた。めまぐるしかった。眼が廻りそうなくらいにね」

と言ってから、ぼつりと、

「まるで順円と逆円だな……」

その言葉でハラヒが何かに気が付き、

「廻る？　今何て言った、イラフ！」

チヒラもはつとした顔をする。

「順に逆に廻る……ダイヤルか」

レオンが声を上げ、

「莫迦な！」

ユーカレも驚愕を隠しきれない。

「あり得ないだろう」

「何？」

イラフはきよとんとするも地図に眼を落とし、ふと気が附いた。

「5年前の二つの戦争、3年前の三つの戦争、その後のシルヴィエの東征、つまり一つの戦争、そしてケーレの直前まであつた四つの戦争」

「2314！」

そう言つてハラヒが息を飲む。ユーカレは眉を顰め、

「4132の逆だ」

「数字の配列も、順円と逆円のような関係だ」

イラフがそう声を上げると、チヒラもうなずき、

「最初にあつたものが『順』か。だからその逆は『逆』となる」

「真理の数字の順番を逆にして運命の転回！　何てことだ」

ハラヒが信じられないという顔をする。チヒラが表情をこわばら

せ、

「それでケーレが起こったんだ」

「信じられない。ジニイ・ムイは超大国の戦争を操って、世界という情報生命のダイヤルを廻していたのか」

イラフの驚愕、ハラヒも嘆息し、

「凄いな。壮大過ぎる」

「まさに大革命だな」

ユーカレがノーズテイカを揺らして皮肉な笑みを浮かべるも、チヒラはさらに、

「しかもよく見ろ、その都度戦争は一つの方角を向いている」

と言って一度言葉を切り、記憶を呼び戻すかのように考え込んでから、少しの間で再び続ける、

「5年前はシルヴィエが大華厳龍國を、大華厳龍國がマールロを攻めた北から東、東から南へ、つまり2つの右回り。」

3年前、シルヴィエがヴォードを、ヴォードがマールロを、マールロが大華厳龍國を攻めた北から西、西から南、南から東という、3つの左回り。

少し前のシルヴィエから大華厳龍國への北から東へ、1つの右回り。

そして現在（正確には転回直前だが）、大華厳龍國がシルヴィエを、シルヴィエがヴォードを、ヴォードがマールロを、マールロが大華厳龍國を、東から北、北から西、西から南、南から東へという、4つの左回り」

息を飲んで眼を丸くするイラフが、

「交互に順円逆円を作っている」

「『聖ルシアの録』に、円環は日時計のごとし。世を革めんとする者は、正逆の交互を以てその対象を為せ」とあったのは、このことか」

ユーカレの言葉にハラヒが絶句し、

「戦争が対象……」

「だから電撃的な和睦や停戦条約後の奇襲があつたのか」

イラフが苦々しい顔でうなずきながらそう言った。ハラヒは怒りが込み上げる。

「狂っているとは思えない。これで何百万人も人間が家族と別れて大移動し、見知らぬ土地で何万人もの人間が死んでいるんだ」

「恐ろしいことだ」

イラフも顔をこわばらせる。

「まるで人民は権力者の駒だな」

ユーカレが言うと、チヒラも同意し、

「結局、どっちに転んでも庶民が犠牲者なんだ」

「笑うのは権力者と財閥のみ、か」

イラフのその言葉を聞き終えると、レオンは厳かに言った。

「私の心は決まった。」

戦争は虚しい。勝っても負けても哭くのは力の弱い者たちばかりだ。血の涙を流しても報われない民衆たちではないか。

戦わず済むならば闘うべきではない」

第六章 戴冠式

レオンは大華厳龍國の龍皇帝にMPCでメールを送った。かねてからの約束であつた同盟の締結を迫る。

龍皇帝は大いに思案した。

こうも早くシルヴィエ帝国内がまとまるとは予想していなかったのである。いつものように互選を前にして権謀術策が横行し、レオン派とイヴィル派で分裂すると思つていた。

「あの周到なイヴィルが惨敗するとは。根回しをしなかったとは思えない。恐らくは根回しをしたにもかかわらず、この結果だったのだ。恐るべし。」

シルヴィエ人は悔りがたい。

危機に際して個人の欲得より国家の存亡を選んだのだ。当たり前

の選択と言えば当たり前前の選択だが、実際にそうならないのが現実だと言うのに」

瞑目して考えたが、結局、大輔^{ほひつ}弼官^{いんいん}尹^{いん}殷卿^{いん}の進言に遵った。

「神聖帝国は急速に国力を回復している。一時の連勝が途中から続かなくなり、敗戦に追い込まれる例は枚挙^{こま}に遑^{いとま}がない。

朕はシルヴィエと同盟する。しかしこれを以てマールロ帝国やヴォード帝国と闘うことは虚しい。

いかにすべきか」

MPCがメールの着信を知らせた。開くとシルヴィエ皇帝レオンからである。

「東大陸の統治者にして神授の偉大なる大皇帝に挨拶申し上げます。

我レオン・フランシスコ・デ・シルヴィエは本日、第200祖を公儀に於いて継承し、四週間後に第5代絶対神聖皇帝の位を継ぐべく戴冠式を執り行うことと決した。

これに先立ち東西南の大陸中枢に坐す偉大なる神授の大皇帝に恐れ畏みつつも天が我に与えたもうた命として誓約する。

神聖シルヴィエ帝国は我が治世に於いて永遠和平を願い、不可侵の誓いを立てる。これ生涯違わず。民を慰撫し、安寧に世を治めることこそ至高神聖の真義、最高位の者の為すべき大義なり。

我は強制的な布教と布教と併せて行われていた軍事的侵略を止め、過去の侵略地に於いても民衆の意向を細やかに尋ね、かつての国・地域への復活を望む国・地域には、その望みを必ずや無条件に叶える。

永劫平和を築かん。

東西南の大皇帝に於かれても世界大義のため、平安と繁栄のために、平穩無事の大義を果たされるようご進言申し上げる。

願わくば、四大陸にて国際連合を為さん」

この文章は公約として全世界に流布された。衝撃的な内容であり、凄まじい勢いで人々に伝播する。たちまち民衆は熱狂した。もしかしたらこれこそが真の転回^{Keire}なのかもしれない。

大鴉を肩に載せたヴォード皇帝レイヴァンは地団太を踏んだ。

「おのれ、考えたな、レオンめ」

スールに於いても羅汜は巨漢イムジンに問うた。

「これに準じなければ民を安んじず、和平を好まぬということになるな」

「御意」

「しかしながら我が国の民は皆荒々しく獰猛な戦士であり、過酷であり非情であることを誇りとしている。無慈悲こそ道徳と心得ておる。

されば、かような言辞には動ずることもあるまい」

「御意。」

ですが、陛下。ヴォードは隠密裏に休戦条約を打診し始めました」

「何だと！」

「かの国は植民地支配から自由を勝ち得た伝統がございます。自由と権利こそは彼の国の大義なのです」

「うぬ」

羅汜は断念したが、最後にこう言った。

「皇帝レオン暗殺計画を策定せい」

四週間後の朝、レオンは初めて緊張に震える表情を浮かべた。

皇帝のために用意された式典前の荘厳なる控室である。疾く帰国するつもりであったイラフ、チヒラ、ユーカーレ、ハラヒはこの日までに引き留められ、今、ここいた。

「こんな日が来るなんてね。出会った頃は夢にも思わなかった」

壮麗なる皇帝の絹衣と装身具で装うレオンを見て歎息しながらイラフはしみじみと言つと、ハラヒも、

「ほんとうですね。何か、胸一杯です」

イラフはいつも身に附けている革の鎧ではなく、黄金の鎧兜に最上級の騎士の礼装に身を包んでいた。

チヒラも黄金で装甲し、鮮やかで深いスカーレットの縞子のチュニックにタイツを穿いた細い脚は繊細なヒールのピンク・シャンパ

ン・カラーのミュールを履き、重ね三つ又の戟。

ユーカレは2 mの長剣を象牙の鞘に収め、黄金の鎧と白金のトーガと白銀マントをまとう。

ハラヒも黄金の鎧、『きよかみ』を黒い漆塗りの鞘に収め、純白の貫頭衣に高貴で深い青貂のマントで装う。

広大な戴冠の間に大貴族や高位の宗教者など数万人が集い、証人として戴冠を見届ける。教祖であるレオンは皇帝候補レオンに皇位を授けるために王冠を手に掲げて、神に咒を唱え、自らの頭上に冠を載せる。

教祖が神の御名によって世俗権力者を認証する形だ。ただ一人の人間がそれを行うのが普通とは異なるところである。

頭上に聖なる皇帝の冠が置かれた瞬間、数千の喇叭が高らかに鳴らされ、賛美歌が響き渡る。

荘厳な式典が成就された。荘厳なる神咒が数限りなく誦誦される。空気は霞み、黄金に光り輝き燦めいた。祭壇に降り注ぐ崇高なる光線。

その後、皇帝は広大なる一億人広場に面したバルコニーに出る。そして宣言する。

「しかあれし、さいわいあれ！　ともに神に随いぬ」

大歓声が起こった。歓呼の声は鳴り止まない。

戴冠式の後には、盛大な祝賀会が催された。その盛大なること他国に例がない。祝賀のための会場となったのは、南北に9 km、東西に7 kmの大バシリカ。王の列柱廊とも呼ばれる大長堂だ。東西の側廊に列柱と大アーチがならぶところからそう呼ばれる。そこに集まった祝賀客は史上空前絶後の三百万人。

清らかに響き渡る荘厳なる大讃美歌が一万人の聖歌隊によって次々と歌われ、黄金と象牙で飾られた百台のパイプオルガンが荘重に鳴る。

香油の消費は数千t、撒かれた花卉は数十億枚、牛肉・馬肉・豚肉・羊肉は合わせて数千t、葡萄酒もまた数千t、トリュフやフォ

アグラやキャビアや歌劇や剣舞や哲学的シンポジオン
Συμπόσιον……

贅の限りを尽くし、放逸享樂と壮大なる豪奢にして莊嚴なる百花
繚乱の絢爛たる懶惰が大波瀾の潮のように大氾濫する。

レオンは降りて来て、イラフやチヒラやユーカレやハラヒの手を
取って感謝した。

「君たちのおかげだ。心から感謝する。ただエオレアとの約束が果
たせなかったのは残念だった。ほんとうに。

無事に帰還した暁には、神聖なる儀礼のうちにも、最も聖の聖な
る祝祭を挙げることを誓ったのに」

イラフは涙ぐんだが、チヒラは笑い、

「メタルハートを斃した戦士が泣くのか。似合わないよ」

ユーカレもノーズティカを鳴らし、

「ふ。

人の感激も束の間のものだ。今日の感謝も、明日には簡単に裏切
られる。失望させられるくらいならまだいい。

いつかはレオンがじぶんらの前に立ちふさがり、闘わねばならぬ
日も来るさ」

「そうなればただ闘うのみ。希望も失望もありません」

そうハラヒは静かに決然と言った。

レオンは壇上の席に坐る。

数千のキャンドルと大きな黄金の杯、メロンや葡萄や林檎や無花
果やマンゴーがあふれんばかりに盛られた高台附の銀の盆。こんな
極北に野趣あふれるヤシの実にストローを刺したジュースである。
金の飾りと赤のラインと白の絹地の礼装で凜たる禁欲の誓いを立
てた若き修道僧や髪長き若き巫女数千人が新皇帝を囲み、賛美歌を
歌いながら聖なる神酒を注ぐ。

レオンがダイヤモンドとルビーとサファイアとエメラルドと真珠
とラピス・ラズリを嵌めた黄金の杯を傾けた。

取っ手には聖句を記す帯が結ばれている。

会場全体に聖典の読誦が響き渡っていた。よく見れば、巨大な柱に壮麗な説教壇が張り出し附けられていて、金・赤・白の礼装の聖職者が聖典を読み上げ続けている。

説教壇は木製で繁縷な彫刻が施され、漆で艶光している。

大貴族や高位の軍人や親族が次々と階段を上って壇上に上がり、レオンに祝辞を述べ、礼拝する。

広大な会場のあちこちで、歓呼の音が潮のように上がった。天井やバルコニーから花卉が降り注ぐ。香が焚かれた。薫り高い煙が霞のように漂う。

イラフは気が附いた。

「チヒラ」

「何」

「あの男だ。おかしくないか」

「男？」

壁面に沿って等間隔にならぶ大六角柱の傍の、高さ2 mはあろうかと思われる彩色された陶磁の壺の陰に、蠢く男の姿が。

「あんなところに人がいたか」

「そう言えば、いなかったね。まるで忽然と現象したかのようだ」

「そういうことが得意な奴がいなかったか」

「いたね。イジュールだ」

「だが彼はイジュールではない」

「近くにいるに違いない。いつぞやと同じだ」

「行ってみるか」

「いや、少し泳がせてイジュールの現れるのを待とう」

そこにハラヒがやって来て、

「どうしたんですか」

「いや、あれを見て」

イラフが説明する。

「ほんとうだ。いったい、あれは……」

三人がああだこうだ言っていると、ユーカレが興味を示し、寄っ

て来る。

「何だ、どうした」

「あれさ」

「どれ」

「いや、あれだってば。…あれ？」

「いなくなってる！」

ハラヒの驚きの声に対し、呆れ顔を作ってユーカレが言う、

「じっとしていなくちゃならない理由はないだろうからな。それとも感附かれたんじゃないか。君らまるで素人だな、歴戦の戦士ともあろう者どもが」

「ともかく行こう」

イラフが言うと、チヒラが

「どこへ」

「探すのだ」

だが見つからなかった。

「皇帝の警護を強化するように進言しよう」

イラフが言った。チヒラも、

「念のため、厨房の毒味も強化すべきだろう」

ユーカレは、

「今さら祝賀客の再チェックは難しいだろうなあ。いったい、ここには何百万人がいるんだ」

「アンテナを張ろう」

イラフはチヒラに言った。

「うん」

「では、わたくしは警護担当者に進言してきます」

「じぶんはレオンに話に行く。せつかくのお祝いが台無しだが、話のできる高官がいらないからな。仕方ない」

イラフは瞑目する。

意識を澄まし、人々の心の波長に合わせる。さまざまな情念が交わり、巨大なうねりを醸し出し、その複雑さはとても言葉では表現

できない。

その解析を微に入り細に入り極め、襞の一つ一つを浮き彫りにしつつ、その妙を読み解いて、形象・凹凸をなぞること、入念を極め、解像度を高め、やがて個別の心象を把握し始めた。

「つかめない」

「閉ざしているね」

「明らかに情報生命の原理を知っていて、ぼくらのような者の探知を予想し、その探知に引っかけられないように、心の働きを殺している者がいる。怪しい。だが場所が特定できない」

「そうでもない。」

場所は時空（時間と空間）の座標で特定されるが、時空とは『心』という自然の摂理が構成する解釈ではない。

逆に言えば、存在が占有する場所は、すべて特定され得ないものだ。そもそも「場所」ってあるのか、「場所」って何だ、って言うこともできる。「場所」っていうコンセプトがそもそものどういうことなのか、とかね」

「言っていることはわかるが、それじゃ、さらに始末が悪いじゃないか」

「心を消す者は心を消しただけでは、そこがブラックホールのようになってしまって、反って特定されやすい。特異な場所になってしまう。」

だから彼らは心機を消すだけではなく、時空の解釈、時空の座標を補正しているはずなんだ」

「しかしそれは矛盾する。心の働きを使わずして補正をすることはできない」

「今はね」

「今は？」

「過去、または未来から現在を補正されてしまえば、現在の中にいるわたしたちからは敵のその働きをストレートに見ることはできない」

「なるほど。その働きを読み解けばいいんだ。君は天才だね」

「君が教えてくれたからだ」

二人は早速解析を始める。

「数人いる」

チヒラが言うと、イラフも、

「壇上の巫女、修道僧、説教壇の僧侶」

「イジユールはどれだ。奴をやれば『魔法』は解ける」

「わかるよ。」

説教壇だ。全体をコントロールしている」

チヒラはMPCを手にした。

「ユーカレ、説教壇の僧侶がイジユールだ。ただし、うまくやってくれ。ぼくらが逆に逮捕されちゃ元も子もない」

「じゃ、レオンにやってもらおう」

「どうやって？ 彼の周囲には祝辞を言う人がいっぱい近寄れないし、電話にも出られないだろう」

「案ずるより産むが易しさ」

そう言うとユーカレはひらりと飛び上がり、階段の欄干を蹴って一気に壇上のテーブルを飛び越え、レオンの隣に降りる。一人の修道僧が突き飛ばされて倒れた。

「何ごとだ、ユーカレ！」

ただ事でないことを察してレオンが言う。

「皇帝陛下、あの説教壇の僧侶は偽物です。イジユールです」

「何！」

「ただちにご命令を。自分らが言ったのではシルヴィエの人たちは信じないでしょうから」

「わかった。」

おい、衛兵、あの説教壇の僧侶を引きずり下ろせ。皇帝の命令だ。疑うことなく、ただちに執行せよ！」

誰もが驚いた。

しかし突如、修道僧と巫女の数人が突如、その手に剣を現象させ、

振りかぶる。だがユーカレがたちまち斬り捨てる。

説教壇の僧侶は矢を射たが、それもユーカレが断つ。

「ちくしょう！」

イジュールがその本性を現した。蛇のように蠢く紫色の髪、赤黒く滾ろう瞬きのない眼、古代の戦士のような革の鎧、ベルトで留めた短い腰衣、短いマントだ。穂先が大きく湾曲した槍を持っている。砂漠の悪魔が描かれた楯を掲げて。

既に説教壇に上っていたハラヒが、

「覚悟！」

名刀『きよかみ』で斬りかかる。

「小賢しい！」

剣を受けるも、その背後に來たイラフとチヒラが左右から斬りかかり、

「天誅！」

それをも楯で受けたが、イラフは瞬時に身を落とし、床を蹴って飛び上がる。『韋弟天亢龍』だ。

「うううつぎやああああ」

イジュールを縦裂した。血飛沫が四方に飛び散る。最初のレオン暗殺計画はこうして潰えた。

死んだ修道僧や巫女はイジュールの死とともに元の姿を現す。その本性は蛇やトカゲや蠍であった。誰もが驚きの声を上げ、震え慄く。

「何者の陰謀か、ただちに調査する」

レオンは決然と言った。

「大枢機卿イヴイルが一番怪しいが」

チヒラがそう言うと、レオンは、

「可能性は他にもある。羅汜やレイヴァンの可能性、彼らがイヴイルと結託する可能性」

ハラヒが歎息する、

「きよらさやかな世界が来る日は、いつでしょうか。裏切りの世界、

信頼できる地盤のない、どこも混沌として不安定で、関節の外れたような世界、已むことのない私利私欲がある限りそれは続くのしよう。

「嫌悪すべきこの憂き世が」

イラフが厳粛な声で言った、

「そのとおりさ。」

戦いが終わるときはない。常に努力が必要だ。その努力を支えるものは希望だし、それが生命だ。だから仕方がない。自然はそのようにすべてを作った。これは自然の摂理だ。我々にとっては、それが美しい。

つまり人々は永遠の平和を諦めない」

第七章 闘いの哲学

褒賞と栄光を満載して錦の旗をひるがえし、イラフとチヒラとユ―カレとハラヒは颯爽と帰国の途に就く。

シルヴィエ鉄道の豪華な車輛（車輛No.999）を用意され、贅沢に南下した。その後、南東行き路線へ切り替え、その次に、東行きへと切り替える予定であった。南へ向かうに伴い、日照時間も長くなる。

旅は豪華列車の奢侈な装飾と世界中の贅沢な料理を堪能し、飽くことがない。

一日に何度でも使える風呂も彼女たちを喜ばせた。蒸し風呂あり、ジャグジーあり、ローマ風の浴場あり、美しい模様に描かれた陶器の個人風呂ありで、列車の中とは思えない逸楽の極みである。

彼女らにはあり余る時間の中で、何度も今回の冒険のさまざまな場面を語り合って反芻し、感慨を共有していた。すべての記憶が彼女らを飾って荘厳する。それは精神に於ける輝かしき儀装軍服であり、誇りで鍛えられた魂の鎧や兜でもあった。

話のクライマックスは何と言っても世界最強の女傑との闘いであ

る。

特にイラフはジン・メタルハートを斃した世界最強剣士としての栄誉と名声をも得ていた。さまざまな方面からの賛辞とともに、クラウド連邦のイースからは聖なる剣が送られてきた。柄や鐔に絡む龍が見事に彫刻された剣で『龍肯(りょんくわ)』と銘打たれている。

両刃の幅広剣だが、片方が波形紋で反対側が亀裂紋(亀文)で雌雄(陰陽)を顕していた。刀身を傾けると光がゆっくりぎろりと動く。鋭さは恐ろしいまでであった。

チヒラはこれを見て、我が事のように大いに喜んだ。

「『龍肯』とは！ 最高の言葉だね。レムノ大僧正も言っていた言葉だ。

ありふれてはいるが、実際、これこそ奥義の中でも特に究竟であつて、最も喜ばしくめでたくもあり、耀くように美しい言葉だ。奥深い言葉。人を幸福に導く言葉だ。

ぼくの知り得る限りに於いて、人間の使う言葉でこれほど素晴らしいものはない。

クラウド連邦の大臣ともなると、常人とは明らかに違うものだ。

君の本質を良く見抜いているよ。

確か面識があると言っていたよね。そうでなければ、こんなに優れたチョイスはしないだろう」

柄頭は五銖杵の形をしていて、青いクリスタル・オパールが埋め込んであった。サンスクリット文字が彫られている。

イラフは鞘から抜いて太陽に光に翳した。

剣は燃えるように輝く。刀身の中央に鑄鉄の青龍文が浮彫のように象嵌され、紺碧の空のように鮮やかな濃さで、ラピス・ラズリに金属の輝きを与えたらこんなふうではないかと思わせる艶であった。

中央以外のふちは鏡のように万象を映す、薄っすら青味を帯びた銀色で、日に何度も色を変え、蒼や碧や藍や紺や翠や群青などを複雑に帯びるのであった。

「凄いよ、チヒラ。わたしは言葉を失ってしまった。こんなものを作る名工がこの世にいるんだな。ほんとうに感動した」

今まで帯びていた剣を下ろし、佩く。

「最高の気分だよ！」

さて、シルヴィエ鉄道で7000kmを往くと、その先は連絡がなかった。オエステに帰るには、海辺まで出なくてはならない。鉄道はいずれ港湾まで繋がる予定だが、まだ完成していないのだ。

駅を降りると、用意されていたのは壮麗な馬車と壮観に美々しく飾った衛兵であつた。馬車に繋がれていたのは龍馬である。本来は応龍が速くて良いのだが、シルヴィエにはいなかった。

「急ぐ旅ではないからな」

ユーカレがそう言う。もつとも、龍馬も決してスピードが遅いわけではないが。

「そのとおりです」

ハラヒも同意してにこやかに応じた。チヒラが笑う。イラフは幸福を感じた。

万事上々である。しかも天候も最高であつた。言うことなしとはこのことだ。

すべてから解放され、清々しい気分だった。風光を愛でながら、シルヴィエの大地を悠々と進んだ。雪は白く大地を蔽っているが、降雪はない。蒼穹が澄み切って広がるばかりだ。呑気な旅である。自然とさまざまな回想が誰からともなく始まる。

「思えば、いろいろなことがあつたね」

イラフが休憩中に、感慨深く言つた。蒼穹の下、氷原が輝いている。チヒラもうなずき、

「ほんとうだ。長い旅だったような気がする」

「じぶんらは出会う運命だったのだな。今思えば、初めて会つたときにはもう世界の転回の怒濤の中にいたんだ。

もつとも、運命なんて後から見てわかることで、そのさなかにいるときにはわからない。そういう意味では、運命なんてあつてない

ようなものだがね。

ダイヤルを廻していたつもりのジニイ・ムイでさえも、実は転回の中の一つでしかなかったと思う。

今になればね」

ユーカレのその言葉を聞いて、チヒラも考え深い表情で言う、

「聞いた話では、今回の件で、ジニイ・ムイはリアイキという少年を使っただけらしい。世界の臍と言われる海鳥島（エル・パツハロ・デル・マル）に連れて行って」

「へえ。どういうこと」

「少しは考えろよ、イラフ。」

リアイキと聞いて思い当たらないか。リアイキっていうことは……」

ユーカレの言葉をハラヒが継いで、

「2314！　そうですよね、リ（2）ア（3）イ（1）キ（4）」

イラフもはつとして声を上げ、

「秘文の真逆だ！　秘文4132の逆だ！」

「でも、ちよつと待て。その少年の場合は、『イブルン』っていう、あのアナグラムは使われていなかったんだな」

ユーカレがいぶかしげにそう言う。だがチヒラは嘲るように、

「イヴィロンという姓じゃないからな」

イラフは手を打ち、

「そうか。……で、逆だと、いったい、どうなるんだ？」

呆れ顔でチヒラが、

「対象だよ。いや、正確に言えば対象に呼応したんだな。少年は少女になったらしい」

「ええ！」

ユーカレが、

「そうか。と言つても、じぶんもよくわからないが……。戦争による、いわば世界の流れによってダイヤルを2314と廻した……。そして、少年の名がそれに呼応した」

頭の中の靄を払うようにそうつぶやいていると、ハラヒが、

「そうです。世界の臍という場所だから、世界の逆流に呼応したのではないでしょうか」

チヒラが満足げにうなずき、

「ぼくもそう思う。ケーレの作用が世界の中心に求心的に収斂されて、秘儀的に2314の名前を持つ少年に呼応し、少年が少女に、恐らくは第二のイキリヤになったんだと思う。

神にも等しい第二のイキリヤがジニイ・ムイの思惑どおりになるはずもなく、制御不能だったらしいけど」

イラフがようやく気が附いて、

「そうか。エオレアに求愛してだめだったから、自分で新たなイキリヤを創ったのか。何ということ。もしかしてそれでエオレアは死んでしまったのか。赦せない」

チヒラも眉を寄せ、

「そうだ。そして今回のケーレもそのためだったんだ。そのために5年に渡って大戦争を起こし、何十万もの人間を犠牲にした。これは絶対に赦すべきことではない。ジニイ・ムイは滅びて当然だった」

沈黙。誰もが激しい怒りで言葉を喪った。

ようやくユーカレが、

「恐らく知る者はそれを知っていたのだろうな」

その言葉を継ぐようにチヒラは歎息しながら、

「それは大枢機卿イヴィルだろう。彼は全体の流れがジニイ・ムイの失脚に結び付き、彼が皇帝になれる方向へ向かうようにコントロールしていた。

ぼくはレオンを襲撃させていたのはイヴィルだと思う。

それは、有力候補の抹殺という単純な理由だけではなく、レオンの動きがジニイ・ムイの失脚に結びつくように、あたかも羊飼いが羊の群れを誘導するように、コントロールしていたのだと思う。

だからすぐに殺さない。聖ガレノンでの襲撃など本気ではなく、ぼくらとレオンを会わせるためだったのではないだろうか。

エオレア誘拐（実際にはマリア誘拐だったけど）も大華嚴龍國に行かせず、ヒムロに直行させるための茶番だったんだ。ほんとうに策謀家だよ」

「そうだったのか」

「ぼくと君（イラフ）は最初から狙われていたかのようにも見えるけど、正確に言えば、動きを監視され、コントロールされていたのだと思う。そしてイヴィルの計画に合わない動きをすると、修正されていたと考えると、辻褄が合う。

イヴィルがぼくらをストリントベリイでアグールに襲わせたのも、乗るはずだった列車に乗り遅れさせて、レオンと同じ列車に乗せるためだったんだ。ジニイ・ムイを失脚させるためには、ぼくらがレオンと一緒にヒムロに行くことが必要だったからね。

だから襲って来てもよいはずのときに襲われず、そのまま泳がされ、殺されずに済んだのかもしれない」

「イヴィルの企みだったのか。だからジンもわたしを殺さなかった。

あの山上での最初の闘いは明らかに戯れのようなだった。わたしの力を試して楽しんでるかのようだった。思えばメタルハートの目的は何だったんだろう」

イラフの言葉にチヒラも苦笑し、

「確かにジンの目的はこの段になってもよくわからないな。彼女は何をしたかったのか、何を求めていたのか。

そういう意味ではイヴィルの方が単純だ。いくら彼が策略深く賢くても」

イラフが顔を上げて双眸を輝かせ、勇躍たる表情をする。

「そのイヴィルがこのままで済ますとは思わないな。ジンもどう動くことやら。考えがわからないだけに彼女の方が怖いがね」

その懸念をハラヒも受け継ぎ、

「わたくしもそう思います。イヴィルには今のこのような状況をも想定した行動計画があってもふしぎはないと思います。それを論理的に追及することは可能だと思います」

「あり得ない話ではない」

ユーカレがノーズテイカを揺らして同意を示す。

イラフは決然と、

「されば闘うのみ。闘わずしていかにも努力を為したと言えるか。大義を護れようか。生命のある生 *Vie* を生きられようか。生死の狭間にのみ活命はある」

チヒラが微笑し、

「君らしいな。」

しかしいずれにせよ、イヴィルに関して言えば、すぐには動かないよ。時期を見るはずさ。今はレオンが有利過ぎる。奴はとても賢いからね」

それを聞いて顔を顰めたハラヒは、

「究極的に言えば、決して賢くはありません。賢い人間は悪を犯しません。それは結局、魂に不幸の轍を深く刻み込むからです」

ユーカレが口角を吊り上げて皮肉な笑みを浮かべ、

「ふ。誰もが君のように賢明なら世に不幸などないだろうな」

しかしイラフは、

「だがそれを追求する。不可能な夢であっても闘う。諦める人間などいない。絶望は自己矛盾だ。真に絶望した人間は絶望などしない。

望みがあるから虚しさや口惜しさ、悲歎や自暴自棄や絶望感があるのだ。

真に望みを絶った人間はすべてを超越した人間だ。絶望感などない」

そう言い切る。

旅は平穏だった。その日が来るまでは。

数日が経った。蒼穹の続く平野を横切り、溪谷を涉って、山を越え、海に近い村に着くはずだった。そこから船に乗るのだ。船は既に準備されて波止場で待っているとのことだった。

「ねえ、あれは何だろう」

チヒラが遠くを眺めて言う。

「煙だ。烽火^{のろし}……ではないようだけど」

イラフの言葉にユーカレが眉を顰め、

「火事かな。そんな感じがする」

「行ってみよう」

村であつた。

酸鼻を極める惨状。裂かれ、焼かれている。女もこどもも差別はない。後に、ペ・ヨルトックという小さな村であることがわかった。

「いったい、この村で何が起こったんだ」

「このような虐殺が起こるような場所ではないはずだ」

「戦場も遠いし、馬賊が荒らしているような場所でもない。領主同士
の紛争もない」

ユーカレが白き髪を昂然と振って指差す。

「どうやらあれが答のようだ」

炎を背に屹然と立つ人影。その憤怒の形相は鬼神そのもの。火焰の逆光で黒く見える身体の中で、眼だけがまっすぐこちらを凝視して燃え滾っている。

ジン・メタルハート。戦士たちの体に一気に戦慄が走った。

「なるほど、奴の仕業か」

ユーカレがうめく。イラフは馬車を降りて、

「なぜこのようなことを」

眸を憤らせ、声を荒げて問う。『龍肯』をあえて抜かなかった。

以前から使っていた剣をにぎっている。刃がギラギラ輝いていた。

踏みしめるように怒りを滾らせ、ゆっくり歩む。

馴染んでいるから、という理由でもあるが、ジンを斬るのにイスから賜った聖なる剣を使いたくなかった。

問いを発しながら、ぐいぐい近附く。

「なぜだっ！」

止まる。にらみ合う。滴る血のごとく紅く爛々と滾るメタルハートの殺戮の眼。瞬きがなく、獰猛なコブラのようだった。ペパーミント・グリーンの双眸はそれを威で押し返すほど強いまばゆさで耀

き燦めく。二人の距離はわずか十数mであった。

「答えろっ！」

「なぜだ、と？ ふつ。理由などない。気紛れだ。それがどうした」

「うっ、何だと！」

怒りは頂点に達した。

「さあ、殺戮の激情に燃えて、イラフよ、かかって来るがよい」

「貴様！」

振りかぶった剣をゆっくり静かに下ろし、青眼に構えた。

イラフが構えると、三つの影が現れる。今は三人となった四天王だった。

黒い緋色のカーリー・ヘアを振り乱し、昏い緋色の鎧兜で装甲した長身のアグールが朱く艶光する刀身の大剣を抜く。

「安心しろ、イラフよ、我らは邪魔しない。逆だ。むしろ貴様の仲間が邪魔するのを防ぐために来たのだ」

下半身が獐猛な鷹となっている悪魔のようなユイスが、

「さあ、雑魚ども、かかって来い」

「ちようど三対三だ」

そう喚いて長く黄金に煌めく獅子の鬣をなびかせるゼノ、腰から下が獅子の胴で脚を大地に踏ん張り、尻尾で地面を叩いている。

金の眸を冷凍とさせたユーカレが首に彫られた薄明るい金色の刺青を紅潮で茜を帯びた燃え上がる金へと変える。歩を進めた。冷凍剣が黄金に変わる。

「上等だ。アグールはじぶんがやる」

緑の髪を小さく靡かせてハラヒは、

「では、ゼノはわたくしが」

愉快そうに桃色の双眸を燦めかせてチヒラが髪を撫でながら、

「じゃ、ぼくはユイスを退治だな」

白き眸のハラヒが飛び出し、気合とともに『きよかみ』を振りかぶる。緑の炎のようだ。

「ふううっ！」

ゼノもまたネコ科のスピードでしなやかにジグザグ移動し、間合いを詰める。ハラヒが振り下ろす。ゼノは楯で受け、槍で返す。だがハラヒはその槍をつかみ、ゼノの籠手を『きよかみ』で打ち砕く。

「次は首だ」

と叫ぶも、言い終わらぬうち、ゼノの頭部に乗って、掌で剣を押すように上から突き徹す。

クリムゾンとボルドーの髪の子ヒラは三叉戟と楯でじりじりとユイスに迫った。藤色のまつ毛は開き、双眸はピンクダイヤのように燃えて耀いている。

ユイスは飛び上がり、頭上から襲い掛かった。それをただじっと見るだけの、泰然として不動の子ヒラ。ユイスは渾身の力を込めて、「滅せよ！」

だが剣が刺したのは地面だけ。子ヒラは三叉戟を上空に抛り、転移したかのようにユイスの背面に廻っていて、後ろから短剣で首を刺す。そして素早く離れた。

空中に投げた三叉戟がまっすぐ落ちてユイスを串刺す。まるで虫ピンで止められた蝶々のようなようであった。

「一丁上がり！」

宿敵アグルとユーカーレは互角の闘いをしていたように見えたが、「アグルよ、貴様らは安穩と慢心して進化を怠った。しかし、じぶんたちはさまざま経験を、どれ一つあまさず活かし、叡知を鍛えた。見ろ、その成果がこれだ。

慢心とは自惚れて自己を超えようとしなことだ。利己を捨て客観的な地平を獲得しようとする努力しないことだ。淘汰され、滅すのみ。愚者、覚悟せよ」

聖なる白光に包まれたユーカーレが跳躍して黄金の冷凍剣を振りかぶり、一刀両断すべく敵の兜を狙う。金色の刺青がひととき強くまばゆく燦めいた。アグルは受け止めるが、ユーカーレはさらに押す。歯噛みして顔をゆがめるアグルの注意が頭上に集中する。その刹那、ユーカーレは刃を翻し、がら空きの胴を打つ。鎧が裂ける。

「うぎゃあああ」

アグルは剣を捨て、腹を押さえながら龍鳥に乗って逃げ去った。

「待て！」

追い附けない。八つ当たりのように荒っぽく冷凜剣を鞘に収め、ユーカレは唇を“へ”の字に大きく歪める。

「無念！ 逃がしたか！」

イラフとジン・メタルハートは激烈に大剣で数合交えていた。

両者とも大きくて幅広で重い剣を扱うパワー派なので、重たい金属のぶつかり合う音は雷霆のように凄まじく、地面を揺るがさんばかりだ。

であると同時に、両者とも技巧、何よりも精神性の顕れである“呼吸”を極めた心技の超人でもあるため、その闘いは言語超絶で、精妙を極め、神々のごとくに崇高、まさに神技であった。

驚くべきことに、メタルハートは裂けた鎧や、真つ二つに割れた兜を鎖で繋ぎ、綱で縛っているだけで、完全に修復していなかった。

それを見てイラフは想う、

『臥薪嘗胆というわけか。』

わたしへの憎しみ、怒り、口惜しさを否応なく生々しく思い起こすように、敢えて直さないというわけだ。

凄まじい執念、怨憎、執著だ。毎日、自らの傷を暴いて、憤怒に身を裂くほど燃え滾っていたのか』

イラフはそう察した。さらに考えを続ける。

『ジンが無意味な虐殺を行ったのは、わたしを怒らせるためだ。』

そうとわかれば、さらなる怒りが湧くが、奴はわたしの感情が高ぶって、呼吸を読む精神の精妙さが鈍るのを狙っている。

その手に乗るか。

憤怒で心眼が曇るのを狙っているんだ。奴への憎しみによって、自然の摂理を読む精妙さが喪われることを狙っている』

走りながら飛びながら打ち合う。やがて海が見えてきた。重い金属音が轟く。

『ふ。

おかしなものだ。ジンは自らに於いては激情でモチベーションを上げておきながら、敵であるわたしに対しては昂ぶりで剣を鈍らせようと考えているのだ』

大地すら裂きそうなくらいジンの剣は重い。しかしその呼吸を読み切ったイラフは自然の摂理に従い、『押さば引け、引かば押せ』の精神で、敵の力を利用してその力をかわしていた。

上空に上がったかと思うと、背後に現れ、助走もなく高く飛び、まるで宙空に足場があるかのようにあらゆる体勢を取ってあらゆる方向から剣を振り裂き、降ろし断ち、突き貫く、振り上げ逆裂き、翔けながら翻り斬らんとするその自由自在の剣法にメタルハートは押され気味であった。

周囲のものを破壊しながら次々移動する。岩を砕き、道を裂き、大樹を伐り倒しへし折り、空気を切ってつむじ風を起こし、川さえも逆流した。まるで龍巻が移動して来るかのように、道行く人々は蒼褪めて悲鳴を上げながら命からがら逃げる。

やがて港町に至ると、スーク(市場 *bnos*)で大暴れ、人々を驚かせ、逃げ惑わせ、樽を砕き、馬車を割って石壁を破壊し、鉄塔を伐採する。

ジンの大剣が起こす風でタープが吹っ飛び、真空が起こって近くにいた人の衣服が切れる。激しい摩擦で雷のような放電すら起こった。剣を振る際の唸り音でガラスが割れ、扉が外れた。

鎬しほを削りながらじわじわ波止場まで寄せる。

波止場まで来ると、停泊している船に飛び移る。船から船へと涉って剣を振り、床を抜き、マストをへし折り、ヤードを断ち折り、今まきに出向しようとする中型巡洋帆船に飛び乗る。

船はそのまま出航し、イラフとジンはそのまま数合を交え、帆を裂いてマストを伐り倒す。メタルハートが振り下ろす剣が勢いあまって甲板を砕いた瞬間に二人とも船倉に落ちる。

「ふははは」

すぐに体勢を直して哄笑すると、ジンは大剣で船底を突き破る。
勢いよく海水があふれ始めた。

「ふふ。

これぞ背水の陣。

早く敵を戴さねば、鎧で身を固めた我らが身、海の底、魚の餌たるは必定。いや斃しても結果は変わらぬかもな。何と爽快なことよ。

この海が時化にでもなれば、さらに心地好かるうに残念至極ぞ。

犬死などと言うは市井の民の戯言。

武人はただ一切を裂き、ただただ荒ぶのみ。ただただ素戔ぶるのみ」

しかしイラフは、

「さようになるもの、現象にしかず。得るも喪うもなし。すべてはカタチにしかず、つくりもの。すべては名もいわれもなき仮象、唐突なるもの」

「ふ。

意気地のない弱々しき議論よ。人生を虚しいと言うか。我もまた言う、生は取るに足らぬと。しかしその趣は真逆だわ」

理由もなく、インリイ・インデイスでレムノ大僧正から聴いた聖なる単語が胸郭に甦る。魂の深奥に点った青い炎のように。

イラフは無意識にその単語を反芻していた。

「否。

生きる営みを否むのではない。生を肯んずるでもない。これこそが龍のごとき大いなる肯定だ。

人は容易く虚憊こぼろと言うが、虚し憊はかなしという価値観もまた虚しい。されど憊しも憊しというは何を言わんとするや。

知りようもなし。

畢竟、いわれも知らぬまま、ただ与えられたる諸考概とやらいうおもちゃの積木を何も知らず積み上げ、組み立てしもの、万象一切は」

「意味不だ。

ふぬっ。

しよせん、机上の空論、青瓢箪あおびょうたんの言辞の戯れ。現実を見よ、この剣を否定できるか！」

「現実をと言うか！」

縁なき衆生は度し難きかな、ジン・メタルハート。貴様の負けだ。まさしく現実を見るがよい。

たとえこの身を裂かれるとも、碎かれるとも破られるとも、勝利は我が方にある。敗れようとも」

「ふふん、あくまで高邁を装い、説教するか。

アンギラの虐殺者が」

その言葉はイラフの胸に刺さった。自分が殺した者たちと先ほど見た、ジンに虐殺された犠牲者とがかぶる。

ペパーミント・グリーンの眸が光燦し、究竟の炎を上げた。

「されど！　されどしかし！　されども貴様を討つ！」

畢竟の魂魄を込めて必殺の技を放つ。

しかし心迷いか、イラフの「韋芽天亢龍」は雷霆のごとく垂直に振り下ろされたジンの大剣に割り碎かれる。碎かれるも受けた剣に圧されて上半身がひっくり返される力を活かし、イラフは臍下丹田を中心に回転する。

回転しながら短剣を踵と踵の間に挟み、メタルハートの下顎から顱頂骨を貫く。意の力を込めた刃は意志ある者のように鋼鉄の兜を内側から外側に突き破る。

そのままイラフは回転をし続けて再び上半身を起こし、ジンの刃の上に乗る、割れた剣の根元で敵の顔面を突き破る。短剣と長剣の残骸とがメタルハートの頭蓋骨の中でクロスする。

鋼鉄の女傑はうめきも上げられず、崩れ斃れた。

船底に両手を突き肩で息をするイラフの顔は真つ蒼だ。意識が喪われた。

渦に吞まれ、沈み逝く船とともに海底へ。何もかも消え行くのに、暗闇を背景に炎のように鮮やかに虐殺の場面だけが躍動するよう廻

って脳裏を翻り舞い踊っていた。永遠の悔恨、永劫なる魂の地獄……久遠の底へ沈み逝く哀れ。

「イラフ！　しつかりしろ！」

まばゆい太陽で何も見えない。やがてチヒラの輪郭が見え始めた。「あゝ、生きていたのか、わたしは。

もう死んでもよかった」

「何言ってるんだよ！」

それよりジン・メタルハートは？」

「斃した」

チヒラの表情が歓喜の光にあふれて耀く。

「やった！　今度こそ完勝だね。ぼくらはゼノとユイスを斃したよ。アグールだけ逃したけどね」

「どうでもいい」

「どうしたんだ、君らしくもない」

「すまない。」

わたしはずっと長い間、誰にも言わなかったことがある」

哀しそうに怪訝な顔をするチヒラ。イラフを心配しているのであった。

「秘密くらい誰にでも……」

「いや、正確に言えば、当時、同じ隊にいた者らは知っている」

「ねえ、ぼくら生まれて14年しかたっていないんだよ。『当時の

』って、まるで大昔のことを言うときのような言い方するなんて、変だよ。

せいぜい2、3年前のことだろ？」

「アンギラの虐殺だ。シルヴィエがオエステ勢を攻めていた頃だ」

突如、チヒラの顔が曇った。

「何だって」

「わたしの最初の戦場だった」

「我がリョジャドが君の最初の戦場だったんだね」

「十一歳のとき、『非』に入る前で、わたしは最前線に立つ『人間

の楯』だった」

チヒラは黙っている。

イラフは言葉が続けた。

「悲惨な戦争だった。リョジャドは神聖帝国の占領下にあって、シルヴィエ側に附いている人間がたくさんいた。わたしは自分よりも年端のいかない、幼い少女も殺したことがある。母子ともに殺したこともある。

敵のスパイだとされていた。

ゲリラ部隊だとも言われていた。実際、幼いこどもが爆弾を持たされて基地に来たこともあった。仲間の兵士が何人も死んだ。何十人も死んだ。何百人も死んだ」

暫時の沈黙の後、凄絶な表情でチヒラは、

「ぼくの妹と母もあの虐殺で殺された。妹は右の胸にこれと同じ刺青があった」

そう言つて荒々しく開く左胸に、輪廻の象徴である円環の図柄が金の顔料で彫られていた。

イラフの顔が恐怖で引き攣る。刺青が記憶をえぐつたのだ。

「まさか、そんなばか、まさか、そんな……」

チヒラの表情が凄まじい陰悪さに歪み、吊り上った。

「そうか、やはりそうか、やはり……君がアンギラと言った瞬間から、なぜかそんな気がしていたんだ。

なぜか、なぜか気がしていた、君が」

凄絶なる憎悪の表情。濃いクリムゾン・レッドの髪が焰のよう、黒のようにさらに濃く、しかし赤々と鮮烈に燃え上がった。全身のオーラが天を衝くように噴き上がり、周囲の土がぐつぐつと煮え滾る。

「ぼくの妹を殺した。未だ幼かった妹を」

「チヒラ……」

イラフの顔は次第に冷静さを取り戻していった。それは安堵にも諦めにも見えた。何かから解放されたかのような。

「ぼくの母を殺した。ぼくを生んでくれたお母さんを！」

桃色の双眸の生命の火はその奥に燦のごとく滾り、強烈な熾火をなす。藤色のまつ毛も炎となって紅蓮に変ずる。

イラフは蒼ざめ、悲痛な声で懇願する。

「チヒラ、わたしを殺してくれ。ズタズタに切り裂いてくれ！」

「だめだ！ 剣を持て！ 闘え！ ぼくに殺されれば、それは君には救いだ。だが永劫に罪に苦しんでもらう。さあ、剣を取れ、ぼくと闘え」

イラフのまつ毛が苦渋の陰を翳す。だが、しばらくすると、人の顔に表れたこともないような荘厳で厳粛な表情が浮かぶ。

「わかった」

抜剣する。『龍肯』が鞘から抜ける刹那の、シャンという重くて冷たい金属音。青眼に構えた。

ハラヒが必死に叫ぶ、

「待って、二人とも。よく話し合って。」

わたくしたちは仲間だ。友達だ。イラフの事情もよくわかる。戦場に行った者ならばわかるはず」

しかし深い諦めの表情でユーカレが、

「無駄だ。」

こうなる運命だったんだ。家族が殺されて、黙っていられる者などいないし、黙っていることが正しいとも言えない。もし正しかったとしても、誰に言う権利があるだろうか」

苦しげにそう言った。そんなやり取りも二人の耳には聞こえていない。

三叉戟『天真義』と楯『地真義』とが現れた。

たちまち烈しく位置を変えながら、瞬時に上下に移動し、前後に飛び、左右に廻ってあたかもうつくしき舞いのようにであった。『龍肯』は『天真義』と烈しくぶつかり、『地真義』を激しく叩く。激烈な魂魄のぶつかり合いに、地が震える。

互角の戦いのように見えなくなかったが、イラフは最初の数合

を交わしたときに既に悟っていた。

『チヒラもまた、この旅で高い境地に達した。しかし今やわたしの比ではない。もはや闘うまでもない』

そう心に想い、剣で大きく円を描く。

全身隙だらけであった。どこからでもかかって来いという構えだ。

「ふ」

チヒラはその意図を奥の奥まで読んだように諦めと嘲りの笑みを浮かべた。

「天真義究竟奥義『熾烈』！」

そう叫んで、まっすぐ突っ込む。チヒラの持つ奥義の一つだ。自滅と紙一重のため、滅多に使わない大技であった。

突っ込んで来たはずのチヒラの姿が寸前で忽焉と消える。

消えたと同時にイラフの頭上に現れ、無防備な顱頂骨を目がけて流星のごとく急降下する。

瞑目しているイラフはあわやという瞬間まで動かない。

まるで茶でも飲むかのように自然に三叉戟を剣で受けた。

そのスピードたるや、まさに神技、奇跡。だがイラフは受けた剣を眼に見えないほど微妙にずらし、穂先が顱頂を貫くように運ぶ。天才にしかできない妙技だ。

だがチヒラは翻って着地し、仁王立ちになった。厳しく眉を寄せ、強く唇を噛みしめ、歪ませている。

激しく三叉戟を擲った。

「やめだ。もう終わりだ」

「チヒラ！」

イラフが手を伸ばす。永遠に手の届かないものへ触れようとするかのように。ハラヒの白い眸の上で、それがスローモーションのよう映っている。まぶたを伏せてユーカーレは歎息する。

伸ばした手は手で打ち払われた。

苦悶と憤りと暗鬱で悲愴な尊厳を帯びた顔で、

「来るな。もう二度と触れようとするな。」

ぼくに近附こうなどと思わないでくれ。慰めの言葉も、魂の癒しもいらない。どうにもならない。ぼくも理を解している。だがそれが何だ？

幸せな日々があつた。それは優しい歌だ。

ぼくの耳には、庭を駆けながら、笑いさざめく妹の声が今も聞こえる。ぼくを抱きしめる母の匂いが甦る。そのたびに心が張り裂ける。

もう二度と戻らない。ここからは、もう出られない。尹良梟、ぼくにさわるな、この、闇に生きる者に」

濃い緋色と葡萄酒色の絡む髪を風になびかせ、チヒラは消えた。

Epilogue

まだ止んでいなかったようだ。ログオフすると、たちまち音が聞こえてくる。土曜日の朝になっていた。

ゴーグルを外す。

幻想と深い瞑想から覚めた。窓に絶え間なく流れる無数の滴、篠突く雨。オリーブ色の外套を着てフードを深くかぶり歩く小柄な人の幻影がまだまぶたの裏に残像を遺していた。

吐息が洩れる。

表面的には、イラフに殺されることがイラフへの復讐になるとチヒラが考えていたかのようにも見える。だがあの状況で、イラフが殺すはずがない。それをチヒラが理解しなかったはずもない。

どうすればよかったのか、どうすべきだったのか、到底、答があるとは思えない。

だがそんなことはどうでもよいことだ。

いずれ死すべき運命なのだから。

それまではせめて、生存に伴って与えられた仮の価値を信じて生きよう。けれども。

魂を解放されて生きたい。自由な空想の日は来るのか。マラルメが夢見たような。

あゝ、我らはいつ解放されるのか。いつ自由に。それは死なのか。

死しかないのか。死は厭うべきもののなのか。

死は大いなる自然の摂理である。そうであつてもそれは厭わしい。恐らくは理由がなかったとしても、厭わしいに違いない。死を厭うこともまた、大いなる自然の摂理なのである。

だがそれがわかつて心は納得しない。

探れば探るほど、つかむものがなくなっていく。

せめて魂を焦がして生きたい。戦士のように、戦士らしく。

振り返るとき、今日まで魂から迸り生きて来たであろうか。偽り

の追従で、気遣いという釈明に追われ、ただ汲々と、自分をも誤魔化し、薄い翳のような日々を生きて来てはいなかったであろうか。だがたとえ、すべてが偽りの、束の間の現象であったとしても、他に現実がないならばそれが我が生の、唯一の真実である。どう思うかは心々でしかない。

さあ、もう疲れてしまった。せつかくの雨の土曜日ではないか。窓辺に坐って、じっと降るしずくを眺めて過ごそう。

完